
銀の王と黒の騎士

舞傘 真紅染

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の王と黒の騎士

【Nコード】

N1925P

【作者名】

舞傘 真紅染

【あらすじ】

後ろを振り返ればいつだってそこにあいつがいたんだ。なのに、どうしてだろう。あいつの名前が思い出せない。

いつだってあの方を追いかけていた。時折振り返って笑いかけられる。あの方の名前はなんだったろう。

記憶を失った二人がいた。二人は記憶を求めて行動をし、やがて大きな戦いに巻き込まれていく。正義とは何か。悪とは何か。自分のしたいことはなんなのか。

悩み悩んで二人が出した答えとは!?

コードギアス〜反逆のルルーシュ〜Lost Colorsの二次創作です。原作主人公とオリジナル主人公の二人主人公です。苦手な方ご注意ください。

本編に描けなかった話を短編にてまとめています。よければそちらもよろしく願います。

毎週日曜日更新（予定）！

プロローグ「逃亡者」(前書き)

コードギアス 反逆のルルーシュ Lost Colorsの二
次創作です。

主人公は二人。内一人はオリジナルキャラクターなので苦手な方はご注意ください。主人公共にチートです。

基本的に物語は二人の主人公視点を交互に繰り返して進んでいきます。

プロローグ「逃亡者」

逃げていた。

息が切れている。身体のあちこちが痛みを訴え、今すぐ足を止めてしまいたかった。

「くそ、こんな、ところで」

だがそんなことをしていられる時間などない。痛みや疲労を振り払い、走ることに集中した。あいつらの気配はだいぶ遠のいているが、まだ油断はできなかった。

あれからどれだけ走っただろうか。分からない。どこを走っているかも分からない。何も考えられなくなる。逃げなくてはという意志のみで身体を動かすのも限界に来ていた。踏み出したはずの右足が思うように動かず、傾いた身体を支えようとするもやはり動かず。何もできないまま地面に倒れこんだ。

思ったほど衝撃はなかった。痛みを感じる気力すらないのかもしれない。ただ耳元で水音が聞こえ、ようやく今雨が降っていることに気がついた。我ながら本当に今さらだと呆れた。冷たい雨がほてった体を冷ましていく。

いつそのこと、このまま眠れたら。

「おや？」

自分以外の声がした。軽薄そうな声に、自然と目をそちらへやっ
た。白い服を着た男だ。顔はよく見えなかった。ただ。

「ぬじさ、ま？」

白銀の髪を見て、誰かの笑顔を思い出した。

・
・
・

走り続けていると目の前を建物が塞いでいた。門の横に書かれた文字の最後だけを読む。どうやら学校らしかった。

「くそ……！」

思わず舌打ちするも、後ろから人の気配がして、何も考えぬまま閉じられた門を越えて敷地内に入っていった。そのまま学園を囲む塀に沿って走る。なるべく人の気配がしない場所を探して。

「ここまでくれば」

随分と大きな学校のようにだ。芝生が植えられた中庭らしき場所には、立派な木がいくつも植えられていた。その影に隠れ、乱れた息を整える。

これからどうするか。身体を休めながら考えていると声がして、反射のように体が強張った。木の陰から様子を伺う。制服らしきものを着ているのでこの学校の生徒なのだろう。しかし、

「学生だろうと見つかるわけには」

対応を考えようとしたが、頭の痛みで思考が途切れる。人影は二つ。

「まったく、こき使ってくださいね」

「何言ってるのよ。元はといえばあなたがサボるからいけないんですよ」

痛む頭を押さえながらその生徒たちを見る。一人は金髪の女生徒。もう一人は細身の男子生徒で、痛みを忘れて見入った。彼の、黒髪に。

「誰だ！」

しまったと思った時にはすでに遅く、男子生徒と目があつた。逃げようとした、つもりだが身体は限界だったようで、意思とは反対に芝生の上へ倒れこんだ。

意識を失うその寸前まで、ただただその黒を見ていた。

プロローグ「逃亡者」(後書き)

【補足説明】

ロスカラの主人公はかなりチート設定なので、戦力を均等にすするためオリジナルキャラクターを登場させています。このオリジナルキャラクターもまたチートなので苦手な方はご注意を。オリジナル展開有。

お付き合いいただけると幸いです。

修正(11・06・13)

第一話「色あせた世界での目覚め」(前書き)

コードギアス反逆のルルーシュLost Colorsの二次創作
です。

オリジナル主人公も登場するので苦手な方はご注意を。

第一話「色あせた世界での目覚め」

世界はこんなに味気ないものだったろうか。空を見ながら、ライはそんなことを思った。

「青ってこんな色だった、か？」

当たり前のように空は青く、雲は白で、木は緑。見る物すべてに疑問を抱いてしまうのは己の記憶がないからか。ライはしばらくの間、木の緑越しに空を見上げていた。やはり、何か物足りない気がした。

草を踏みしめる音に彼は顔をそちらにやった。茶色の長い髪が揺れていた。

「あ、いたいた。もうどこ行ったのかと思ったよ」

「すまない……シャーリー、だった、か？」

つい先ほどの自己紹介を思い出しながらライが自信なく問いかけると、少女が嬉しそうに頷いた。名前を間違えなかったことに一息をついた。

「どうかしたのか？」

「もうお昼だからさ。みんなで食べようって話になって探してたの」

「そうか。それはすまない」

「さっきから君ってば謝ってばかりだね」

「む？」

またすまないと言いそうになったライに、シャーリーは人差し指をつきつけ、言葉を遮った。

「ほらほら、行こう！ 皆生徒会室にいるから」

手を引つ張られて、ライは青い目を少し見開いた。表情をあまり変えない彼のそんな顔を見て、シャーリーが明るく笑った。

ライとシャーリーが生徒会室につくと、部屋の中はチーズの匂いがした。ピザを頼んだらしい。大きなテーブルの上には、開けられたピザの箱がある。どこに座ろうかとライが席を探していると、もうすでに食べ始めているメンバーの中で、黒髪の少年だけが少し顔をひきつらせていた。ライはまた記憶をたどる。

彼はライを最初に発見した人物の一人で、なぜか少しの懐かしさを感じる少年だ。

「えっと、ルルーシュ？ 君はピザが嫌いなのかい？」

ピザを手に取りながらライが隣のルルーシュに声をかけると、紫色の瞳がライへと向けられた。ライはその瞳を見る度に「違う」と思ってしまう。理由はよく分からない。

ルルーシュが苦笑いした。彼もまたピザをひとかけら手に取った。

「いや、別にそうではないが……少し匂いがきつくてな」
「なるほど」

たしかにチーズの香りが部屋に充満している。人によっては好き嫌いが出るだろう。

他には特に会話することもなくライたちはピザを食べた。濃い味付けのそれは嫌いと言うほどではないが、進んで食べたいものでもないな、と冷静に考えた。自分のことなのに自分が何を好きなのかわからないのだ。少し自分のことを知れた気になった。

そろそろ昼休みも終わるといふ時間になった。

授業へ向かう生徒会のメンバーを見送っていると、ミレイに名を呼ばれた。ミレイはルルーシュと共に自分を見つけ、衣食住を与えてくれている恩人だ。

「ライ、ちょっと」

どうしたのだろうと思いつつ素直に駆け寄るライに、ミレイは金髪を揺らし笑顔で何かを差し出した。紺色の 財布のようだ。

「これは？」

「お小遣い。ないと困るでしょ」

「え。い、いや、でも」

衣食住の世話になっている上にお金まではもらえない。戸惑うライの手に、ミレイは無理やり財布を握らせた。

「身の回りの物、それで買ってきなさい。あー、でもまだ町に不慣れだろうから、誰か誘って」

「ミレイちゃん授業遅れちゃうよ」

「いけない。じゃあね」

眼鏡をかけた少女、ニーナの声にミレイは慌てて生徒会室を出て行った。一人残されたライはしばらく財布とドアを交互に見ていたが、

「ありがとうございます」

届かないだろう礼を述べて頭を下げた。自分を見つけたのがミレイとルルーシュで良かったと、思った。同時にお人好しすぎる彼らが今後、誰かに騙されたりしないだろうかと心配にもなった。

「さて。片付けるか」

ライはピザの箱を片付け始めた。急に部屋が広くなった気がした。

第一話「色あせた世界での目覚め」(後書き)

ライ難しすぎる。まだ感情の起伏がないので面白みがないですね。
こ、これから……何とかしたいなあ。

第二話「奇妙な感覚、おぼろげな記憶」(前書き)

オリジナル主人公視点です。この時点で受け付けない方はお戻りください。

第二話「奇妙な感覚、おぼろげな記憶」

「敵機撃破。ミッションクリア」

女性の声があるとハッチが開いた。密閉されていた空間に光が差し込み、新鮮な空気が一気に押し寄せてくる。

心地よい開放感と共に、カイナはその空気を思い切り吸い込んだ。いまだにこの狭苦しい空間は慣れなかった。

「お疲れ様、カイナ。相変わらずすごいスコアだね」

「スザク、お前も見てたのか」

少し汗ばんだ黒髪をかきあげながら、カイナは声をかけてきた少年を見た。

白いスーツを身に付けた彼の名前はスザク。枢木スザクくわきという。

茶色い髪が自由奔放にいろんな方向を向いているのが妙に似あっていた。顔立ちにはまだ幼さがあるが、それでも立派なブリタニアの軍人であり、特派（正式名称は特別派遣嚮導技術部。ブリタニア軍にある技術部の一つ）に所属するナイトメアのデヴァイサー（テストパイロット）だ。特派におけるカイナの先輩のだが、まだ学生という一面も持つ。カイナより二つか三つほど年下だ。

カイナはスザクからタオルを受け取り軽く汗をふいた。自分に向けられるスザクの翡翠色の瞳が輝いているのを見て、さりげなく目を逸らす。彼の純真な瞳は少し、いやかなり苦手だった。

「ただのシュミレータだ。実戦とは違う」

スザクは純真にシュミレータ結果を褒めているようであったが、首を横に振る。シュミレータと言えば聞こえはいいが、感覚的には

ゲームをしているようなものだ。ゲームと違う点はシミュレータ機が実際のコクピットと同じところぐらいか。

とりあえず、カイナはシミュレータの結果を褒められるのがあまり好きではない。話題を変えるために口を開いた。

「ん、そういうえば、今日お前は非番じゃなかったか？」

「そのはずだったんだけど、ロイドさんに呼ばれて」

「ロイドが？」

黒い瞳をカイナがロイド 特派の主任へと向けた。うねった短い銀髪に眼鏡をかけた白衣の男は、「んふふふ」と奇妙に笑っている。

今度はなんだ。

めんどくさそうな顔をして舌打ちしたカイナの肩を、「お疲れ様」と青い髪の女性が叩いた。オペレータをしているセシルだ。彼女はロイドと違い、きちんと橙色の軍服を着ていた。

セシルから水の入ったコップを渡されたのでカイナは遠慮なく受け取り、一気に飲み干す。特派にパンパンと手拍子の音が響いた。

「おめでと〜。今から演習行くよ」

「演習、ですか？」

「まためんどうなことを」

「カイナさんってば」

手を叩いたのはロイドで、彼の嬉しそうな声に返ってくるのは三者三様の反応だった。

「前から申請していたのがようやく通ったんだ〜んふっふっふっふ。 やつと実機のデータが取れるなあ。うひひ」

あからさまに嫌そうな顔も声も、見ざる聞かざる、なロイドは気持ち悪い動きをして笑っている。カイナが他の二人の様子を伺ってみると、スザクは真面目そうな顔をして「がんばろう」と小声で気合を入れており、セシルはにっこり笑いながらロイドを現実世界へと呼び醒ましていた。彼女はよく話を脱線させるロイドのストツパ―役でもある。

このロイドという男は、研究一筋の変わった男なのだ。それでいて自分で自分が変わっていることも理解しているし、相手に自分の考えを押し付けられないなど、意外と常識もある。だが……やはり変人には違いない。テストパイロットをデヴァイサー、道具と呼んでパ―ツ扱いするのだ。もっとも、パ―ツ呼ばわりされることをカイナ自身はあまり気にしていない。

変人だろうと恩人は恩人、か。

彼に拾われてしまった己を嘆けばいいのか、己に利用価値があったことを喜べばいいのか。カイナは複雑な気持ちになりながらも、結局恩人には逆らえず、演習場へと向かった。

ナイトメアフレーム（略称はKMF、ナイトメア）にカイナは初めて乗り込んだ。ナイトメアとはブリタニアが誇る人型兵器のことだ。全長が四〜五メートルほどの大きさで、市街地戦用に開発されたものである。

胸の部分には細長い形状をしたコクピットが、まるで背中から突き刺さるような形で収まっている。ちなみにコクピットは脱出機能付きだ。

決して快適とは言えない狭いコクピットの中、カイナが操縦桿を前に倒すと紫色のナイトメア（サザールランド）はゆっくりと動き出

した。途端に身体がシートに押さえつけられる。

「ぐっこれは思った以上に」

ナイトメアの移動は足につけられたホイールで行うので、上下に激しく揺さぶられることはない。しかし速度が出る分、かなりの負担がカイナの身体に襲いかかった。

シミュレータとは違う感覚にカイナは最初こそ戸惑い、違和感のある動きをしていたがすぐに慣れたようだ。段々とナイトメアを自由自在に動かし始めた。Gにさえ慣れてしまえば、他はシミュレータと同じだ。

ピピッ。

そんなカイナの元に通信が入る。ディスプレイにロイドの顔が映った。隣にはセシルもいる。

「カイナ君。そろそろ模擬戦の時間だけど、調子はどうかな？」

「ああ。問題ない」

「じゃあこの位置に移動してくれるかしら」

「了解」

セシルの声と同時に位置情報が送られてきた。カイナの操るサザーランドは、まるで人間のようスムーズな動きで移動を開始した。模擬戦相手は正規のパイロットだった。実機に乗ったのが初めてのカイナとは違い、数度実戦に出たこともあるという。気合を入れた。

しかし結果、カイナはあっさりと模擬戦に勝利した。あまりの手ごたえのなさにがっかりしたほどである。何かの手がかりになるかもしれないと期待していたので、模擬戦終了を告げる声に深いため息を吐きだした。

カイナには記憶がなかった。

およそ2か月前、ロイドに拾われるまでの記憶がまったく。覚えていたのは名前と、生活する上で必要な知識、それからナイトメアの操縦方法だけ。

ブリタニアではナイトメアに乗れるのは騎士候位以上（貴族）と定められている。民間人が乗ることは通常不可能と言ってもいい。スザクのような名誉ブリタニア人（ブリタニア植民地国の住民）がナイトメアに乗っているのは異例中の異例である。

なので軍の関係者だろうとロイドたちに情報を当たってもらったが、該当者はなし。奇妙なことにIDすら存在しなかった。なので記憶の手がかりはナイトメアだけだった。カイナの落胆が大きいのは仕方ない。

「おかえりなさい、カイナさん」

「……ああ」

優しく声をかけてきたセシルに、カイナは短く応え、水の入ったコップを受けとる。一口だけ飲んだが、あまり喉は乾いていなかった。

「カイナ君、どうだった？」

一先ず適当な場所に腰かけてカイナがコップをもてあそんでいると、ロイドが眼鏡を光らせながら話しかけてきた。カイナは眉間にしわを寄せて彼を見た。

「おかしい」

「ん？ 何がかな」

「ロイド。分かり切ったことを聞くな」

銀髪を睨みつけても効果はない。そうだねと笑って、ロイドは今

演習を終えたスザクの元へと走って行った。データを解析するのだらう。

「俺は、本当にナイトメアに乗っていたのか？」

誰にも聞こえないほど小さな声でカイナはぼやく。もしも本当に乗っていたなら操縦方法だけでなくGのことも知っていただろうに、カイナは知らなかった。実機の間を知らないパイロットなどいるはずがない。それにいつまでたってもあの密閉された空間に慣れない、懐かしさもまったく感じない。

カイナはため息を吐いてコップの水に移った己の顔を眺めた。眉が垂れ下がった情けない顔をしていた。

「俺は、誰なんだ」

思わず手に力が入り、紙のコップが歪んで水面が大きく揺れた。

波紋の中で己の姿が別の誰かに見えてくる。カイナ。白銀に見えた誰かが自分の名を呼んだ。

「あなたは、一体誰なんだ」

第二話「奇妙な感覚、おぼろげな記憶」（後書き）

補足：特別派遣嚮導技術部は“とくべつ・はけん・きょうどう・ぎじゅつぶ”と読みます。略称は特派“とくは”です。

一人は学園に。一人は特派に拾われました。これからどうなることやら。

今さらロスカラって需要あるんだろうかと思いつながらがんばりたいのでよろしくお願いします（挨拶遅い）

ロスカラR2でないかなあ。プレステ3で出ても本体ごと買っちゃうよ、私！

ナイトメア・ブリタニア等のギアス世界観に関する記述を大幅に加筆修正。分かりにくい点・間違いなどがあればぜひ教えてくださ
い（11/01/28）

第三話「後ろのあいっ」(前書き)

まだほのぼのしています。

第三話「後ろのあいつ」

ライは後ろを振り返った。

立ち止まったライに気づいたルルーシュもまた、足を止める。

「ライ？ どうした」

声をかけられても、ライは動かなかった。様子を怪訝に思ったのだろう。ルルーシュも紫の瞳を彼の後ろへやるが、廊下には誰もいな いや、リヴァルが手を振りながら二人へ駆け寄ってきていた。

「全く二人ともひでえよな。俺を置いて行くなんて」

「……リヴァルの着替えが遅い」

不満そうに唇を尖らせたリヴァルに、少し間を開けてからライが言い返した。何度目か分からない違和感を隠しながら。

「いやいや、お前たちが早すぎるんだって」

「そう、なのか？ ルルーシュ？」

「どうなんだろうな。普通だと思うが」

隣へと視線を送れば、ルルーシュの黒髪が揺れた。大分慣れたものの、今だこの黒髪を見る度にライの中で沸き上がる感覚ものがあった。温かいような、冷たいような、嬉しいような、悲しいような。相反した奇妙な感情が同時に身体を支配しそうになる。

いや、やはり慣れていないのだろう。気持ちの悪さを感じて、ライは苦笑った。

「ほら、そんなことよりさっさと生徒会室に行こう。会長に怒られ

るぞ」

「げ。そうだった」

「リヴァル。文化祭のアンケートは終わったのか？」

「ああそれならばうちりだ。ライにも手伝ってもらったし。あの時は助かったぜ。ありがとな、ライ」

「いや」

「でさでさ、聞いたか？ 今度新しい先生が来るんだってさ。美人だといいなあ」

「女と決まったわけではないだろうが」

ルルーシュに促され、彼らは先ほどよりもやや早い歩調で目的地へ向かう。

その間もリヴァルがいろいろと話し、ルルーシュが冷静なツツコミを返し、ライは二人の様子を見ながら時折相槌を返していた。二人とこうして話すのは楽しくて、気がつけばライの中から違和感が消えていた。ライは少しだけ後ろを見た。廊下が続いているだけで、誰もいない。

「リヴァルだったのか？」

二人の掛け合いを見ながら小声でライが呟く。振り返った理由を、彼自身良く分かっていたいなかった。だから振り返って動きを止めたのだ。誰もそこに居なかったから不思議に思っただけ。違うな。

誰もいなかったから、僕は。

「え、ライ呼んだ？」

「ん？」

声に顔を上げるとリヴァルが不思議そうな顔をしていた。声に出していたのか。ライは、首を横に振った。

「いや、呼んでないが」
「そっか？ んー、でも誰かに呼ばれた気が」
「もしかして七不思議のあれじゃないか？ 恋人を呼び続
「ルルーシユ！ やめるよなあ、そういうの」
「なんだリヴァル。あんな与太話信じているのか？」
「ち、違うけどさー」

二人の意識はまた会話に戻り、ライもまた「ななふしぎ？」と首をかしげて会話に加わった。話は徐々にそれていき、最終的に今日はミレイからどんな無茶命令が飛び出るのか、に落ち着いた。三人顔を見合わせ、誰からともなく笑う。後ろから聞こえた「へえ、そう思ってたんだ」との声が聞こえるまでは。

話を聞いていたらしいミレイに三人仲良く「会長チヨーツプ」をもらった。全然気配に気づかなかった。ミレイさん、悔りがたし。その言葉をライは心に刻んだ。……それにしても、かなり痛い。ライは銀色の頭をさすった。

そんなこともあっていつも以上に真面目に、というわけでもないが。生徒会の仕事を手伝っているライの横から「慣れたものだな」という声がした。いつの間にか正面に居たはずのルルーシユが、ライの書類を覗き込んでいた。

「そう、なのか？」

銀色の髪が揺れた。ライには比較する情報が無いため、自分の仕事ぶりを評価するのも難しかった。そのことを察したのか否か。ルルーシユは処理済みの山から書類を一枚取り、じっくりと読んだ。口から関心の吐息が漏れ出た。

「ああ。計算も正確で早い上に、文章も整っていて読みやすい。初めは誰でも戸惑うものだが……記憶を失う前に似たようなことをしていたのかもな」

「あ！ それ俺も思った。だって俺より全然処理スピード速いし！」
「リヴァル。それ自慢にならないわよ」

「ほんとライってば、どっかの誰かさんたちより真面目だし有能だし力もあるし、頼りになるわよねえ」

今さっきまで書類を前に唸っていたリヴァルが元気よく手を上げると、カレンが静かな口調で、ミレイが嫌みたっぷりの口調で言った。ミレイの目線先にはリヴァルと、ルルーシュがいる。ライが二人を見ると彼らはそっと目線を外した。特定の名前は挙げられないものの、自覚はあるのだ、二人とも。便乗するように「ほんとですよ。ルルったらやればできるのに」とシャーリーが言えば、「待ってくれよシャーリー、俺は、俺は？」と、またリヴァルが騒ぎ出す。

「はいはい落ち着いて。いったん休憩にしましょうか」
「やったー！」

手を叩いたミレイの言葉に一部歓声があがる。他のメンバーも声こそ挙げなかったが、さすがに疲れていたのだろう。息を吐いて肩の力を抜いているようだ。ライも動かしていた手を止め、固まった身体をほぐすように肩をまわす。ごきつと音がした。

シャーリーがお茶を入れようと立ちあがった。ルルーシュが「俺も手伝う」と声をかけ、彼女はどことなく嬉しそうに頷いていた。

「ああ、そういえばライ、買い物には行った？」

静かにライが観察していると、ミレイに声をかけられる。首を横

に振った。

改めて考えてみると、学園の外には出かけていなかった。皆がない時には学園を散歩し、時折迷子になり、食事時に生徒会メンバーに発見される。というパターンを繰り返していた。最近はずすがに迷子にはならないが、時間を忘れて空に見入ってしまったことが度々あった。そうすると食事を忘れてしまうので、心配した生徒会の彼らが捜してくれるのだ。

「やっぱりね。そんなことだろうと思ったわ」

呆れた。

ミレイがため息をつく。それでいて、ミレイの目が輝いていることにライは気づいた。首をかしげた彼の前で、ルルーシュが嫌そうに顔をしかめた。ルルーシュはミレイが何を言うか分かっているようだったが、まだ付き合いの短いライには何が起きようとしているのか。まったく察しが見つからない。

「というわけで、明日は『ライ君の買い物ツアー』に行くわよー」

「あ、賛成！ 私も買いたいものあるし」

「会長が行くなら俺も行く！」

「はあ」

「もちろん、男どもは荷物持ちね！」

嬉しそうにする者、必死にすがりつく者、嫌そうな者、不思議そうな者　ああ。そう言えば明日は祝日か　反応はそれぞれだが、次の日は生徒会メンバーで買い物に行くことが（強制的に）決まったのだった。

一人ではあまり行く気にもならなかった買い物も皆で行くとなると、どうしてか。とても楽しそうだと、ライは思った。

第三話「後ろのあいつ」(後書き)

ライのキャラが……これから段々人間っぽくなる、と、いいなあ(願望)。記憶喪失難しすぎる。

こっちは、もう少しほのぼのしそうな感じで。

第四話「スシーツ」

人混みをよけながらカイナは歩いていった。今日は非番だったので、髪を切りに行ってきたのだ。

本ならカイナは前髪ぐらい自分で切るつもりだったが、セシルに禁止されていた。自分で切るのではなく、ちゃんと美容院に通うように、と。

めんどくさい。思いつつ、セシルの迫力が怖くて逆らえなかった。いつの世も強いのは女性だとカイナはよくよく理解した。

「それにしても、なぜナイフだとダメなんだ？」

カイナは不思議そうに首をかしげる。それは一か月ほど前の話だ。セシルから自分で髪を切っているのか、と聞かれたことがあった。頷くと、

「カット上手なのね。私も頼もうかしら」

そう言ったセシルに「いつでもいいぞ」と、ナイフを出したら、よく分からぬままに怒られたのだ。思い出したカイナは、腕を組んで悩み始める。

絶対傷つけないと言ったのに、よほど自分の腕が信頼されていないのか。……あ！もしかしたら、セシルは先端（刃物）恐怖症だったのだろうか。だとしたら悪いことをした。今度お詫びをしなければ。と、なれば何か物を贈るのがいいな。ああでも女性が喜ぶものはなんだろうか。やはり定番はサバイバルナイフ、か？しかし、ナイフで怒られたのだし、先端恐怖症な人物に刃物を贈るのはさすがに気が咎める。

カイナは考え続ける。

うつむ。しかしナイフがダメとすると……銃はどうだろうか。護身用に いや、彼女も軍人だ。それぐらい持っているだろう。じやあ、スタンガン？ ありきたりだが、改造して渡せば許してくれるかもしれないな。と決まれば後で買いに行かねば、

「おっと、ここか」

カイナは足を止めた。いつの間にかもう一つの目的地、スーパーマーケットに着いていた。カットに行くついでにセシルから買い物頼まれているのだ。カイナはポケットからメモを取り出した。

一人暮らしで、ほとんど外食に頼りつきりなカイナを心配してか、たまにセシルが料理を作りやつて来る。今日はその日だった。折角だからロイドとスザクも、とカイナは二人を誘うのだがいつも断られてしまう。二人は引きつった表情で今日も誘いを断わった。

「えっと、rais、パイナップル、いちごじゃむ」

どうしてだろうか。考えながらカイナは店内を見回す。

初めて訪れたスーパーは予想より広かった。商品が綺麗に陳列されていて、おそらく規則性があるのだろう。しかし、カイナにはどこに何があるのかさっぱり不明だった。誰かに聞くかと、たまたま近くに居た学生に声をかけた。身長が高く細身の少年だ。彼を選んだのは、自分と同じ黒髪にどこか親近感が沸いたからかもしれない。ブリタニア人は奇抜な色が多い。

「悪い。ライスとイチゴジャムとホイップクリームはどこだ？」

「……ああ、それなら」

少年は若干迷惑そうな顔をしたが、いかにも作り笑顔な仮面を張り付けてカイナを案内した。

「随分と主張性のない面白い物ですね。何を作るんですか？」

「確か、オスシとかいうものらしい」

「おすし、ですか」

セシルの言葉を思い出しながらカイナが言うと、少年は紫色の目を丸くし、次いで頬をひきつらせた。食事を断る時のロイドとスザクの顔に似ていた。

どうやら彼はオスシとやらを知っているらしい。

「俺は知らないが、日本の伝統料理なんだろう？」

「まあ、そうですね」

「美味しいのか？」

「はい、まあ、美味しいですね 『普通』は」

「そうか。それは楽しみだ」

会話をしながらメモを見て、カイナはイチゴジャムをカゴに入れた。少年は紫の目をあちこちに彷徨わせながら、何か言いたそうだった。しかしどうしたと聞いても何も言わない。カイナは首をかしげつつ、次のフロアに行く。少年は買い物に慣れているらしく、足はよどみない。

次々とメモに書かれたものをカゴに放り込んでいくと、どうにも果物が多かった。夕飯の材料、のはずだが。

「オスシとやらはデザートなのか？ 俺はてっきりメインかと」

「え！ えっと」

純粹に首をかしげたカイナに、少年は甲高い声を上げ、無意味に手を動かした。いよいよもって挙動不審である。最初見た完ぺきな作り笑いはどこへ行ったのか。余裕がなさそうだ。困った顔をして

彼が口を開く。

「あー！。胃薬持ってますか？」

「胃薬？ 俺は元気だぞ」

「まあそうなんですけどね。これからのためというか」

「よく分からんが……お！ これがライスか。すまない、助かった」

メモ全てを制覇してカイナは息を吐き出した。最後まで少年が何を言いたかったのかは不明だ。それでもこれ以上付き合わせるのには申し訳ない。カイナは礼を告げてレジへと向かった。後ろから小さな声で、

「お大事に」

という言葉が聞こえた。変な少年だと、カイナは思った。

第四話「スシーツ」(後書き)

ギャグのつもりなんですが、ギャグになっているでしょうか。

アレ、の意味が分からない方はプレイ動画探してみてくださいな。

2525だと「スシーツ」検索でたぶん出る。……たぶん。

そして、カインさんは基本ボケ担当の非常識人です。クールなかつこいいキャラだったはずなのに、な。どこで間違えたんだorz

第五話「スリーパー」

ショッピング。それは、女の意地とプライドをかけた熱き戦いの場である。

「なんというか。これはすごいな」

「甘いライ。まだまだこんなものじゃないぞ」

「そうぞ。序の口序の口。これぐらいで驚いてたらついていけないぜ」

ライが感心しながら洋服売り場へと突撃していった女性陣を見送っている、ルルーシユの疲れた声、リヴァルの呆れた声がした。どうやら己が見ているのは初歩も初歩のようだ。ライは両腕に抱えた紙袋を見下ろす。一応、今日の主賓であるライの物も含まれているが、ほとんどミレイとシャーリーの物だ。あと、ナナリー（ルルーシユの妹）のものもある。ライだけでなくリヴァルとルルーシユも荷物を抱えている。ちなみにニーナ、カレンは欠席だ。スザクも軍の仕事が忙しいらしい。ナナリーは……。

「ふふ。でも、みなさん楽しそうです」

さすがに車いすであのバトル（あまり詳細は語りたくない）に参加はできないので、雰囲気だけを楽しんでいるようだ。控えめな少女だが、やはり買い物は好きなのだろう。

「時間かかりそうだな。飲み物でも買ってくる」

「俺も行こう」

その場にライは一端荷物を下ろす。リヴアルとナナリーの要望を聞いた後、歩き出した彼の腕をルルーシュが引っ張った。ルルーシュは別の方向を指さした。

「売店はこっちだ」

「分かった」

初めてやってきたデパートは広く、どこに何があるのか分からない。物珍しそうにライが店内を見回していると笑い声が出た。すぐ隣、ルルーシュだ。あまり声を上げて笑うことのない彼の様子にライは少し驚く。

「どうしたんだ？」

「いや、この前も案内したことがあってな。あれはスーパーだったがつー！」

前に向き直ったルルーシュが動きを止めた。ライが目線を追っても、何を見ているのか特定はしづらい。祝日だけあって客は多く、店員もあちこちにいる。商品ももちろんたくさんある。ライはまだルルーシュの好みを把握しているわけでもないのに、彼にとって目を引くものが分からないのだ。

「無事だったのか」

「え？」

「いや、もしかしたら俺の勘違いできちんとしたものを……しかし、夕飯の材料だと確かに言ってる」

独り言を始めてしまったルルーシュを、ライはどうしたらよいものかと見守る。心なしかルルーシュの白い肌が、青くなっている気がした。

「ルルーシュ、大丈夫か？ 顔色が悪い」

「え、あ、ああ。少し思い出して」

「スーパーの話か？」

「まあ、そう、なんだが」

らしくもなくルルーシュは歯切れが悪い。しかし、意を決したのかルルーシュはライに向き直り、真剣な顔をした。

「ライスにホイップクリームやジャムが合うと思うか？」

「……は？」

ルルーシュがおかしくなった。ライは心底友人を心配した。

「う、ライスにイチゴジャム」

シャーリーがパフェを前にして、気持ち悪そうな顔をした。先日ルルーシュが出会った人のことを話したのだ。

スシの材料を求めていたその人が手に持っていたメモには、夕食の材料とは思えないものばかりが書かれていたらしい。ライはスシが何なのかを知らないが、ライスにイチゴジャムやメロン、ホイップクリーム、ハチミツ等々を買い求めたその人の気がしれない。その人もスシを知らず、誰かに買ってこいと頼まれたようだが。

「うへ。聞いてるだけで気持ち悪くなってきた」

「まあ大丈夫ですか、リヴァルさん」

「ナナリー、大丈夫ーじゃないかも」

コーラが入ったコップを手に、リヴァルは椅子の背にもたれて空を見上げた。ここはデパートの屋上にあるカフェだ。彼らの足元には、当たり前のように大量の戦利品が鎮座している。

「その人を見かけて思いだしたのかい？」

「まあ、そうなる。後ろ姿を見ただけだから、人違いかもしれないが」

ルルーシュも、気持ち悪そうだ。平気そうなのはナナリーとライぐらいだった。ライの場合は表情に表れていないだけで実際は少し気持ち悪かった。

ライスはイレヴン、日本人の主食であり、何度か口にしたこともある。スシというものはライスに酢などを混ぜたスメシと呼ばれる物の上に、魚介類を乗っけるのが通常のようなのだ。が、ルルーシュが語ったその人のメモには魚介類のぎの字もない。一体どんなものになるのやら。思いつつも、ライは想像しなかった。賢明な判断だ。

「絶対別人だって。それ食べたら今日動けるはずねーよ」

「そうよねー。あたしも無理だな」

「あら、その人がものすごい変わった舌の持ち主ならありえるかもよ。」

あーあ。私も会ってみたかったなあ、その人。ものすっごおおおおく辛い物とか、ものすううううごくまずいものとか食べさせてみたいわ。あ、そうだ！ 激辛パーティー開催とかどうかしら？」

ミレイの不吉な言葉を、ライは聞こえなかったことにした。

「その方は大丈夫なんでしょうか」

「大丈夫だよ、ナナリー……たぶん」

出会ったこともないその人を心配するナナリーに、ルルーシュが笑いかけた。若干。いや、かなりひきつった笑顔だった。

第五話「スシーツー」（後書き）

全然気づいてなかったのですが、お気に入りしてくださる方がいらっしやるようで、ほんとありがたいとございます^^

まだキャラとの絡みが薄く内容がないんですが、これから絡めていきたいなあと思ってます。このキャラ出してほしいというのがあれば教えていただけると嬉しいなあ。

第六話「おしのびデート」

最近カイナは暇が少しでもあれば街を歩いていた。記憶探しのためだ。

ナイトメアの詳細な情報を知っていたことから、パイロットではないかと予測を立て、一時期は希望も抱いていた。だがカイナはすでにナイトメアに乗ったことはない、と確信している。記憶をなくしても身体は覚えているもので、格闘術などは覚えていないのに身体が勝手に動く。銃ではなく、ナイフや剣を持つとどこか懐かしいと感じ、しつくりくる。ナイトメアにはそれがなかった。

とはいえ、デヴァイサーを止める気もカイナにはない。自分の身元を確認するために軍の情報は役立つ。……義理もある。

カイナはある場所で足を止めた。つい五分ほど前まで聞こえた人々のざわめきは、聞こえなくなっていた。

「やはりここが一番怪しいか」

目の前に広がるのは、廃墟、そう呼ぶにふさわしい光景だった。

ゲットーと呼ばれる旧日本の街である。そこにあるのは色鮮やかな街並みではなく、ぼろぼろのコンクリートに、傾いたビル、割れた窓ガラス、ひしゃげた鉄パイプ、コンクリートの破片、生気のない人間、荒んだ空気だった。

カイナがチラリと後ろを振り返れば、多種多様な色があふれる賑やかな街、ブリタニア人の住む租界そかいが広がっている。また前を向けばどんよりした色の街。まるで境界線でも惹かれているかのようにはつきりとした違い。

この差は一体なんなのだろう。

思いながらカイナはゲットーと租界の境界を越えた。正直、人が大勢いるごちゃごちゃした租界よりもゲットーの方がカイナは落ち

着けた。空気、雰囲気とも言うべきものが肌になじむのだ。もしかして植民地の住民ではないのか。そんな推測も成り立つが、景色自体に見覚えはない。

諦めきれずにしばらく歩きまわったものの、目新しい収穫はこれといってなかった。予想はしていても、やはり落ち込む。

「あら？」

少し肩を落としたカイナが租界の方向へ足を向けると、呑気な明るい声が聞こえた。声の持ち主は場違いに綺麗な服を着た少女で、桃色の髪が灰色の街中で色鮮やかに揺れていた。少女の存在にカイナは気づいていたが見知らぬ人間に興味はなく、放置していた。

のだが、その少女は真つ直ぐカイナを見ていた。

後ろにいる誰か、ではなく間違いなく自分を見ていると気づけば、訝しく思った。このようなド派手な髪の色合いはいないはずだ。人の顔と名前を覚えるのは苦手とはいえ、そもそもカイナは知り合い自体が少ない。記憶を失う前の知り合いなら別だが、そんな雰囲気でもない。

少女は嬉しそうな顔をした。

「あなたもしかしてスザ」

「おうおう！ ブリタニアのお嬢さんと軍人さんよお。こんなところに一体なんの用だ？」

突如二人に声をかけてきたのは日本人の男だった。よれよれで色あせたシャツを着て、風呂にもろくに入れていないのか、肌は少し黒い。髪はある程度切りそろえられているがぼさぼさだ。無精ひげが年齢を少し上げていたものの、日本人は幼く見えるので二十代後半か三十すぎ、といったところだろうか。他にも似たような男たちが四人、の計五人が少女とカイナを囲んでいた。

カイナはいかにも面倒くさそうな顔をして、頭の後ろを右手でかいた。少女はもちろんのこと、カイナの服装も彼らと違い新品に近く、綺麗なものだ。住む世界が違うような二人に、男たちは羨望よりも憎しみを抱いているようだった。特にカイナは軍服なので余計だろう。

着替えるのを忘れていた。

今さらながらそんなことに気がつく。正確に言うならば着替えるのが面倒だっただけ。今度からはちゃんと着替えようとカイナは思った。毎回厄介事に巻き込まれるのは勘弁願いたい。

「てめえらのせいで、俺らは！」

少女は胸の前で手をにぎりしめている。だが少女は、カイナに助けてと叫ぶことも、すがりつこうともせず、震えながらも自分の足で立っていた。意外な態度にカイナは感心した。ブリタニアにもマシな奴はいるらしい、と。

「黙ってないでなんとか言え」

「……邪魔」

何も言わないカイナたちにリーダーらしき男が怒鳴った。ため息交じりに答えれば「この野郎！」とまた怒鳴られる。喋れと言うから喋っただけだというのに。不穏な空気が更に張り詰めた。仕方ないか。カイナは足元に転がっていた拳ほどの石を、二つほど拾った。手の中で転がす。

「こんのブリキ野郎が！ やっちまえ」

「はあ。だるい」

少女に二人、カイナに三人襲いかかってきた。少女の目が恐怖で

見開いている。カイナは右手に持った石を投げた。心の中では「そろそろ休憩時間終るんだが」と考えながら。

「ぐべっ」

石は少女に向かっていった二人の鳩尾と胸にそれぞれ直撃し、彼らの体をくの字に折らせた。え。誰かがそんな声を上げた。カイナはそのまま上体を倒して腰をひねり、右から飛びかかってきた男を蹴り飛ばす。飛ばした方向にはもう一人の男がいた。カイナは飛んで行った二人へ目も向けずに上げた左足を地面に下ろし、リーダーの男が突き出してきた拳を首を横に振って避ける。

「何！」

驚きに目を見張るリーダーの腕を取ったカイナは、彼を思い切り投げ飛ばした。……ちょうど起き上ろうとしていた、先ほど蹴り飛ばした彼らの方向に。

「どげえらっ」

奇妙な声が出た。

カイナはまったく気にせず後ろに大きく飛ぶ。空中で身体を回転、落下の勢いを利用し、また少女へ近づいていた男の背中を蹴る、というより踏みつけて着地。そのまま膝を曲げて腰を落とし、上半身を横にひねって、別の方向から向かってきていた男の腹に右拳を突き出した。男の体から力が抜けて、地面に倒れこむ。

周囲が静まりかえった。

「……スザク、遅い」

「ははは、ごめんよ。でも、問題ないようだったし」

「で、見物してたのか？ 趣味が悪いぞ」
「ホントごめん。助けに入ろうとしたんだけど、出番なくて。強いね、カイナは」

物陰から現れた少年に、カイナは不機嫌そうに鼻を鳴らし、少年……スザクが苦笑した。

少女がそんなスザクの名を呼んで彼に駆け寄っていった。ずっと気丈に振舞っていた少女だが、やはり怖かったのだらう。思い切り抱きついてスザクを困らせていた。二人は随分と親しそうだ。

「なるほど」

今日はめずらしく、スザクの方から休みたいと言っていた日だ。

普段ならいくら周りが休むように言っても休まない、あのスザクがだ。そういうことか。カイナは一人頷く。ようやく少女を剥がしたスザクは、少し赤い顔をしていた。

「デートだったのか。悪い。邪魔したな」

「えええっ！」

「ちょ、ちよつとカイナ。ちが」

二人は顔を真っ赤にして否定した。そんな二人にカイナが大丈夫だと頷く。顔は至って真面目だ。

「安心しろ。ロイドたちにも黙っていてやる」

「そっそうじゃなくて」

「しかしいくらなんでも、ゲッターはダメだろ。俺も詳しくはないが、ここでデートがまずいぐらいはわかるぞ」

「あ、私が行きたいとお願いしたんです」

「へえ。それは随分と変わっているな。普通は遊園地とか映画館じ

やないのか？」

少女の言葉に、カイナは特派の女性陣を思い出す。彼女たちの話を聞く限り、ゲットーに行きたがる女性はいなさそうだった。統計は知らないものの、おそらく少女の方が変わっているのだとカイナは判断した。少女まで赤くなった。

「え、あ、でも、その。私たちは別にデートというわけでは」

「まあスザクも変わっているからな、ちょうどいいんだろう。うむ、お似合いだ。ああ式に呼んでくれたら祝いはするぞ」

「式って、なつ、ちよつと待ってカイナ！ こちらの話をちゃんと聞いて。僕は、僕たちはほんとに」

スザクは、自然と変人呼ばわりされたことにも気付かぬほど、慌てている。式という言葉聞いて、まるでケチャップを塗りたくったように顔を赤くした。そこまで照れて慌てるのだからやはり本命か。カイナは益々二人の仲を応援したくなった。特に今のご時世、日本人とブリタニア人との恋など大変に違いない。

「まだ付き合いは短いが、こいつはいい奴だ。よろしく頼む。じゃあがんばれよ」

カイナが綺麗な仕草で頭を下げると、二人は否定するのにも一度忘れたらしく、律義に礼を返した。その様子にカイナはうんうんと頷く。頭を上げた二人はそこでハツとした。慌てて顔を上げて大きな声を出した。

「だから、違うんです！」

「だから、違うんだよ、カイナ！」

「お。息がびったりだな。これが日本の夫婦漫才というやつか」

「.:~しからし」

第六話「おしのびデート」（後書き）

ブリキ野郎、とはブリタニア人のことで、簡単に言うと悪口です。

デートってカイナがデートするわけじゃないんかい！ というツッコミが聞こえてきそうです。ハイ、スミマセン。

スザクの登場がどうしても多くなる。そしてユフィが登場。原作ではスザクとそう何回も出会ったりしてなさそうなんですが、ロスカラだとよく抜け出しているみたいなので、今回こんな感じになりました。

ちょこちょこ加筆修正しております。

第七話「ピザマスターと携帯電話」

ライは街の中を歩いていた。

生徒会の皆で出かけたあの日から、ライはよく街へ出かけるようになった。しかし今日は自分の用事ではなく、生徒会のおつかいで、だ。

「……どれだけ街に慣れたかテストします、か。ミレイさんらしいな」

生徒会会長の言葉を思い出し、ライは小さく笑った。年齢はあまり変わらないはずなのに、どうも彼女には一生勝てない気がしてしまっ。

「しかし、結構重そうだな。回る順番次第では大変、に？」

渡されたメモにはたくさん書いてあった。中によく分からないものを見つけたライは、思わず眉間にしわを寄せた。口に出した。

「12連ネコミミマガジン」

12連？ ネコミミ？ マガジン？ 一体どんなものなのか。姿形がまったく想像できない。

「第四世代ハイパーハンマー」

分からないのは自分が記憶喪失だからなのだろうか。

一応ミレイもライを気遣ってくれたらしく、店の名前も横に書いてあった。おそらく学園の生徒ならすぐに分かる店なのだろう。生

憎とライが知る店の名前は一つもなかった。外に出かけているとしても、店に入るとは少ないからだ。もう少し興味を持って入ってみるべきだろうか。ライは思いつつ、店を探すため歩きながら辺りを見回した。

ふと、ある色が目に入りライの足が止まる。

レストランの前に緑色の髪をした少女がいた。その少女は店に入るでもなく、ショーケースを眺めていた。食事時には少しずれた時間だが、レストラン前でショーケースから食べたいものを決めるのは普通だ。実際、彼女を気にかけている人はいないようだった。ライが少女の目線を追いかけると「新作ピザ登場！ピザフェア開催中」と書かれてあった。ピザが食べたいのだろうか。

あれ。そこでライは怪訝に思った。どうして自分はこの少女が気になったのだろうか。髪の色は少々珍しいが、ほとんど帽子で隠れ目立たない。第一あり得ない色ではない。ショーケースを眺めるのも不思議ではない。……ピザを見つめる目線が真剣に過ぎる気もしたが。

目線に気づいたのか、少女がショーケースからライへと目線を移した。二人の目が合う。そしてライの思考が止まった。少女から目線を逸らせなくなった。少女もまた、真っ直ぐにライを見ていた。ライの心臓が大きく音を立てた。

しかしポケットから響いた電子音に身体が跳ね、ライの視線がそれる。一瞬携帯へ目を向けて、また少女へ視線を戻すと、そこにはもう誰もいなかった。慌ててライが周囲を見回しても、少女らしい姿は見えない。

どこか消沈した気分では彼は携帯を取り出した。画面にはミレイの文字が表示されていた。

「えーつと通話は、これか」

ライが恐る恐るボタンを押すと携帯からミレイの声がした。先日

「無いと不便だからね」とミレイが買ってくれたのだが、どうにも携帯は慣れない。

『やっほー。迷子になってない?』

「はは。大丈夫ですよ。で、どうしたんですか、わざわざ」

携帯を耳に当てながら歩き、ライは視線を彷徨わせる。やはり先ほどの少女は見当たらない。

『実は買ってきて欲しいものが増えたのよ。お願いしてもいいかしら?』

「分かりました。なんですか?」

追加の買い物メモに書き込み、終話ボタンを押す。こんな小さな箱で遠く離れていても会話ができるのだから、便利な世の中に

ライは、首をかしげる。今の考えは、

「まさか」

自分の考えを、ライは首を振って否定した。携帯が普及して十年以上たっている。携帯の前は固定電話。どちらにせよ。遠い場所への連絡手段が確立されたのは、ライが生まれるより前だ。だからありえない、はずだった。……電話をまったく知らなかったなんて。

第七話「ピザマスターと携帯電話」(後書き)

やっと彼女が登場。これで物語は動き始め……そうでもない。ちなみに携帯苦手なのは私です(ドーン)。ってか電話が苦手で呼び出し音になると毎回びくつとします。え、どうでもいい？ スミマセン。

第八話「不安という名の」

カイナが記憶を失ってから、もうすでに二か月が経っていた。最初は混乱や不安もあったが、今では冷静に自分を見れるようになり、カイナは気づいた。自分の意識・感覚と知識が噛み合わないことにナイトメアに関してでもそうだが、その他の『当たり前のこと』に違和感を感じる。

例えば……カイナは右手に持った携帯を見下ろした。

「この黒い箱がなあ」

携帯の使い方は知っているし、特別珍しいものでもない。今なら誰でも持っているだろう。だが、どうしてか。新鮮に感じる。新鮮、というよりも驚きだろうか。こんな小さな箱で。違和感は機械全般にも同じことがいえた。

なんとも言葉にし難い感覚だった。カイナは顔をゆがませて携帯をポケットにしまう。気味が悪かった。

ロイドにでも話そうか。

脳裏に浮かんだ考えも、すぐ霧散した。大分薄れたが、カイナの中には最初から軍への警戒心があった。いくら軍人っぽくないとはいえ、ロイドにすべて打ち明けるのは躊躇してしまう。

第一、これは自身の問題なのだ。すぐ誰かに頼りそうになる己をカイナは律する。自分でなんとかするんだ。

だが考えれば考えるほど、腹の底にいくつもの石が次から次へと入っているかのような、冷たくて重たい感覚がした。

「あれ、カイナ？」

「ん？」

暗い気持ちのままカイナが突っ立っていると、聞き慣れた声に呼ばれた。振り返る際、咄嗟に表情を取りつくろった。

「スザクか」

彼の隣には細身な黒髪の少年と、彼らより若干年下と思われる車いすの少女がいた。二人ともブリタニア人のようだが、雰囲気から察すると知り合いなのだろう。全員制服らしきものを着ていた。見覚えのある服装だと考えて、それがスザクの学校の制服だと気付いた。スザクが笑って声をかけてくる。

「奇遇だね。こんなところで会うなんて」

「そうか？ 公園なら別におかしくもなさそうだが……ああ、でもお前は学校じゃないのか？ サボリか？」

今は昼休みの時間ではあるものの、学生が外をうろつく時間ではないように思った。昼休みなら学校の外に出てもいいのだろうか。カイナにはよく分からなかった。学校というものが想像できなかったのだ。

ちなみに最後に「サボリか」とつけたしたのは別に本気で思ったわけではない。言ってみただけだ。生真面目なスザクがサボる姿など、カイナには想像できない。案の定スザクは慌てて否定した。

「まさか！ 今日の授業は午前中だけなんだ。それで今」

「おいスザク」

「あ、ごめんよ。ルルーシュ、ナナリー」

説明しようとしたスザクは、連れに声をかけられてバツの悪そうな顔をした。黒髪の少年がどこか苛立った顔をしてカイナを見て、というよりも睨んでいた。初対面のはずだがこの少年に何かしただ

ろうか。

「えっと紹介するね。この人はカイナ。軍の……同僚、でいいのかな」

「いいんじゃないか？ 上司や部下という関係ではないし」

「で、カイナ。ルルーシュとナナリー。僕の友達で、二人は兄妹なんだ」

スザクは笑顔で二人を紹介した。二人が大切なのだと、スザクの笑顔が何より雄弁に語っている。友達か。カイナは心の中で苦笑した。自分にとつて一番不必要な言葉だ。自分に友などできるわけではない。また大きな石がカイナの腹に入ってきた。

「ナナリーと言います。よろしくお願いします、カイナさん」

「どうも」

礼儀正しく頭を下げた妹に対し、兄は傲岸不遜な態度、に見えた。何か分からないが、やたら嫌われているようだ。明らかな少年の敵意に、今度は面に出してカイナは苦笑した。

「で、三人は何しにここへ？」

「お昼ごはんを食べに来たんです」

ナナリーが笑顔で答える。彼女の目が閉じられたままであることに、カイナは気がついた。だがそのことについて特に何も言わず、手にしたビニール袋を掲げて見せた。ビニールの擦れる音に、ナナリーがわずかに首をかしげる。色素の薄い、柔らかそうな長い髪が波打った。

「良かったら食うか？ これ」

袋は三つあった。それぞれにタコヤキ、焼そば、お好み焼きが十パックづつ入っている。この公園にある出店でカイナが買ったのだ。スザクが渴いた笑い声を上げた。顔が盛大にひきつつている。

「いつものことなんだけど、それ、全部一人で食べる気だったのかい？」

「ああ」

「でも、よろしいのですか？」

「一人で食べるより大勢の方が楽しいからな」

遠慮がちなナナリーにそう返し、返事も聞かずにカイナは空いているベンチへと足を進めた。少し経ってから、三人がついてくる。ちよつと強引だったかな。反省しつつも、今は一人になりたくなくてカイナは気づかぬふりをした。

自分勝手な奴だと己自身で呆れた。

「タコヤキと焼そばにお好み焼き。どれがいい？」

腰を落ち着けてカイナが問いかければ、ナナリーは少し悩んだ後、タコヤキと答え、スザクはお好み焼き、ルルーシュは焼きそばを手にとった。買った当人は、迷いなくたこ焼きを手にして食べ始めた。その様子を見て、戸惑っていたスザク達も手を合わせた。

「あ、ナナリー。タコヤキは中が熱いから気をつける」

「はい」

カイナはナナリーが食べる様子をじつと見ていた。小さな口が丸いタコヤキ飲みこむ。しばらく嚙んでから可愛い喉が動いた。

「わあ、たこさんがコリコリしてとっても美味しいです。中もふわふわしていて」

「良かったな、ナナリー」

「はい、お兄様」

本当においしそうなのでカイナもホツと一息つき、次から次へとたこ焼きを食べていった。自然とカイナの頬が緩んだ。

「お好み焼きなんて久しぶりに食べたけど、やっぱり美味しいや」

「そうか。そうか」

すでにタコヤキを三パック平らげていたカイナは、スザクの言葉を聞いてお好み焼きを食べ始める。カイナの表情筋は、先ほどから緩みっぱなしだった。そんなカイナを見ていたスザクが横でふき出した。全員の視線がスザクに向かう。

「いやゴメン。君って食べている時幸せそうだなと思って」

「そんな顔しているのか、俺は？」

「ああ。確かにしているな」

「私にはお顔が見えませんが、とても温かい空気が流れてます」

スザクだけでなく、初対面のルルーシュにナナリーからも言われ、カイナは自分の頬を撫でた。鏡がないのでハッキリと分からないものの、確かにニヤついている気がした。意識して顔を引き締めると、今度はスザクの隣に居るルルーシュがふき出した。

「ソースを頬につけたまま真面目な顔されてもな」

ずっと仏頂面だったルルーシュが声を上げて笑うから、カイナは驚いた。スザクとナナリーも驚いていたので、やはり珍しいのだから

う。紫色の瞳にはもう警戒心がなさそうだった。なぜ突然？ カイナが首をかしげると、

「ははは。ほんとだ。左頬についてるよ」

スザクも笑って、しかし場所を覚えてくれる。左といえば先ほど触った方だ。左手を見ると人差し指にソースがついていた。カイナはなんとなくじっとその指を見て、右頬にも触れてみた。

「おい。反対にもソースをつけてどうするんだ。さっさと拭け」

「え、ああ、いや……えっと、拭くもの拭くもの」

「カイナさん、あの、よかったらこのハンカチ使ってください」

「ありがとうナナリー」

「そこじゃないよ、カイナ。ほら、僕に貸して。くすぐったくても我慢だよ」

「あ、こら。拭いてすぐにまたつけるな。というか、ハンカチぐらい持ち歩け。常識だろう。大体お前は箸の持ち方になってない。いいか」

「ふふふ。お兄様だったら、カイナさんのお母さんみたいです」

「ナナリーっ？ 俺はただ」

「ぶっあははははは、ほんとだね」

「スザクまで！ お前もなんとか言え」

「ルルおかしさん怖いー」

「ぐっこのー！」

最初のぎこちなさはどこへ行ったのか。スザクも、ルルーシユも、ナナリーも、楽しそうに笑っていて、カイナはふと自分の体を見下ろした。身体が温かい気がしたのだ。ご飯を食べたから温まった、わけではなく。原因はよく分からない。ただ、

「……悪くない」

「カイナさん、どうしましたか？」

「いや、あそこの焼きそばが中々美味いと思ってな」

腹にたまっていた石は、いつのまにか溶けていた。

第八話「不安という名の」（後書き）

ルルは良いお母さんになれると思うよ。それにしてもカイナさん、十パツクずつって食いすぎです。今回はほのぼのとしていただければ幸い。

話が進んでなくてすみません。けど結構重要だったり。どう重要なのかは次話にて。

2011・02・05修正

03・31修正

第九話「秘密の記憶・前編」

テーブルの上には、色とりどりの折り紙が広げられていた。中には動物や花の形をした完成品もたくさんあった。

「あつ！ できました、ライさん」

「ナナリーは上達が早いね」

「きつと先生がいいからですよ」

ライはナナリーの折ったサクラを見て、感心した。ナナリーは目が見えないが、その分丁寧に折られたサクラは自分が折ったモノより綺麗に見えた。同じく折り紙に熱中していたスザクは自身の折ったサクラを手に取り、ナナリーのモノと見比べている。彼もまた感心の声を上げた。

「すごいなあナナリーは。僕のサクラはなんだか不格好だ」

「スザクのは花びらの長さとおさがバラバラだな」

素直な感想をライが口にすると、スザクは情けない唸り声を上げながらテーブルに突っ伏した。数枚のカラフルな折り紙が、一瞬間に浮いた。

折り紙というのは元々エリア11（日本）の文化なはずだが、イレヴン（日本人）であるスザクはあまり得意じゃないようだ。とはいっても、鶴はちゃんと綺麗に折れるのだから不器用というわけではない。サクラなど初めて折ったと言っていたから、要は慣れの問題なのだろう。

なぜスザクより折り紙に慣れていて、たくさん折れるのかはライにも分からない。ただ、記憶はなくても手が覚えている。そのことを彼は嬉しく思っていた。

「そういえば、ライさん。この前面白い方と出会ったんですよ」

ナナリーが話し始めると、スザクが復活した。顔を上げた彼はどこか嬉しそうだ。その表情から、彼もその面白い方とやらを知っているのだと察せられた。ライへ話を振ったことから、少なくともライの知り合いではない。

しかしナナリーはあまり外に出かけられない。学園とここ、クラブハウス内が彼女の主な世界だ。自分がいない間に誰かがクラブハウスに来たのだろうか。ライが首をひねっていると、奥からルルーシュがやって来て会話に混じった。彼は人数分の紅茶を持っていた。意外にルルーシュは家庭的で、このメンバーで集まる時に紅茶を用意するのは、自然と彼の役目になっていた。

「午前授業の日があっただろう。その日、俺とナナリーとスザクの三人で昼食を食べに行ったんだ」

話を聞いていたらしいルルーシュがライの疑問を察して答え、スザクが申し訳なさそうに眉を下げた。

「ごめんね。君も探したんだけど見つからなくて」

ライは別に学園の生徒というわけではないので、基本的に授業には参加していない（たまに無理やり参加させられることはある）のだが、二人の話を聞いて思いだした。

確かに数日前、まだお昼の時間だというのに生徒たちが下校していく姿を見た。怪訝に思ったものの危険はなさそうだったので放置していたのだが……なるほど、その日の出来事らしい。

ちなみにライはその時中庭で昼寝をしていた。

「そしたら公園で僕の、えーっと、軍の同僚、に会って」
「私たちにお昼を奢ってくださいっただんです」

ルルーシュから紅茶を受け取り礼を言ったライは、相槌を打って二人に話しの続きを促す。余程楽しかったのか、二人は始終嬉しそうだった。見ている方が幸せになるぐらいの笑顔だ。ナナリーが弾んだ声で面白い方について話し始める。

「カイナさんっていう方で」

「つか、イナ？」

ナナリーが口に出した名前を聞いた途端、鈍器で頭を殴られたような衝撃がライを襲った。二人からもらった幸福など遠くへ飛んでいく。ナナリーが楽しそうにその人物について話しているが、ライの頭に入ってこない。頭が痛くなり、彼は右手で額を押さえた。彼の全身はまるで凍えているかのように、ひどく震えていた。

「うん。僕たちより少し年上で黒髪の……ライ？」

「おいどうした、顔色が」

細切れの映像が頭の中で流されていく。

無数の剣、槍がぶつかり合い、金属音を奏で、空からは矢の雨が降ってきた。赤い血があふれる度に聞こえる叫び声から耳を塞いだ。二度と開かれることのない瞼まぶたに心臓が萎縮した。血の気のない真っ白な顔は、冷たく硬かった。苦しい。苦しくてたまらず、彼は膝をついた。そんなライの後ろから、声が出た。

「様」

振り向くと、綺麗な黒髪を揺らした誰かが微笑んでいた。なぜか

顔がはつきり見えなくて、それが嫌で、ライは必死に思いだそうとする。頭の痛みが増していく。それでも彼は思い出したかった。

「あああ、あ」

しかし肉体が耐えられなかった。ライは頭を押さえて倒れ込んだ。

「ライ!」「ライさん!」

ルルーシュ達の悲鳴を聞きながらライの意識はそこで途絶えた。

ライは飛び起きて、たいへん驚いた。いつのまにベッドに入ったのか覚えていない。慌てて日付表示がついた時計を確認すると、次の日になっていた。しかも窓の外は赤い。もう夕方、だった。ライは慌てて起き上がり、最低限の身なりを整えて部屋を飛び出した。向かうのはナナリーの部屋だ。階段を一気に駆け下りて廊下を走る。ナナリーの部屋はもう少し先にあった。

とても急いでいたのだが廊下で珍しい背中を見かけ、思わず足を止めた。

「あれスザク? どうしてここに」

「っライ!」

「はい!」

声をかけるとスザクは驚いたように目を見張り、すぐに怖い顔をしてライの名前を呼んだ。穏やかな彼のめったに見ない形相に、思

わず背筋を伸ばして返事をした。スザクは表情を変えぬまま大股で歩み寄り、ライの腕を掴んで引つ張っていく。向かっているのはライの自室がある方角だった。

「え、スザクっ？」

「ダメじゃないか、ちゃんと寝ていないと」

さすが軍人というべきなのか。スザクにすごい力で引きずられていく。混乱が深まるが、とりあえず今はライにとってもっと重要なことがあった。

「待ってくれスザク！ 僕はナナリーに謝らないといけなくて」

「謝る？」

ようやくスザクが立ち止まった。腕は掴まれたままだったものの、話を聞く気にはなってくれたようだ。スザクはライを振り返った。表情はまだ少し怖かった。

「昨日、ナナリーに折り紙を教える約束してたんだけど、いつの間にか部屋で寝ていたらしくて」

落ち着いてライが理由を話すと、腕が解放された。かなりの力がこめられていたらしく、少ししびれていた。腕をさすりながらスザクを見ると、彼はひどく驚いた表情をしていた。呆然としている。さつきからスザクの様子がどうも可笑しかった。

「どうしたスザク！ 一体何ご……ライっ？」

「え、ライさん？ もう起き上がっても大丈夫なのですか？」

スザクの大声を聞きつけたのだろう。いつになく焦った様子の方

ルーシユと、不安な顔をしたナナリーが部屋から出てきた。ライの困惑は深まる。

自分を心配してくれているのは分かっても、彼らが心配している理由が分からない。

「あー。その、ナナリー、昨日はすまない。折り紙の約束、守れなくて」

とりあえず、ライはナナリーへの謝罪を述べた。ナナリーは眉尻を下げ、首を傾げる。困惑した表情だ。ルーシユもまた驚いているようで、スザクは難しい顔をして黙っている。気まずい沈黙だった。

「……覚えていないようだが、昨日、お前は倒れたんだライ」

幾分落ち着いた声でルーシユが話し出す。ライは戸惑った様子でスザクを見た。彼は頷いた。

「すごい熱が出てずっとうなされていたんだ。その様子を見ると熱は下がったようだがまだ寝てた方がいい」

「僕が、倒れた？」

「そうだよ。それにまだ熱があるみたいだしね」

スザクに言われてライが自身を顧みると、たしかに身体は少しだるく、汗をかいた形跡もある。気がつかないとは、余程慌てていたのか、頭が働いていないのか。ああ、両方か。ライは肩をすくめた。

「たしかに本調子ではなさそうだ」

「私のことはお気になさらず、ゆっくり身体を休めてくださいね」

「会長には俺から言っておく。最近忙しいからってライを働かせす

ぎだ、とな」

「ほら、ナナリーもこう言ってるし、君は身体を治すことだけ考えて。一人で大丈夫かい？」

「ああ」

過保護な言葉に苦笑して、ライは素直に自室へ戻ることにした。このまま無理にとどまっても心配させるだけだ。それに体調不良を意識したからか。本当に身体がだるくなってきた。

「おやすみ」

最後に振り返ってライはそれだけを言った。

第九話「秘密の記憶・前編」（後書き）

いろんなキャラを出そうと思っているのですが、どうしてもこの三人が良く出てきてしまいます。ご容赦を。

途中残酷描写になるかなと思ったのですが、一応目次にて警告文あるので前書きに何も書きませんでした（ネタバレになるので）。ご了承ください。

2011・03・31修正

第九話「秘密の記憶・後編」

「ルルーシュ」

「分かっているさ、スザク」

意図せず強めの声が出てしまい、ルルーシュは苦笑した。不安な声を出す親友を宥めるためとはいえ、自分もかなり動揺しているらしい、と。

最初、ルルーシュはライを疑っていた。恩人であるミレイの頼みで仕方なしに面倒をみるようになった、だけの存在と思っていた。だというのに今、ライが倒れたのを見て動揺している自分がとても可笑しかった。いつのまに彼はこんなにも自分の中に入っていたのだろう。ルルーシュは不思議に思う。

だがそんな心を隠し、ルルーシュは安心させるようと妹の肩に手を置いた。ナナリーはそれでも心配そうな表情を崩さない。そんな妹へルルーシュは告げる。

「カイナのことは、もうライの前で話さないことにしよう」

ライはカイナの名を聞いた瞬間に様子がおかしくなり、倒れた。頭を押さえていたので、記憶を思い出しかけたのかもしれない。だとすれば、ライの失われた記憶にカイナが関係しているのは間違いないだろう。少なくとも同名の人物と。

あのカイナと同一人物かは、情報が少なすぎて確定するのは危険だった。カイナとライの関係も不明瞭だ。もしも二人が敵対関係にあったのなら、排除する必要もある。

ルルーシュはその考えにいたった時、一瞬呼吸を止めた。

「でも、カイナさんはライさんのお知り合いでは」

「そうだが、同名の別人な可能性も十分ある。変に告げて混乱させるわけにもいかないだろ。違った時のショックも大きいだろうしな」

ナナリーにルルーシュはそう言ったものの、あの二人が知り合いである可能性は高いと考えている。ライがよく自分の髪を見ていたのを知っていたからだ。ずっと不思議に思っていたが、カイナもルルーシュと同じ黒髪だ。記憶を失っていてもなんとなく覚えていた可能性は十分ありえる。

しかしできることなら、あのカイナとライの記憶にあるカイナがまったくの別人であるといい、と願った。

「もしかしたら、ライは記憶を取り戻さない方がいいのかもしれない」

「ルルーシュ、それって」

一度思い出しかけた記憶をライは再び忘れていた。彼にとってそれほど辛く、悲しい記憶なのかもしれない。ルルーシュは酷くうなされていたライを思い出した。あの苦しみ方は尋常でなかった。

「自然に思いだすのなら仕方ない。だが今回のようにカイナの話をする、また倒れる確率が高い。それはライの体にとっても良くないからな」

「確かにそうんだけど」

スザクは俯いた。ルルーシュの言葉を理解はできるのだろう。彼はライが真剣に記憶を探しているのを知っている。記憶が無いことでライが苦しんでいるのを理解している。だからこそ記憶の手がかりを黙っているのが辛い気持ちは、ルルーシュにも分かる。

しかし身体のことを考えれば黙っているのが最善だった。何より、

記憶を取り戻せばライはどこか遠くへいってしまっ気がした。

ナナリーが不安そうな声でルルーシュを呼んだ。彼はしゃがんで彼女に声をかけた。

「ナナリーは、辛いかな？」

「お兄様……でも、ライさんのためなら、私黙ってます」

「そうか」

心やさしい妹の頭を撫で、ルルーシュは昨日のことを思い出す。

ライの熱は一時など40度まで上がり、始終うなされ言葉にならない何かを言っていた。記憶の欠片を取り戻す度にあんな状態になるのなら、記憶探しを無理にでも止めさせなくてはならない。そうしないとライの身体がもたないだろう。いざとなればギアスを使ってでも、止める。止めてやる。

だってライはもう。ルルーシュは黙り込んでいる親友を振り返る。

「スザク」

「分かった。僕も黙ってる。もちろん、カイナにライのことを言ったりしないよ」

「そうしてくれ。しばらくは様子を見よう。でもまた倒れるようなら」

「ああ、そうだねルルーシュ」

すべて言い終わる前に察したスザクが頷いた。彼も頷きを返す。ルルーシュは腕を組んで顎に手を当て、少し目つきを鋭くさせた。

「しかし、カイナについて少し調べた方がいいかもしれないな。スザク、あいつのことで知っていることを話してくれないか？」

「え、うーん。その、実は僕もほとんど知らないんだ」

スザクは困ったように笑った。フルネームすら知らないことにスザク本人が一番驚いていた。

ふむ。カイナがスザクにわざと隠している？ だとしたらやはり何かあるのか。

「ああ、でも時折街を歩いて何か探しているみたいだった、かな。もしかしたら」

「ライを探していた、か？」

しばらくルルーシュは考えてみたが、推測の推測にしかならず、ひとまずはスザクにカイナのことを調べてもらうことで落ち着いた。その時、彼は服の裾を引っ張られた。ナナリーが彼を見上げていた。

「でもお兄様。カイナさんは悪い方ではないと思うのです」

ナナリーもスザクも、複雑な表情をしていた。本音を言うと、ルルーシュ自身も複雑だった。初めて出会ったのはスーパーで（向こうは覚えていないようだった）、まともに会話したのはこの前が初めてだ。だというのに、どこか放っておけない危うげな空気をまとったカイナのことを、珍しくルルーシュは嫌っていなかった。

排除しなければならぬ可能性を思い、彼は少し気が滅入った。

「俺もそう思うよナナリー。だけどライがもう少し落ち着くまではな？」

「……はい」

二人を会わせるのはまだ早い。なるべくライに一人で出かけるのを止めさせる必要があるだろう。

「やれやれ」

ルルーシュは深いため息をつく。やらなければならないことは多く、とても面倒だったが、仕方がなかった。ライは彼にとって、なくてはならない存在なのだから。

第九話「秘密の記憶・後編」（後書き）

ルルーシュ視点って難しい。理屈っぽいからな、ルルーシュは。こんな感じで二人はすれ違う。出会うのはまだまだ先っぽいですね。

それにしても、なるべくライ君とカイナさんの文章量同じにしたいんですけど、どうしても差が出てしまいますね。どうやら落ち着いたキャラクター視点の苦手なようです（アウチ）。

第十話「ラウンズ・前編」

「今回は二対二の模擬戦よ。使用武器は大型ランス。加えて、格闘専用の固定武装は使用してもいいということになっているわ」

「スラツシユハーケンは？」

「相手に直接当てなければかまわないわよ」

ライフルはなし。近接戦闘か。カイナが小声に出して考えていると、電子音が聞こえた。顔を上げると、ディスプレイにスザクが写っていた。

「考えてみれば一緒に戦うのは初めてだね、カイナ」

「そうだな。サザールランドはランスロットと機能が大分違うから、気をつけるよ、スザク」

「うん、大丈夫。なんといってもこれは僕たち特派が殿下に認めてもらえるチャンスだからね。お互いがんばろう」

特派は突如決まった演習に来ていた。

驚いたことにコーネリア総督（この国を直接管理する領主のような存在）からの演習要請らしい。相手は青紫色のナイトメア、グロースターが二体で、これはコーネリアの親衛隊が乗る機体だ。パイロットもおそらく親衛隊だろう。エリート中のエリートたちだ。

対するカイナ達はサザールランド、性能はグロースターより落ちる。武装は同じ大型ランスだが、カイナは槍を捨てたため左右のスタントンファのみ。スザクは大型ランスのままだ。

ランスロットでは戦力が違いすぎるとはいえ、カイナは釈然としないものを感じた。いきなり呼びつけておいて「遅い」の一言だ。

カイナがよい印象を抱けないのも仕方なかった。とはいえさすがのカイナも「このばばあ」などは思っても口にはしていない。

「二対二と一対一は違うからな。いい練習になるだろう」

「さすがカイナ君。全然緊張してないねえ」

「当たり前だ。やるからには勝つ」

ロイドの気の抜けそうな声にカイナはやや不機嫌そうな口調で返した。

開始の合図を聞いて、スザクもカイナも全速で進む。すぐに青紫のナイトメアが二機見えてくる。カイナの頭が戦闘に切り替わった。普通の戦い方ではまず勝てない。カイナはそう判断した。機体の性能が違う上にパイロットの腕も今までとは段違いだろう。

さて、どうするか。カイナは相手をじっと見つめた。

二機の構えは、まるで違った。向かって左の機体は油断なく構えており、いつでも対応できそうな熟練者の空気をまとっている。

一方で右の機体は余裕の表れなのか、構えという構えをしておらず、一見隙だらけだった。

右へと機体に向けた瞬間、ぞわつとした悪寒がカイナの身体を駆け抜けた。

「スザク、向かって左の機体を、二人がかりで一気に倒そう……：右は、ヤバイ！」

「君がそう言うのなら、分かった」

スザクに声をかけたカイナはすぐさま操縦桿を倒し、左の機体に真っ直ぐ突っ込んでいく。右がまずいと思ったのは、根拠のないただの勘にしか過ぎなかった。だがスザクはカイナの勘が当たるのをよく知っている。反論なく、頷いた。

「俺が隙を作るからその間に左から回り込んで素早く倒せ。ただし、もう一方の動きには常に注意しろ」

指示を出しながらカイナはスラツシユハーケン（ワイヤーの先に鋭い爪がついている）を左の機体近くに突き刺し、ワイヤーを巻き戻す勢いを利用して一気に相手と距離を詰める。左機が槍の構えを少し変えた。

相手の攻撃範囲に入るギリギリで、カイナは先ほど射出したスラツシユハーケンを外し巻きとる。ほぼ同時に今度は右側のハーケンだけを自機近くにさして、速度を落とす。急制動に機体が揺れ、カイナの身体に凄まじいGがかかるも、カイナは歯を食いしばって左の機体を見る。今までの相手ならこれだけで態勢を崩したが、油断なく構えたままだ。

さすがというべきなのか、今まで戦った連中の程度が低いのか。いや、ここは純粋に相手を褒めるべきだな。

速度が完全に落ちきる前に、カイナは左側のハーケンを今度は右機前へ打ち込んだ。左の機体を無視して右へと向かう。スザクが通信越しに驚いた声を発したのをカイナは「黙って見てろ」と制する。右の機体は相変わらず泰然と構えていて動く気配はない。面白がっているようだとかイナは思った。かかってこい。まるでそんな声が聞こえてくるようだった。

完全に左の機体に背を向ける状態になったところでカイナは右のハーケンを戻し、機体を反転させる。突撃の勢いを利用し、スタントンファアを左の機体へ向けて思い切り振り抜く。力が込められたカイナの一撃は、

「ちいっ」

しかし槍で止められ、機体の回転もそこで止まる。身体を襲う衝撃に、カイナは歯を食いしばった。連続での急制動のGは中々きついものがある。

その時、右の機体が無防備なカイナへと動き出した。少しひきつ

けた後、カイナは躊躇なくトンファとハーケンを切り離し、後ろに飛び退る。右の機体はカイナが離脱し距離を保つと、すぐに攻撃の態勢を止めて元の位置に戻った。

この判断力……やはり、タダものではない。しかし、これで。

「スザク！」

「分かってる」

今まで競り合っていた力がなくなったため左の機体は体勢を崩し、横から回り込んでいたスザクの一撃が入った。すぐさまF E R R E A T（撃破）判定が出た。まず一体。

「ハハハハ、やるねえ」

オープンチャンネルで通信が入った。予想外に若い声は、女性のものだった。随分と楽しそうで、そして余裕もある声だった。カイナも、口角を釣り上げた。気分が高揚していた。

「気を抜くな、スザク。普通に戦ったら負ける」

注意を促しつつ、カイナは先ほど手放したトンファの位置を確認する。敵機の向こう側、スザクの傍に転がっている。折れ曲がっていたので、拾っても無意味だろう。

一応挟み撃ちすることには成功したが、相手はまだ余裕そうに構えている。今カイナの手元にある武器は左のトンファのみ。間合いでは向こうが上、数と陣形ではこちらが有利。地形は平地なのであまり関係ない。

「……んん？ どうした、さっきの元気がないなあ」

挑発の声が通信から聞こえてきた。それでもカイナは攻撃を仕かけない。スラッシュハーケンを使ったフェイントはもう効果がない。カイナ達の動きは見られている。だが、向こうの動きは分からない。

「スザク。頼みがある」

「なんだい」

「相手の動きが見たい」

「分かった」

短い言葉をスザクはすぐに理解したようだった。スザクのサザードランドがグロースターに向かっていく。

……ところで、グロースターの黒いマントにはなんの意味があるんだ。

風になびくマントを見ながらカイナはそんなことを考えた。動きを遮りそうなものなのだが。

「ん、遮る、か。なるほど」

スザクの的確な攻撃を易々と避けていくグロースターを、カイナは注意深く見る。マントが場違いに優雅に揺れていた。戦場において目立つことは味方の鼓舞、敵の畏怖を呼ぶ目印にもなるが、同時に大きな欠点にもなる。何よりなんだかムカツク。よし。これを使うとしよう。

いきなり呼びつけられたのを、カイナはまだ根に持っていた。呼び出された時、カイナは昼寝を楽しんでいたのだ。

「くっ、この人強い！」

「はははっどうしたどうした」

槍という武器の特性を生かした突撃力は、圧巻の一言に尽きた。

それだけでなくスザクの攻撃を完璧に避けてみせる。見本にしたいほどだ。スザクの動きは決して悪くない。相手の技量が上なのだ。機体性能差だけの話ではなかった。

グロースターが反撃をしてくる。サザールランドをスザクが後退させているが、間に合わず左腕にランスが当たる。追撃しようとしたグロースターにカイナも攻撃を仕掛けフォローすれば、グロースターはあっさりとスザクを追うのをやめて距離を取った。

深追いをしない。その判断力はやはり優秀だ。相手は兵士としてだけでなく、将としても優秀そうに思えた。

「損傷具合は？」

「小破つてところかな」

機体の重心のかけ方、攻撃の避け方、槍の構え方、突撃する際の動かし方。時折カイナもフェイントをかけながら探るが、癖を読ませない見事な動きで二人揃って翻弄された。相当ナイトメアでの戦闘経験があるのが伺えたが、それがための弱点もある。

カイナは戦闘中であるというのに、攻撃を避ける度に機体の横を揺れるマントを見た。頭の中で今までの動きを反芻し、カイナは頷いた。通信を開く。

「そろそろ反撃するぞ、スザク。俺が相手の動きを止めるから、後は任せた」

「え、分かった。だけど、どうやって」

「見てのお楽しみだ。攻撃の準備だけしといてくれ」

敵の背後に回りこむのは難しそうと判断し、カイナは側面から突っ込む。スザクに攻撃をしかけていたグロースターは、左に回避行動を取った。思い切り振ったカイナのスタントンファはかすりもしない。態勢を大きく崩したカイナに向かって、グロースターはすぐ

に容赦ない攻撃を仕掛けてくる。

「カイナ！」

「大丈夫だ」

スザクの悲鳴にカイナは短く返す。このままでは槍が突きつけられて終りだ。態勢を整える時間はない。トンファで迎え撃つのもこの姿勢では無理、ならば そのまま倒れてしまえばいい。目の前に広がるのは、横に回避したために風になびく黒いマント。カイナはそれを掴んだ。

「なにっ！ くっ」

しっかりと機体に装着された丈夫な布は、カイナの機体が倒れるのに引つ張られ、グロースターをその場に縫いとめた。カイナは声をかけようとして、その前にレーダーに映るサザールランドが見えたので笑った。

「これで終わり！ はああっ」

声をかけずともスザクは突撃していた。完全に体勢を崩していたグロースターは、それでも彼に槍を突き出した。見事だ。しかし相手が悪い。あっさりとその槍を避けたスザクは、己の槍をグロースターに突きつけた。

セシルの声が聞こえた。

「模擬戦終了。開始位置に戻ってください」

「あっはっは、やるじゃないか。まさかマントを掴まれるとは」

目の前で豪快に笑っている女性、ノネットⅡエニアグラムをカイナは観察していた。このノネットこそ先ほどの対戦相手であり、カイナが危機感を抱いた乗り手だった。話を聞けば皇帝直属のナイト・オブ・ラウンズの一員だという。想像以上の大物に、スザクが横で言葉をなくしていた。カイナはふと思いついた。

スザクはラウンズに入るのが目的なのだという。カイナが聞いた話によると、ナイト・オブ・ワンになれば好きな植民地エリアの一つをもらえるらしい。ナイト・オブ・ワンになって日本をもらおう。日本人であるスザクがブリタニア軍に所属しているのは、すべてそのためだった。

ちなみに名誉ブリタニア人でラウンズに入った者は、今まで存在しない。スザクが目指しているのは、あまりにも困難すぎる道だった。まあがんばれと、他人事のようにカイナは思っている。

突然決まった今回の演習は、ナイト・オブ・ナイン、つまり目の前にいる女性の気まぐれによるものらしい。コーネリアでさえもノネットには頭が上がらない、ということなのだろう。ラウンズだからではなく、個人的な親交。学生時代の先輩後輩に当たるのだから。大きな理由のようだ。

「回避行動を取った際に大きく揺れるマントを掴み、機体ごと倒れてこちらの攻撃を避けると同時に動きを止めるか。あそこで私が避けることを前提にした攻撃だったわけだ」

「まあ、マントじゃなくても良かったのですがね。意表を突きたかったので」

実際のところはマントが偉そうでムカついたからなのだが、本当

のことは言わない方が花というもの。マントより相手の機体自体を掴んで足止めた方が効果的だったろう。マントにしたのは、カイナの意地だった。

「それにハーケンを利用したフェイントも見事だった、なあ？」

ノネットは後ろに控えていた男に声をかけた。彼がもう一人のパイロットだ。まだ若い。カイナと同じか少し上、二十を過ぎたぐらいだろうか。この年齢である落ち着いた動きか。カイナは心の中で驚嘆した。将来が楽しみな青年だ。随分と年寄り臭いことも考えた。青年は苦笑いを浮かべた。彼は、まさか負けると思っていなかったのだらう。それでも素直に負けを認めている姿勢は賞賛に値した。負けを認めないものは大勢いるのだ。

「はい。一直線にこちらへ来ると見せかけ急制動、反転。エニアグラム卿へと機体を向けたことで私の意識を逸らす。エニアグラム卿の一言がなければ、私は最初のトンファでやられていたことでしょう」

「ハーケンの使い方はぜひとも参考にさせてもらいたいな。しかもそのまま私を挟み打ちに持っていくとは。いやぁお見事！」
「たしかにあの動きは見事だったが、やりすぎだ」

紫色の髪を揺らしたコーネリアが呆れた視線を、サザーランドに向けた。カイナが乗っていた機体である。無理な動きがたたつたらしく、見事に故障してしまった。重症なのはハーケンと足の関節部分だ。カイナも少しやりすぎたかなと、忙しなく動き回る技術部の面々を見ていると思わなくもなかった。時折悲鳴まで聞こえてくるが、あまり反省はしていない。演習を持ちかけた方が悪い、というのがカイナの考えだ。

「サザールランドの100%を出し切っても勝てるか分からなかった
ので。それに最悪自分が動けなくなってもスザクがいましたから」

「ええっ？ 僕？」

「引き分けには持って行けたでしょう」

驚くスザクを放つてカイナは淡々と語る。事実、一対一であれば
勝てなかった。スザクがいたから、もう一人がスザクだからこそ、
カイナはあんな無茶ができたのだ。ノネットの視線がスザクに向か
い、彼は更に慌てたようだった。ノネットが首を縦に振った。

「ああ。たしかに良い動きだった。今日は機体との相性が悪いよう
だったが、今度は噂のランスロットとやらと手合わせ願いたいもの
だ」

「エニアグラム卿！ ……はあ、まあよい。お前たちご苦労だった。
帰ってよいぞ」

「じゃあまたな」

笑顔のノネットと握手を交わし、カイナ達はその場を去った。

第十話「ラウンズ・前編」(後書き)

ノネット「エニアグラム卿でした。もっと会話絡めたかった。戦闘シーン長すぎだ、気合い入れすぎだよ自分。戦闘の解説とかも、なるべくいれたいなかつたんですけどね。文章力なくてすみませ。本編に入れられない小話なんかは短編として上げていけたらいいなと思ってます。このキャラの話を、ってのがあったら教えていただけると嬉しいです。

後今さら何ですが、ユニークアクセツ1000突破ありがとうございます。これからもがんばります！

武装について修正しました(10/12/30)。

第十話「ラウンズ・後編」

スザクは、席に座って黙り込んでいるカイナの様子を伺った。ルーシユに言われたから観察している、わけではない。いつもと雰囲気が違うのが気になったのだ。

「カイナ？ どうしたんだい、さつきから
「何がだ」

鋭い目で床を眺めていた、というより睨んでいたカイナが顔を上げた。口調は淡々としている。

「すごい怖い顔してたよ。もしかして怒っているのかい？」
「怒る？ ああいや」

どうやら自覚していなかったようで、カイナは眉間を手で揉みほぐした。手を顔から退けた時、カイナの表情は、いつもの淡白な表情に戻っていた。

「怒っているというより、不満、が正しいな」
「え、不満って何が？」

少し考えても不満の理由がスザクには思い浮かばなかった。カイナは苦笑して「さっきの演習だ」と答えた。スザクは翡翠の目を大きく開いた。演習の結果は勝利だ。機体性能も、パイロットの腕も格段に上の相手に対しての、だ。正直負けるとスザクは思っていたぐらいで、一体どこに不満要素があるというのか。

「あれは演習だから勝てただけだ。実戦じゃ負けてる。ノネット卿も本気じゃなかったしな」

「えええっ？ そうなのかい？」

大声を出して純粹に驚いたスザクを、カイナは「お前もまだまだだな」と笑い、彼の頭をぐしゃぐしゃにかき混ぜた。

カイナはたまにこうしてスザクを子供扱いすることがあった。普段はカイナの方が子供っぽいのに。スザクは思っ少し悔しかった。悔しいのだが、その手はとても心地よかった。だからつい振り払うことなく受け入れてしまい、スザクは余計に悔しく感じるのだ。

向かいの席に座ってパソコンをいじっていたロイドが顔を上げ、二人の話しに加わった。

「あんな無茶苦茶な……機体性能を明らかに上回った動きしてたら消耗も大きい上に、下手したら戦闘中に故障する場合もあるからね。敵が二人だけって決まっている演習だからこその動きだよ。おかげで面白いデータが取れたけどね」

「せめて機体性能が同じならもう少しマシな戦いができただろうけど」

しみじみと呟くカイナを見て、ロイドが不気味な笑い声を上げた。カイナは嫌そうな顔をして彼を見た。

「んふっふっふ。もしかしてサザーランドじゃ満足いかないようになっってきたのかな？」

ロイドの言葉に、カイナは言葉を返さなかった。スザクはようやく納得した。カイナが不満を抱いていたのは機体か。たしかにサザーランドであそこまでトリッキーな動きができるのだから、能力に見合った機体に乗れば……。スザクは思わず唾を飲み込む。カイナ

が味方でよかったと、彼は心から思った。

ああ、でも。今までカイナがそういつた不満を漏らしたことはなかった。思わぬラウンズとの戦いに彼も何か感じたのだろうか。

スザクがそつとカイナの顔を覗き込もうとしたら、反対側に向けられた。子供っぽいそんな仕草にスザクが思わず笑ってしまうと、黒い瞳に軽く睨まれてしまう。それでもスザクが笑い続けると、

「寝る。ついたら起こせ」

「おやすみ」

カイナは腕を組んで目をつむった。今は演習場からの移動中だ。思い返せば、移動中カイナはいつも眠っていた。最近カイナに対する発見が多い。今までどれだけ見逃していたのかと、スザク自身が呆れてしまうほどに。

「しかしすごいよねえ、あんな動き。スラッシュハーケンをあんな風にするなんて」

声にスザクはロイドを見る。どうやら独り言のようで、パソコンに何か打ち込みながら一人で笑っていた。どう見ても怪しいが、彼は普段からこうなのでスザクは気にせず、隣で眠るカイナに視線を送った。

目を閉じたカイナは少し幼く見えた。黒いまつげが長く、白い肌に影を落としている。こうして見ると本当に整った顔だとスザクは思う。普段はあまり意識しないのだが、眠っていると中性的な雰囲気が出た。

そういえば、とてもよく食べる割に身体も細い。親友も細いが、彼とは違う。なんというのだろうか、もっと柔らかくて。

「うっわ」

身体が引つ張られる。トレーラーがブレーキを踏んだらしい。スザクは反射的にてすりを掴んだものの、眠っているカイナは流れるままに倒れこんだ。スザクの膝に。彼はカイナが落ちないようにもう一方の腕を伸ばして支えた。衝撃にカイナがうめいた。

「うっ」

「カイナ！ 大丈夫かい？」

「スザクくん、僕も心配して欲しいなあ」

「あ、すみませんロイドさん」

見事に尻もちをついているロイドが唇を尖らせた。そこそこいい年のはずだが、彼にはそんなしぐさが妙に似合った。

運転席からセシルの声がした。どうやら交通事故があつたらしい。たしかに周りがざわついているのが聞こえる。怪我人がいるのか。事故の規模はどれくらいなのか。スザクは気になったものの、膝にカイナがいるので立ち上がるわけにもいかず、落ち着かなかつた。腰をさすりながらロイドが運転席の方に向かって行った。セシルと話をしているようだ。

「スザク？」

眠そうな声の下から聞こえ、スザクは意識を外からカイナへ移す。黒い瞳がぼんやりとスザクを見ていた。その時初めて、彼は黒色を綺麗だと思った。

「もう、ついた、のか？」

「いやまだだよ。今ちよつと事故があつたらしくて」

「そ、か」

いつもよりカイナの声が甲高い。余ほど眠いのか途切れ途切れに喋っていて、本当に子供のようだ。カイナはゆっくり身体を起こしてスザクの膝からどいた。急に膝の上が寒々しく感じ「あ」意識せず残念そうな声スザクの口からまれ、顔が熱くなるのをスザクは感じた。

幸いカイナには気づかれなかったようでホツとした。

「ふぁぁぁおおう」

カイナは猫のようなあくびをした。いつもカイナは眠そうだが、今日は特に疲れているようだった。動きがフラフラしていて頼りない。やはり演習での無理な動きが祟ったのだろう。ナイトメアの操縦は体力を削ってしまう。

「悪いな。気、になるんだろ、いってこい。俺は、寝る」

言うだけ言ってカイナは床で横になり、寒いのか丸くなった。その姿はまるで、ではなく猫そのものだった。しかももう眠っているのか、寝息まで聞こえてくる。スザクは少し迷った後、上着をカイナにかけて外へ出て行った。

ライとは知り合いなのだろうか。知り合いだとしたら一体どんな関係だったのだろうか。カイナから見た世界はどんなふう映っているのだろうか。もっと知りたい。純粹に彼は思った。

第十話「ラウンズ・後編」（後書き）

トレーラーの荷台に座れるスペースあるかどうかは不明です。が、ここでは壁際にずつつと長椅子が続いていると思ってください。でもほとんど機材を積んでいるので座れるスペースはちよびつとだけ。いつもスザクと並んでカイナさんが座ってる感じで。正面にはロイド。

今回はスザク君視点でした。ルルーシュより書きやすいよ。ウザクウザクと呼ばれる彼ですが、私は結構好きです。普通に友達なら良い子だよ。でもなんだかこの子との友情は腐臭い気がしてならない舞傘でした。

2011・03・31修正

第十一話「足を踏み入れる」

「はあっはあつくそ」

ライは走っていた。見知らぬ誰かと肩をぶつけながら、必死に追いかけていた。緑髪の少女を。

少女は何かを知っている。彼はそんな確証を抱いていた。先ほども公園でライを見た少女は笑ったのだ。お前のことは分かっている。そう言わんばかりに。

「どこに、行った？」

段々と人混みから外れているようだ。少女が向かっている方角を察しライは戸惑ったものの、すぐに走り出す。ここ数日部屋に押し込められていたせい、すぐに息が上がってしまう。倒れたと言う日から周りが過保護になった。心配は嬉しいものの、気分は複雑だ。緑色の髪を追いかけて、追いかけて……ゲッターまでやって来たライは、足を踏み入れることを躊躇した。治安の悪さを気にしたわけではない。

以前ここでライが軍人に捕まりそうになった時、スザクに助けられたことがある。その際に、どうしてもゲッターへ来たい時は彼と一緒に行く、という約束をしていた。

「ごめん、スザク」

約束を守れなかった罪悪感を今は引つ込める。あの少女を見つけなければ。そして、僕のことを知っているなら聞かなければ。記憶を取り戻して皆と、気兼ねなく過ごすためにも。ライはゲッターの

地を踏んだ。

以前来た時と同じ廃墟がライの目の前に広がっている。ちらほら見える人影を確認しながら進んだ。崩れた建物や破片、ごみが道を塞ぎ、道路は崩れて寸断され、複雑な迷路を作り出している。土地勘がないと迷いそうであった。

ゲッターを見回したライは思わず舌打ちした。ここは隠れられる場所があまりにも多い。住民たちとあの少女は明らかに服装や雰囲気が違うのですぐ見つかる、という希望的観測を捨てた。

諦めきれないライがそのまま探し続けていると、見知った姿を発見して彼は足を止めた。青い瞳が驚きに数度まばたく。決してこんな場所にいる人物ではなかった。

「あ」

向こうもまたライを見て動きを止めた。赤い髪の少女　カレン
「シユタットフェルト。生徒会メンバーの一人だ。病弱な彼女は学校を休みがちで、今日も学校を休んだはずだった。

「カレン、なぜ君がここに」

「あなたこそどうして」

お互い相手の事情を聴きだそうとしたその時、地面が大きく揺れた。銃撃の音が聞こえてくる。ライが音の方角を見れば黒い煙が昇っていた。どうやらテロらしい。こんな時に！ まったく、ついてない。

「我々は黒の騎士団である！」

ひび割れた声が辺りに響き、人の形を取った機械が次々に現れた。ナイトメアフレーム（KMF、ナイトメアと略されることもある）、

ブリタニアの誇る人型兵器だ。全長が四〜五メートルほどの大きさで市街地戦用に開発されたものである。

目の前に複数出現したこげ茶色っぽいナイトメアは無頼という。ブリタニアのナイトメアを鹵獲^{ろかく}し、日本人の手で改造された機体だ。性能はあまり良いとは言えないが、安価で比較的手に入りやすく、反ブリタニアの組織がよく使っている。

「いつつな、んだ？」

痛みと共にパツと浮かんだナイトメアの情報にライは一瞬混乱したものの、意識を切り替えた。現状を打破することが最優先だった。先ほどの声は拡声器の質が悪いらしく少し聞きとりづらかったが、確かに黒の騎士団と言った。仮面の男、ゼロが率いる反ブリタニア抵抗組織のことは、ほぼ毎日のようにニュースで流されているので知っていた。今ブリタニア軍は彼らを血眼になって探している。

「これはブリタニアに対する正義の制裁である！」

いずれかの機体に拡声器がつけられているのだろうが、周りに反響していて特定はできない。

ナイトメアの周囲には銃を持った男たちが並んでいた。テレビで見た黒の騎士団が来ている制服ではなく、ここに住む人たちと大して変わらない服装だ。

本当に彼らは黒の騎士団なのだろうか。ライは疑問に思ったものの、カレンの腕を引っ張って走った。

「逃げるぞ」

「え、ええ。そうね」

巻き込まれてはかなわない。拡声器からはまだ声がしている。

「立ち上げれ日本人よ！ 正義は我ら黒の騎士団にあり。ブリタニア人を殺せ！ 殺しつくせ！」

正義、そう言いながら彼らは一般人を巻き込み、ブリタニアのパトロール隊を襲撃している。同じ日本人を平気に跳ね飛ばし、倒壊した建物の下敷きになった人たちを助けようとせす、彼らは癩癩かんしゃくを起した子供のようにただ暴れていた。綺麗な言葉を並び立てているみたいだが、やっていることはただの破壊に過ぎない。ライは顔をしかめた。

「あんなのは違う。黒の騎士団はこんなことしない！」

彼らの行いを見たカレンは唇をかみしめて叫んだ。彼女はブリタニア人だが黒の騎士団を肯定的に受け止めているようだった。ライは奇妙な違和感を覚えた。

訊ねる前にまた地面が大きく揺れ、カレンがバランスを崩したので、咄嗟に腕を伸ばして抱きとめる。

「大丈夫かカレン」

「ええ、ありがとう」

ライが警戒しつつ振り返れば、先ほどよりも明らかに無頼が近付いていた。いや違う。無頼がこちらに逃げてきているのだ。後ろにはブリタニアのナイトメア、サザerlandがあった。もうブリタニアの援軍が到着したらしい。騎士団を名乗っている彼らは無様に逃げ回り、紫色の機体、サザerlandにより破壊されていた。

あっけなく無頼が倒れていく中、テロ集団と関わり合いのない日本人が生き延びようと必死に逃げ回り続けた。中には子供も、お年寄りもいた。

ブリタニア軍は周りの損害など気にせず銃を撃っている。実際気にも留めていないのだろう。租界ならまだしも、ここには普通のブリタニア人はいなく、どうなってもいい場所なのだ。破壊されたコンクリートの壁が崩れて一人の男性を押しつぶすのが見えた。ライは知らず、唇をかんだ。他の誰かを助ける余裕など彼は持っていなかった。逃げ惑う人々から視線を剥がし、走った。ブリタニア軍の動きにだけ意識を集中させ、無理やり冷静さを保った。

そしてライは足を止めた。カレンが急かすように彼の腕を引っ張る。

「ライ、何してるの。早く逃げなくちゃ」

「無駄だ。逃げ切る前に包囲される」

「で、でも事情を説明すれば」

「彼らが事情を聞いてくれると思うか？」

「それは」

状況は最悪だった。テロリストが一般人と同じ格好をしているというのがなお悪い。ブリタニアはテロリストを抹殺するため、この住民すべてを殺すことのためにためらいはしないだろう。ライがそのままで予測するのとはほぼ同時だった。

今までと違う悲鳴が上がったのは。

辺りに血の匂いが広がった。とりあえずライはカレンの視線を遮りながら彼女の腕を引っ張り、物陰に隠れる。頭の中ではどうやって包囲網をくぐり抜けるか。絶望的な状況でいてなお、諦めずに考えていた。彼の思考をときらせるのは泣き叫ぶ声だ。握りしめられたライの拳が震えた。

カレンが悲鳴染みた声を上げる。今にも銃弾の前に跳び出そうな彼女の腕を掴んだまま、ライは首を横に振った。

「なんでっあの人たちは何もしていないのに」

「テロリストが紛れ込むかもしれないからだろう。彼らの服装は一般人と変わらないから余計だ」

うつむいていたカレンがライの言葉に顔を上げる。驚いているようだったが、なぜ驚いているのか聞く暇はない。なんとかして逃げなければ。せめてカレンだけでも。

機械の駆動音がすぐ近くでした。ライが様子を伺うと、包囲網から逃げようとした一機の無頼がこちらに突っ込んできている。無頼をしとめるためサザーランドの銃口がライたちの方を向いた。

「カレン、しゃがめ！」

ライがカレンに覆いかぶさる。先ほどまでカレンの頭があつた位置を銃弾が通過して行った。どんどんと二人は追い詰められている。身体を起こしながらライが辺りを見回すと、先ほど突っ込んできた無頼から中年の男が逃げ出していた。無頼は頭の部分が損傷しているだけのようだ。ライは少し考えた。

「ここでちょっと待っていてくれ」

声をかけてライは空いているハッチから操縦席を覗き込む。左右の操縦桿、フットペダル、出力ゲージに残弾数。パーツ、各計器の意味がライには分かった。なぜかは分からないが、どうやら操縦できそうだった。キーも刺さっている。故障も特にしていない。ライは隠れていたカレンを呼ぶ。

「これを使ってこの場所から脱出する」

「え。ライ、あなた操縦できるの？」

「どうやらそのようだ」

戸惑っているカレンの腕をやや強引に引っ張る。コクピットの中は狭く、自然とカレンがライにもたれる形になった。

「ハッチは壊れているみたいだな。このまま目視で行く。しっかり捕まっけてくれ」

「う、うん」

意を決した様子でカレンはライの首に腕を回した。それを確認したライはスラッシュハーケンを近くの壁に射出、機体を起こした。そしてすぐ目に入ってくるのはこの無頼を追っていたサザーランドだった。槍を構えて真っ直ぐ突撃してくる。その動きは隙だらけで、油断しまくったものだった。

ライは操縦桿を動かし、スタントンファで槍を跳ね飛ばす。今まで逃げに徹していた無頼からの反撃に相手は動揺した。相手は慌てた様子でライフルを構え、構え終わる前にライがもう片方のスタントンファを叩きこんでいた。すぐさまコクピットが射出され、サザーランドが沈黙する。

「ライ、あなたは一体」

「今ので包囲網の一角が崩れた。応援が来る前にそこについて脱出する」

返事を待たずライは再び無頼を動かす。一角が崩れたとはいえ、本当にわずかだ。それにナイトメアは目立つ。包囲網を突破したらどこかで乗り捨てる必要があった。降りる瞬間を軍に見られては言いわけのしようがない。

だがそううまくは行くわけもなかった。ライとカレンの目の前にサザーランドが二体現れる。いや、その二体だけではない。ブリタニア軍はほとんど包囲網を締めつつあるようだ。操縦桿を握るライの手を汗が伝っていく。無頼にある残りのエナジーは脱出だけで

切れそうなほどしかない。戦っても途中で燃料切れになるのは明らかで、たとえこの敵を倒せたとしてもここから逃げるのは難しい。

万事休すか。

ライが諦めかけた瞬間、突如響いた破壊音。目の前のサザーランドが膝をついた。状況把握は、さすがのライでもすぐにできなかった。

爆炎の向こうを見れば包囲網の後ろに無頼が数機現れていた。もう一体のサザーランドも彼らが撃破した。

新たに現れた部隊は、ブリタニア軍だけでなくテロリストの部隊も攻撃していた。その動きは先ほどのテロリスト達とは明らかに違う。方向性、目的があるようだ。リーダーの動きをみる限り逃走路の確保、そしてどうやら巻き込まれた住民を逃がしているようだった。

戸惑うライとは逆にカレンが歓喜の声を上げた。

「黒の騎士団だわ！ 今度こそ本物よ」

喜ぶカレンを見ながら、ライはどうするべきか考えていた。彼らが本当に黒の騎士団かどうかはさておき。この行動を見れば、彼らにとってテロリストが敵であるのは間違いない。なら、テロリストが使っていた無頼に乗る自分たちも敵に映るはずだ。とりあえず戦う意志が無いことを表明すべきか。噂に聞く黒の騎士団なら話が通じるかもしれない。ライは通信を開こうとした。

その時ライの首からカレンの腕が解かれた。ライが驚いて振り返ると、彼女は無防備にもハッチから顔を出していた。

「何をやってるんだカレン！ 危な」

「大丈夫よ」

自信満々のカレンにライは少し眉間にしわを寄せた。だが彼女の

言葉通り、周りを囲みアサルトライフルを構えていた無頼が次々に道を開けていく。まるで通れと言わんばかりに。またカレンの腕がライを抱きしめた。

「どうやら私たちが敵じゃないって分かってくれたみたいね」

釈然としないものを感じつつも、通してくれるというのだからさつさとここを出るべきだと、冷静な思考がライに告げた。もしかしたら後ろから撃たれるか。冷や汗ものだったが、心配したことは何も起こらなかった。それどころか逃げるのを援護してくれているようだ。

そのままライたちは死地を脱した。

日本が日本と呼ばれていたのは、もう七年も前になる。

皇暦二〇一〇年八月一〇日、神聖ブリタニア帝国が日本に侵攻した。日本は希少資源『サクラダイト（レアメタル）』の世界最大の産出国（シェアの約七割）で、ブリタニアの侵攻はこのサクラダイトを求めてのことだった。

ブリタニアはこの戦いで初めてナイトメアを戦場に投入。縦横無尽に市街地を駆けるナイトメアには今までの戦法は通じず、日本は抵抗したものの、敗戦。ブリタニアの植民地『エリアー1』となり、日本人はイレヴン、もしくはナンバーズ（ブリタニアの植民地国民への差別語）と呼ばれ、蔑まされるようになった。

「あれが当たり前、か」

「ええそうよ」

租界に戻ってきた二人は、後ろを振り返った。再生することなく、ただ朽ちていくのを待つだけの街、ゲットー。住民もいると言うのにブリタニア軍の演習地にもなっているらしい。さすがのライもそ

の話聞いた時に顔をゆがめた。

反ブリタニア抵抗組織が日本各地にいるのも、現状を考えれば無理はない。ただ、民間人を巻き込み暴れるだけのテロリストも多い。先ほどの偽黒の騎士団が典型的な例だろう。こんなことがエリア11、いや日本のあちこちで起きている。ああ。あの時逃げていた人たちはどうなったろう。ふとライは思いをさせ、自分の身を守るだけで必死だったことを情けなく思った。結果的には自分の身すら黒の騎士団がいなければ守れなかったのだ。

悔しくて、ライは拳を握りしめた。

「カレン、今日のことなんだが」

「お互いに不干涉。そうでしょ？」

「……ああ」

ライとカレンの目が一瞬交差し、すぐに外れた。

「帰ろう」

「そうね」

聞きたいことを飲み込んで、二人は綺麗に舗装された道を歩き出した。

第十一話「足を踏み入れる」(後書き)

偽黒の騎士団登場。そして主人公ライ君初陣。ようやくナイトメア乗ってくれた。そしてカレンとの絡みがようやくできた。いいよカレン。男前だ。大好きだ！

もうそろそろ第一章は終わりです。そして私は短編が書きたい。現在第三章書いているのですが、まあ暗いのなんのって。明るいお話が書きたい。

というわけでこの後日談をシリーズとして短編に載せます(別枠)。めっちゃ短いですが、よければそちらも見てやってください。では今回はこちらへんで。

少しは分かりやすい話しになっていると良いなと思う今日この頃

(加筆修正：11・02・01)。

2011・03・31修正

第十二話「似て非なるもの」

「はあ。頭が痛くなりそうだな、この数は」

カイナは嫌そうな顔をした。目の前には、己の身長より高い本棚にきつちりと詰め込まれた本があった。とはいってもここは図書館だ。本がたくさんあるのは当たり前だった。

基本的に身体を動かす方が好きなカイナは本が苦手だ。そんなカイナがなぜここに、というと記憶の手がかりを探すためだった。

渋々やってきたのだが、本の匂いは妙に心を落ち着かせてくれて、長居してもいいかなどとカイナは思い直す。本は苦手で本の匂いは落ち着く、とは矛盾している。もしかすると記憶を失う前は本が好きだった、のかもしれない。

「ああここか……って、もしかしなくてもこれ全部『歴史』の本か？」

目当てのコーナーが見つかった。知識と感覚のズレを確認するために歴史を選らんだのだが、歴史関係の書籍はあまりにも多かった。カイナはやっぱ図書館に来るんじゃないかなかったとげんなりした。それでもここに足を運んだ以上、一冊は手に取るうと背表紙を目で追いかけていく。

文字が目から入り、頭を通過していった。

途中で面倒になったカイナは適当に選んで近くのイスに腰かけた。今日は平日だからか、図書館は空いていた。

カイナが手に取ったのは著名人大百科と書かれた本だった。まえがき、目次をさっと読み飛ばし、ページをめくっていく。

どうやら基本的にページの左上に顔写真、もしくは似顔絵があり、写真の右に名前と生没年、出身国などの簡単なプロフィール、写真

の下部分には細かい経緯が書かれている。余程エピソードが多い人物以外は一人一ページのようだ。

とりあえず経歴などは飛ばし、名前と顔写真がある場合はそれも見て、違和感（知らないはずなのに『知っている』という気持ちの悪い感覚）があるかどうかだけ、確かめていく。とても単純な作業だ。

大分進めたところでカイナは一端止めて、情報を確認した。知らない人物も結構いたが、今のところ違和感のない方がやや多かった。違和感がある、ない人物の共通点を探すため、カイナはまたページを戻す。今度は名前だけでなく簡単にページを流し読みしていく。すると、

「うーん年代、か？」

比較的新しい人物に対して違和感があった、気がする。具体的な年代までは不明だが、一定以上昔の人物に対しては違和感が無い。カイナの中で本当に知っている、という感じがある。

とはいっても元々この感覚に根拠はないので、分かったところだからどうしたという話でもある。他に手がかりがないからという消極的な理由で調べていただけだった。焦って空回りしているのは、カイナ自身が一番よく理解している。

ため息をついてカイナは首を横に振った。余計に混乱を招いてしまっただけのようだ。

「無駄骨か」

それきり本から興味をなくしたらしい。カイナは肩肘をついて、パラパラと本を捲った。流れていく文字を眺めていると、その中に見逃せない文字があった。慌ててカイナはそこを探し、開く。茫然と文字を読む。

「……カイナ」スマンハク」

結構昔の人物らしく、顔写真・似顔絵はなかった。生年は不明、没年だけが推定ではあるが書かれている。カイナは呼吸を忘れたかのように動きを止めた。視線も動かない。経歴を読むことを身体が拒否しているかのようだった。心臓がうるさく音を立て始めた。カインの背中を汗が伝って行く。今日は暑くないというのに。むしろ寒い。とても寒くて凍りついてしまっそうだった。なぜだ。同じ名前であるだけなのに、なぜこんなにも苦しい。

「あれ、カイナ？」

かけられた声にカイナは思わず本を閉じ、勢いよく振り返る。スザクが不思議そうな顔をしていた。カイナは知らず安堵の長い息を吐き出していた。無駄に入っていた力が抜け、椅子の背もたれに身体を預ける。先ほどの寒さはどこかへ消えていた。

「ああスザクか。どうした」

「僕は課題の資料を探しに、なんだけど。カイナこそどうしたんだい？ たしか本は苦手なんじゃ」

「俺か？ 俺は、もう終わった」

「……そっか」

本を片手にカイナが立ち上がると、スザクは少し寂しそうに笑った。疑問に思い尋ねる前に、スザクは普段の笑みを浮かべていた。

「じゃあさ。資料探し手伝ってくれないかい。たくさんあって」

苦笑しながらメモを示され、覗き込むとたしかにかなりの数が書

かかっている。この後予定もなかったのでカイナは「まあいいか」と頷いた。スザクは嬉しそうな顔をしてメモを半分がちぎり、片方をこちらに差し出した。

「見つけたらここに集合で」
「分かった」

メモに書かれた資料は案外すぐに見つかった。少し経ってから戻ってきたスザクにカイナは資料を渡して「留年するなよ」と図書館を出た。「縁起でもない」そう笑ったスザクの頬はかなりひきつっていた。

留年しそうなのか、スザク。

カイナは無気力に公園のベンチに座って空を茫然と眺めていた。意外と長い時間を図書館で過ごしてしまったようだ。青かったはずの空はすでに赤く、元気よく遊んでいた子供たちが母親や父親に連れられて帰っていくのを、なんとなく目で追いかける。

噴水の音を聞きながらカイナは呟いた。

「そうだ。今日の晩飯は何がいいと思う?」
「ピザにしる」

「ふむ、そうだな。ピザでいいか。めんどくさいし」
「ポイントシールは」

「お前に渡せばいいんだろ、分かってるさ。C・C(シーツィー)」

いつのまにか横に座っている緑髪の少女へ視線を移し、カイナは

当たり前のように会話した。

偉そうな態度で変わった名前前の彼女とカイナが出会ったのは、偶然だったのか必然だったのか。と、恰好つけるような出会いではない。公園でピザを食べているカイナをじっと見ていたのがＣ．Ｃだった。あまりにも物欲しげな視線が気になり、カイナが声をかけたのだ。それ以来、二人はピザ仲間だった。

「チーズ君いくつめだ？」

「今三つある」

「そんなにたくさん同じもの手に入れてどうするんだ」

「あつて困るものじゃないだろう？ それに同じじゃないぞ。表情が違う。お前の目は節穴か」

チーズ君とは宅配ピザのマスコットキャラのことで、シールを集めるとチーズ君の大きなぬいぐるみ（バナナみたいだとＣ．Ｃに言ったらこれでもかと怒られた）がもらえるのだ。カイナからしてみればそんなもの集めてどうする、なのだが、女というものはそういうのが好きなのだ。Ｃ．Ｃは言う。どちらにせよシールはいらないのでピザを頼んだ際にはＣ．Ｃにあげていた。

ピザは家計に響くのでカイナはあまり食べないが、今日は買い物に行く気力がなかった。ひどく疲れていた。深いため息をついたカイナは、黒い前髪をかき上げ、Ｃ．Ｃを見た。

目の前の少女は一見どこにでもいそうな普通の少女に見える。だが、カイナはＣ．Ｃが普通でないことを知っていた。同時に向こうもまた知っているのだろうと確信していた。口に出して聞いたことはない。問えばきつと答えが返ってくる。カイナが望むものかどうかはさておき。

いつもはそのまま他愛のない会話（主にピザの話）をして二人は別れる。

「なあC・C。俺はお前と同じものか？」

今日は違った。カインは聞かなければいけなかった。

「違う」

答えは短い。それで十分だった。カインは「そうか」と頷き、立ち上がる。答えを聞けば気分が晴れる、ことはなかったものの、ちよつと安心する。こちらを見るC・Cの目に嫉妬が少し混じっていた。彼女は。

「お前は私とは違う。似てはいるが、な。あまり過信するなよ。苦しむのはお前自身だ」

「珍しいご忠告どうも……ああ、シールはまた今度会った時にでも渡す」

「分かった」

何事もなかったかのようにカインは歩き出した。どんなピザを注文しようか考えながら。

第十二話「似て非なるもの」(後書き)

C・C再び。実際の彼女なら人のピザを羨ましそうに見たりはし
……そうだな。うん。

ロスカラ知っている人なら今回の話は「ああ、うん。そうだな」
的な感じだと思います。知らない人は悩んでくれるとにやっとしま
す(私が)。C・Cとの会話はああだこうだと考えてくださるとに
ばにばします(私が)。

後二話で第一章終了です。

2011・03・31修正

第十三話「答えはきつと、進んだ先に」

「黒の騎士団。ギアス、か」

ライは呟いて空を見上げた。ここは学園の屋上だ。ライが気に入っている場所の一つであり、よくここで彼は空を見上げる。今は授業中なのでライだけしかない。

風が銀色の髪を遊ぶように揺らした。今日はいつも以上に風が強い。白い雲があつという間に姿を変えながら過ぎ去っていく。まるで、雲がめまぐるしく変化する己の状況を表しているようだ。一度小さく笑って、彼はすぐに頬を引き締めた。

あの雲のようにただ流されていくわけには、いかない。

「彼女は、C・C（シーツ）は何者なんだ」

つい先日、ライはずっと追いかけていた緑髪の少女と接触できた。少女は誰も知らないはずのことを知っていた。記憶を失ったライが覚えていた数少ない自分の情報。ギアスという力について、だ。その力をギアスというのは初めて知ったが、彼女が知っているのはギアスについてであり、ライ自身のことは知らなかった。大事なことであるので真剣に話を聞いたものの、落胆した。

彼女からギアスについて少し教えてもらったライは、どういう繋がりか、黒の騎士団に入らないかと誘われた。C・Cと黒の騎士団。C・Cはイレヴ……いや、日本人には見えない。騎士団は日本人以外にも構成員がいるのか。

いや違う。今そのことはどうでもいい。

ライの脳裏にはゲッターでの出来事が浮かんでいた。もう関わることはないと思っていた黒の騎士団と、まさか再び関わることにな

るとは。

答えを一端保留にさせてもらい、ずっと考えていた。ギアスのことを、自分のことを知るためだけに入団する、というのは嫌だった。反ブリタニア抵抗組織に参加するということは、自分の命だけでなく、生徒会の皆、これからできる仲間や他にも大勢の未来に深く影響を及ぼす。良い意味でも悪い意味でも。だから戦いに身を投じるのならば、相応の腹をくくる必要があった。少なくともライはそう考えていた。

「戦う、か」

ゲッターでのごことが頭をよぎって消えない。一方的に様々なものを奪われていく人々と、何もできない自分。悔しいと思った。守りたいと思った。

「僕はもう　ぐっ」

頭が酷く痛み、誰かが泣いている映像が見えた。

しかし浮かんだ映像はすぐに途切れ、同時に頭痛も引いた。首を振ってライは意識を切り替えた。何が正義で、何が悪なのか。答えはどこにあるのだろうか。そして自分は何がしたいのか。何を求めるのか。

再び見上げた空は、先ほどと変わらぬはずなのに、どこか違うもののようにライの目には映った。

ライは室内を見回した。

C・Cの誘いを受けた彼は目隠しをされ、拉致同然に騎士団のアジトへ連れてこられた。ようやく目隠しを外されて見えた部屋は落ち着いた雰囲気です、とてもアジトとは思えないほど普通だった。むしろ少し豪華かもしれない。この資金はどこからきているのだろうか。ライは冷静にそんなことを考える。

「少し待っている。ゼロを呼んでくる」
「分かった」

C・Cが奥の部屋へ行き、一人残される。耳を澄ませば声が聞こえるかもしれないが、盗み聞きは気が引ける。待っている間、ライは新しく手に入ったギアスについての情報を整理することにした。

ギアスとはC・Cのような存在（彼女以外にもいるようだ）と契約を結んだ人間に与えられる力で、各々違う力が与えられるらしい。ライの場合は強制命令権、とでもいおうか。命令すれば相手はそれに従わざるを得なくなる。C・Cは似た能力を持つ人間が他にいる口ぶりだった。その相手は視覚、光を通して発動し、ライの場合は聴覚、音を通して発動する。どうやって発動させるのかまでは、不明だ。

最後に彼女は忠告した。この力は誰にも知られてはならない、と知られてしまえば相手を殺すしかない。ギアスは強力だ。人が理解できない力を前に行う行動は自分の中に取り込むか、見て見ぬふりか、殺すか。

殺される前に殺せ、ではないが、命の危険にさらされるのは自分だけでなく、力を知った者、知った可能性のある者にまで及ぶ。C・Cの受け売りだが、実際そうだろうなとライも思う。

ドアの開く音にライは意識を戻す。

「ライ、待たせたな」

「な、お前は！」

静かなC・Cの声に続いてくぐもった男の声がした。顔を上げると緑色と黒い仮面が見える。テレビで何度も見た 黒の騎士団のリーダー、ゼロだ。仮面の男はライを見て動きを止めた。

「君は僕のことを知っているのか？」

「……いや、違うな。すまない。人違いのようだ」

「なるほど。それは残念だ」

本心からライはそう言った。もつとも、記憶を失う前に黒の騎士団のリーダーと知り合っていた、とは思っていない。今のところ記憶の手がかりはまったくないので、藁にもすがる思いだったのだ。

一度目をつむった後、ライは青い目を真っ直ぐにゼロへと向けた。

「C・Cの推薦で来た。名前はライ。家名は分からない」

少し迷って最後に付け加える。騎士団トップに紹介されたから、というのもあるが、組織に入れてもらうからには尽くせる誠意は見せるべきだという判断からだ。

ゼロが軽く首をかしげた。

「分からない、とは？」

「ああ、僕には記憶が無い。怪しいのは自分で一番よく分かっているが」

「優秀さは私が保証するぞ」

口を挟んだC・Cにゼロは腕を組んで黙り込んだ。

さすがに正直すぎたか。しかしどちらにせよ、調べられればすぐバレルことだ。隠して後々気づかれるより自分で告げた方がいい。

「ゼロ、扇さんたちが帰ってきて……え！ ライツ？ どうして」
「カレン！ ああ、やはり君は騎士団の一員だったのか」

沈黙を破るようにドアが開き、入ってきたのは赤い髪と同級生、カレンだった。カレンは驚いていたが、ライはあまり意外に思わなかった。ゲッターでの出来事を考えれば、むしろ納得がいく。

「入団希望者だ。私が連れてきた」

「C・Cが？」

「今はゼロの判断待ちだ」

C・Cの言葉を聞いて、カレンがライを真っ直ぐに見た。ライもまた彼女を見た。ゼロは黙ったままだ。

「一つ聞かせて。あなたが入団しようと思った理由は、何？」

学園では聞いたことのない低い声音だった。ライは心を落ち着かせるためにゆっくり息を吸い、吐き出した。彼女の問いに、なるべく平静な状態で答えたかったのだ。自身に対する最終確認の意味合いもあった。

脳裏に浮かぶのは、ブリタニアによって無理やり頭を抑えつけられている日本の姿だ。もやもやとしたはつきりしない異なる映像がそこに重なる。心なしか酸素が薄くなったようにライは感じた。落ち着けと思うのに、自然と拳に力が入った。

「知ってしまったから、かな。何もせず、見えないふり、聞こえないふりをして生活するのは、僕にはもう無理だ。苦しくて苦しくてたまらない。何かせずにはいられない。」

騎士団に入りたいのは、そんな苦しみから逃れたいだけなのか

しれない。自己満足に過ぎないのかもしれない。だけど、僕はもう、失いたくないんだ」

話しているうちに体の底からこみ上げてくるものがあつた。段々と言っていることが支離滅裂になってくる。それでも『失いたくない』という思いは本物で、ライは口早に続けた。

「ごめん、めちゃくちゃで。僕にもはっきりと分からないんだ。ただ、軽い気持ちでないことだけは分かってほしい」

「そう」

学校では見たことが無いほど強い眼差しを向けていたカレンが、答えを聞いて小さく笑つた。彼女はライから視線を外し、様子がかがっていたゼロに向き直る。どこことなく、ゼロには面白がっている空気があつた。

「ゼロ、私も彼を推薦します。ライには記憶がありませんが彼の人格は信頼できるものです。それに、ナイトメアの操縦技術は以前見ました。優れた技能であることは私が保証します」

「ほほお、お前がそこまで言うとはな」

感心した声を出してゼロは腕を組み、大きく首を縦に振つた。彼の動作は一つ一つが大きい。

「いいだろう。ライ、お前の入団を許可する。そしてしばらくは能力を見るため、私直属の特殊作業員とする」

「えっ？」

入団の許可が下りたことよりも、ライはゼロ直属という言葉に絶句した。入団許可を一瞬喜んだカレンも目を丸くした。C・Cだけ

は楽しそうで、にやにやとしていた。ライとカレンの反応が不満だったのか、ゼロが少し胸を逸らした。

「どうした。私直属では不満か？」

「いや、むしろ逆だよ。素性のわからない僕を抜擢するなんて、ね」
「黒の騎士団は志のあるものを歓迎する。何よりそこにいるカレンは我が騎士団のエースだ。彼女が推薦し、保証するのであれば、何も問題はない」

「おいちよつと待てゼロ。そいつを連れてきて推薦したのはこのわた」

「ありがとうございます、ゼロ」

文句を言いたそうなく・Cを、カレンは鼻で笑っている、ようにライには見えた。ゼロに対してはとても忠実な態度でお辞儀をしたというのに。どうやらカレンはC・Cに対して、あまり良い感情を抱いていないらしい。二人の間に火花の幻覚が見えそうな気がした。どこまでも強気な態度は、学園内でのカレンとまったく違う。あれは外向きの仮面なのだろう。

カレンのギャップにライは目を見張って驚くが、髪をはねさせ、
潑刺はっせいとしている目の前の彼女の方が好ましく思えた。

「では彼に騎士団内を案内してやってくれ」

「分かりました。ライ、こっちよ」

ゼロと不満そうな顔をしているC・Cに軽く目礼をしてから、ライはカレンの後をついていった。後ろで二人の言い合う声が聞こえていたが、ドアをくぐると聞こえなくなった。

ライは幹部の人に挨拶をして回った。カレンが推薦してくれたおかげか、中々好意的に受け入れられているようだ。ライの見た目はブリタニア人に近いので、反発を心配していた彼は胸を撫でおろした。

初日ということで制服のサイズ合わせだけして帰ってもいいことになった。トレーラーの外は暗かった。

ナナリーやルルーシュが心配しているかもしれない。

ひんやりした空気がライを包み込む。体を一瞬だけ震わせた彼の視界に、闇の中で輝く星が飛び込んできた。いくつも夜空に浮かんでいる星の中で目に付いたのは、特別明るくもない星だった。

これからに対する不安がないとは言えない。ただ、後悔はない。

カレンに語ったことは本音だ。まだ明確な答えは見つけ出せないけれど……ライは掌を握り締めた。

星の光が少し強くなった。

第十三話「答えはきつと、進んだ先に」(後書き)

ライの見た目をブリタニア側としました。銀髪なので日本人はな
いだろうと思ひまして。

ゲームではあっさり受け入れられていましたがやはり反発はある
だろうと思ってカレンの推薦という形に。……っというところ
怒られそう。この前のナイトメア操縦はここに繋がっているわけ
です。ゲームだと最初から高評価すぎるので。

そんなこんなでいよいよ入団。入団理由はもっとうライの本質
的なのを出したかったのですが、私の技量ではこれが限界でした。
それぞれ反対に付いた二人の主人公たち。これから彼らは一体ど
うなるのか。キャラクターではなく、ちゃんと彼らを“人間”にし
ていきたいと思うのでよければお付き合いをお願いします。

次話にて第一章は終了です。次は軽めのお話。

いろいろ修正したつもりなんですが、前よりよくなっていますで
しょうか。よくなっていると、いいなあ(11/01/27:加筆
修正)

2011・03・31修正

第十四話「全身タイツと正直に言ったら怒られました」

カイナが目をこすりながら特派に行くと、ロイドと軍服姿のスザクがディスプレイを覗き込んで話し合っていた。耳を傾けようとした時、二人がカイナに気づいて会話を止めた。とりあえずカイナは片手を上げる。スザクが嬉しそうに翡翠色の瞳を輝かせた。カイナの脳裏に子犬の姿が浮かんだ。

「あ、カイナおはよう！」

「おはよ……ふおおおうおう。あふっ」

「おはよう、カイナ君。いつもながら君は眠そうだねえ」

あくび交じりのあいさつにスザクは苦笑い、ロイドはいつもと同じにやけ顔であいさつを返した。カイナが二人に近づいていくと、スザクが場所を譲った。遠慮なく二人が見ていたディスプレイを覗き込んだ。ピンク色と緑色の三角形が二つ、ぷかぷかとディスプレイに浮かんでいた。どうやら何かのグラフのようだ。

説明を求める黒い瞳を受けて、ロイドが指でディスプレイを示しつつ話し出した。

「これは君とスザク君の身体能力をグラフにしたものだよ。あ。ちなみにピンクが君で緑がスザク君ね」

言われてから三角の頂点を見ると、持久力、瞬発力、腕力と書かれていた。ロイドが軽快に指を動かしてキーボードへ何かを打ち込んだ。すると黄色い三角がまたそこに描かれる。ピンクと緑に対してずいぶん小さい。眼鏡のズレを片手で直し、ロイドは不気味に笑った。

「今新しく表示したこの黄色が成人男性の平均だよ。……こうして改めて見ると本当に君たちはすごいねエ。良いデバイサーだよ、ほんと。んふっふふふふ」

笑っている白衣は放っておき、カイナは黄色よりもピンクと緑の差を注視した。二つの三角は拮抗しているが、やはり若干の差がある。悔しそうにカイナは唇を尖らせた。

「ああ。やっぱりパワーはスザクに負けるか」

「ふっふっふ……ああ、そうだねえ。どうしても性別の差は出るよね。でも瞬発力はスザク君よりあるし、持久力も二人はほぼ一緒。君はほんと女の子にしておくのがもったいなあ。男の子だったらもつとすごかったのかな」

「へっ？」

黙ってグラフを見つめていたスザクが突如大声を上げた。カイナとロイドの二人はまったく意に介せず喋っていた。

「んむうー。俺が男だったら、か。どうだろうな。ああでも持久力もスザクの方があるだろ。やっぱり若さには勝てんな」

「え、え？」

「まあでも男女両方のデータが取れるからこつちとしては嬉しいんだけどね。二人が戦ったらどうなるのかは気になるねえ」

「そっぴい対戦したことはなかったな。スザクとかあ。面白そうだな、それ」

「あ、やっぱりそう思う？　じゃあさじゃあさ今度」

「ちよっちよっど待ってください！」

ロイドとカイナのテンポが良い会話に、スザクが両手を前に突き出して待ったをかけた。振り返ると翡翠の瞳が大きく揺れていた。

少年は何やら動揺しているらしい、とカイナとロイドは顔を見合わせ、思い当たる節がなかったらしく、揃って首をかしげた。

「どうした、スザク」

「いや、だって、今、カイナが、ロイドさんが」

「むんん？」

はっきりしない物言いにカイナの眉間に力が入る。はっきり言えと強い口調でスザクに言った。

少し頬を染めたスザクは、一瞬カイナの身体を見下ろした。不可思議な行動に、カイナは同僚の健康状態がとても気になった。

「カイナが、その……お、女の子だ、って！」

顔を上げたスザクの力一杯の言葉に、カイナはますます不思議そうな顔をした。一方のロイドは隣で納得したように頷いた。へらりと眼鏡の向こうの目が笑った。

「おめでとう！ 大正解だよ、スザク君」

「えっ？ えっ？ えっ？」

よく自体が飲みこめないカイナがこれでもかと首を横に倒すと、スザクの翡翠の目とかち合った。スザクはカイナの顔をじつと見つめてから少し目線を下げて、頬やら耳やらを先ほど以上に真っ赤に染めてすぐさま明後日の方を見た。

顔より少し下、どうやら胸を見たらしいと判明する。カイナが身につけている橙色の軍服の胸部分に女性特有のふくらみはない。もしかしたらその前も胸を見ていたのかもしれない。

「ああ。胸はサラシをまいてつぶしてる。動くのに邪魔だからな」

「じ、ごめん！」

「なんで謝るんだ？ あ！ 脱いで見せた方がいいのか？」

「ふええええっ！ い、いいから！ ほんとにごめ、おうわあ、ごじごごめんなさい！」

カイナが軍服のボタンに手をかけると、スザクが慌ててその手を掴んで止める。その時手が軽くカイナの身体に触れたことでスザクはますます顔を赤くし（首まで赤い）、勢いよく両手を上げた。まるで囚人みたいである。初めてみる反応は、非常に興味深かった。

「あらカイナさんおはよ……スザク君？ どうかしたんですか、口イドさん？」

「やあセシル君、おはよう。今ね、スザク君がようやくカイナ君の性別に気づいたところだよ」

「ああそうだったんですか。なるほど。それで」

「へえっ？ セ、セシルさんも知ってたんですか？」

「ええまあ」

三人の会話をカイナはぼけつと眺める。先ほどから、彼らの会話は彼女にはよく分からないものだった。だが、分かっているのは自分だけのようで、少し不安になった。セシルと目があつたカイナは問いかける。

「俺が女だと何かあるのか？」

「いいえ。何も無いのよ、カイナさん」

「そうか」

ならいいか。カイナはそれ以上考えるのはやめた。説明されても理解できないことだと、なんとなく思ったのだ。

頷いた彼女にセシルが黒い布を差し出した。手に取り広げてみる

と、パイロットスーツだった。スザクが着ているスーツの黒色バー
ジョンといったデザインで、黒と白の位置が入れ替わっていた。

「ちょうどさつき届いたの。今度からそれを着て操縦してみてください
るかしら。一応普通の服より頑丈だから」

カイナは上下がながった服を眺め、軽く引っ張った。素材は頑
丈そうだった。伸縮もかなりする。

後ろではスザクにセシルが謝っていた。

「ごめんなさいねスザク君。別に隠していたわけじゃないのよ。で
も、わざわざ言うことでもないし、いずれ分かると思って」

「あ、いえ」

「気に病むことないわ。特派の中でもカイナさんの性別を知ってい
るのは私たちと数名だけだし……今まで自力で気づいた人はいない
の。実は私もロイドさんから聞いて」

「どう見てもカイナ君は男の子にしか見えないからね。僕は身体調
べる際に知ったんだけど、いやあ。びっくりしたよお、あの時は」

「なあなあ、これ着ないとダメなのか？」

「えっ？ そうね。パイロットの安全性を考慮したスーツだから、
なるべく着てもらいたいだけけれど」

「動きにくくないか、これ」

会話に入ってきたカイナに、セシルが困った顔をして答えた。ス
ーツを睨んだままカイナが唸っているとスザクが苦笑した。落ち着
きを取り戻したようだ。スザクが浮かべているのは普段カイナが見
慣れた表情だった。

「大丈夫だよカイナ。着てみると結構動きやすいから」

「んー、分かった」

「じゃあ、今日も張り切って良いデータ取らせてね」

特派の一日はこうして始まる。

第十四話「全身タイツと正直に言ったら怒られました」(後書き)

キーワードから予測してた人もいるかもしれませんが、カイナさんは女性でした。はい。最初は男性予定だったりしたんですけれどプロット作成途中に女性となりました。……た、ただの趣味じゃないんだからね！

男の子だとですね。スザクとこう……ね？ そんなつもりなくてもそんな匂いがプンプンしてきたので。

あと物語の大筋に関係あったりなかったり。けっ決して趣味で男装させたわけじゃないんだからね！(二度目)

第二章はいよいよ戦いが始まります。二人の立ち位置。戦う理由。覚悟。葛藤。お楽しみに。

ほんと、何なんだろうな。このタイトルは。

後、スーツの色を白から黒に変えました。だからどうしたって話なんですけどね。(加筆修正11・01・29)

2011・03・31修正

第十五話「ただ寂しくて不安だった」

「今日は、君が初めて実機に乗った時の模擬戦相手から希望があったね。再戦させろって」

ロイドの話を聞いて記憶をたどった。最初の相手がどんなだったか、カイナの記憶には残っていなかった。腕を組んで首をひねっている彼女を見てそのことを察したらしく、ロイドが笑った。

「もしかして……んふふ、忘れちゃった？」

「あまり覚えてないな」

戦ったこと自体は覚えていても、直接相手パイロットの顔を見たわけでもない。カイナが正直に答えれば「それ聞いたら相手怒っちゃうから言わないでね」とロイドにくぎを刺される。言われなくてもそんなことは言わない。失礼な奴だと思いつつ、素直に頷いておいた。

「より実戦に近い形がいつてことで、ライフルのペイント弾も用意しといたよ」

「へえ、遠距離もありか。そりゃありがたいな」

「うんうん。実戦に近いデータがとれるし嬉しい限りだねエ」

喜んでいるロイドの後ろに白い機体が見えた。スザクのランスロットだ。サザールランド五機を相手に模擬戦をしていた。数の不利をもつものでもない速度で、ランスロットは次々に相手を戦闘不能にしていく。まるで決められた演舞のようだ。カイナは思わず口笛を吹く。

五機のサザーランドはやがて沈黙するように動かなくなった。

周囲にセシルの「模擬戦終了。開始位置に戻ってください」という声が響く。機体性能の差もあるだろうが、あまりにも圧倒的過ぎるランスロットの勝利だ。

相変わらずスザクの強さは飛び抜けていた。

「いつか、本気のスザクと戦ってみたくなるな」

カイナの口から自然と本音が零れ、彼女は苦笑う。ありえない。ランスロット並の機体に乗らなければ相手にもならないのは、先ほどの模擬戦で証明されている。ああ、ダメだな。カイナは己を戒めた。近頃、どうにも心が不安定だった。ずっと戦いを追い求めている。ラウンズとの模擬戦のような心躍る戦いを。

心を落ち着かせるため、彼女は深く息を吸い、ゆっくり吐き出した。何度か繰り返し返す。

「よし、行くか」

「がんばって来てね」

落ち着いたところでカイナは気合を入れ直し、ひらひらと手を振るロイドに背を向けてサザーランドに騎乗する。ハッチが閉まるとセシルの声がした。

「カイナさん、準備はいい？」

「ああ」

「では、模擬戦を開始してください」

使える武装はスタントンファとアサルトライフル、共に模擬戦仕様。乗る機体はサザーランド。視界は良好、ただし地面には凹凸がある。相手と条件は同じだ。

さて、どう動いてくるだろうか。カイナは向こうの動きを見た。前回の負けがある分、こちらをなめてかかることはないだろうが。

「様子見、か。なるほど。少しは考えたか」

相手は慎重にカイナの様子をうかがっている。ならばこつちから攻めさせてもらおう。整ったカイナの唇が弧を描いた。獲物を狙う獣のような表情だった。

カイナはライフルを構え、照準は気にせず素早く撃った。ペイント弾は彼女から向かって右側に着弾し、地面を染めた。大きく外れていたが、相手パイロットは必要がないほど大きな動きで回避行動を取った。

どうやら慎重と言うよりも、負けることを恐れるあまり臆病になっているようだった。

ふむ。

一つ頷いたカイナはどの方法で相手を攻めようかと悩んだ。一度勝った相手といっても、相手を侮る気はなかった。真剣に戦法を練る。練っている間も動き回り相手をかく乱し、足場をなじませるのを忘れない。

「これでいくか」

方針を決めた彼女はもう一度ライフルを構え……撃つフリをした。相手は先ほどとよく似た動きで横に動いた。慎重なのは悪いことではないが、慎重になることと臆病になることはまったく違う。

されなかつた攻撃をよけた相手は少し動揺していた。カイナが容赦なくライフルを（今度は本当に）撃ちこむと、面白いくらい攻撃が当たった。ディスプレイに表示されたダメージ判定は中破。場所によっては動きに支障が出るダメージだが、今は模擬戦のため影響はない。カイナは油断なく相手をうかがった。

「ようやく来たか」

ライフルを構えた相手がジグザグに動きながらカイナへと向かってくる。彼女はトンファを構え、撃たれるライフルを最小限の動きでかわした。相手が慌ててトンファに切り替えた。

「遅い」

すれ違いざまにカイナはトンファを振るう。ディスプレイに赤い文字が映った。『D E F E A T』撃破完了、だ。ほうつとカイナは息を吐き出した。

セシルの声が聞こえてくる。

「模擬戦終了。両者、開始位置に戻ってください」

「あっさり返り打ちにしちゃったね。これじゃまた再戦申し込まれるよ」

「すごいや。ますます強くなってるね、カイナ」

画面向こうにいるロイドやスザクの感嘆した声に、カイナは軽く肩をすくめただけで答えなかった。

当たり前かもしれないが、ラウンズであるノネットと戦った時の高揚感はなかった。いや、むしろラウンズと比較してしまっただけは相手がかわいそうだろう。思いつつ開始位置に戻ろうとしたカイナは、唐突に寒さを感じた。考える前に腕が操縦桿を前に倒していた。機体はわずかな沈黙の後に加速してその場から離れる。

ライフルの音がした。

相手がカイナの後ろから撃ってきたのだ。素早く機体を反転させようとカイナは操縦桿を握り締めたが、先ほどの急加速の影響か、思うように動かない。機体の速度が落ちた。カイナの頬を汗が流れ、

コクピットが大きく揺れる。初めて感じる振動だった。

銃弾が機体の左肩に命中したのだ。カイナがすぐさま左腕を確認すると、なんとか動いたものの反応は鈍い。損傷は小破といったところか。

「くつ。まったく、懲りない奴だな」

先ほどまで彼女がいた場所は、地面が深くえぐれていた。卑怯にも相手はポイント弾ではなく実弾を、しかも背後から撃ってきたのだ。もしあの時反応していなければライフルはコクピットに命中し、カイナは確実に死んでいただろう。

「あれは実弾ですよ！！」

「両者、模擬戦を止めて開始位置に戻ってください！ カイナさん、下がって」

スザクとセシルの悲鳴じみた声を、カイナは他人事のように聞いていた。心がひどく静かだった。本人にも理由は分からない。

「この感じを、俺は知っている？」

命がかかっている緊迫した状況であるにも関わらず、彼女は懐かしさに目を細めた。

そんな彼女を我に返らせたのは、ピピツという場違いに明るい電子音だった。相手サザーランドからの通信だ。迷わず相手との会話を**選ぶ**。

「君は実戦に出たことが無いらしいな」

ディスプレイに映ったのは三十前後の、金髪を短く刈り込んだ男

だった。彼は実弾が入ったライフルをカイナへ見せつけるように構えながら、ゆっくりと唇をなめた。いたぶりたくてたまらない、と男の水色の目が語っていた。

「これは私からのプレゼントだ。有意義な訓練だと思ってくれ」

男の言葉に、カイナは可笑しそうに肩を震わせた。ディスプレイの向こうで男の顔が不機嫌そうに歪む。カイナが動揺して泣き叫ぶところでも見たかったのかもしれない。気の済むまで笑った後、彼女は男を見た。黒い瞳が怪しく輝き、男は少し怯えた顔をしてのけぞった。

「それはどうも先輩。ありがたく受け取りましょう」

「ふんっ」

通信は乱暴に切られた。

プツンという音と同時に襲い掛かってきた銃弾を、カイナはあっさり避ける。どこまでも卑怯な男だ。男の照準の先には、カイナがいるコクピットがあった。

その後も連続で撃ち込まれた銃弾のいくつかが機体をかすっていた。活動に支障はない。

「そんな、今コクピットを狙って……カイナさん逃げて！」

「カイナ！ ダメだ、脱出を」

セシルとスザクの声がうるさかったのでカイナは通信を切った。相手が実戦のチャンスをくれると言うのだ。受け取らないでどうする。

「とはいえ、実弾は使用許可が出ていない。トンファだけでいくし

かないか」

いくら向こうから仕掛けてきた事実があれど、特派の方が正規軍より立場は弱い。データが証明してくれるとは思うが、事実を捻じ曲げられる可能性は大いにあった。変な疑いをかけられるのも癪だ。カイナはライフルを構えると見せかけ、投げ捨てた。

相手に向かつて。

一瞬気がそれた隙に側面へと回り込み、トンファでまず一撃をくわえる。衝撃でカイナの乗る機体も揺れた。

「チツ浅いか」

舌打ちした彼女はすぐに距離を取り、相手の様子をうかがった。

トンファでの攻撃は純打撃。攻撃を受けると衝撃がかなりパイロットにも行くはずだ。ベストな勝ち方としては機体をあまり損傷させずパイロットを気絶させることだが、相手はまだ元氣そうに動いている。まあ、現実はそのままで甘くない。

カイナがエナジーを確認すると残りは六割ほどだった。向こうも同じぐらいだろう。

「あちらは遠距離、こっちは近距離……射程だけでなく、動き回る分こっちがエネルギー的にも不利、と。まいったな」

銃撃を避けながら冷静に分析し、カイナは「まいったまいった」と繰り返しながら楽しそうに笑っていた。例えようのないほどの高揚が身体中を渦巻いていたのだ。

猛スピードで相手に突っ込んでいく。相手の動きから攻撃を予測、操縦桿を小刻みに動かしてライフルを避け、最短距離で接近する。相手が怯んだのが機体越しに伝わってきた。銃撃が止む。左に逃げようとしている機体の、膝部分にカイナは左腕を突き入れた。両者

の機体が大きく揺れる。

左肩の傷が軋み、悲鳴を上げたのをカイナは聞いた。

「うっ結構くるな、これは」

膝が無理やり伸ばされた相手サザーランドが前後に揺れ、完全に停止する。カイナはトンファを無防備な相手に思い切り振るい、コクピット部分の寸前で止めた。

相手のサザーランドが膝をついたのを確認してからカイナが通信を開くと、憔悴しきった男の顔が見えた。怪我をしている様子はない。彼女はニツと口角を吊り上げてみせる。

「プレゼント、どうもありがとうございます、先輩」

男からの返事はなかった。

「カイナ！」

「うお」

カイナがサザーランドから降りると、怖い顔をしたスザクが彼女を待ち構えていた。黒い目が大きく見開かれ、彼女は何かとスザクに問う。

「何かあったか、じゃないよ。君はなんて無茶なことをしたんだ。無事だったからいいもの」

「え。いや、でも、お前が同じ立場だったらきつと俺と同」

「でもじゃないよ！ 通信も切っちゃうし。僕がどれだけ……ラン
スロットは整備中ですぐに動けなくて、相手は実弾で、コクピット
狙ってるし、君は逃げないし」

「落ち着けスザク。いいじゃないか。勝ったんだし、怪我一つない
し」

「カイナ！ 君という奴は……皆にどれだけ心配かけたと思ってる
んだ！」

「は？ し、んぱい？」

珍しくとても怒っていたスザクの言葉を聞いてカイナは、呆然と
立ち尽くした。誰かにも同じことを言われた気がする。誰に言われ
たのかは、思い出せなかった。

カイナは何度もスザクの言葉を胸のうちで反芻してみたが、よく
分からない。スザクが己に対してそんな感情を抱く意味が、カイナ
には分からない。ただ彼女は、

「えと、カイナ？ どうかし、あ」

「相手の部隊長を問い詰めたんだけど、あくまでパイロットの暴
走と言い張っているわ」

黙り込んだカイナにスザクは戸惑い、セシルたちが帰ってきたの
を見て安堵の息を吐いた。セシルとロイドは相手側の部隊へ抗議に
行っていたのだ。反射で瞳を動かしたカイナと、セシルの目があう。
セシルは「あ」と声を上げた後、カイナへ駆け寄ってきた。普段穏
やかな彼女もまた怒っているようで「なんで逃げなかったの」と眉
を吊り上げた。

対応に困ったカイナは情けなく眉を下げ、一人いつもと変わらぬ
ロイドへ視線を送り、珍しくも助けを求めた。

「あ、その君！ カイナ君が乗ってたサザーランド回収してきて

大丈夫だよん。話はつけてあるから」

だがロイドはカイナのSOSにまったく気付かなかった。嬉しそうにはしゃぎながら近くの職員に声をかけ、サザーランドを回収させている。本当に生き生きしていた。

ああそつだ。こいつに助けを求めた自分が悪かった。判断力が鈍っていたに違いない。

カイナはがっくりと肩を落とした。そうしている間にもセシルの追及は止まない。

「カイナさん分かっているのっ？ 相手はあなたを殺そうとまでしてたのよ。なぜ逃げなかったの？」

「え、えっと、その、でも、ほら」

言い返そうと口を開いたカイナは、何も言うことができなかった。セシルもスザクも、怒った顔をしていたが、瞳には悲しげな光が浮かんでいた。心配しているのだと、何よりもその瞳が語っていた。だからカイナはどうしたらいいのか、分からない。

なんで彼らは心配するんだろう。自分は、だって××なのに。なんで自分なんかを。

カイナの頭が真っ白になる。

「あつカ、カイナ！ ご、ごめん」

突然スザクが謝った。セシルも慌ててカイナに謝罪した。理由が分からずカイナが彼らを見ていたら、セシルがハンカチをそつと彼女の頬にあてた。そのまま拭うような仕草をする。

「ごめんなさいね。少しきつく言いすぎてしまったかしら」

ハンカチが濡れているのを肌で感じて、ようやくカイナは己が泣いているのだと理解した。きよとんと、黒い瞳がまばたいた。首を傾けたカイナは、不思議そうだった。

「あれ？ 俺、なんで」

「気付いて、なかったのかい？」

「いやだって俺、別に悲しくなんかないし、苦しくも、ないし。泣く必要なんて、うっ」

「カイナ！ 大丈夫かい？」

ひどい頭痛がし、カイナは額を右手で押さえた。慌てたスザクが傾いたカイナを支えた時、彼女は声を聞いた。知らない声だった。とても懐かしい声でもあった。

『こんなところにいたのか』

カイナは一人、膝を抱えてうずくまっていた。泣いていた、ように思う。そこに、彼が来てくれた。彼は少し呆れた顔をしていた。カイナは彼の名を呼んだ。たしかに呼んだはずの名前は、聞き取れなかった。

『二人がお前をとて心配していた』

『しんぱ？』

『お前に何かあったんじゃないかって、不安を感じてるってことだから、今度からは一人で勝手にどこかへ行くな。辛くことがあつたら、こんなところでうずくまってないで私に言え。いいな』

『はい、もうしわけ』

『頼むからカイナ。あまり私を 心配させるな』

眩しい銀色が見えたところで、映像は途切れた。寂しさにカイナ

は、うめく。視界に広がる翡翠の瞳が、別のものと重なった気がした。

心配の意味は、やはりカイナにとって分からない。だが、彼女は一つだけ理解した。

自分は一人じゃない。

それだけを理解し、涙を止める努力をやめた。涙は勢いを増してカイナの白い頬を流れ落ちていく。セシルのハンカチがびしょ濡れになり、役目を果たさなくなった。

「うあああ、せつセシルさん、ど、どうすれば」

「そ、そうね。えと、そっそうだわ！ 何か食べ物を」

「あは〜。セシル君がカイナ君をどう思ってるかよく分かる言葉だね」

「ちよつとロイドさん！ あ、違うのよカイナさん。私は別に食べ物であなたを釣ろうとしているわけじゃ」

「セシルさん。それだとロイドさんを肯定していることに」

慌てている特派のメンバーを潤んだ目で眺めていたカイナは、しばらくしてから肩を大きく震わせた。誰もがカイナをポカンと見た。彼女は視線を気にせず、涙を流しながら腹を抱えた。

それはスザクたちが初めて見る、カイナの笑顔だった。

第十五話「ただ寂しくて不安だった」(後書き)

私のお気に入りシーンは「プレゼント、どうもありがとうございました、先輩」と言うところ。こんな厭味ったらしいセリフいつてみたいわ(え)。

改めて思うんですが、ほんと主人公たちチート(最強)すぎる。

ところで、修正すればするほど文章が長くなっているのは気のせいでしょうか？(滝汗)(大幅加筆修正：11/01/28)

修正(11・03・31)

修正(11・06・16)大幅書き直し。

第十六話「ナリタ連山」

黒の騎士団にライが入ってから、初めての大規模軍事訓練が行われた。

ゼロに『ハイキング』と名付けられたこの訓練には全軍が参加していた。ライは内心首をひねったが、何も言わずに付き従っている。それは新人が口を挟むことではない。ゼロのことであるから考えもあるのだろう。

「まったく、こんなところにハイキング、とはなあ。ゼロも何考えでんだか」

彼の横でばやくのは黒の騎士団幹部、玉城タマキだ。騎士団の母体となった『扇グループ』のメンバーらしい。カレンもまた扇グループのメンバーだったようだ。

入団してここ数日間、ライは幹部を密かに観察していたが、この玉城という男、ムードメーカーではあるが能力は平均以下だ。しかし日本に対する愛着は強く、口は悪いが気安い性格なので団員からは慕われている。リヴァル以上にいつもハイテンションな玉城に、ライはいつもついていけない。ライの苦手なタイプだった。

玉城がこんなところと言い捨てたのは『ナリタ連山』と呼ばれる山岳地帯で、見渡す限り岩と緑しかない。軍事演習には適した場所と思えた。

ライが様子をつかがったところ、どうやら玉城だけでなく、他の幹部もゼロから詳細を聞いていないらしくった。団員達は全員、山肌に設置された削岩機を不思議そうに眺めている。あの削岩機で何をするつもりなのか。ゼロは軍事訓練と言っていたが、ライにはどうしてもそれだけが目的とは思えない。青い瞳を少し後ろに流す。

山を登っているのは人だけではなかった。

戦闘車両。日本製ナイトメアフレーム『無頼』が、黒の騎士団が持ち得る全戦力がここに集結していた。

訓練は確かに必要だった。騎士団はまだ素人の寄せ集まりで、錬度が低い。しかし、たくさんの戦力を動かすと敵に発見されやすくなってしまふ。錬度が高いならまだしも、現在の騎士団で全軍を動かせば、ブリタニアに発見してくれと言っているようなものだった。今までのゼロの作戦を見る限り、彼がこの程度を理解していないとは思えないのだが。

ライは考えながら、首をめぐらせた。地形を改めて確認する。地図を渡されて覚えているものはいたものの、やはり実物を見るに限る。じっくりと眺めた彼は視線を再び削岩機に戻した。

「よう新入り！ 訓練なんかでびびってんじゃねえぞ」

辺りを見回していたのを緊張しているからと勘違いしたらしい。

玉城が笑顔でライに声をかけた。思わずライは眉間にしわを作ってしまった。

「訓練？」

「おいおい。こんな何もないところで訓練以外に何するってんだよ。分かってねーなあ」

玉城は笑ってライの背中を叩き、他の幹部のところに戻って行った。どうやら新人であるライを励まそうとしたらしい。荒っぽそうに見えて気遣いができる人柄のようだ。……というのはライの考えすぎだろうか。

削岩機による掘削が終わる頃、別行動していたゼロが合流した。傍には白い拘束着姿のC・Cもいる。

騎士団内部において彼女はゼロの愛人と噂されていた。2人とも

特にその噂を否定していない。C・Cに関する団員の感情は、かなり複雑だった。

少し話は変わるが、記憶が無く、更にブリタニア系の顔立ちをしているライを団員は好意的に受け入れた。もちろん中には嫌悪の感情をぶつけてくる者たちもいたが、彼自身の予測よりも遙かに少なかった。疑われても仕方ないと思っていたので最初は逆に戸惑ったものの、団員たちがカレンの言葉を信じているからだと知って、彼は納得した。つまりそれだけカレンは騎士団内で信頼されているのだ。

彼女がなぜこんなに自分を信頼してくれるのかまでは分からないが、信頼には信頼を返す。

ライは改めて決意を固めていた。

その時、扇がゼロに近寄って行ったのをライは視界にとらえた。話の内容までは聞こえない。気にはなつたものの、自分のやるべきことをしようと、ライは己に与えられた無頼の調整に向かった。入念にチェックをする。

今回の訓練は制服を着た初めてのものらしく、団員たちは皆、浮足立っていた。

制服と無頼、それから日本が作った最新鋭の『紅蓮式式くわんにししき』を見つめる団員達の目は、どこか誇らしげで熱がこもっていた。

この紅蓮式式は赤いカラーリングが施されており、黒を基調とした無頼の中で非常に目立つ。この機体には騎士団のエースであるカレンが乗ることになっていた。

「軍団としてのまとまりは弱い、か」

だらけきつた周囲を眺め、ライは呟く。

1人1人の強さは元より、指揮系統、規律からして正規軍とは違う。騎士団を構成するのは、ほとんどがゼロという名前に惹かれてやってきた素人ばかりだ。このままではまともに戦うどころか、訓

練すらろくにできないのではと思われた。ゼロは一体どうするつもりなのだろう。ライは何度目かの疑問を抱く。

念入りな機体のチェックを終えてライがコクピットから降りると、笑い声が聞こえてきた。温泉がどうの、という話をしている。随分と呑気なものだ。

「ゼロ！ レーダーに反応多数……何よ、これ」

しかし幹部の1人、井上という女性の悲鳴で緊張が、その場を一気に覆い尽くした。

空にあらわれる多数の黒い影を誰かが指差す。影、戦闘機にはブリタニアの国旗が刻まれてあった。驚き、誰もが声を発せずにいる間にも、空輸されたナイトメアが地面を這って素早く陣形を整えていく。数は山を飲み込みまんとするほどで、騎士団ごとナリタ連山を囲うように展開している。

ざわめく騎士団の中で、状況を理解してなお、ライは落ち着いていた。きっとゼロはここにブリタニア軍が来ることを知っていたに違いない。そしてハイキング、全軍の軍事演習、ブリタニア軍、岩山に設置された掘削機……すべての点が、ライの中で繋がっていく。

「冗談じゃねえぞ！ あんなのが来たら帰りの道がなくなっちゃう。ゼロ、どうすんだよ」

「もう封鎖されているな」

玉城とゼロの会話で自分たちの現状を理解したのか、下っ端の団員が小さな悲鳴を上げた。混乱が広がっていく。

「生き残るからには戦うしかない。戦争をするしか、な」
「ブリタニアと、戦争」

騎士団は反ブリタニア勢力、つまりブリタニアと戦うための組織だ。だがおそらく、団員のほとんどがブリタニアと戦争する発想を抱いたことはなかったに違いない。おかしな話ではあるが、圧倒的戦力差を考えると仕方がないことでもあった。

幹部たちがゼロに抗議をしているのを聞きながら、「見事だ」と呟いた。いつのまにか彼の傍にいたC・Cが「何がだ」と聞いた。ライは彼女へ目を向けることなく静かに答える。

「ゼロの手腕が、だよ」

逃げ出そうとした団員を、「私なしで勝てると思うなら、私を撃て」のたった一言で沈めたゼロを、青い目が感心したように見えた。

簡単に言っつてしまえばゼロは団員を死地へ追いやったのだ。

団員にはもう退路はなく、戦うしかない。しかしゼロ抜きでは勝利、生き抜くことは難しい。彼らは生き残るため、死に物狂いでゼロの作戦に従う。そしてこの戦いに勝って生き残れば、団員たちは戦闘の経験を積んだ兵士として成長する。更には騎士団を絶望的な状況から勝利へ導いたゼロを心酔し、今以上に従うことだろう。ゼロは忠誠を得られ、黒の騎士団の名も広がり、戦力の補強も可能となる。

いいこと尽くめだ……もちろん、勝てば、の話だが。

「どうした、緊張しているのか？」

少し離れた所から戦闘準備に忙しい騎士団を眺めていたライは、ゼロに声をかけられた。

「いや。君、ゼロに感心していたところだ」

「ほおお。どう感心されたのか、気になるな」

ライは先ほどの考えを彼に伝えた。今度はゼロの方が感心したように首肯した。

「なるほどな。では聞こうか。ここで私がどのような戦術をとるか」「この地形を利用した古典的な高地からの逆落とし。岩肌に刺したあれが土砂崩れを起こすための道具なのだろう。土砂崩れを起こして敵を分断、混乱させたところで奇襲をかけて敵将を討つ。少数が多数に勝つ方法はそれしかない」

話を聞き終えたゼロは少しの間黙り込んだ。

「お前は軍隊にいた可能性があるな」

「どういう意味だ」

「今お前が言った作戦は理にかなっている。兵法の基本を知り、戦いを理解している。ただの市民の妄想とは考えづらい」

ゼロの言葉に、ライは反論しなかった。彼自身思い当たる節がある。今この場で、命をかけた戦いに赴くというのに心はひどく落ち着いていた。戦いについての知識もあふれ出んばかりで、ナイトメアの操縦に関してもそうだ。軍にいたとすればすべてに説明がつく。

「ナリタ連山に充満した戦いの空気がお前の記憶を揺さぶったのだろう。この雰囲気存分に味わうといい」

そこまで言ってゼロはライに背中を向けた。黒のマントが大きな音を立てた。

「だが死ぬな。これは命令だ」

「ああ。僕はこんなところで死ぬつもりはない」

言い切ったライに、ゼロは少し振り返って笑った、ようだった。仮面をつけているのではっきりと分からないが、ライにはそう見えただ。

「我々は敵が日本解放戦線を発見し、攻撃を仕掛けたタイミングを狙う。それまでは無頼内で待機しろ」

命令を出したゼロが自分の機体へ向かって行く。ライはその背中に問いかけた。真剣なその声に、ゼロが立ち止まる。

「この作戦。確かに君が言ったとおり、理にかなっている……しかし、土砂崩れは僕たちの敵だけを襲うわけじゃない。この意味、君なら分かるはずだ」

どれだけ綺麗な言葉を並び立てようとも、戦争とは犠牲の上にか成り立たない。だからライは問わなければならなかった。それを聞かなくては、一歩も前に進めない気がしていた。

「君は背負う覚悟があるか？」

黒い仮面がライを振り返る。今ゼロはどんな表情をしているのか。ライはなんとか読み取ろうとゼロを見つめるが、仮面の男は悠然とそこに立っただけだった。

「覚悟か。覚悟など、当の昔にしている」

答えたゼロの声は今まで聞いたことのない声音だった。仮面越しに彼の本気が伝わってくる。

「そうか。いや、ならいいんだ。すまない」

去っていくゼロの背中を最後まで見送ることなく、ライは無頼に乗り込んだ。

第十六話「ナリタ連山」（後書き）

まだ戦闘に入っておりません。でも、どうしてもいれたかったんです、ライがゼロに覚悟を聞くシーン。ライの方が戦争について知っているはずなので。ロスカラでも聞いてほしかったと思ってました。いれれて満足。

あと、私は特別玉城が好きというわけじゃありませんが、彼みたいな人物はどこにでも必要だ、とは思ってます。

ライってホント頭いいですね。（加筆修正：11/02/02）
2011・03・31修正

第十七話「ナリタ連山2」

ナリタ連山、という山がある。

この山には『日本解放戦線』の本拠地がある、と目されていた。にっぽんかいほうせんせん
日本解放戦線とは日本最大の抵抗組織のことで、旧日本軍の生き残りらしい。コーネリア総督が率いるブリタニア軍は解放戦線がナリタ連山にいるたしかな情報を手に入れ、念入りな準備の元、今日いよいよ彼らを殲滅するらしい。

一夜漬けで頭に入れた情報を反芻したカイナは、とても大きなあくびをした。目の端に浮かんだ涙を右の人差し指で拭う。

「もうカイナさんつたら、数日前からちゃんと資料読むようになってあれほど」

「そう言われてもな。文字見ると眠くなるんだから仕方ないだろ」

横で少しご立腹なセシルにカイナは言い返すも、本当のところは少し違った。図書館に行ったあの日から、本は元より、資料などの文字がびっしり書かれたものを見ると気分が悪くなるのだ。かと言ってさすがに読まないわけにもいかないのです、仕事と割り切って無理やり資料を読んだ。昨夜のことを思い出すだけで胃がムカムカしてくる。

どうにかしなくてはとカイナ自身も悩んではいた。……誰かに相談するのがいいんだろう、とも思う。

この前の一件以来、彼女の周りに対する意識は変わった。スザクに記憶喪失のことは話したし、今まで心にためていた不安なども吐き出すようにはなった。だとしても、このことを相談するには図書館で見たことを説明する必要があって、カイナにはどうしても話せなかった。

あの感覚をまた思い出すのは、怖い。

「カイナ、大丈夫かい？」

「ああ。朝はたらふく食べてきたからまだ減ってな」

「いやお腹の減り具合じゃなくて」

心配そうなスザクに軽口を返してカイナは意識を切り替える。今は戦場に来ているのだ。後方待機の予備戦力扱いである特派の出番がなさそうだろうと、だらけていいものじゃない。敵味方双方に被害が出るのは間違いないのだから。

「しかし念入りだな。この包囲網は」

カイナはブリタニア軍の配置を見ながら言った。声は少し呆れ気味だった。

「おかげで僕たちの出番なさそうだけどね」

「完ぺきな布陣ですからね」

つまらなさそうに唇を尖らせたロイドに続き、セシルが言った。二人に対し、カイナは「完璧ねえ。それはどうかな」目を細めた。視線が彼女に集まった。

「どうかなって、どういうこと？」

「すべてに対して完ぺきな布陣というのはありえない」

「え、と？」

不思議そうなスザクに、しかしカイナはそれ以上何もいわなかった。スザクが口を開く前に、ロイドが不満を漏らす。唇を尖らせている様がここまで似あう男は、いないだろう。

「折角この前もらってきたサザーランド、使えるようにしたのにねえ」

「もらってきたって。アレは一応修理するからお借りします、じゃなかったのか？」

「んっふっふっふ。でもいつ返すかは言ってないしね」

「お前って……まあ、いいけどな」

「ロイドさん、返す気ないんでしょう？」

「あはははっやっぱり分かる？」

いつものやり取り（じゃれあいだと顔見知りの技術員に言われた）をカイナたちがしていると、リーダーに映った味方機が動き始めた。ゆっくりとではあるが着実に包囲網は狭まっている。

「時間の問題、かな」

「いや、まだ油断はできない」

ロイドの言葉にカイナは首を振る。先ほどまでの口調と打って変わった冷静な話し方だった。戦いに関するカイナは口調が変わる。纏う空気もまた、重く冷たくなる。まるで歴戦の將軍のような貫禄があり、誰もが彼女に一目置く要因の一つだった。

「どっついうことかしら、カイナさん」

「戦争にイレギュラーはつきものってことだ」

終るまで気は抜けない。カイナが憂えている間にも戦況は進み、ダールトン將軍の部隊が敵本拠地の入口を発見した報が届く。セシルとスザクがほっつと息を吐き出した。ロイドだけが残念そうだった。

「他の部隊も順次合流してるみたいですね」

「残念でした。本当に出番なさそうだね」

「でもロイドさん。出番がないに越したことはないですよ……ん？
どうしたんだい、カイナ？」

周りが緊張を緩める中、彼女だけがじっと画面を見つめていた。
スザクの呼ぶ声にもこたえず、ただ、じっと。カイナの背中を汗が
流れ落ちる。

寒気がした。

「悪い予感がする」

はたしてカイナがそう呟くのと、世界が揺れたのはどちらが先だ
つたろうか。セシルが倒れそうになったのをカイナは腕を伸ばして
支えた。

「これは！」

続いて轟音。レーダーに映る味方機が次々と『ナニカ』に飲みこ
まれていく。セシルが慌てて自分の席に座り、機械を操作した。原
因を調べているのだろう。

「土砂崩れ？」

「あらら、このままじゃ麓^{ふもと}までいっちゃうよ」

「熱反応が異常です。これは自然発生したものではありません。誰
かが意図的に水蒸気爆発を起こしたのでは」

「なるほど、逆落としか。古典的な方法だが、効果的ではあるな」

「カイナ！ 冷静に分析している場合じゃ」

焦るスザクに、カイナは声をかけて落ち着かせようとした。が、

その前に前線の声が通信から聞こえてきた。

「こちらマルソー隊、アレックス將軍と連絡がつきません。第二師団は壊滅したとみるしか」

「ロイド」

「うん、おそらく君が言ったとおりだろうね。このタイミングで土砂崩れなんてとつても不自然」

「敵の奇襲です！ 黒の騎士団がつうああ！」

突如入った一報は、しかしすぐに雑音で聞こえなくなった。ゼロ。カイナの隣でスザクが敵の名を呼んだ。齒軋りの音まで聞こえてくる。本人にカイナが聞いた話だと、何やらスザクとゼロの間には因縁があるらしい。ゼロがどんな人間なのかをカイナは知らない。だけど、処刑されそうになったスザクを助けてくれたことには、礼を言いたいな、と密かに思っている。スザクに知られたら絶対怒られる自信があるので、誰かに喋ったことはないが。

「おめでとう！ 出番、あるかもよ」

「ロイドさん」

「不謹慎です」

「え、どうして？」

「教えて差し上げましょうか？」

スザクとセシルに怒鳴られているロイドから救難信号が送られてたが、カイナは黙秘を貫いた。決していつかの仕返しというわけではない。

第十七話「ナリタ連山2」（後書き）

まだ戦闘に入っていないというちんたら具合に自分で呆れた。今回もいつものごとく自分の解釈はいつてます。ホントは土砂崩れあった時点でスザクはまだ何があったか知りません。ま、こういうのもありということ。

次で戦闘に入ります。

第二章はこのナリタ連山の話だけなのであっさり終る予定。二人の戦いはどんなものになるのか。初陣が二人の主人公に与える影響とは？

盛り上げた？ところで次回をお楽しみに！

ところで今さらですが、あとがきの次回予告って必要ですか？

ネタバレなるからいやだーっというかたいらっしやったら教えてく
ださい（次回予告はしないことにしました）。

2011・03・31修正

第十八話「ナリタ連山3」

打ち上げられた信号弾、スクリーンに映る敵ナイトメアの移動奇跡を見て、ライはその時が来たことを悟った。電子音が鳴る。ゼロからの通信だ。

「すべての準備は整った！ 黒の騎士団、総員出撃準備！」

黒の騎士団に漂う緊張がピークに達した。誰かの唾を飲み込む音まで聞こえてきそうだ。

「これより我らは山頂よりコーネリア軍に奇襲を敢行する。私の指示に従い、第三ポイントに向け一気に駆け抜ける！ 作戦目的は敵の殲滅ではない。ブリタニア第二皇女コーネリアの確保だ。間違えるな」

上手く敵を分断し混乱させたとしても、ライたち騎士団が不利なのは変わらない。コーネリアに目標を絞るのは当然だった。戦いに慣れていない者だと血気にはやる可能性もあるが、今回は大丈夫だろう。自分たちの命がかかっている。ゼロの指示に従うはずだ。

「突入ルートを確保するのは紅蓮くれんしん式だ」

「はい！」

緊張気味な声で返事をしたカレンの操縦するナイトメアが、動きだす。地中深くに打ち込まれた杭のようなものに、大きな銀色の右手、放射波動を打ちこむ。パツと見は杭に右手をついているようにしか見えないが……やがて地面が大きく揺れた。カレンの歓声が聞

こえてきた。

「やった！」

山肌から膨大な水と土砂が噴き出し、すさまじい勢いで様々な物を飲み込んでいく。揺れる視界の中、ライはその光景から目を話さず、見ていた。

心の中で、ゼロにかけたのと同じ問いを今度は自分にぶつける。土石流は敵を飲み込むだけで飽き足らず、勢いをそのままに麓^{ふもと}まで流れていく。ゼロにはああ言ったものの、ライは彼だけにその責を問うつもりはなかった。黒の騎士団に身を置き、ゼロとともに歩むと自分で決めたのだ。ゆえに覚悟は、

「ある！」

操縦桿を握る手に力が入ると、電子音が通信を告げた。画面にゼロが映る。

「ライ、聞こえるか？」

通信は己に宛てられたものだった。何かあったのだとライは眉を寄せた。

「どうした」

「ナリタ東に後方支援部隊が数機まとまって残っている。合流されると厄介だ」

それだけを聞いてライは頷いた。

「小林、沖野、山崎、お前たちも」

「不要だ、ゼロ。ここで僕らに戦力を分けている余裕はない。僕が足止めしてみせる」

ゼロの言葉をライは遮る。本音を言うなら敵と数倍の戦力は欲しかった。だが、ただでさえ寡兵の黒の騎士団にそんな余裕はない。ここは自分1人だけで行くのが最善で、貴重な戦力は作戦のために残しておくべきだった。普段のゼロならそれくらい分かるはずなのだ。

「らしくない甘さだな」

「……そうか」

ライは小さく呟いたが、ゼロに聞こえたらしい。今度は別の声が入る。カレンだった。どこか焦った顔をしていた。

「ゼロ、いくらライでも1機は」

「カレン、あの男は足止めすると言った。任務の主眼を理解している。勝算あつてのことだろう。行け、ライ。また後で会おう」

「また後で」

まるで友達に伝えるようにライは軽く返事をし、フットペダルを踏み込んだ。ゼロ率いる本体が山を駆け下りる姿がディスプレイに映る。

「運命は自分の手で切り開け！ 己の勝利を、存在を信じるのだ」

ゼロの号令だ。続いて幹部たちが直接率いる部下たちに声をかけている。ライは彼らを信じ、意識を敵グラスゴーに向けた。数は5。時間稼ぎとはいえ、まともにはやっていては勝ち目はない。

手にじつとりと汗をかく。心臓が大きく胸を打った。ライにとっ

て初めての实战だ。油断、焦りはともに禁物。一瞬、アツシユフォード学園の皆の顔が思い浮かんだ。ルルーシユ、ナナリー、ミレイ、リヴアル、シャーリー、スザク、カレン、はこっちにいるか。

ライは笑った。不思議と心が落ち着いた。そう。たとえ記憶が無くても、今の自分には帰る場所がある。だから、彼は死ねない。死なない。

デイスプレイをもう一度見る。機体性能は大きく変わらないはずだが1対5、と数で圧倒的に不利だった。勝つためにとるべき行動が、ライの脳裏にいくつも浮かんだ。迷っている時間はない。彼はその1つを選択する。

すぐさま彼はフルオートで敵に向けて銃を撃った。グラスゴーはすばやく散開し、銃を避ける。さすがというべきか。訓練された見事な動きだった。

しかし想定内、というより、元からライの目的は敵を散らばらせることだったので、まったく問題はない。2体と3体に敵が別れていた。ざっと周囲の地形を確認。山中なので障害物を上手く使えば十分戦える。彼はそう判断した。気をつけるべきは己の油断とエナジー（燃料）切れぐらいだろう。

2体の方へとライは機体を向けた。敵は慌てることなくアサルトライフルを構えた。予測していた通りの反応だ。ライはスラッシュハーケンを敵が隠れている大樹に打ち込み、先端が突き刺さると同時にワイヤーを一気に巻き戻す。

整った顔が苦痛でゆがんだ。

かなりの速度で機体が宙を舞い、身体にGがかかる。ライは歯を食いしばり、機体の体勢をひねる。大樹を中心とした円のような軌道を描き、敵の後ろへ見事に着地した。その動きにグラスゴーの1機が動揺していた。もちろん、その隙をライが見逃す必要などない。スタントンファを振りかぶった。

確かな手ごたえを感じた彼はすぐその機体から離れる。グラスゴーは膝をつき爆発、炎上。ライが少し安堵していると、残り1体の

アサルトライフルが火を噴いた。回避行動は、間に合わない。今までは違う揺れがライを襲う。

「っう！ だがまだ、やれる」

機体損傷は小破。まだエンジンファイラーも十分ある。ライは確認してすぐ無頼を突進させていった。迎え撃つ構えのグラスゴーの前で右足を軸にして急速回転、相手に背中を見せながら回転の勢いを使ってトンファを叩きつけた。相手のコクピットハッチが脱出したのを見て、ライは標的を変える。

先ほどのような油断はもう見せない。

「2機目、残り3体」

あくまでもライの任務は時間稼ぎだ。殲滅する必要はない。しかし倒せば、本隊の負担が減る。

「いけるか？ ……いや、いける！」

障害物を利用しながらライは前進する。銃弾が装甲を掠めるも損傷というほどではない。ライはあつという間に障害物を越え、グラスゴーと対峙した。タイミングを狙ったような右からの攻撃をトンファで受け止め、無防備になった相手の胴体をもう1つのトンファで叩きつぶす。倒れこむ機体に巻き込まれないよう飛び退き、宙に浮いた状態でハーケンを打ち込む。今まさに突撃しようとしていたグラスゴーの膝に。

突撃を無理やり止められたグラスゴーは、頼りなく体を前後に揺らした。体勢を整えさせる前にライはアサルトライフルを構え、容赦なく撃つ。ハーケンを巻き戻している間に、グラスゴーは天を仰ぐように倒れた。

撃破しても喜んでいる暇はない。残った1機がアサルトライフルを構えている。すぐさま前進、撃ち込まれた銃弾を回避する。敵の位置を確認すると、岩の陰に身を潜めていた。かなり大きな岩なのでアサルトライフルで貫通させるのは無理そうだ。

ライの思考は一瞬だった。

スラッシュハーケンを岩の左側に突き刺し巻き戻して、一直線に敵へと向かって行く。グラスゴーが岩陰から飛び出ようとしたその瞬間にハーケンを切り離し、もう1つあるハーケンを己から見てかなり左へと突き刺して巻き戻す。現れたグラスゴーはライを失ったように、ライフルを構えたまま動きを止めた。無頼が着地する。手にしたライフルの照準を合わせる。

相手がようやくライを発見した時には、すでに無頼のライフルから銃弾は飛び出していた。

敵グラスゴーが火花を上げながら倒れ込み、ライはようやく一息ついた。任務完了。そんな彼の元に通信が入る。休む暇はないらしい。

通信はゼロではなかった。実質騎士団のメンバーをまとめている扇要^{おんかなめ}だ。扇グループの元リーダーで、やや優柔不断な男だが、団員達からの人望は厚い。

「ライ、無事か？」

「はい。まだ十分動けます」

「そうか。じゃあポイント 1に集合。急いでくれ」

「了解」

通信はそこで途切れた。扇の表情はあまり芳しくなかった。何かあったのか。ライは勝利の余韻を感じる時間もなく、無頼を走らせた。

戦いは、痛み分けに終わった。黒の騎士団は団結を深め、経験を積み、戦う集団へと進化を遂げたものの、目的である『コーネリア総督』の確保には至らず、ブリタニア軍に大損害は与えたが致命的な事態にはなっていない。

作戦が失敗に終わったのはコーネリアを追い詰めた際に、『白カブト』が現れたからようだ。今まで何度も騎士団を苦しめてきた『白カブト』を撃破できたはまだ良かったのだが、カレンの紅蓮式くわんしきをもつてしても倒せなかったという。更には、

「凄腕パイロットの出現、か」

聞いたところによると邪魔をしに来たのは『白カブト』だけではなく、サザーランドも1体いたらしい。最近広くブリタニア軍に利用されているサザーランドを駆使し、性能に違いがあるとはいえ、あつという間に無頼を2機撃破。更にはゼロを追い詰めた。なんとかカレンがゼロを守ったものの、カレンの攻撃を2度も避け、冷や汗が流れるような攻撃をしかけてきたという。明らかに性能が落ちるサザーランドで、だ。もしも白カブト並の機体にそのパイロットが乗っていれば、確実にそこで終わっていただろう。

カレンからの話と見せてもらった戦闘データを思い出し、ライはため息をついた。至近距離の攻撃を避ける。言葉にすると簡単だが、実際に行えと言われて実行できる人間は中々いないだろう。カレンにすらできるかどうか。

「敵は強大、でも僕たちは負けるわけにはいかない」

第十八話「ナリタ連山3」（後書き）

ライ無頼無双！ つえーよライ！ もうお分かりかもしれませんが、私はスラッシュハーケンが好きです。スパイダーマンできそうだよ、とか思ってる。そのうちそんなネタもやってみたい、とか思ってる。

あと基本戦い方は原作をもとに創作してます。ご容赦を。

さて、戦い自体は次で終わりです。第二章はけっこうあっさりめに終了予定なので、ちゃちゃっといきましょう。連日更新保証はこの第二章までです。

2011・03・31修正

第十九話「ナリタ連山4」

「んん？ あれは」

もうすっかり慣れてしまった狭いコクピットに入り、カイナは首をかしげた。レーダーに味方の状態が映っている。単騎で進んでいる機体があつた。所属は、

スザクが驚きの声を上げた。

「ロイドさん、コーネリア総督が孤立しています！」

「え？ 随伴機もないの？」

「単騎ですね。あ！ 所属不明ナイトメアが複数接近中。これは、まさか黒の騎士団？」

セシルの声を聞きながら、カイナは十中八九黒の騎士団だろうなと思った。日本解放戦線の可能性もないとは言いつれないが、こんなに早く体勢を整えるのは元正規軍といえど難しいだろう。

「さすがに放っておくわけにはいかないね。周りに合流できそうな味方はいないし」

「ロイドさん出番を待っている場合じゃないですよ」

「とはいっても命令がないとねえ。んん。ああそうか。じゃ、命令もらおうか。セシル君、本陣につないで」

彼には考えがあるようだ。そちらはロイド達にまかせてカイナは自分の用意を済ませる。

「はい、回線開きました」

セシルの声とともに、コクピットのディスプレイにも映像が映る。ピンク色の髪をした少女と、ごつい顔立ちの軍服を着た男たちがいる。少女は軍服ではなく豪華な服を着ていて、明らかに浮いていた。雰囲気も軍人っぽくない。カイナは1人首をひねった。どこかでの少女を見かけた気がした。

「人間の顔ってなんでこう分かりにくいかなあ」

だがまったく思い出せず、カイナは断念する。周りの男たちの態度を見る限り、お偉いさんのようだとかイナは推測した。ロイドが少女に話しかけている。特派でございませう。のんびりした彼の口調は、画面向こうの男たちをいら立たせたようだ。頭が堅そうな彼と柔らかすぎるロイドの会話は、きつとこんな状況でなければ楽しいものなのだろうが、今そんなことを言っている場合ではない。

「わかりました。総督の救助を頼みます」

少女が頷いたことでカイナの初陣が決まった。

「カイナ君、ただのサザーランドじゃランスロットについていけないから、サンドボードにブースターをつけておいたよ。ただし、エナジーが切れたら重いだけのスキー板だから外してね」
「分かった」

ロイドの説明へ頷きながら、カイナは先ほどの少女を思い出して

いた。エリア11の副総督ユーフェミア皇女殿下。テレビで何度も顔を出している。どうりで見覚えがあるはずだ。

「今ならカイナ、君はまだ」

「断る」

通信越しのスザクが厳しい表情で何かを言いかけたが、カイナは短く遮った。まだ戦わずに済むだとかそういうことだろう。しかし言い捨てた途端、スザクは情けない顔になった。カイナは「めんどくさい奴だ」と胸の中で呟いた。

「……うん、ごめん」

あまりにも声が沈んでいたのでカイナはもう一声かけた。どうにもカイナは戦いが絡むと、言葉が足らなくなってしまいう傾向があった。

「安心しろ。俺は死なない」

「うん」

少しスザクの表情が明るくなったところでセシルの声があった。

「嚮導兵器Z 01、ランスロットはサンドボードを使用し、最大速度で液状斜面を上昇。総督を救援せよ」

「イエス・マイ・ロード」

まずはスザクのランスロットが発進準備に入る。イエス・マイ・ロード。ブリタニア軍に置ける上官への「了解」を意味する言葉だが、カイナは使ったことが無い。他にも似たような言葉があって使い分けるのが無理そうだからだ。

その時、突如ロイドがスザクに話しかけた。ロイドが発進を遮るなど珍しい。カイナは興味深そうに目を輝かせた。

「スザク君、1つ聞きたかったんだけど」

「なんででしょうか」

「君は人が死ぬのを極端に嫌うね。なのに軍隊にいる。なぜだい？」

「死なせたくないから軍隊にいるんです」

「その矛盾はさ。いつか君を殺すあうおっごめんなさいごめ」

横からセシルらしい腕がロイドの襟首を掴んだところで、映像がぷつんと切れた。

あー。安らかに眠れ、ロイド。

カイナは祈った。しかし今はロイドの安否より気になるのはスザクだ。戦うのが嫌い。でも戦う。死なせたかないといいながら戦い、誰かを傷つける。確かにひどい矛盾だった。

でも彼の中に確固たる信念のようなものを、カイナは強く感じる。では、自分はどうかろう？

彼女は自分を省みたが、よく分からなかった。

「ランスロット、発進します」

告げたスザクの声は、カイナの聞いたことがない調子だった。どんな顔をして発した声だったのだろうか。

あつという間に遠ざかる白い影を追うように、カイナは特派サザーランドを同じく発進させる。とりあえず今はナゾナゾを解いている場合ではない。彼女は目の前のことに意識を集中させた。

「うっ。こ、れは予想以上だな」

ブースターはかなりの速度を引き出していた。同時に今まで感じ

たことのないGがカイナの身体を押しつぶそうとしてくるが、画面に映るランスロットはサザールランドの前を悠々と進んでいる。ブースターをつけてもランスロットの方が若干速い。スザクにかかっているGも相当なはずだが、平気そうである。いつもこんな中を操縦しているのだとしたら、たしかにスザク以外の人間にランスロットを動かすのは無理だろう。

ランスロットとサザールランドはあっという間に液状化した斜面を登り、中腹までやってきた。総督の場所への最短ルートは、土石流に巻き込まれなかった原生林が塞いでいる。

「突っ切るか」

「うんそうだね。カイナは後ろからついてきて」

「ん？ ああ、分かった」

2人は短いやり取りをした。スザクはどうするつもりなのか。カイナが眺めていると、スザクはランスロットの専用銃ヴァリスを構え、躊躇なく連射し始めた。次々と木々が消し飛んで、あっという間に道ができる。急いでいるとはいえ、スザクも中々強引だ。ロイドの笑い声が聞こえてきた。

ランスロットは最短距離をフルスピードで進んでいく。カイナもフルスピードを出すのが、どうしても差が出てしまう。悔しい思いを抱きながら追いつがるように白い背中を見つめる。懐かしかった。

いつも青いマントを揺らした彼の背中を追いかけていた。だけど時折、あの方は自分を振り返って、

「あ？」

「カイナ君？ 今変な動きしたけど何か問題でもあった？」

「え、あ、いや。なんでもない」

カイナは振り切るように顔を振って、ペダルを踏む足に力を入れ

直す。何かが見えた。だけど今は考えている時じゃない。

「総督！」

スザクが声を上げる。前方にコーネリア総督のグロースターが見えた。その時もカイナの目はグロースターに装備されたマントにいつて、頭がチリッと痛んだ。カイナは唇を噛んで、目を無理やり引き剥がした。

グロースターと向かい合っているのは真つ赤なナイトメア。明らかにブリタニアのものと形状が違う。右手が異様に大きい不思議な形をした赤い機体だけでなく、数機の無頼がグロースターを囲んでいた。そしてコーネリアに向かって一斉にライフルを撃つ。

コーネリアのグロースターは両腕を失ったものの、コクピット部分は平気そうだ。おそらく殺すつもりはなかったのだろう。

「ご無事ですか！ 救援に参りました」

総督のナイトメアと敵機の間スザクは無理やりランスロットを押しこんだ。

「特派だと？ 誰の許しで」

数秒遅れで現場に到着したカイナはサンドボードを外し、ライフを撃ち込んで牽制しながらコーネリアの傍に寄る。何やらわめいているコーネリアは無視した。文句なら後でいくらでも聞く。

……スザクが。

カイナは大役をスザクに押し付け、敵を確認した。

赤い猫背のナイトメア1機、無頼3機、無頼の1機は他と塗装が違うので指揮官、ゼロである可能性が高い。カイナは状況を見、判断を下す。

「この場で倒そう。総督を守る上でその方が確実だ」

「わかった」

「スザクは赤い機体を頼む。くれぐれも右手には注意しろよ」

「うん、カイナも気をつけて」

こちらが動き始めるとほぼ同時に向こうも動き出す。相手も同じことを考えたのだろう。赤い機体はランスロットに向かった。スピードだけで分かる。サザーランドじゃ相手にならない。

横でド派手に白と赤の機体がぶつかり合う。機体性能だけでなく操縦技術もスザクのランスロットと互角に見えた。寄せ集めだと思っていたが良いパイロットがいるじゃないか、黒の騎士団。カイナは戦闘中だというのに相手を褒めた。

「まあ、こつちはこつちでやるるか」

3機の無頼は指揮官機、ゼロが乗っているとされる無頼と、技術はそこそだが慎重過ぎる無頼、それから短気そうな無駄に良く動く無頼、とパイロットの特性がバラバラだ。

機体右側についているハーケンを左の短気そうな無頼に射出。ハーケンは無頼に当たらず機体の右後ろにある岩に刺さった。それを好機とみたか、短気な無頼が突っ込んでくる。カイナはハーケンを突き刺したまま、真っ直ぐ進んできた無頼の左へと自機を回り込ませる。ワイヤーが無頼の両足に引っ掛かった。そのまま右へ機体を反転させワイヤーを飛び越えると無頼の両足を縛る形になる。

短気な機体が無様にこける。慌ててライフルを撃とうとした慎重な機体を見て、カイナはゼロ機へとライフルを向けた。

フルオートで撃ち抜く。慎重な機体はライフルの構えを解いてゼロ機をかばった。ということはやはりあれがゼロらしい。確認が済む。

慎重な機体は膝をついて倒れ込み、完全に停止した。パイロットが中から出てきたのを見て、うつぶせに倒れている機体に向かった。ワイヤーを外そうともがいているが、余計に絡まっているようだ。ゼロ機がカイナに向けてライフルを撃ってきた。しかし、カイナは最小限の動きで避けるだけで相手にしない。そのままトンファを振りかぶって起き上れない無頼に近づいた。

振り下ろす前に無頼のコクピットハッチが射出された。カイナはハーケンを切り離す。これで身軽になった。サザーランドを反転、今度こそゼロ機へ向かう。ライフルが向けられるものの動きが大きく、避けるのは簡単だった。

先ほどから思っていたが、どうやらゼロ本人のナイトメア技術はそう高くないらしい。

「これで終わりっ」

カイナがトンファを振りかぶったその時、全身が総毛立つように震え、今まで感じたことのない悪寒がした。彼女は反射的に横へ跳ぶ。画面左端に赤い影が映った。

「ちっしくった」

無理に跳んだ分着地が上手くいかず、カイナのサザーランドは右ひざを地面につけてしまった。立ち上がる前に赤い機体がそのままカイナを追いかけ、大きな右手をのばしてくる。この手に捕まったら終わりだと思った。

マズイ。態勢を整え、いや、間に合わない。

カイナは機体を思い切り右に倒す。敵機の右手がサザーランドの上を通り過ぎていった。

「ぐうっああ、いつうっ」

加減など考えず地面に倒れ込んだため、かなりの衝撃がカイナの身体を襲う。息がつまり、全身に痛みが走る。だが痛がっている暇などない。

「はああああああっ」

大声を上げて操縦桿を動かした。横たわったままの下半身を捻り、赤い機体の足を蹴ろうとすれば、気づいた赤い機体が寸前で攻撃を止めて飛び退く。そこにランスロットが赤い機体へ攻撃をかけ、一先ずの危機が去った。ようやくカイナは一息つく。

「ごめんカイナ、大丈夫かいっ？」

「……ああ、大丈夫だ」

スザクのランスロットが敵を抑えている間に機体を起こした。下敷きにした機体の右腕は壊れたようで反応なかったが、残ったハーケンを使いカイナはなんとか立つことに成功する。身体の右側が熱い。アザは確実にできているだろう。

少し朦朧とする視界の中でカイナがレーダーを見ると、味方機が数機こちらに向かっていた。自分たちの不利を悟ったのか、ゼロ機と赤い機体が後退していく。ゼロ機の背中を守るようにしんがりを務めている赤い機体に、カイナの頭が真っ白になった。

違う！　そこは自分の場所だ。自分が彼の背中を守るんだ。

「僕が追いかけるからカイナはそこで総督を」

追いかけなきゃ。いつだって、そう。いつだって自分は彼の後をついて行った。

「全将兵に告げる。これ以上の損害は無意味だ。全軍、速やかに撤退せよ」

自分が後ろにいないとあの方は不安そうな表情をなされる。だから、いついかなる時も自分は、俺は、私は、あなたの傍に。

「撤退命令が出てる。カイナ！」

「え」

機体が大きく揺れ、カイナは顔を上げた。ディスプレイには心配げなスザクの顔とランスロットが映っている。状況を確認すれば、なぜかランスロットがカイナのサザーランドを押さえ込んでいた。

「カイナ、機体を止めるんだ」

スザクに言われたことで、カイナは自身がフットペダルを踏み込んでいることに気づいた。

第十九話「ナリタ連山4」（後書き）

タマキの一本釣り（笑）。

戦闘シーンうまくなりたいものです。文字で戦闘の緊迫感とかスピードだとか表現するのむずかしい。精進精進。

そしてちらほら過去の光景が！ マントですマント！ 最後まで赤しようか青にしようか迷ったマント！ けどとある方が描いたあのキャラのマントが青だったので青にしました（そんな理由）。貴族様のマントって赤いイメージあるんですけどね。あのキャラには青似合うもんね！ っていうか私だけマント好きなんだろうか。

興奮しすぎ失礼しました。今回でナリタ連山の戦い自体は終わります。

第二章はあと三話であっさり終了。

2011・03・31修正

第二十話「ナリタ連山・終幕」

シャーリーの父親が死んだ。

数日前のナリタ連山で黒の騎士団が起こした土砂崩れに、巻き込まれたのだ。ライの隣で立つカレンが唇を噛んでいた。土砂崩れの作戦を考えたのはゼロだが、直接引き起こしたのは彼女だったから、きっと誰よりも自責の念が強いのだろう。握られた拳が痛々しい。

細い肩に手を置いたライは何か言おうとして、女性の泣き叫ぶ声に口を閉じた。何も言えることなどなかった。ただ「君だけが背負うものじゃない」のだと、伝えたくて彼女の名前を呼んだ。

「カレン」

赤い髪が表情を隠していたが、カレンの手から力が抜けた。ライは安心して肩から手を離す。

葬儀は静かに進められ、棺が埋められるころになって雨が降り始めた。女性が、シャーリーの母親が夫を埋めないでくれと叫んで周りから宥められていた。

気丈に母親を支えるシャーリーの背中から、ライは目を離さなかった。そして覚悟が弱かったのを痛感した。戦争を起こす以上、犠牲は出るモノと割り切っている、つもりだった。だけど、

「シャーリー、シャーリー、あの人が、あの人が！ お願い、どうか埋めないで。もう苦しめないで。やめてえええっああああ」

実際に誰かが亡くなり、その死を悼む人を目の前にして、彼はすべてから逃げ出したくなった。シャーリーの父親でなくて良かっただろう。そんなことまで考えてしまい、ライは己を恥じた。

自分の周りに犠牲者がいなければそれでいいのか。ゼロに偉そうに覚悟を聞いておきながらなんて様だ。

これからもつと犠牲は増える。増えていく。それは必然。ライはそれらを乗り越えなければいけない。もう彼は足を踏み出した。引き返す道は、どこにもないのだ。

ライは騎士団に向かった。身体も心も疲れきっていて本当はしばらく休みたかったが、ゼロからの呼び出しとあっては行かざるを得ない。カレンのことも気にかかっていた。

「何か用か、ゼロ」

つい口調が平坦になってしまったライに、ゼロは文句を言ったりはしなかった。ライは怪訝に思った。ゼロの雰囲気がいつもと違う。まるで落ち込んでいるような。隣にいるＣ・Ｃ（シーツ）へ疑問の目を向けるても、彼女はかすかに首を振るだけだった。知らないのか言いたくないのか。

やがて話し出したゼロは、先ほど感じた雰囲気が勘違いと思えるほど冷静に用件を言った。

「大したことではない。お前の戦闘データをお前自身の解説で見たかったのだ」

「ナリタ連山、か」

「１機駆けとはな。よく生きて帰ったものだ」

口を開いたゼロに続き、Ｃ・Ｃが口を挟む。よりにもよってその

話題か。ライは苦笑う。考えてみればその話をされるのは当然でもあった。本来ならすぐにしなればならない詳細な報告を、戦いから数日経った現在までしていないのだ。今さら気づくとは、余程自分は揺れていたらしい。

「それが最善だと思った。それだけだよ」

「なるほど。たしかにこのデータはお前の言葉を裏付けている……カレンが保証するはずだ」

「常に先手を取り、地形を最大限利用して敵をかく乱、しとめるか。ブリタリアの騎士でも、ここまでできる者はそういないだろう」

「それは言いすぎだよ、ゼロ、C・C。コーネリアの騎士には遠く及ばないさ」

「機体の差も大きいだろう。同程度の機体に乗せれば同程度のそれ以上の働きをしてくれると信じているのだが」

やけに高評価な2人にライは肩をすくめたが、機体性能については彼自身思っていたことではある。

「ゼロが言うほどの働きができるかは分からないが、贅沢を言うならもう少し反応が早い機体が欲しい。紅蓮式くれん・にしき式程とは言わない。

そう、だな。せめて解放戦線が使っていた改造無頼かいぞう・ぶらいがあれば、もう少しマシになるだろう」

画面が切り替わり、解放戦線が使っていた無頼が表示された。騎士団と違う、訓練された軍人というものもあるだろうが、縦横無尽に戦場を走り回る無頼は、騎士団が保有する無頼ととても同じものと思えない。だがまだ騎士団には改造できるほどの施設もなければ、技術者もない。

入手の困難さはライも理解しているので消極的に告げる。ゼロは頷いた。

「なるほど、検討しておこう。下がっていいぞ」

頭を下げてトレーラーを後にした。

後日再びライはゼロに呼び出され、彼の部屋にいた。

「ライ、お前の活躍で黒の騎士団は想定外の4割の被害ですんだ」

開口一番のセリフに思わず苦笑する。この間からゼロはオカシなぐらいに自分を高く評価してくるように思う。C・C、カレンの推薦もあるのだろうとは思っても、ライにはその評価がむずがゆくて仕方ない。

「それは少し言いすぎじゃないか？」

「謙遜する必要はまったくない。お前は敵を倒し、敵の意識を集め、陽動の働きを見事に務めてくれた。操縦技術も優秀だが、その判断力を私は高く評価したい。私は優秀な部下を手に入れたようだ。君を推薦してくれた彼女たちに感謝しなければならないな」

ゼロが仰々しく腕を組んだ。今に始まったことではないが、ゼロの仕草は大げさなほど大きい。最初は士気向上の演技かと思っていたが、どうにも素らしい。つまり元々人を率いる、従える立場だった可能性が高い。少なくともただの庶民であった、とは考えづらかった。顔を出せないのはそれが原因じゃないかとライは睨んでいる。しかし正体を暴こうとライが思ったことはないので、団員の誰に

も告げていない。仮面をつけた彼につき従うと決めたのは、他ならぬ己自身だからだ。たとえその覚悟が今揺らいでいたとしても、あれはゼロが悪いわけではない。いや、悪いのか？　じゃあ自分はどうだ。ホントに、今していることは正しいのか？

疑問が螺旋を描き始める前に、ライはゼロに訊ねた。平静そのものの声だった。意識が切り替わる。まるでスイッチでも入ったかのように。

「用件はそれを言うため、か？」
「不服か？」

ゼロの言葉にライはどこか辛そうに顔をゆがめた。

「知り合いの女の子に折り紙を教える約束をしていた。約束を破るのは心苦しい」

「うっ！」

「うっ？」

正直に言うとゼロが妙な声を出した。ライが首をかしげると、ゼロはわざとらしく咳払いをして話を変える。

「そうか。それはすまないことをしたな。だが、呼んだのはそれだけではない　キョウトから、私宛に連絡があった」

「キョウト、か」

以前、カレンや他の幹部から聞いたことがあった。あの最新鋭の紅蓮式や無頼を回してくれたのもキョウトらしい。他にもキョウトは、反ブリタニア対抗組織に資金や機材を援助をしている。そのキョウトに認められるということはただのテロリストではない、一人前の組織として認められるということだ。

日本人にとってキョウトは象徴的な意味も持つようで、認められれば援助を受けられるだけでなく、団員の士気向上にもつながる。

「どうやら私に直接会いたいらしい。どのような存在か確かめようといったところか。ライ、お前がキョウトの立場だとしたら、私に対して何をする？」

ゼロが聞いてくる。ナリタ連山で作戦を告げてから、彼はライにこうして訊ねてくることが良くあった。

「僕なら仮面を外して身元を明らかにするな」

考える時間は必要なかった。ゼロが満足したように頷き、左腕を上げ、指先を軽く仮面に触れさせた。

「私も同感だ。無論、応じてやるわけにはいかないが」

騎士団の幹部でさえゼロの正体を知らない。C・C辺りは知っていそうだが、キョウトの要請でゼロが簡単に仮面を脱ぐとはライには思えない。

「顔を見せるのはマズイ、か」

「ああそうだ。だからお前を呼んだのだ」

左手の指先を仮面に触れさせるような仕草をとったまま、ゼロが笑った、気がする。それにしてもあのポーズ、疲れないのだからうか。

第二十話「ナリタ連山・終幕」（後書き）

シャーリー父死亡のところ、ロスカラじゃあっさりすぎてたので、どうしても描きたかった。ライは冷めているところがあるのでそういうのもありかなとは思ってますけどね。でもいくら覚悟していても、いざ目の前に真実をつきつけられると揺らぐものじゃないでしょうか。だって覚悟した時にはその真実は目の前にないんですから。

覚悟が揺らぎ、疑問を抱いたライはこれからどうするのか。作者も彼と一緒に成長したいもんです。

というわけで、第二章は後二話です。第二章終わったらぼちぼち修正します。誤字脱字は今のところ見つけてないんですが、見つけられたらメッセージでこそつと教えていただけると助かります。

2011・03・31修正

第二十一話「ナリタ連山・終幕2」

サザールランドから降りたカイナを待ちうけていたのは、セシルとスザクだった。以前スザクに見せてもらった、般若とやらの表情に似た形相をしている。思わず一步、と言わず、カイナは数歩後ろに下がった。

だが逃亡劇はすぐに終わりを告げる。右半身に酷い痛みが走ったのだ。こけそうになったところをスザクに支えられ、というよりも捕獲され、カイナはセシルたちに挟まれたまま1つのテントへ連れて行かれた。特派のテントだ。

「ではセシルさん、後はお願いします」

「ええ、任せて」

見回したテントの中にはほとんどモノがなかった。急遽張られたものようだ。何が起きているのか分からず、カイナはテントを出ていくスザクの背を見送った。

「さ、服を脱いで。怪我の手当てをしますから」

「怪我？」

言葉にセシルを見る。しばらく彼女の目を見つめてから、カイナはようやく2人が怒っている理由を察した。つまり、怪我のことを心配されたのだ。その途端、カイナは怯えたようにセシルを見た。

「本当は救護班に診せてあげたいのだけれど、今は重症人最優先で対応しているから……カイナさん？」

「だ、ダメだ」

冷水を頭から浴びせられたように感じた。自然とカイナの身体は震える。困惑した表情でセシルが手を伸ばしてくるのを、避けた。痛みが走るが気にしている場合じゃなかった。

「平気だ！ 俺は平気だ、怪我なんてしていない」

「カイナさん、ちょっと待って、落ち着いて」

近づいてくるセシルを振り切ってテントを飛び出す。

「あれ？ もう治療終わったのかい？」

外にはスザクがいたが、カイナは黙ってその横を駆け抜ける。大分走って、後ろからセシルの声が聞こえた。

「スザク君、カイナさんを捕まえて！」

「えっ？ あ、はい！ 分かりました」

カイナは必死に逃げた。

気がつけば人の声がせず、自分の状況を確認めた。テントの裏側、荷物が煩雑に置かれた影の中にいた。陣営のどこ辺りにいるのかは、カイナ本人にも良く分からなかった。

一先ずほうつと息を吐き出す。

「よか」

「こんなところでどうかしたのですか？」
「ひっ！」

荷物の端から顔をのぞかせたのは少女だった。どこかで見た顔だが、思い出せない。

「お、俺は怪我なんてしてない」

慌てて口に出してみたものの、不思議そうに首をかしげられる。どうやら追手というわけじゃなさそうだった。胸に手をやって、腕に走った痛みにかイナは顔をしかめた。少女が慌てて駆け寄ってくる。

「怪我なんてしてない。だから平気だ」

少女が何か言う前に声を出した。テントの表側は忙しそうに人が行き交っていて、多少声を出しても平気そうだった。少女はピンク色の鮮やかな髪を揺らし、そうですかと豪華そうな服が汚れるのも気にせずかイナの隣に座った。パイロットスーツのかイナとこの少女が並ぶと妙なツーショットだった。

「実は私わたくし、あなた達にお礼を言いに来たのです」

「おれい？」

「姉上を助けて下さってありがとうございました」

「姉って……！」

かイナは少女の言葉を反芻し、あ、と声を上げた。この少女は、コーフェミア・リ・ブリタニア。エリア11の副総督にしてブリタニアの皇女。コーネリア殿下の救助を認めてくれた人物だ。

「あ、い、いえ。お、私は任務を遂行したまで、です」

慌てて言い繕うものの、これで特派の立場が更に悪くなったらどうしよう。カイナは必死に頭を回転させる。空回りしている音だけが聞こえてくるようだ。

「……………どうしてこんなところにいるのか聞いてもよろしいですか？」

心配そうな顔をしたユーフェミアが聞いてくる。どうやら今まで無礼を怒っていないらしい。これ以上失態を見せるわけにもいかず、カイナは素直に話した。動揺している頭はあまり働かない。

「ち、治療をされそうになって、逃げてきました」

「まあ、やはりお怪我を」

「あ、いえ、違うのです。怪我などおれ、私は別に、つうっ」

悲しげに顔をゆがませたユーフェミアを見て、カイナは慌てて言い直すものの右わき腹に激痛が入り、思わずうめいた。身をかがめ、左手で患部を抑える。こうなったらもう誤魔化しはきかない。そうしたら、どうなる。連れていかれて、それで……………ああ、逃げないと。逃げようとカイナが身体に力を入れれば更なる痛みが走る。骨は折れていなさそうではあるものの、身軽に動ける傷ではなさそうだ。この状態でよくスザクを振り切れたものだ。人間必死になればなんでもできるものらしい。

ああ違う。感心している場合じゃない。ここから去らないと。カ
イナは立ち上がろうとした。

「ぐ」

「落ち着いてください」

ユーフェミアは逃げようとしているカイナの身体を支えて、優しい声で囁く。不思議と心が落ち着いた。そうだ。あの方もこんな風に。

「なぜ逃げられたのですか？」

『どうして逃げたんだ？』

本当は今すぐこの場を逃げ去りたかった。だが、目の前の少女と誰かが重なり、カイナは気がつけば口を動かしていた。

「怪我を誰かに看られるのは、知られるのはダメなのです」

「ダメ？」

「その……言葉にしづらいのですが、知られたと思うと、こっ怖くて、身体が震えて、自分でも抑えられなくなってしまうのです」

目の前のユーフェミアには完全に知られてしまった。話しながらカイナは身体の震えが大きくなるのを自覚した。

「すみません、お辛いことを話させてしまったようです」

カイナの肩に手が置かれた。顔を上げると悲しげな瞳とかち合う。

「でも今あなたは怪我をしていますね？」

はい。返事をしようとして声が出ず、首を縦に振った。彼女は真っ直ぐカイナを見て、力強く頷いた。

「では私はあなたの怪我を誰にも言いません」

『安心しろ。どんなことがあっても私はお前を嫌ったりしない』

「え？」

意外な言葉に間抜けな声が漏れた。横でユーフェミア殿下はが立ち上がる。カイナはただ茫然とその様子を見ていた。全然違う言葉と声が頭の中で響く。似ていないはずの2人の姿が重なった。

「その代り、後でちゃんと自分で手当てをすること。よろしいですか？」

『痛いことがあつたら我慢せずちゃんと私に言え。私が手当てするから、な？』

「っは、いい」

なんだ。さつきからおかしい。変だ。カイナは異変を察知するも、どうすべきか分からず彼女を見上げた。無性に誰かの名を呼びたいのに、その名が出てこない。そのことがとても悲しくて泣きたくなかった。

「いいお返事ですね。じゃあ一緒に皆さんのところに帰りましょう。きつと心配していらっしやいます」

『いい返事だ。……これでよし、と。ほら一緒に帰ろう。2人が心配して待っている』

差しのべられた手を、カイナは無意識に掴んだ。

第二十一話「ナリタ連山・終幕2」（後書き）

ここでユフィ再登場。ロスカラだと自分で選ばない限りユフィの出番ほとんどないもんなあ。

そして記憶の欠片がちらほらと。これからどうなるんでしょうねえ。

今回はほのぼのっとして第二章終りです。第三章書きなおし始めたらどんどんもやもやしてきたよ！ どうしよう！（おい）

2011・03・31修正

第二十二話「二重生活」

カレンを尊敬する。黒の騎士団と学校とを往復するようになって、ライはよくそんなことを思う。

「ラーイー！ 次移動教室だよ」
「ああ分かった」

声を掛けられて立ち上がり、シャーリーの傍に寄った。最近はこの風になんか生徒会の誰かが傍にいることが多い。倒れた日から過保護気味ではあったが、シャーリーは特に心配そうにしている、まめに話しかけるようになった。父親の死が彼女を敏感にしているようだ。君はどこにもいかないよね。

涙目で言われてしまえば、ライに抵抗などできようはずもない。しかも彼女だけでなくリヴアルやミレイにも頻繁に引っ張られ、自然と毎日授業に出るようになって、で、一番初めの感想に戻る。二重生活とやらは中々にストレスが溜まる。特にカレンは学校で『病弱なお嬢様』の仮面を被っているので尚更だろう。時折「病弱なんて設定にしなければ良かった」と呟いているのをライは知っている。とはいえ、勉強自体はそう嫌いじゃない。ライがそう言うとき生徒会メンバーのほとんどが「変わっているわね」と言う。賛成してくれるのは二ーナぐらいだ。物理関係に偏っているみたいではあるが、話がずれた。つまりライは忙しい。授業に、生徒会に、騎士団に、そして私生活に。

「それです、桃太郎は犬さんたちと一緒に……ライさん？ 聞いてますか？」

ナナリーの声で我に返る。ライがごめんと謝ると少女は「もうつ」と可愛らしく頬を膨らませた。今、ナナリーから日本の昔話について聞いていたところだ。前々からの約束である。

なんとか睡眠は取っているものの、最近どうも注意力が散漫なのは本当に気をつけなければいけない。分かっているけど、気がつけば考え込んでしまう。ナリタでの出来事と女性の泣き叫ぶ声、気丈なシャーリーの背中がライの頭から離れてくれないのだ。

「また夜更かしされてるのですか。ちゃんと寝て下さいといつも」

「はは、ごめんよナナリー。つい小説の続きが気になって」

「そうやっていつもごまかすんですから、お兄様もライさんも」

本当に怒っているらしい。ナナリーは珍しく眉を吊り上げてお説教してみたことを言っている。ルルーシュ、か。ルルーシュと言えば、

「今日も多分授業中寝てたな、そういえば」

ルルーシュの教師にばれずに居眠りする技術は卓越している。少し見習ってみようか。ライは本気で考えたことがある。シャーリーにどやされそうだと思っただけだ。いや、実際ルルーシュの居眠り技術を褒めたら怒られた。隣にいたりヴァルもどうしてか一緒に怒られて、「お前のせいだとぼつちりだ」と彼にも怒られた。

「で、ナナリーはどの絵本が気に入ったんだっけ？」

「桃太郎です。討伐劇なんですよ」

メイドの咲世子から聞いたと言う日本の昔話は、最近ナナリーが熱中しているものの1つだ。彼女は真摯に日本のことを知ろうとしている。

日本人を軽視したり差別する傾向があるブリタニア人が多い中、

ナナリーは日本人に敬意と親しみを持つているように見えた。もしもブリタニア人全員がナナリーのような考えを持っていたら、世の中は平和だったろうに。ふとライは思った。

「ももたろう、か。ああ、これかな」

テーブルに置かれた絵本の中から、ライは桃の絵が描かれたものを手にする。ナナリーに了承を取ってから中を見させてもらう。何々、川で洗濯していると大きな桃が。

「ナナリーっ桃から赤ん坊が出てきた」

「桃太郎ですから」

驚きの声は、ナナリーの笑い声でかき消えた。桃から人が生まれる、などライにとって驚愕だった。なるほど。確かに日本の昔話は変わっていて興味深い。その時柔らかな女性の声があった。見るとメイドの女性がにこやかに頭を下げている。アッシュフォード家のメイド、咲世子だ。ナナリーが日本に興味があるのは、日本人であるこのメイドの影響が皆無とはいえないだろう。

「ナナリー様、ライ様。お茶が入りました」

「咲世子さんありがとうございます」

「ありがとうございます、咲世子さん」

「いいえ」

その後ライはナナリー、咲世子と一緒にお茶を飲み、絵本を読みながら時間をつぶした。久しぶりにゆっくりできたライの身体から、緊張が抜けていく。ナナリーと過ごす、ささくれ立った気持ちが不思議なくらい落ち着く。なのでライは何かあるとついつい彼女の下に足を運んでしまい、関係を誤解したルルーシュに睨まれたこと

もあつた。ライが思わず” ナナリーと将来結婚する顔も分からぬ相手”に同情したのは記憶に新しい。

とりあえずこれならあの任務もこなせそうだ。ゼロから聞かされた作戦を思い出す。かなり危険で、重要な任務をゼロから与えられていた。

第二十二話「二重生活」(後書き)

これにて第二章完です。あの任務ってすぐ実行だったのかなとも思ってたんですが間に入れてみました。ナナリーなごみます。

ってか会長とリヴァルが空気になってる。好きなのにな二人とも中々生徒会全員を出すのは難しいですねえ。

今回は黒の騎士団サイドでお届けします。キョウト潜入編。

2011・03・31修正

第二十三話「王の力 その名はギアス」

今回ライに与えられた任務は、キョウト側の警備室と警備員の詰め所を制圧することであった。失敗すれば今頃会談している扇たち幹部の命はない。もちろんライ自身も危ない。危険でとても重要な役割だった。

ゼロは今頃別ルートから潜入しているはずだ。すべてはゼロの素顔を見せることなくキョウトを認めさせるため。もしかしたらキョウト側には見せるのかもしれないが、そこまでライは聞いていない。

「しかしこれほどとは、な」

彼は素直に驚嘆する。ゼロから教えられていた建物の構造は、実物と全く変わらないものだった。更にはここまで警備システムが一切発動していない。ゼロが任務を説明する際、警備室までの警備を解かせてあると言っていたものの、実際何の問題もなくここまで来れるとは思っていなかった。キョウト内部にまでかなりの仲間がいるらしい。改めてゼロのすごさを知る。

「だがここから先は気合を入れないと」

目の前の警備室をにらみ、1度深呼吸をした。ライがゼロから聞いた順番にキーを押すとロックが外れる。警備室の扉を少し開け、ゼロから渡された神経ガスのカプセルを放り込んだ。

慎重に20数えて中に入り、警備システムのカメラをオフにする。そしてすぐさま倒れている警備員の服を脱がせてまとい、ライは詰所へ向かった。

教えられた情報が確かなら一本道だ。誰にも鉢合わせなければい

いが。

心配が現実となった。前方から4つの足音。周りを見回しても隠れる場所はない。警備室に戻ることも考えたが、時間のことを考えるとそんな余裕もない。冷や汗がライの頬を流れた。

「ん？ お前はどこの所属だ。1人で何をしている」

4つの銃口が向けられたが警備員の服を来たライを見て、彼らは怪訝な表情で銃口を逸らした。この様子からどうやら複数巡回が基本のようだった。平静を装って返答をする。

「忘れ物をしてしまいました、詰所に向かおうとしていたところで」

警備員はふむと1度頷いた。ごまかせたか？ ライが様子を見てみると、

「まずは所属と名前を言え。それから警備室に確認をとれ」

リーダーらしき男はライを問いただすと、同時に部下たちに指示を出した。まずい。このままでは警備室の状態に気づかれる。どうする？ ライが考えている間に連絡を取ろうとしていた隊員が声を上げた。

「隊長！ 警備室から応答がありません。何か起きたものと思われ
ます」

「何？ すぐに警報を鳴らせ！ それから我々はこの男を……」
「っ」

くそっこのままではゼロが、カレンが、騎士団が！ とはいえさすがにライ1人で4人を同時に相手するのは、しかも警報を鳴らさ

れる前に倒すのはどう考えても無理だ。

考えている間に銃口が再びライへ向けられた。抵抗すれば容赦なく撃たれるだろう。動きを止めたライに、警備隊のリーダーが近付いてきた。そして腕を掴まれて背中へ回される。こんなところで自分は、自分たち黒の騎士団は終わるのか？ 自分のせいだ……ダメだそんなの！

じゃあどうするっ？ どうすればいいんだ！ 焦りと緊張がピークに達したその瞬間、ライは身体を駆け抜けた感覚で我に返った。これは？ しかし、これならいける！ 確信の元、ライは力強く命じた。警報を鳴らそうとしていた男の動きが止まった。

「お前たちは何も見ていない聞いていない。異変などなかった。これをもって元の部屋に戻り、スイッチをいれろ」

ライが警備員のリーダーにカプセルを渡すと、リーダーは自然にそれを受けとった。誰も騒がず、まるで人形のように立ち尽くしていた。警報は鳴っていない。

「ああ、何も異常はなかった。俺たちは詰所に戻りスイッチを入れるぞ」

男たちが機械的に背を向けて戻っていくのをライはじっと見ていた。見えなくなったところで冷や汗が一気に背中を流れ落ちた。空気が肺へ送られ、ライは片膝をついて乱れた呼吸を整える。今の感覚は、力は、

「そう、か。これが、ギアス、か」

すごい力だ。すごい力なのだが、どうしてだろう。ライはこの力を怖いと思った。

ライがその場所に辿り着いた時にはすでにことは終わっていた。ゼロとキョウトの重鎮、桐原との会談は上手く行った。ゼロは桐原にだけ素顔をさらしたようだ。そして桐原が「この者は偽りなきブリタニアの敵。安心してこの者についていけ」と語ったことにより、騎士団幹部は素顔を見ずとも納得し、ゼロをリーダーと改めて認めた。さらにこれでキョウトからの支援も得られる。作戦は大成功と言えるだろう。

しかし日本人ではないと自ら語ったゼロが桐原と知り合いであり、なおかつブリタニアを憎んでいる、とは。多少気にかかることも増えたが、ライにはもっと気にすべきことがあった。

「ギアス」

全身を駆け抜けたあの感覚がギアスなのだろう。強大な力だ。ギアスがあれば不可能を可能にすることも容易である。だがライはギアスをあまり使おうとは思わなかった。己自身でも理由は分からない。失った記憶が関係しているのか。ただただ嫌な感じがする。

無数の剣と槍。

「いつ」

一瞬何かの映像が浮かんで頭が痛くなったが、痛みはすぐに去った。映像もライがはつきり自覚する前に消えた。

「ギアス」

もう一度呟き、ライは横になって青い空を見上げた。今度は何も

浮かばなかった。視界には木の緑と青色が広がっている。

何かあるといつもこうして空を見上げる癖がついてしまった。ああ。授業に行かないと。思うのにも身体が動かない。流れる雲を見ているとまあいいかと思いつめた。出席日数が足りないというルーシユヤスザク辺りはよく騒いでいるが、ライは正式な生徒じゃないので気にならない。

草を踏む音がした。

「あ、やっぱりここにいた！ 教室にいないから探したよー」

次いで聞こえた声に閉じようとしていた目を開ける。長い髪を揺らした少女が、芝生を踏みしめながら近づいてくる。少し怒っているようだった。とりあえずライは片手を上げてあいさつする。

「シャーリー、おはよう」

「おはよう、じゃなーい！ もう、ルルもライも放っておくとすぐさぼろうとするんだから」

ほら行くよ。ライは彼女に手を引っ張られて起き上がった。気は向かないが、こうなってしまうと行くしかない。そういえば最初にシャーリーに見つかったのもここだった。避難場所を変えなければいけないようだ。

「1時間目は体育だよ。着替えなきゃいけないんだから早く早く」
「わかった」

ギアス。なるべくなら使いたくない。ライは思いながらも笑顔のシャーリーを見て、皆を守るためになら。とも思った。

第二十三話「王の力　その名はギアス」(後書き)

ギアスを使う場面。もっと緊迫感を出したいのになあ。

掲載時間かかると言っておきながら、昨日の修正作業が上手く行ったので載せてみる。まあ、最も気にかかったのは別のシーンなので、ね。

2011・03・31修正

第二十四話「覚悟を問われる時が来た」

最近夢を見る。黒髪の女の子と女性、それから銀髪の少年。3人がこちらを見て何か言っている。必死に聞き取るうとして、それが自分の名前だと気付いた。

「カイナ！」

間近での大声に驚いてカイナは1歩下がった。目の前にスザクの顔があった。翡翠の瞳には心配そうな光が宿っていて、どうやらまたやってしまったのかと苦笑い。ナリタでの初陣以降こんなことが度々あるのだ。

「悪い、聞いてなかった」

「本当に大丈夫かい？ 最近前より眠そうだし、ちゃんと夜は寝ているの？ それとも何か問題が」

「大丈夫だ。何も問題ないし、睡眠はとってる」

やたらと心配してくるスザクをなんとか宥める。実際寝てはいた。ただ、最近見る夢が楽しくて、温かくて、優しくて。カイナは目が覚めてしまつとどうにも寂しく感じて仕方がなく、夢を求めてしまふ。

「やっぱり無理せず別の日に」

「いいって別に」

今日は珍しく2人揃って非番だ。機体をあれこれいじりまわすのだと、ロイドが不気味に笑っていたのを思い出す。機体がなければ

デヴァイサーであるスザクとカイナは暇だ。いや、カイナの場合は特派の雑用もしていたりするが、セシルから休むようにと放り出された。

そしてスザクに誘われて街へと駆り出した。どうもカイナに会いたい人がいるらしく、その仲介を頼まれたのだとか。一体誰だろう。考えても、あまり人付き合いをしないカイナに思いつく人はいなかった。大体彼女は人の名前と顔を覚えるのが大の苦手だ。

「あ、スザク、カイナさん！」

「ん？」

「すみません、遅くなりました」

待ち合わせの駅前に行くと少女が大きく手を振った。スザクが返事をしている。自分の名前まで呼ばれたカイナは少女をじっと見た。白い大きめの帽子をかぶって髪の毛を隠し、サングラスまでかけている。どこかで見たような。見ていないような。しかし声には聞き覚えがある。

「分かりませんか？」

首をかしげて考えているカイナを2人が見た。カイナはじっと少女を見つめる。そして鼻を鳴らし、得心する。

「ああこの匂い……ユーフェミア殿下ですか」

「に、匂いですか」

「はあ。カイナ、君はなんでそう」

驚いている2人をぼんやり見つめる。この組み合わせをどこかで見た覚えがあった。どこだっただろうか。カイナは考えて。いつぞやの、ゲッターで出会った少女を思い出した。そういえばあの時の

少女もこんな匂いだった気がする。あまり興味がなかったので記憶はあやふやだが、2人の仲を見る限り間違っではないなさそうだ。

カイナは大きく首を縦に振る。

「なるほど。身分を越えた愛ってやつですか」

「違います!」

「や、やっぱりまだ勘違いしてたんだね」

精一杯否定するユーフェミアと疲れた顔のスザクをカイナは眺め、しかし自分が呼ばれた理由に察しがつかない。

「ご用件は？」

正直さつさと帰りたかった。どうにもカイナはこの少女が苦手だ。ことあるごとに誰かの姿が重なる。記憶を取り戻すチャンスだとは思っても、苦しさが身体を支配してどうしようもなくなる。いや、苦しさ、というよりもそれは、そう。罪悪感、のような。

「お聞きしたいことがあったのです」

「聞きたいこと、ですか」

ユーフェミアは真剣なまなざしをしていた。彼女の視線を受けてカイナも自然と背筋が伸びた。背筋を伸ばし、堂々とその場に在る姿は『お飾りの副総督』という言葉とは真逆に思えた。ユーフェミアは口を開く。

「あなたが戦う理由とはなんですか？」

心臓が大きく脈打った。

第二十四話「覚悟を問われる時が来た」(後書き)

今回短めに。カイナがどう答えるのかは次次回にて。

アニメを見る限り、スザクとユフィがそう気軽に出会っていた感じではなさそうなんです。自分なりの解釈です。前回はゲッターで会ってましたけどね。

そしてちよびちよび記憶が出てますね。過去と主人公たちがどう向き合っていくのか。これからの期待せず(?)お楽しみに。

2011・03・31修正

第二十五話「王の力　その名はギアス2」

自室に戻ると、部屋中にチーズの匂いが充満していた。ライは長く息を吐き出す。考えずとも原因は簡単だった。

「C・C（シーツ）」
「遅かったな」

我が物顔でライのベッドに横になり、ピザを食べているC・Cがいた。この少女、驚くべきことにほぼ毎日ピザを食べているようだ。そして普段はルルーシュの部屋で食べるのを、追い出された時にこうしてライの部屋へやってきて食べる。おかげでライはあまり好きでなかったピザを更に嫌いになった。チーズの匂いに酔いそうだ。

「文句なら追い出したルルーシュに言え」
「今度は何で喧嘩したんだ」
「あいつがチーズ君を捨てようとしたんだ」
「そっ……そうか」

もう好きにしてくれ。ライは何も言わないことにした。

ちなみにチーズ君の黄色いぬいぐるみは、ライの部屋にも強制的に置かれている。以前遊びに来たミレイとリヴァルにそんな趣味があるのかと言われ、数日間これでもかとからかい倒されたことがあり、ライもルルーシュの気持ちがよく分かった。苛立っている時にあの気の抜ける顔を見ると殴りたくなる。捨てないのは諦めただけだ。

未だにルルーシュとC・Cの関係がどういうものなのか、ライは知らない。ルルーシュがC・Cのことを隠していることや、C・

Cがライと会っていることを誰にも言うな、と厳命しているので聞くに聞けず今に至る。恋人というわけではなさそうだが。まあ誰にでも秘密はある。自分にもギアスという秘密があるように。

「しかし本当に君はピザが好きだな」

「当たり前だ。簡単そうに見えて、これほど奥が深い食べ物はない。それに、熱で溶けたチーズでつながり、奥深く味わいを変えるとところが、世界の縮図のようで面白いのだ」

「どうやらC・Cの中では世界がピザらしい。力説するC・Cに頭が痛くなりそうだ。いや実際頭が痛い。」

「世界、か。随分と大げさだな」

「大げさなのではない。お前が見落としているだけで世界の縮図はあちこちにある」

真面目な顔をして力説している少女の手にはピザが一切れ。C・Cは世界を頬張り、大いに満足そうである。世界を食う魔女。比喩表現ではあるがなんとも恐ろしい。

「まあ好きにしてくれ」

「そうさせてもらおう」

C・Cについてそれ以上考えるのを止めたライは、汗を流すためシャワーを浴びに行った。彼女と会話して余計に疲れた。

「ああ、言い忘れていたのだが」
「どうわっ」

ライがシャワーを頭から浴びているとC・Cの声がシャワールームに響いた。くっくと笑う声がする。

「お前のそんな声は初めて聞いたな」

カーテンの向こうにいるC・Cを睨む。向こうから見えるわけもないが、かといって顔を出すのも癪だった。今は忘れる。などと言ったところだからかわれるのもまた、目に見えていた。

「なんの話だ」

「決まっているだろう。ギアスについてだ」

すぐライが持ち直して訊ねると「つまらん男だ」と呟いてからCが言った。ギアス。その言葉にライの身体の動きが止まる。また嫌な感情が沸き上がってくる。嫌悪というよりも恐怖の方がより近い。

「後で聞いていないと駄々をこねられても困るからな」

動揺を押し隠す。

「だから、なんだ」

「お前のギアスは1人に対し1度しか効かん」

一瞬ライの呼吸が止まる。

「本当か」

「今まで何人ものギアス使いを見てきた。まず間違いない」
「そう、か」

彼女の言葉に頷いて目を閉じた。1度しか効かないと教えられてライはむしろ安堵していた。本当にC・Cの用事はそれだけだったのだろう。シャワールームのドアが開く音がした。

「それだけだ。ではな」
「ああ」

ギアスのことで悩んでいた心が、少し軽くなった。制約が唯一の救いだった。

第二十五話「王の力　その名はギアス2」（後書き）

今回のツツコミどころはチーズ君を殴りたくなるライ君です。ちよ、綺麗な顔してあんた！　と、思っていただけたら幸い。私とこのライ君は意外と過激。

もしも自分がギアスなどという力を手に入れたらどうなるだろう。単純に喜ぶかな？　怖がるかな？　皆さんはどうでしょう？　ライ君が力を怖がった理由をただたんに設定ではなく、考えていただけたら嬉しいです。

2011・03・31修正

第二十六話「分からないことばかりで」

「戦う理由、か」

ユーフェミアに問われたカイナは、初めて理由を考えてみた。カイナが戦っているのは、別にブリタニアへ忠誠を誓ったわけでもない。ブリタニアという国に愛着があるわけでもない。スザクのように目的があるわけでもない。自分の身を守るためですらない。ロイドに拾われ、能力を買われたから。他にすることがないから。それだけだった。

気が付けば一人で街を歩いていた。あの後2人に何を言っ、何を言われたのか、どこをどう歩いたのかもよく覚えていない。周りを見回したところで建物や車、街路樹があるなとぼんやり思うだけで、人間に至っては皆のつぺらぼうに見えた。誰もカイナのことを気にかけずそれぞれの道を歩いていた。まるで世界に置いてけぼりにされたようだ。

戦う理由は何だ。理由、理由は、理由が必要なのか？ それは考えなければいけないことか？ そもそも、

「そもそも俺は何がしたい……？」

己に問いかけて愕然とする。やりたいことが思いつかなかった。記憶は取り戻さなければいけないとは思っている。しかし”やりたいこと”とは違う。ふとカイナは胸に触れてみた。心臓が動いている。なのにどうしてだろうか。自分の中には何も無い気がして仕方なかった。

助けを求めるようにカイナは空を見上げた。どれだけの間自分は歩き続けていたのか。求めていた青はすでに赤へと変わっていた。

歩き続けた身体はひどく重い。息がしづらく苦しかった。

「帰るか」

頼りない足取りでカイナは歩き始めた。座り込んでしまえばもう立てないと思った。

カイナの借りているアパートは、安さを追及して選んだ二階建のぼろぼろな建物だ。

軍からもらっている給料ならばもつといい場所に住めるのだろうが、カイナの場合は給料の大部分が食費に消えていくため、自力で生活するのはここが限界だった。元から雨と風がしのげれば上々だと考えている彼女からすると、風呂もトイレもついているとあれば十分過ぎて不満はない。

何よりもゲッターにほど近い場所に在り、荒んだ空気が強張っている身も心もほぐしてくれるのが気にいっていた。治安が悪いのでセシルからは心配されているが、部屋を変えるつもりは微塵もない。

「少し遠いのが不便だがな」

ようやく建物が見えた頃にはすっかり日は落ちていた。足を引きずるように歩き、階段をゆっくりと登る。エレベーターはない。いつもは階段で十分だと思っていたのに、今日だけはエレベーターが欲しいと、カイナは心底思った。何度も段差につまずく。

「あ」

階段をなんとか制覇し、部屋へ向かうと声がした。俯いた顔をゆっくり上げれば、誰かのつま先が見える。そこに立っていたのは、

「スザク？ どうしてここに」

「どうしてって。君の様子が変わったから気になって。部屋に来てみたらまだ帰っていないし……カイナこそ、今まで一体どこに行っていたんだい？」

スザクの心配しているような、怒っているような顔を見て、カインはとても安堵した。

「カイン君、今日も張りきってデータ取ろうか。今日はねえ、面白いもの用意してあるんだ。何時間でも乗って行ってね」

「もうロイドさん！ ごめんなさいね、カインさん。疲れたら疲れたって言うてくれていいのよ」

「そうだよカイン。君はすぐに無茶をするから」

「……心外だな。特にスザク、お前にだけは言われたくない」

「ええっ？ そんなことないよ」

「そうね。スザク君も無茶するところがあるから。ちゃんと行ってね、2人とも」

「そんなことどうでもいいから早くやろうよ！」

「ちよつとロイドさん！」

「んん？ 僕何か変なこと言った？」

「教えて差し上げましょうか」

「イエ、遠慮しときます」

特派での思い出がカインの頭の中を駆け巡る。あった。自分の中にもあった。彼らとのつながりが、あった。そのことに気づけばカインの中が、心が飢えたように、渴いたように、痛いように疼いて

たまらなくなつた。

無言のままスザクに歩み寄つて、すがりつくように抱きついた。飢えを満たすために。渴きを潤すために。傷をいやすために。そうするのが一番の方法だと心が知っていた。

「えっえ、えええええっちょ、カイナっ？」

スザクはとても慌てている。身体を引きはがそうと肩に手が置かれたので、離されてなるものかとカイナは手に力を込めた。離されてしまったら自分は、きつと壊れてしまう。

「……………ス、ザク」

「カ、カイナ？ どうしたんだい？」

困惑しているスザクの声にカイナは応えず、抱きつく、というよりも身体を預けて彼の体温を感じていた。温かい。当たり前だ。彼は生きているのだから。

そこで初めてある可能性にカイナは気が付いた。スザクが、特派の皆がいなくなる可能性に。暗闇の中、自分だけが取り残される可能性を、初めて考える。自分を飢え、渴き、痛みから救ってくれる人がいなくなる。当たり前のように存在する彼らが、いなくなる。また独りになる。

「いやだ。おいてかないで。独りはいやだもうやだきらわないでください。どうかおいていかないでくださいぬしさま」

嫌だ。嫌だ。嫌だ。スザクの服を必死に掴んで、カイナは頭を横に振った。いつのまにか涙がこぼれていたが、気にしなかった。何を口走っているのかも分かっていない。ただカイナは嫌だったのだ。濁流のように恐怖と不安が押し寄せてくる。

「大丈夫だよ。僕は君を置いて行かないし、嫌いにならないよ。ロイドさんもセシルさんも、特派の皆も」

背中に腕を回して抱きしめ返してきたスザクが優しい声で言う。ただ嘘だとカイナは思った。だってスザクはいつだって危険に身を晒すじゃないか。死にたがっているじゃないか。死んで、自分を置いて行くのだ。他の皆だって軍にいるのだから戦争に巻き込まれる可能性は高い。

カイナは考える。考え続ける。どうすればいいのだ。どうすれば皆ずつといてくれるだろうか。疑問が沸くだけでカイナには答えなど欠片も見つけられなかった。

彼らがいないと、もう自分は生きていけないのに。

第二十六話「分からないことばかりで」（後書き）

難産作品の一つ。全てはたった一つの言葉から。今まで何も考えず戦っていたカイナの答えと一緒に探っていけたらと思います。お楽しみに。

さて、いつも拝読ありがとうございます。ストックはまだあるので連日更新できるかと思えます。推敲はきちんとしているつもりですが、誤字脱字等気になることがあります。お気軽にご指摘ください。漢字が難しくて読みづらい、レイアウトが見にくいでも構いませんので。

2011・03・31修正

第二十七話「魂の叫び」

「ゼロ、ライだが入ってもいいか？」

「ああ構わない」

声をかけて部屋のドアを開けると、中にはゼロだけでなくC・C（シーツ）もいた。何か話し合っていたようだ。C・Cが声をかけてくる。

「どうしたライ。何か用なのか」

「扇さんが書類の裁可が欲しいと」

「お前は意外とまめだな」

「どうやらそっという性分のようだ」

ライは手に持った書類をゼロに渡す。横でC・Cが呆れているが、書類が溜まっていると気になってしまっただから仕方がない。その書類をまとめたり、自分でも処理できそうなものは手伝ったりしていると、いつのまにか書類仕事が苦手な団員から押し付けられるようになってしまった。生徒会でもこき使われ、こっちでも、か。ライは自分を顧みて空しくなった。損な性格だ。

「たしかに受け取ったが、どうして扇が直接来ない？」

受け取った書類を見ながらゼロが言った。ライも少し首をかしげた。

「僕にもよく分からないのでそのまま伝えよう……』邪魔すると悪いから』……意味がわかるか？」

「ああ。ゲスの勘ぐりというやつだ。気にするな」
「なるほどそう言う意味か。分かった」

顔をしかめたＣ。この言葉にライは納得した。Ｃ・Ｃがゼロの愛人という噂は幹部の間でも広がっている。ライは２人がそんな間柄でないことを理解しているので、なんとも思わないが。

用事は書類のことだけだったので部屋を出ようとしたライを、ゼロが呼びとめた。

「お前から見て、黒の騎士団はどう見える？」

一瞬考えたライだが、素直な意見を述べることにした。ゼロが求めている言葉はお世辞ではなく、本心だろうと思ったからだ。

「まだまだ、だな。組織というよりただの寄り合い所帯だ」

「奇遇だな。私もそう思っていた」

苦笑する。

「奇遇ではないだろう。今まで黒の騎士団を率いてきた君が気づいていないはずがない。むしろ気づかないのなら、僕は君についていこうと思わなかったと思う」

「ほほお。では私には君のお眼鏡にかなったということか」

「僕だけじゃない、きっと他の皆もそうだ。君だからついて行くんだ。……あ、でもごめん。気に障ったなら謝るよ」

「っい、いや」

少し上から目線だったかな。ライが謝るとゼロは少し黙り込んだ。彼の隣にいるＣ・Ｃがにやにやしているのが気になった。

「私は君の期待に応え、黒の騎士団を戦う集団に変えて見せよう。つまらないことを聞いたな。さがっていいぞ」

一礼してライは部屋を去った。

「……言いたいことがあるなら言え、C・C」

隣で厭味つたらしい笑みを浮かべている魔女をゼロは睨んだ。睨んだぐらいで動じる相手でないのは承知している。第一今、自分は仮面をつけた状態だ。だが、意味はなくとも少し気は晴れる。

「よかったな、ゼロ。ライは『お前だからついていく』んだそうだ。片思いじゃなかったぞ」

「んぐつ」

仮面を外そうとした状態のまま、彼は固まる。自分が今、どのような表情をしているのか、悟ってしまったからだ。魔女が笑う。苛立つがこいつにギアスは効かない、か。ゼロは舌打ちして、仮面をつけたまま机に座り、渡された書類に目を通した。……文字の内容が頭に入ってこない。ええい、落ち着け俺。動揺しすぎだ。

「くつくつく」

「黙れ、この魔女が」

きつとゼロはしばらくC・Cにからかわれるに違いなかった。原因を作った本人は何も意識などしていないのだろうか。

『君だからついて行くんだ』

今まで見たことのない穏やかな表情で笑ったライは、自分がどれだけその言葉を待ち望んでいたかなど、知るはずもないのだ。

「頼むカレン。1度でいいんだ」

ライが中庭を歩いていると聞き慣れた声が出た。ルルーシユの声だ。気になって近づいてみる。すぐにルルーシユとカレンの姿が見えた。真剣な表情で話し合っている。いや、カレンは困っているようだ。

「そんなこと言われても……1度とか簡単に言わないで。だって身体のことなのよ。そう簡単に頷けないわ」

「んん？ 身体？」

雲行きが怪しい会話に、思わずライは声を出していた。ルルーシユとカレンの肩が大げさなぐらいに飛び上がり、勢いよく2人は振り返った。その反応は、聞かれてはならないものを聞かれてしまった、と雄弁に語っている。

「悪い、邪魔したみたいだな」

「ちちちがうのよ、ライ！ これは」

「ど、どこから聞いていたんだ？」

「ごまかそうとしているが、2人とも声が裏返っており、余計に怪しかった。なのでライはすぐさま立ち去ろうとした。」

「ルルーシュが1度でいいから……って頼んだところからだ。2人がそういう仲だとは知らなかったとはいえ、邪魔してすまなかったじゃあ」

「だから違うのよ！ 聞いてライ！」

カレンが両手を、いや全身をフルに使い、全力で否定した。以前のライなら「こんなに動いて大丈夫か」とカレンを心配したと思われるぐらい、精一杯否定した。隣にいるルルーシュがそんなカレンを見て、なんとも微妙な表情をしている。2人の間柄が本当はどうであれ、たしかにここまで否定されればそんな顔もしたくなるだろう。ライはちよびつとだけルルーシュを同情した。

「あのね、ルルーシュが偽の診断書を書いて欲しいから、私の主治医を紹介してくれって言うのよ。それじゃまるで私が偽の診断書で皆を欺いているみたいじゃない。ね、ライもひどいと思わない？」

カレンがついているのは真つ赤な嘘である。彼女は病弱でもないし大人しいご令嬢でもない。だがライは口裏を合わせ、顔をしかめた。

「ルルーシュ、それが本当なら確かにひどいぞ」

「あ、いや俺はそんなことを言っただけじゃない。勘違いさせたなら謝る。すまない、カレン。俺はただカレンの主治医なら信頼できると思っただけなんだ」

ライの言葉にルルーシュはなぜか一瞬「裏切られた」という顔をした後、素直に頭を下げた。珍しく素直なルルーシュにカレンは戸

惑い気味ながらも「ええ、もう怒ってないわ」と返す。一先ず落ち着いたところで再度疑問が浮かんでくる。

「ところで診断書を偽造？　ってどういうことだ」

「そうじゃない。俺の身体に問題があることは診察して貰えば分かる。俺は学園に信頼のある医師に診てもらい、診断書が欲しいと思っただ。その点カレンの担当医ならと思っただが、紹介してもらえないようだ」

身体に問題……。ライはルルーシュを観察する。無言で見ているとルルーシュがなんだと怪訝そうに聞いてくる。

「たしかに少々、いやかなり細身な気はするが、ルルーシュはそんなに弱いのか？」

「ほ、ほそっかよわっか、か」

真剣に聞き返すライにルルーシュが変な声を出した。珍しい。ポーカーフェイスな彼が肩を落としてこれでもかと意気消沈している。どうやら変なことを言ってしまったようだ。助けを求めてライがカレンに目をやると、彼女は目線を外して口元を手で押さえ、肩を震わせている。笑うのをこらえている仕草だ。何が面白いのだろう。

「よく分からないが、すまない。ルルーシュ」

「……いや」

ルルーシュはカレンを鋭い目で睨んでいたが、彼女は目線を逸らし続けていたので気づかなかった。

「どうして診断書が必要なんだ？」

気を改めて問いかける。ルルーシュの紫色の目が気まずげに、逸らされた。

「出席日数が、足りないんだ」

「それで病欠にしたかったのか」

少し呆れてライは言った。

「ルルーシュが健康なことは会長も先生もみんな知っているから、絶対無理よって言ってたところなの」

「ああ、たしかに無理がありそうだな」

「そういえば、ライも出席足りないはずよね。あなたは どうしているの？」

「僕は元々正式な生徒じゃないから。出席日数も成績も関係ない」

カレンは悪戯を思いついた子供みtainな顔で笑った。

「そういえばそうよね。まあルルーシュは頭もいいし、なんとか切り抜けられるわよ。応援してるわ。じゃあ、私は行くわね」

去って行った彼女を見送る。その場にはライと怖い表情をしたルルーシュが残された。この顔をルルーシュファンに見せたら一発で熱が冷めそうだとライは思った。

だがルルーシュにかけられる言葉はライにも1つしかない。

「あー……がんばれ」

ルルーシュからの返事はない。考え込み始めた彼を1人残し、ライはその場を去った。触らぬ神のなんとやら。後ろからルルーシュの、

「あ、あの女っ！」

魂の込められた叫びがした。

第二十七話「魂の叫び」（後書き）

今回のお気に入りにポイントは書類の文字が頭に入らないゼロ君。ライって結構天然タラシだと思っのでそっうのをちよっとしてみたかったんです。出来はどうあれ、満足！

三人のやり取りも好きですね。ファン心を掴んでいると思うなあ、あのセリフ。

ほのぼのの次はまた暗め。うだうだしてます。

2011・03・31修正

第二十八話「分からないことが多すぎて」

「この脆弱者めっ！」

どうやら自分は怒られているらしい。目の前で眉を吊り上げているコーネリア総督を見ながら、カイナは呑気に思った。ブリタニア政庁に届けモノをしにきただけのだが、そこをコーネリアに見つかり、何をしに来たのかという問いに「おつかいにきました」と言ったらこうなった。とりあえず謝る。

「はあ、すみません」

「だから『はあ』とはなんだ。大の男が、ナイトメアを駆る者がそんなことでどうする！ この脆弱者め！ 騎士ならもっとビシッとせんか」

男でもないし騎士でもないんですが。

更に怒られて内心屁理屈をこねながらコーネリアを眺める。また「はあ」と返事をしそうになったのは内緒だ。慌てて別のことを話す。

「ところで、『ゼイジャクモノ』とはどういう意味でしょうか。良い意味でないのはわかるのですが」

「何？ そんなことも知らんのか」

またコーネリアの眉がつり上がる。どこまでつり上がるのか実験……はさすがのカイナも躊躇するが気にはなった。直角まで行くんじゃないだろうか、あの眉。

「脆弱者というのは、信念も理想もなくただその場しのぎに生きている連中のことだ。」生きているようで本当は死んでいる”。己を支えるものがないから、脆く簡単に朽ちて消える。そういう連中のことを言う。お前も戦場で死にたくなければ精進することだな」

言いたいことを言い終えたのか、コーネリアは去っていく。彼女の後ろ姿を黙って見ていたカイナは首をひねった。つまり、自分は励まされたの、だろうか？ もっとがんばれよ、と。だとしたらなんと分かりづらい激励だろうか。今度ギルバート（コーネリアの選任騎士で、親衛隊長）にこのことを尋ねてみようと思った。

おつかい…… ああいや、書類を提出し終わってカイナが特派に戻ると、怖い顔をしたスザクとロイドが話し合っていた。ロイドはいつもと変わらぬ表情だが、スザクの空気が異様に張り詰めている。

「スザク君。まさか正義なんてものを当てにしているわけじゃないよね？」

「そうじゃないんです。でもこの前のナリタでだって関係のない人をたくさん巻き込んで……」

スザクの言葉にカイナが眉を動かした。2人がそこでこちらに気づき、軽く手を振ればちょうどよかったとスザクが声をかけてくる。

「前から君に聞きたかったんだ。黒の騎士団のやり方をどう思うか」「黒の騎士団、ね」

「彼らはブリタニアから日本を取り戻そうとしているけど、あんな

やり方ではだめなんだ」

答える前に、いつもとなんら変わらない口調でロイドが口を挟む。スザクの視線が再びロイドに向かった。カイナは椅子に座り背もたれに体を預け、そして思う。スザクはどうしてあそこまで”赤の他人のため”に必死になれるのか。よく分からない。……そういえば最近”分からない”という言葉を思い浮かべている頻度が高い。こんなにも世の中は分からない事だらけだったのかと、カイナは新鮮に思った。

「どうしてダメなんだい？」

「ルールを破って、ただ自分たちのやりたいようにやっているだけだからですよ。あんなもの、誰も認めない」

「で、そのルールは誰が決めたの？」

「そっそれは」

ロイドの短い言葉に、スザクは反論できず詰まった。スザクの言うルールとは、ブリタニアが作ったルールにすぎない。ブリタニアは日本に押し入って、日本のルールを破り、力づくで自分たちのルールを押し付けている。

「そうかもしれません、しかし」

「はいはい、この話はここで終り。僕と正義について語りたいわけじゃないでしょ。あとは彼女にお願いするよ、ね」

「えっあ、もう。ロイドさん」

珍しくまともなことを言っていると思ったら、ロイドはセシルにすべて押し付け近くの研究者と話し始めた。難しい理論についての話のようで、カイナにはさっぱり理解できない。セシルはしばし戸惑った後、スザクに向き直る。暇だったので2人の会話に耳を傾け

てみた。

「そうね。さつきスザク君は『あんなもの誰も認めない』って言ったけど、黒の騎士団を支持する人はたくさんいるわ」

「でもそれじゃ意味がないでしょう。一時的に満足するかもしれないけど、その過程で踏みつけられたブリタニアの人たちの気持ちは、行き場を失ってしまう。だから」

「今の日本人の状態がまさにそうじゃないかしら。ブリタニアに一方的に踏みつけられ、行き場をなくした思いが黒の騎士団に向かっているっていう……そこしか行き場がないから」

「だからこそ同じことを繰り返してはいけません。ブリタニアの人たちにも認められた上で、この国を変えていかなきゃいけない」

「でも今のブリタニアは誰が糾弾するのかしら？ 君の考えだとしても正義ではないわよね？」

「確かにブリタニアが正しいとは思わない。だけど糾弾するのではなく、説得して理解を得るべきなんです」

説得、か。カイナはそこで初めて口を挟む。

「じゃあなんでお前は、黒の騎士団を始めとする抵抗組織にそれをしていないんだ？」

「彼らが聞く耳を持たないからだよ。僕だって、できるならそうしたい。同じ日本人なんだから」

自分に向けられていた翡翠の瞳を、カイナはじっと見つめた。真剣で真っ直ぐな目だ。だが、どうしても、スザクの方こそ聞く耳を持っていないように思えた。何か言おうと口を開いたが、言いたいことをまとめている間にセシルが会話を進めたので、結局カイナは口を閉じた。

「じゃあブリタニアは聞く耳を持っていると思う？ …… もたないわよね。カイナさんはどう思うかしら？」

「ん？ まあ持ってない、だろうなあ。ブリタニアには今までこのやり方で成功してきた自負と奢りがあるから」

天井を見上げて答える。こういうことなら分かる。

「カイナさんは黒の騎士団のやり方と、ブリタニアのやり方に違いはあると思う？」

武力で持って日本を抑え込み、服従させたブリタニア。武力を持って反抗し、自分たちを取り戻そうとしている黒の騎士団。どちらも拳を振り上げた。お互い己が正義だと言い張っている。

「根本的なものは変わらない。自分たちの得たいもののために武器を持った。他に方法があるかもしれないのに、お互いその方法しか見えていない。スザクの言い方で表すと『聞く耳』がない」

「……それで結局。君はブリタニアと黒の騎士団のやり方について、どう思っているんだい？」

スザクは答えを急いでくる。焦っているように見えた。彼も自分の意見にほころびを感じ始めているのかもしれない。だが残念なことに、カイナは彼が満足するような答えを持っていない。あるのはただ、

「分からない。だが正直、どうでもいいかな」

「えっ？」

目をつむる。浮かぶのはスザクやセシルを始めとした特派の職員達の姿と、夢に出てくるぼやけた3人の姿。彼らがいるだけでカイ

ナは満足だった。他のことに興味はない。

「どちらの考えも理解できるが、同時に賛同も否定もしない。俺には関係ないから。だからお前は、お前のやりたいようにやればいい。それだけだ」

数度首を横に振り、目を開けた。一番に見えたスザクは悲しそうな辛そうな怒ったような、表現し辛い複雑な顔をしていた。次に見えたセシルは寂しそうな顔をしていた。また疑問がカイナの中で起きる。本当に”彼らがいるだけで”いいのか？ と。だってそうじゃないか。いてくれるだけで自分は。

「あ？」

首をかしげて軽く胸に触れた。特派にいるはずなのに、カイナは飢えて渴いて痛くてしょうがなかった。おかしいな。彼らがいるのに。

「カイナ、君は」

『おはようカイナ』

声に顔を上げるとやっぱり苦しげな顔のスザクがいた。頭の中に笑顔のスザクが同時に浮かぶ。どういうことだろうか。彼の笑顔を思い出せば、飢えがマシになる。良く分からず、カイナは考えた。

「カイナさん」

寂しそうなセシルを見ると渴いた。楽しそうなセシルを思い出すと渴きがマシになる。これは、なんだ。これは。

傍にいてくれるだけじゃダメだということか。笑ってくれていな

いとダメなのだろうか。でもどうやったら笑ってくれる。どうやったら楽しんでくれる。分からない。自分には何も分からない。分からないことが、とても悲しくて苦しい。

考えても考えてもカイナには分からない。分からないことを考えるのはとてもしんどくて、止めたいと思うのに、目の前にある2人の表情が考えることを止めさせてくれない。考えると自分に強要してくるようだった。

「ちっ！ 俺は少し寝る」

それ以上彼らの顔を見ていたくなって、カイナはまた目を閉じた。瞼の裏に、笑っている彼らを必死になって思い浮かべた。

第二十八話「分からないことが多すぎて」（後書き）

これもまた難産作品。ロスカラにあった正義についてのお話。

考えなくてすむのなら考えない方が楽だ。答えの出ない問いは苦痛だ。答えが出ないと苦しい。でもきつと考えずには前に進めない。私も彼女と一緒に考えて行こうと思います。

この章の特派サイドはこんな感じでした。ぐだぐだしてますが、お付き合いいただけると助かります。

2011・03・31修正

第二十九話「一騎討ち」

生徒会の仕事を終えてライが騎士団に來ると、すでに作戦会議は終わっているようだった。詳細までは教えてもらえなかったが、ブリタニア軍が近々大規模な兵力を動かす準備をしているらしい。

「日本解放戦線がらみ、か？」

ナリタでの戦いでコーネリア軍は大打撃を受けたものの、すぐに立て直した。一方、日本解放戦線は戦力を分散させたまま、いまだ戦力を結集出来ていない。叩くなら今が好機だとブリタニアが考えてもおかしくはない。少なくともライならそう考える。

「遅刻だな」

「ずいぶん遅かったな、ライ」

声に驚いて振り返ればゼロと扇がいた。ライは苦笑いを浮かべた。

「何かあったのか？」

「急用というわけではないんだが、最近サボり気味の会員がいて、仕事が滞っているんだ」

「……ほう」

「まさか『黒の騎士団に行くから抜けます』ってわけにもいかないから。それにカレンがいない時に僕もいないことが多いから、いらぬ疑いもかけられそうぞ、ね」

「なるほどな。なんにせよ疑われるのは得策ではないからな」

「今回の作戦については、もう聞いているか？」

答えれば扇は納得したように頷き、ゼロは関係ないと言わんばかりに話を急かした。ライが首を横に振ると、ゼロは大きく頷いた。そして作戦会議で使ったのだろう画面を表示し、説明を始めた。

コーネリアが行おうとしているのは日本解放戦線の中心人物の一人、片瀬少将の捕獲である。片瀬少将はタンカーを改造し、新たな拠点としたが、その情報がコーネリアに漏れたのが事の発端だ。重要な情報を漏らすあり得ない失態を聞いて、ライは眉間にシワを作った。余程焦っていたのか、優秀な部下がいないのか、少将自身の手腕が大したことないのか。

ゼロの話は続く。

ブリタニア軍は、普通であるならば空爆を行うところだろうが、今回は状況が特殊であった。少将のタンカーには流体サクラダイトが積まれてあり、これが誘爆すれば大爆発を起こしてしまう。更にサクラダイトは大変貴重な資源であり、喪失すればコーネリアの失点となる。ゆえに空爆はない、とゼロは断言した。

「どうやらナリタに投入しなかった海兵騎士団を、今回の戦いに投入するようだ。我々が今回優先することは」

「コーネリアの捕獲、か」

ゼロがわざとらしく言葉を切ったので、後を継いで言う。ゼロとこのようにしたやり取りも大分慣れてきた。彼は相変わらずライを試すようなことを言うてくるのだ。

「そうだ。コーネリアが我々の手に落ちれば、ブリタニア軍の動きは止まるからな。解放戦線の吸収はその後でも問題ない」

片瀬少将の失態についてはさておき、ライは基本情報を頭に叩き込む。いよいよナリタでの借りを返す時が来たらしい。

「コーネリアの性格を考えると、本陣の守りを少なくして持てる兵力すべてを注ぎ込むはずだ。片瀬少将の逃げ場は海上しかない。誘爆を避けるためにコーネリアも無理に止めないだろう」

「海兵騎士団をタンカーに取りつかせて主導権を握り、じわじわと削っていく、か」

「その時、コーネリアの本陣と主力との間が離れる。我々が狙うのはそこだ。お前は私やカレンたちと共に高速艇の中で待機しておけ」

命令したゼロはライに何かを投げた。反射的に受け取ると、それは見たことのない形状をしたナイトメアの軌道キーだった。

「新型ナイトメアフレーム『月下』の先行試作機だ。キョウトから回ってきた……ライ、お前が使える」

「しかしっ 新型なら生存率も上がっていえるはずだ。僕ではなく君が乗るべきでは？」

「いや、その機体は紅蓮並くれんに過敏すぎて私や他のパイロットには扱えない。ナリタで見た君の反応速度があれば可能だろう」

さすが試作機と呼ぶべきか。しかし紅蓮並とはキョウトも随分とじゃじゃ馬を回してくれたものだ。

だが、ライはありがたく受け取った。去っていく2人に一礼して、新たな相棒に挨拶をするべく、格納庫に向かった。

探し回らずともその姿はすぐに見えた。見慣れぬ青い機体が赤い紅蓮と並んで立っている。他の機体といえは無頼だけだ。十中八九これが月下なのだろう。近寄り機体を見上げると、月下の頭部が光を反射して一瞬輝いた。

「よろしく、月下」

手でそっと機体を撫でた。まだ乗ったことすらないというのに、

愛馬を手に入れられたような、歓喜の情がライの中に生まれていた。

格納庫に入り情報が断絶されてしばらく。不意に揺れが身体を襲った。無線に意識を集中するがまだのようだ。状況が分からないというのは心身に多大なストレスを与える。ライは体に無駄な力が入るたび、深呼吸を繰り返した。

ゼロは最高のタイミングを計っているのだろう。ライにはよく分かる。だが目の前で、組織こそ違うものの同じ志を持つ者が攻撃されていれば、誰でも焦燥に駆られる。無線で聞こえてくる扇の声は随分と焦っていた。

いや、彼はもしかしたら、それ以上の何かを感じているのかもしれなかった。だが、自分たちは信じるしかない。ゼロを。

「……………出撃！」

ゼロの聲がしたすぐ後のことだった。揺れが、今までとは規模の違う大きな揺れが起きた。船が攻撃され、た？ まさか今の揺れはライが一つの答えに辿り着いた時、ゼロの聲がした。片瀬少将はブリタリア軍を巻き添えに自決した、と。……………このタイミングでっ？

「我々はコーネリアの本陣に突入する。それ以外は構うな！ 結果はすべてに優先する。日本解放戦線の死に報いたければ、我らの覚悟と力を示せ」

片瀬少将の自決は敵兵力の消耗、混乱だけでなく、黒の騎士団内の士気も高めたようだった。無線から怒りの声が聞こえる中、ライ

の心は落ち着いていた。見事な戦術ではあるがあまりにも……いや、考えるのは後だ。

「パイロットが乗り込む前にナイトメアを海に落とせ。紅蓮式は私について来い」

「はいっ」

「ライ、お前はカレンの援護に回れ。親衛隊を近づけるな」

ナイトメアの操縦桿を握る。カレンは親衛隊の1機に襲いかかっていた。既にゼロはコーネリアと対峙しているようだ。やがて障害物に隠れて2人の姿が見えなくなる。

そこまで確認したライは目の前に居るグロースターへ意識を戻した。赤紫のカラーリングを施された機体は、親衛隊の中でも特別な意味を持つ証だった。構えからも分かる。かなりの強敵だ。だからこそゼロは足止めを命令したんだろう。

経験はもとより技量も、おそらくあちらが上だ。普通に考えれば勝てない。なので機体の性能、それと主であるコーネリアの窮地。活かせることができるものをすべて使う。

グロースターに向けてライは通信を開いた。ブリタニアでナイトメアに乗れるのは騎士のみ。衣食住を保障された彼らが大事にするのは、名誉だ。

「名を明かさぬ無礼を許してもらいたい。黒の騎士団の1人として、私があるの相手を務めさせていただく」

コーネリアの親衛隊につくような上級将校であれば、たとえ変則的であろうともこの通信を無視するのはできないはずだ。とはいえ、普通に会話するような余裕は向こうにない。だから、

グロースターが加速する。黄金色に輝く槍を腰だめにした必殺の突撃。敵に声をかけられれば無視はできない。だが今すぐ向かわね

ば主の窮地を救えない。そんな彼に残された選択肢は、声をかけてきたライと戦うしかないのだ。

向こうの突撃に対して……ライは小細工なしに攻撃を仕掛けた。

「ぐうっ」

廻転刃刀と金色の槍がぶつかり、火花が散った。少しでも気を抜いたら持っていかれる。だがパワーでは月下の方が上で、徐々に槍を押し返していく。グロースターは不利を悟ったか。廻転刃刀を受け流し、すぐさま後退した。追撃しようとして、ライは止まる。通信が入ったからだ。

「私はコーネリア・リ・ブリタニア皇女が騎士、ギルバート・G・P・ギルフォードである」

聞こえた声にあまり表情を変えないライも驚きに目を見張った。そして納得する。なるほど、強いはずだ。コーネリアが選んだたった1人の専任騎士。ライが言葉を返す。

「あなたと戦えること、光栄に思います」

不思議と畏怖は感じず、純粹に彼はそう思った。決して余裕があるからじゃない。後は言葉など2人の間に不要だった。動いたのは同時！

「はあああっ」

お互いが射出したスラッシュハーケンが空中でぶつかり、金属音を奏でた。だがそれはお互いフェイント。ライはハンドガンを撃ちながら距離を詰めようとする。対してギルバートは距離を保ったま

まアサルトライフルを撃ってきた。どうやら先ほどの突撃から近接は不利と判断したようだ。

月下右肩に被弾。損傷は軽微。向こうも右腕に当たったはずだが、お互い浅い。やはり接近戦に持ち込まなければ致命打は……エナジーファイラー（燃料）を確認する。まだ大丈夫。周りの状況もざっと見渡す。まだもう少し時間稼ぎが必要そうだった。

飛んできたスラッシュハーケンをかわしながら、ライはハンドガン撃つ。足止めが目的なので現状維持でもいいのだが、ギルバートだと分かった以上、倒すのも親衛隊を混乱させるチャンスであった。できたら倒したいが、そう簡単に倒させてくれる相手でもない。さて、どうするか。

次の行動を考えているとひととき大きな爆音がした。方角は、ゼロが向かった場所。建物でライから直接様子は見えないが、煙が立ち上っている。今のはゼロか。コーネリアか。それとも、

「んっ？」

慎重そうに動いていたギルバートが突如迫ってくる。その突撃に最初の迫力はない。今のでさすがの彼も焦ったか。廻転刃刀を構え、スラッシュハーケンをギルバートの槍に当て、軌道を逸らす。ゼロスターが態勢を崩しかけ、しかしすぐに持ち直す。さすが。ならば！

右足を軸にして月下を反転、槍を避ける。そして無防備な相手の側面にライは左手を伸ばした。甲壱型腕。紅蓮式にも搭載されている輻射波動（ひくしゃ・はつう）の劣化版だが、十分な威力を持つ。エナジー効率（エナジー）は紅蓮式より悪いが、今ここでギルバートを倒して親衛隊を崩せるメリットの方が大きい。

ゼロスターの腕を掴んで輻射波動を使う。敵機の腕が膨らんでいく。そのまま一気に行きたかったが、破壊寸前に放たれたスラッシュハーケンを見て、すぐに月下を下がらせる。ギルバートもゼロ

「スターを下げるものの、動きはかなり悪い。左腕はすでに完全に壊れ、地面に転がっている。大きな槍を右腕だけで構えているが、穂先が揺れていた。立つのもやっとな雰囲気だ。今こそ好機。」

「これで最後っ！」

月下を加速させる。無頼の時には感じなかったG一（圧）で体がつぶされそう。ライが廻転刃刀を振りおろそうとしたその時、白い影が画面に映り、機体が大きく揺れた。左手を咄嗟に付きだすとその影は後ろに飛び退った。あれは。

「くっ白カブトか！」

初めて直接見た白カブトは、ギルバートのグロースターを守るように立ちふさがっている。一体なぜここにいるのか。

「カレン、ゼロは？」

「ライ、それが」

彼女の返事を聞く前に、白カブトが動く。速い。

「なに！　ぐうっそ」

とつさに廻転刃刀で相手の攻撃を受け止める。だが無理な姿勢で受け止めたのでライはそのまま押される。……まずい。輻射波動でエネルギーも大分消費している。こいつを相手にできる余裕はない。それにゼロはどこにいる？

状況は最悪だった。

作戦は失敗した。

ライはカレンの助けで無事だったが、一時はゼロの安否も不明となり、指揮する者がいない騎士団は瓦解しそうになった。だが扇の指示により無事に撤退。ゼロも無傷でなかったものの生還した。

作戦は見事にはまっていた。コーネリアを追い詰めたのだ。あの白カブトさえいなければ作戦は成功していただろう。しかし、作戦前にゼロが言っていた。

『結果は全てに優先する』

つまり、黒の騎士団は負けたのだ。

第二十九話「一騎討ち」（後書き）

ロシアはシステム面ではいろいろ問題ありますが、割り菓子あの戦闘方法は好きだったりします。実際動かしたかった気もするけれど。バトルモードと選択モードに切り替え出来たらサイコーだね！ ゲーム構造なんて知らないから言いたいこと言っちゃうぜ！ ということでギルのご登場。略してギルギルさんです。彼との戦闘はもつと掘り下げたかったものの、ページの都合上カットとなりました。ごめんよ、ギル。しかし、ライの戦闘はゲームと同じ流れになりやすく困る。

なるべく原作知らない方にも分かるように、とは思っていますが、改めて読み直せば原作知らないと分からない出来に……精進しなければ。

2011・03・31修正

第三十話「与え、そして与えられる」

「どうして君は無茶ばかりするんだ！」

空気が震え、耳が痛い。咄嗟に耳を手でふさいだカイナは、般若のごとく怒っているスザクを宥めようと口を開く。

「まあまあそう怒るな」

「カイナが怒らせてるんじゃないか！」

逆効果であった。

周りで迷惑そうにしている職員が「何とかしろ」と目線をカイナに送ってくるも、「俺にどうしろと」が本音だ。困り果てて苦笑する。

ナリタ連山以後、カイナの出勤回数が増えた。理由は知らないが、コーネリア総督からの出勤要請に逆らうわけにもいかない。しかしスザクには待機命令が出ていて彼と別行動も多くなつた。そう。特派に、ではなくカイナ1人に要請が来るのだ。

ロイドは実戦データがとれる！と純粹に大喜びだが、セシルも他の職員たちも心配してくる。この心配とやらが曲者で、先日の小規模戦闘でのデータを見たらしいスザクに、カイナは怒られているのである。今回もそうだが、スザクはカイナの戦闘データを毎回チェックしてくるのだ。どうにも最近過保護すぎて辟易する。噂に聞く日本の小姑とやらはこんな感じなのだろうか。

スザクがこうなつたのは、ユーフェミア殿下と会つたあの日からだった。カイナ自身も振り返ると『なんて弱り切つた姿だ』と呆れるぐらいだ。元々心配症のスザクが更に心配になるのも無理はない、のかもしれない。確かにあの日からずっと考え続けていることもあ

る。気が虚ろになることも多い上に、戦場へ出ることが増えたので疲れも溜まっている……冷静に振り返ってみると心配されて当たり前かもしれない。

それでもなんとかスザクを落ち着かせようと、カイナはこの前の戦いについて説明する。

「無茶じゃない。あれは考えあつての罠であつてだな」

「罠っ？ 君は罠役を買って出たのかい!？」

しまった。墓穴だ。

更につり上がったスザクの肩に、カイナは『ああ、この前の総督の角度を越えたな。新記録だ』と現実逃避をする。そうでもしないとやってられない。今のスザクは、「教えて差し上げましょうか」と笑う時のセシル並に怖い。ロイドの気持ちを少し理解する。理解したくなかったともカイナは思う。

「だから俺は死なないから大丈夫なんだ。俺なんかよりもスザクの方がよっぽど無茶ばかりし」

「話をすり変えない！ 大体なんで死なないって言いきれるんだ」

反論もすぐさま押し返される。完全に迫力負けだった。カイナが「うっ」と詰まって、助けを求めようと誰かを探す。もう周りでは誰もカイナたちのやり取りを気にしていないようで、好きにやってくれと彼らの背中が語っている。カイナの味方は皆無だった。薄情者め。

「あー。ほら、あれだ。俺ってば不死身だから大丈夫！」

「そんな言葉でごまかそうとしないでくれ。僕は真剣に……カイナ、今日こそはちゃんと反省してもら」

「おおっともうお昼じゃないかー。買いに行かなくちゃくいつぱぐ

れるー」

「あ、カイナ！ まだ話は終わ」

わざとらしく大きな声でスザクを遮り、カイナは逃げた。後ろから名前を呼ばれても、聞こえなかったふりを貫き通した。後でたっぷり怒られそうな気もするが、少し間が空けば怒りが収ま……ってくれるといいなあ。

「また逃げられた」

あつという間に消えて行った背中へ手を伸ばし、スザクはため息をついた。すると後ろから女性の笑い声が聞こえた。振りかえらざとも誰だかわかった。

「セシルさん」

「くすくす。ごめんなさいね。あなた達があまりに仲がいいものだから」

笑われ、今さらながらに自分が大声を出していたのを恥ずかしく思った。スザクは誤魔化すように口を開く。手は自然と頭の後ろに触れていた。

「仲がいい、か。そう見えます?」

「ええ、とつても。違うのかしら?」

「……僕は、そのつもりなんです。でもカイナは僕に言ってくれない、頼ってくれないんです。何か、悩んでいるみたいなのに」

自分で言いながらスザクは落ち込んだ。ようやく壁を取り払ってくれたんだと思っていた。自分に頼ってくれたんだと思った。あの日、弱り切った彼女を見た時、戸惑いは大きかったけれど、嬉しさはそれ以上だったのだ。なのに、何も言ってくれない。ぼんやりとすることも多くなった。きっと悩みごとを考え続けているのだ。

しかもそんな状態で危険な戦地へ向かっているのだから、心配で心配で心も身体も休まらない。セシルはそんなスザクに少し苦笑した。

「スザク君……知ってるかしら。カイナさんはあなたと出会って変わったのよ。今みたいに悩み、自分で考えるようになった」
「えっと？ それはどういうことですか」

セシルの言葉の意図をすぐに理解できなかった。悩んで考えるのは”当たり前”のことだ。

「ここに来た当初のカイナさんは、戦いに関しては別だけど、他のことには無関心だったの。こちらが問いかけたら応えるけど、それだけ。どこか遠い場所から世界を眺めているような、そんな表情かおをしていたわ」

「あ！ そ、それは確かにそうだったかも、しれませんが」

思い当たる節があり、目線を下げた。

どんなことがあるかとカイナは冷静だった。言ってみれば関心がないから冷静でいられたのだろう。どうでもいい、が口癖でもあった、この前だって。もしかしたら僕のことでもどうでもいい、そう思っているかもしれない。落ち込んだスザクの肩を軽く叩き、セシルが続ける。彼が顔を上げるとセシルは微笑んでいた。

「ええ。けど今は自分で考えている。何を考えているのかまでは分からないけれど、きっと答えはカイナさん自身が出さなきゃいけない。今の私たちにできるのは信じて見守ること。……もちろん助けを求められたら支えてあげるのも大事よ。」

でも下手に手を差し伸べてしまうと、また何も考えなくなる。自分で歩き出せなくなってしまうわ。大事に思うことと過保護になることは違うの。だから、ね」

「……はい」

彼女の言葉には説得力があった。もどかしく思いながらも、それがカイナのためになるなら。スザクは拳を握り、心を落ち着かすように深呼吸した。でも、やっぱりすぐに心配の一言が頭に浮かんで消えなかった。

「ふふ。あとね、スザク君。あなたも随分変わったのよ、カイナさんに出会ってから」

「え？」

床を見つめていた顔を上げた。セシルはとても優しい顔をしてスザクを見ていた。もしも自分に姉がいたらこんな感じなのだろうか。スザクはふと想像してみた。セシルが姉ならば、じゃあカイナは自分にとってどんな存在なのだろう。

「以前はとても思いつめた表情が多かったけれど、今はとてもいい表情かおをしているわ。あなた達はお互いに影響を与えているのね。きっと、良い意味での」

第三十話「与え、そして与えられる」(後書き)

与えるだけではすり減ってしまう。ただお互いに与えあったらプラスマイナスゼロ……もしかしたらプラスかもしれない。自分にとっては些細なことでも相手には大きなことかもしれない。今回はそんなお話。

次回はアニメの展開に入ります。どこの話かは楽しみに。

2011・03・31修正

第三十一話「変わっていく日常」

ライはいつもの中庭で横になり、空を見上げていた。

「手掛かりはまったくなしか」

失った記憶は今だ戻らない。分かったのは妹がいるかもしれないということ。そして黒髪の誰かが傍にいた。その2つだけ。

けれど最近はこのままでもいいかと、思い始めてもいた。ルルーシユやミレイをはじめとする生徒会のメンバーと過ごす日々は、大変だが楽しい。ナナリーと過ごす時間は穏やかに流れ、心を落ち着かせてくれる。ならばいいのではないか。新たにできた絆と思い出を大事にしていければ、それで構わないのではないか。

そこまで考えて、黒の騎士団はどうかということに思い至る。誘われたとはいえ、参加の意思を決めたのはライ自身だ。のどかな時間を望みながら戦いに身を置いている、その矛盾。黒の騎士団を抜ければ、大事な彼らとの時間ももつと過ごすことができる。

「だけど、僕にはもう」

アツシユフォード学園は、ブリタニアによる日本支配の上で存在する。笑顔で過ごしている彼らの下に、地面を見つめながら生活している人たちがいるのを知った。何もせず、笑顔を浮かべるのはライにできそうにない。生徒会の皆を守りたいと思いつながら、彼らと逆の立場に居る。これは彼らに対する裏切り、なのかもしれない。赤い髪の少女がライの頭に浮かんだ。

カレンはどう思っているのだろうか。彼女は日本を愛してブリタニアを憎んでいる。だけど、生徒会のメンバーのことは好いている

ように見えた。生徒会のことをどう思っているのだろう。黒の騎士団のことをどう思っているのだろう。

「……黒の騎士団か」

「え？」

呟いた声に返答があった。気を抜きすぎていた。慌てて起き上がったライの目に、長い髪を揺らしたシャーリーの姿が映る。ライは肩の力を抜き、安堵して彼女に声をかけた。

「シャーリー。よかった。朝、君が教室にいなかったからどうしたのかと……シャーリー？」

話の途中で彼女の様子がおかしいことに気がつく。いつもなら「またここでサボって」と怒るはずなのに、反応がない。いや、震えている？ 心配になったライは立ち上がってシャーリーに近づこうとした。

「来ないで！」

彼女は手に黒い鉄の塊を握り締め、叫んだ。綺麗で細い手に似合わないそれは、銃であった。ライが目を見張る。シャーリーは苦しそうに顔を歪め、ライを見ていた。大きな瞳からは涙が今にも零れ落ちそうだった。普段冷静なライもどうしたらよいのか分からず、茫然と彼女を見た。夢を見ている気がした。

「ライ、あなたもそうなの？ 黒の騎士団って。お父さんを、殺したの？ ルルと一緒にずっとあたしを騙してたのっ？」

小さな呟きを彼女は聞いていたらしい。だがおかしい。確かにシ

ヤーリーは黒の騎士団の話題に敏感だったし、父親を殺したのが騎士団なのだから、そうならざるを得ないのも分かる。だがライは黒の騎士団と呟いただけだ。いくらなんでも過剰な反応過ぎる。それにどうして銃を彼女が持っているのか。

いや、まて。今シャーリーはあなた”も”と、”ルル”と言わなかったか。なぜここにルルーシュが出てくる。……まさか！ ライは一つの答えに辿り着いた。それから自分を落着かせろ。しっかりしろ、と。今シャーリーを救えるのは自分だけなのだ。

とりあえずシャーリーをどうにかしなければ。彼女は震える手で、目に涙を溜めて、ひどく錯乱している。こんな状態で武器を持つのは危険だ。何よりも彼女を傷つけてしまう。

ライが1歩足を踏み出した。

「待ってくれ。落ち着くんだシャー」

「来ないで、来ないでよ！ もういや！ いやなの、いやああああっ」

空気の抜けるような音とともに、ライの身体を熱が貫いた。

どうしたらいいのかわからなかったのだ。彼女一人で考えるにはその真実はあまりにも重たかった。誰かに聞いてほしくて、一番最初に浮かんだのは銀色を纏った彼だった。物静かで頼りがいのある彼なら、自分の話を聞いて答えを教えてくださいの気がした。

思いついたらあの青い瞳を見たくなくて、けどきつと教室に居ないだろうと思った。いつだって、そうだ。授業に出たら真面目なのに、自分が迎えに行かないとサボろうとする。彼女の足は自然と中

庭に向かっていた。またあの場所で空を眺めているに違いなかった。中庭の隅に植えられた木の陰。彼女の予想したとおり、そこに一人の男子生徒が寝転がっていた。ああ。彼だ。無性に安心して近づいていく。ライ。名を呼ぼうと口を開いた。お願い助けて、と続けようともしていた。

「黒の騎士団か」

だがライの小さくぼやいた言葉に、彼女の頭は真つ白になった。黒の騎士団。父親の死。ゼロ。ルルーシュ。ライ。嫌だ嫌だ嫌だ。目の前でライが青い瞳を見開いて何かを必死に言っていた。でも彼女には聞こえない。もうヤダよ。なんでこんなことに。いつの間にか手に力が入っていた。何か、とても軽い音がした。どこかで聞いたことのある音だった。

「……？ ラ、イ？」

茫然と名を呼ぶ。彼女が見ると、ライはいつものまにか座っていた。いつもの昼寝場所である木にもたれて、俯きながら寝ているようだ。余程深い眠りについていていいのか、微動だにしない。

「あ、あああ」

ライの周囲に赤い草が生えていた。どんどんと緑の芝生を覆い尽くそうとしている赤い草と、寝ているライを目で見て、彼女はようやく手の中にある冷たい感触に気づいた。自分は今、何を、さっきの音は。

「やだ。ルル、助けっ」

脳裏に浮かぶのは好きになった少年の顔。父親の死。黒の騎士団。ゼロの仮面を被ったルルーシュ。ルルーシュに銃を突きつける自分を連れて行こうとした女性に、そう、今みたいに自分は銃を……撃つたのだ。彼女は声にならない悲鳴を上げた。

焦りながら流れていく景色を、彼は睨んでいた。

「苛立ったところで新幹線のスピードは変わらんぞ」

「っ、分かっている！」

冷静なC・C（シーツ）にルルーシュは強い声で言い返す。分かっている。分かっているが、どうも嫌な予感がしてならない。予感などというあやふやなものに左右されている自分が腹立たしい。どうして彼女があんな場所にいたのか。自分の顔を見た2人はどこに行ったのか。もし彼女が自分の顔を見たのならギアスをかけるのか。

「おい、携帯が鳴っているぞ」

「ん？」

指摘されて我に帰る。たしかに携帯が着信を告げていた。こんな時に誰だと苛立ったまま画面を見たルルーシュの眉間にシワが寄る。ライの文字が画面に映し出されていた。ライは携帯が苦手であり使おうとしない。使ってくるかと思えば、それはよほど……通話ボタンを押して耳に当てる。

「どうした」

『シャーリーを、しらない、か？』

ライは挨拶もなしにシャーリーの名を出した。今まさに彼女を追いかけているところだったので、思わずルルーシュの心臓が高鳴る。いつもと違う切羽詰まったライの口調に平静を保とうとするが、携帯を持つ手が震えているのをルルーシュは自覚した。何かがあったのだ。

『様子がおつか、しいんだ。携帯にかけてもつ、じな』

「ライ？ どうした、何かお前」

携帯から聞こえる声は途切れ途切れで頼りない。苦しい呼吸も聞こえてきた。まるで怪我をしているような。

『ふう、大丈夫、だ。僕よりも、シャーリーを頼む。彼女を助けられるのはきつとルルー』

「おいライっ？ ライツ？」

声はそこで途絶え、ただ荒々しい呼吸音だけが聞こえてくる。Cの怪訝な表情をルルーシュは無視し、必死に考える。戻るか？

しかし今さら戻ったところで間に合うのか。それにシャーリーも気になる。ライもシャーリーのことを言っていた。2人の間で何かあったのだ。

誰かに連絡をしてライを……スザク、はいレヴンなので携帯を持っていない。会長、いやダメだ。もしもシャーリーが銃を持っていてライを……あり得ない！ あり得ないがライの状態とシャーリーが関係しているのは明白、生徒会のメンバーに知らせるのはマズイ。じゃあどうする？ 黒の騎士団に。ダメだ！ どうやって説明する！ 他に、他に何か方法は？

『ルル、シュ。すまない、少し気が、とんで、た』

声が再び聞こえたことで、ルルーシュは空回りしていた思考を止め、肩の力をひとまず抜いた。

『こっちは本当に大丈夫だから、君はシャーリーを』

「ああわかった。だが一体何が」

『……こけただけだ』

ライは分かりやすい嘘をついた。彼も動揺している。だが、隠すということはやはり。

『じゃあ、頼んだ』

「ああ」

通話が切れた携帯をしばらく見つめてから、ルルーシュはポケットにしまった。C・Cには何も言わなかった。

第三十一話「変わっていく日常」（後書き）

ライを原作に無理やり絡ませてみた。シャーリーのところはやっぱり絡んでほしいなという願望より。どう絡めようかめっちゃくちゃ迷いました。

ところでアニメでルルーシュが乗っていたのは新幹線でいいんでしょうか？ 電車？ 列車？ 分からなかったので新幹線にしましたが、知っている方おられたら教えてください。

2011・03・31修正

第三十二話「無関心にさよならを」

静まり返った時刻、カイナはそこに辿り着いた。
ナリタ連山。

先日の戦いで亡くなった者たちの慰霊碑がある場所。土砂崩れの被害は大きく、今も続けられている土砂の排除作業は、難航していると人づてに聞いた。

仕事終わりに突然ここに行こうと思いついて、カイナはやつて来た。理由は本人もよく分かっていない。いつもの勘かもしれない。来れば欲しているモノが得られる気がした。自然と足が急ぐ。

「あなたもご家族を亡くされたんですか？」

慰霊碑を目前にしたところで会話が聞こえてくる。若い女の声だ。こんな時間に女の1人歩きはよくないな。眉間にシワを寄せたカイナは慰霊碑前にいる人影を見た。日は沈んで暗いものの、月が出ていることと街灯の明かりでよく見えた。

1人は先ほどの女、というより長い髪の少女で、見覚えのある制服を着ている。もう1人は男で、こちらに背を向けているので年などは分からない。制服ではないことと、少女の口ぶりから知り合いというわけじゃなさそうだ。

「いえ、家族ではなく……友達を。たぶん、とても大事な」

盗み聞きは良くない。踵を返しかけたが、聞こえた男の声に思わずカイナは、

「ルルーシュ？」

彼の名を呼んでしまった。振り返った紫の瞳が見開き、彼は驚いた表情のまま小さく呟いた。

「カイナ。どうしてお前がここに」

「え、ああ、まあちょっと」

とっさに誤魔化す。言葉では説明しづらいことだった。だが、ルーシユも、そしてもう1人の少女も、誰かを失ったのだろうと思いきんでくれたようで、それ以上何も聞いてはこなかった。安堵して、しかし同時に罪悪感を抱きながら、カイナは慰霊碑に近づいた。少女がその場所を譲ってくれたので軽く頭を下げる。

大きな石の前に立った。相変わらず何をしに来たのだからさっぱりだった。どうするべきかと思いつつ、なんとなく手を伸ばして慰霊碑に触れた。

触れた石は、とても冷たかった。

死んだらこんな石に名前を刻まれるだけなのかと思えば、虚脱感がカイナの身体を襲った。自分が冷静に相手の作戦を考えている間に、この石に名前を彫られた人たちが死んだのだ。もつと真剣にあの作戦について考えていたら、この慰霊碑はなかったのかもしれない。今さら可能性の話をしたところで意味はない。だが自分はその可能性を考えたことすらなかった。自分に関係ないと思っていたから。

もしもあの戦いで死んだのが特派の誰かだったら、自分はあるなにかに冷静でいられただろうか。

「俺には関係ないことだと、思っていたんだけどなあ」

戦争をする以上、犠牲は出る。ナリタの作戦前にカイナは己にそう語った。どれだけその語った言葉が軽く、言葉の意味を理解して

いなかったのか、実感する。

「私もそう思っていました。なんで父だったのだろうって思って、辛くて悲しくて……でも、朝は来るんですよね、絶対に。泣いて過ごした次の日の朝、昇っていく太陽を見て、思いました」

どれだけの間そうしていただろう。突如、少女が口を開いた。カイナが振り返ると、名も知らぬ少女は気丈に微笑んでいた。ここにいるのだからきつと大事な誰かをなくしたんだろうに、笑って他人を励ましている。

励ましてくれるな。自分は奪った側の人間だ。少女の綺麗な笑顔がカイナの心に沁みた。

「私、さっきまでなんでここに来たのか、よく分かってなかったんですけど……たぶん自分なりのケジメをつけに来たんだと思います」

ケジメか。少女の言葉にカイナは軽く笑った。奪った側の人間が、奪われた側の人間に励まされている奇妙さと、己の愚かさを、笑った。

「俺もそんな感じかな」

どれだけの人がどこで死のうと傷つこうと興味がなかった。自分には関係ないと思っていた。でも関係ない、なんてことはなく。戦いで起きた悲しみを起こしたのはカイナにも責任があり、悲しみの連鎖はきつといつか、自身の大事な人を呑みこんでいく。

「死んだら終わり、だなんて当たり前なのにな。今の今まで実感持ってたなかった」

出会いがあれば別れもある。いつかは誰だつて死ぬ。だけど、戦争で死ぬのはまた別だ。今回もそうであつたように、自分が真剣に考えていれば失われなかつた命は多いはずだ。多くの命が助かれれば悲しみや憎しみは生まれず、スザクやロイドたちも傷つかずに済む。いろいろ考えた結果出てきたカイナの答えは、とてもシンプルだつた。

結局のところ、自分はスザクたちに幸せになつてほしい。彼らが幸せなら自分も幸せになれるから。己が一番なその答えは、あまりにも自分らしくて納得がいくものだった。顔も知らぬ他人の死がどうのと思うより、よつばど分かりやすい。

「あの。じゃあ私はこれで」

「ああ、気をつけてな」

自分とルルーシュに向けて、最後まで励ましの言葉を述べた彼女は、軽く頭を下げて去つて行った。少女の背中を見送つてからカイナはルルーシュに向き直る。少年は俯いていて、黒髪が表情を完全に隠していた。もう遅い時間だというのに帰る気配はない。カイナは困つたように頭の後ろに手を置いた。人を励ますのは苦手だが、さすがにこんな状態の彼を放つてもおけない。近づいてルルーシュの肩を叩いた。

「なあルルー」

紫色の瞳が近づいた。

「ふああああつと。おあようおつお」

「おはよう。いつもにまして眠そうだね。夜更かしでもしたの？」

特派に到着してあいさつ。かけられた声にカイナはそつちを見る。茶色い髪……この匂い、ああ、スザクか。

「夜更かし……夜更かし……夜更かし……ああ。そうだな」

「ははは、本当に眠そうだね」

昨日、租界外れの自宅に帰りついたらもう寝る時間だった。更に昨日は書類仕事を持ち帰っていたのでそれをせねばならず、ほとんど眠れていないのでとてもだるい。一応出勤したものの、この状態で働くのは無理そうだと思った。そんな状態でもカイナが特派にやってきたのは、

「ああそうだ、スザク」

億劫な腕を動かし、封筒を取り出した。

「これルルーシュに渡してくれ」

「ルルーシュに？」

「ついでに昨日は悪かったって伝言も頼、む……俺はちょっと、寝る」

「カイナ君、堂々のサボリ宣言ありがとう」

キーボードに何やら打ち込んでいたロイドが、眼鏡のズレを直しながら言った。自業自得なのはカイナも分かっている。今日も仕事があるのを分かった上でナリタに行ったのだから。しかしどう考えても身体は限界だった。壁際に置かれたソファの上に身体を横たえる。

「こんな状態でナイトメアとか無理言、うな。おやす、み」

「え、ちよっと待ってカイナ。昨日ってルルーシュと居たのかい？
どうして」

「スザク君スザク君、彼女もう寝ちゃってるよ」

「はやっ」

第三十二話「無関心にさよならを」(後書き)

無理やり原作を絡めるその2。無理やりすぎると私も思います。

けどナリタを訪れるシーンは元々書く予定で、なら原作と絡めちやえ、という安易な考えて書き始めたら痛い目見ましたよ、というお話。

みなさん、何事もご計画的に。

2011・03・31修正

第三十三話「荷物が重くて辛いなら、2人で背負えばいい」

重たい体を起こし、ライは茫然と目覚まし時計を見た。昨日は痛みと発熱で全然眠れなかった。何よりもルルーシュからの連絡がなかった。携帯も通じず、不安と心配で呑気に寝ることができないはずもない。2人の無事を確認しに行きたくとも動けない身体を、何度も恨めしく思った。シャーリーは、ルルーシュは無事なのか。気持ちだけが焦る。

「ルルーシュ、シャーリー……ぐっ」

学校に行つて誰かに2人のことを聞こうと身体を起こす。動いていい身体でないことはライも分かっているが、どちらにせよ怪我のことは隠さねばならない。いつまでもベッドに寝たままではいられないのだ。

ゆっくり立ち上がるうとして、ライは右肩の痛みでうめいた。数度深呼吸。落ち着かせる。一々痛みに反応していたら周りに気づかれる。いつも通りにしなければ。

「はあ、ふう、はあ」

痛みが大分引いたところで立ち上がる。今度は大丈夫だった。軽い振動ですら痛みは走るが、平常心を心がける。さすがに制服を着るのは苦労した。そして鞆を持ち、中身を確認。幸い今日は体育がないのでなんとかごまかせそうだった。

「あ。ライおはよう！」

「えっあ、ああ。おはよう……シャーリー」

教室に入ったライへ最初に声をかけてきたのは、一番心配していたシャーリーだった。彼女の顔には笑顔がある。作り笑顔ではなさそう、ライは安堵ではなく不安になる。あまりにも奇妙すぎた。無事なのは嬉しい。しかし、

「どうしたの？ 変な顔してる」

「そうかな」

「うんうん。今はきつとハトが豆鉄砲くらったって顔だな」

「っ……おはようリヴァル」

「おうおはようさん、サボリ魔のライ君が珍しいですな。1時間目から教室に居るなんて」

右肩に手を置かれて悲鳴を上げそうになったものの、堪えた。シャーリーが「そついえばそつよね」と首を傾げているのを横目に、ライはルルーシュを探し、すぐに見つけた。2人に断ってから彼に近づく。

「ルルーシュ、おはよう」

「ん？ おはよう。珍しいな、お前が1時間目からいるなんて」

机に肘を乗せた彼は、普段と変わらない態度に見えた。だが、だからこそおかしい。やはり何かあったのだらう。でなければ昨日、何かしらの連絡をライにしたはずだ。

とはいえ教室で聞く話でもない。ライが戸惑っていると第三者の声が割り込む。茶色い癖っ毛を揺らしたスザクだ。今日は軍務がないらしい。

「あれライじゃないか。おはよう。珍しいね、君が」

「1時間目からいるなんて、か？ リヴァルとルルーシュにも言わ

れたよ」

ライが苦笑して台詞の先取りをすれば、スザクは普段の行いが悪いからだよと明るく笑った。ルルーシュもつられるように少し笑う。午前中を真面目に授業にあてて、ライは2人を観察した。2人はいつもと変わらない。ルルーシュは相変わらず巧みな居眠り技術を披露し、シャーリーは真面目に教師の話聞いていて、休み時間はライがサボらないように監視した。リヴァルは時々舟を漕ぎ、教師に怒られている。スザクは授業についていこうと必死に教科書と睨みあっている。カレンは休んでいる。

いつもの教室だった。

自分が経験したことの方が幻だと言わんばかりに何も変わらない。……それでも右肩はやはり熱を持っていて、あれは現実だとライに告げてくる。どういうことか。彼は考えこむ。

ルルーシュが演技をするならまだ分かる。彼は本心を隠すのが得意だ。しかしシャーリーまで。彼女の性格を考えると誰かを銃で撃つたのを気にせず演技できるとは思えない。それに演技というより、彼女の様子はまるでそのことを忘れていたようだった。

忘れる？

浮かんだ言葉にライは愕然とした。そうだ。本当に忘れていたら？ でも普通に過ごしているということは、そのことだけを忘れた？ すべてを忘れたのではなく一部分だけを綺麗に忘れてることが可能なのか？ まさか。そんな都合の悪いことだけ忘れさせるなんてできるわけが。

ギアス。

あった。ギアスなら可能だ。じゃあ誰がギアスをかけたのか。それを推測するのはライにとって簡単だった。周りの反応を見ても、シャーリーの異変を知っていた人物がほとんどいないのは間違いないからだ。

『ライ、あなた”も” そうなの？ 黒の騎士団って。お父さんを、殺したの？ ルルと一緒にずっとあたしを騙してたのっ？』

シャーリーの言葉が思い浮かび、そして今までのことを考えるとすべてが繋がった。ライは天井を仰いだ。

お気に入りの昼寝場所をライはじつと見つめていた。そこに血の痕は、とりあえず見えない。昨日傷の痛みに唸りながら水で流し落としたのだ。なのでそこだけぬかるんでいる。朦朧まごころとしながらの作業だったので一応確認しに来てみたが、どうやら大丈夫そうだ。元より人があまり来ない場所であるし、気づかれる可能性は低い。…すでに知っている者以外で気づくことはないだろう。

「もう消していたのか」

「まあね。一応そんな冷静さはあったらしい」

振り返ると、ルルーシュが立っていた。その動きにさえ痛みが走り、少し頬が引きつったのを感じた。ライの顔を見たルルーシュが眉を寄せた。

「俺の部屋に來い。話がある」

「ああ」

まだ午後からの授業があったものも、ライは気にせずついて行った。お互いに聞きたいことがあったのだ。

ルルーシュの部屋でまず最初にライが話をした。あの場所にシャ

ーリーが来たこと。黒の騎士団と喧いたら錯乱して銃を撃ってきたこと。しばらく気を失っている間にシャーリーがいなくなっていたこと。そしてルルーシュに電話したこと。

「僕を撃つた時、シャーリーは気になることを言っていた。僕”も” そうなのか、と」
「……………そうか」

話を聞いたルルーシュはそれだけを言って、黙り込んだ。ライも黙っていた。しばらくして彼が話し出す。

「俺がナリタでシャーリーを見つけた時、すでに彼女は何も覚えていなかった。おそらく極度の精神的ストレスから」
「ルルーシュ」

嘘であることはすぐに気が付いた。ゆっくり頭かぶりを振ってライは深々と息を吐き出した。思ったより部屋に響いた息に、ルルーシュがピクリと肩を動かしたのでゴメンと謝った。彼をいじめたいわけではない。むしろ、逆だった。

ずっと覚悟をしたつもりで、覚悟を偉そうに問うた身で、ライはいつだって不安定に揺れていた。まったく情けなくて仕方がない。だが今ここに改めて誓おう。一度被った仮面を、彼と共に貫き通すことを、誓う。

「ルルー……………いや、ゼロ。どうか全て話してくれ。僕は君と同じものを背負いたい」
「お前っ」

共に歩くとライは今決めた。ルルーシュの瞳が大きく揺れた。どうやら予想は当たっていたらしい。軽く笑って「シャーリーが”ル

ル”と一緒に騙してたのかって言ったんだよ」と種明かしをする。後は簡単な話だ。ライも、そしてカレンも、ルルーシュの姿を黒の騎士団内で見ていない。顔を、素性を知らない団員はただ一人しかいないのだ。

「何、が目的だ。お、前は、なんでそこまで俺に」

「分からない。だけど、どうしてかな。僕は君を放っておけない……そうだな。あえて言うなら君が僕に”色”を与えてくれたから、かな」

本当に理由はライ自身も分からなかった。ただ、ルルーシュを1人にしてはダメだと、心が叫んでいる。それでもルルーシュがライにとつて大事な存在であることは間違いはなかった。自分を最初に見つけてくれた綺麗な”色”を纏う人。

目覚めてからずっとライの世界は灰色だった。空が青いと、木々が緑だと認識できてはいても、どこか違和感があった。世界を遠くから眺めているような気がしていた。

薄雲がかかったような世界を鮮やかに感じさせてくれたのは、黒の騎士団だった。騎士団は、ゼロという存在は己に生きる目的という”色”を与えてくれたのだ。あの瞬間にライは世界への仲間入りをした。

「僕には記憶がないから。信用できないと君が思うなら、ギアスを使って僕を」

「ギアスつだと？ お前なぜ……そうか、C・Cの」

「残念だけど君の考えていることは少し違うよ。僕の契約者はC・Cじゃない。けど、僕は君と似たギアスを持っている……ああごめん。これは僕から話すべきだったね」

謝ってから、ライは己のギアスについて話します。キョウトで与

えられた任務もこれを使って成し遂げたのだと白状した。

「なるほど、そうか。お前も」

「うん、それともう一つ謝らなくちゃいけないことがある。僕は、君に覚悟を問いかけておきながら、僕自身の覚悟が弱かった。彼女の、シャーリーの涙を見て、大きく揺らいでしまった。だから」

「ライ」

言葉を遮られる。ルルーシュを見ると、彼は迷子になった子供のように頼りなさそうに視線を揺るがせていた。こんなに弱り切ったルルーシュを初めて見た。だがギアスを使う雰囲気はない。ということは、信頼されていると考えるもいいのだろうか。だとしたらそれはとても嬉しく思えて、ライは微笑んだ。微笑みで勇気が出たのか、ルルーシュが口を開く。

「本当にいいのか？ 俺のことを知ればお前はもう」

「言ったはずだ。僕はルルーシュ、君だからついていく。君と同じものを、背負いたいって」

「しかし！」

「1人では押し潰されそうな荷物でも、2人ならきつと背負えるよ。ルルーシュ」

数度口の開閉を繰り返していたルルーシュだったが、やがて疲れたように強情だな、と笑った。そして深呼吸を何度か繰り返し、やがてゆっくり語り始めた。遠くから授業の開始を告げる音が聞こえたが、2人とも微動だにしなかった。

「俺の本名は、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。列記としたブリタニアの皇族だ」

第三十三話「荷物が重くて辛いなら、2人で背負えばいい」（後書き）

ライにはゼロ＝ルル＝シュだと自力で気づいてほしかった、という願望が込められております。もっとこう二人の仲の良さを表現したいものです。あっさりしすぎてゐるからなあ。うーん。でもライだとしても思っけど。

2011・03・31修正

第三十四話「手に入れたモノ」

その日特派に着くと、ロイド、セシル、スザクが笑顔でカイナを出迎えた。スザクとセシルはともかく、ロイドが出迎え……カイナが思わずといった様子で後ずさった。

「カイナ君、その反応はさすがの僕も傷つくかな」
「いやすまん。つい」

いじけだしたロイドをなんとか宥め、話を聞いた。

「おめでとう、カイナ」
「はあ？」

ロイドが口を開く前にいきなりスザクに言われ、コーネリアから注意された間抜けな声を上げてしまった。セシルが言葉を続ける。

「本日付けであなたに騎士候位が授けられました」
「き、し？」

「これまでのシミュレータと模擬戦のすばらしい成績に加えて、ナリタでの総督救出の功績が決め手になったみたい。最近の出動は実力の最終確認、ってところじゃないかしら」

「後、ノネットさんが強く推薦してくれたらしいよ。あまり特派をよく思っていないんじゃないコーネリア総督に、『あいつが正規の資格をもっていないのはおかしい』って」

2人の声がカイナの頭を素通りしていく。騎士。その言葉は今までも何度か聞いた。だがどうしてか、自分が騎士、となると胸に

湧き上がるものがあつた。これは？

『私はあなた様だけの騎士です。これまでも、これからもずっと』
誰かのセリフがパツと思ひ浮かんだ。

「そしてそれにともない、あなたに階級が与えられました」
「改めてこれからもよろしく、カイナ准尉」
「あ、ああ。よろしく」

反射のように返事をしてようやく現実に戻り、頭が働き始める。
階級が与えられた、ということとは。

「今まで俺はどういう扱いになつてたんだ？」
「実は技術職員として特派の中に組み込んでいたの。ほら、あなたにはIDがないでしょ。こうすると上のチェックも甘いから。でも今日からカイナさんは正規のパイロットとして認められたの」

とても不思議な心地だつた。自分のしたことが認められる。

「それから残念でした。君のID作っちゃつた。今までの”誰でもない”君は、もういなくなっちゃいました。ひとつ自由を失っちゃつたね」

「ID……誰でもない、俺か」

渡されたちつぽけなカードを見下ろす。あやふやな立ち位置にいた己に与えられた、確固たる地盤。今まで自分が立っていた場所がどれだけ不安定だったのかを、カイナは悟る。ようやくその場にしっかりと立てた気がした。まるで初めてスタート地点に立ったような、緊張と、期待で心臓が派手に音を立てた。

「……つて、作った？」

少し落ち着いたところで重要なことに気づく。今たしかにロイドはIDを作ったと言った。聞き逃せない一言だ。セシルが他に誰もいないにも関わらず声をひそめた。

「ほんとはいけないことなんだけど、ロイドさんは第二皇子シュナイゼル殿下の支援をいただいているから、その関係で、ね。ここ特派も殿下の直轄なのよ」

「騎士候位と階級がもらえるのに、IDがないとどうしようもないからねえ。いろいろ裏技使っちゃった」

使っちゃった。つてそんなに軽く言うことなのか。しかも第二皇子シュナイゼルと言えば、帝国宰相じゃなかっただろうか。

呆れつつも、自然と頬が緩むのをカイナは感じた。

「ありがとう」

3人が動きを止めた。だがそんなことも気にならず、カイナは手の中にあるカードを見つめる。この薄っぺらい板きれが自分を証明するのかと思えば奇妙な感じだ。このカードが自分の証明、つまりはここに居てもいい証。

「……びっくりした。君のそんな顔初めてみたよ」

「んん、なんだ？」

スザクの声にカードを見つめるのをやめてカイナは顔を上げる。3人は驚いているようだった。セシルが微笑んだ。変な顔でもしたのだろうか。

「違うわ、その逆よ。今とても良い笑顔してたの」

「まあまあいいよお。そのことは置いて。お祝いのプレゼントがこっちにあるんだあ。んふんふん」

ロイドが急に張り切りだした。若干頬も染まっている。彼の表情は、子供が新しい玩具を手に入れた顔そのままだった。

「プレゼント？」

「これだよ」

手招きされたので近寄った。すぐその存在に気付く。ナイトメアが置かれている場所に、ランスロットと並んで立つ機体があった。サザーランドではない。見知らぬものだが、その機体はどことなく、

「ランスロットに似ている」

そのナイトメアには、黒色を基調とした塗装が施されていた。裝飾部分は黄色で、黒いランスロットと呼んでもいいだろう。ロイドがまた奇妙な笑い声を上げた。

「ランスロットのノウハウをフィードバックして開発されたナイトメア、ランスロット・クラブ。通称はクラブ。君の専用機だよ」

「クラブ、俺の専用機」

「おめでとう！ クラブはランスロットのノウハウとともに、今までの君のシミュレータ騎乗、模擬戦、実戦のデータをすべて反映させて作ったんだ。予算の都合でランスロットほどサクラダイトが使えなかったから出力は、ちょっと落ちるけどね。それでも今まで乗っていたサザーランドとは比較にならないくらい性能だよ。」

さらにい、君に合わせて作ったからあ、んふんふ。まるでオーダ

「メイドのスーツみたいに馴染むと思うよ」

説明を聞きながら、カイナはただただランスロット・クラブを見上げた。セシルが説明を引き継ぐ。

「スザク君とは違ったあなたの特性を活かすために作られているのよ、このクラブは」

「特性？」

「ええ。あなたはオールマイティーに秀でているのだけれど、中でも特に行動予測の正確性が異常な数値を示していたわ」

「後は、指揮能力だね。状況をすぐさま判断し、最も効率のよい戦い方をする。これはスザク君にはちょっと欠けている能力だね」

「そうだったのか。だからこの前のナリタ戦やノネットさんの模擬戦でもなんとかなったんだね。君はすごいな」

「それは褒めすぎだと思うが」

3人の高評価にカイナが苦笑いをする。出勤を要請してくるダールトン將軍やギルバートからもよくそんな評価を受けるが、彼女は「自分なんかをおだててどうするのだろう」といつも疑問だった。

「この前テストした強化型ファクトスファイア（情報収集用カメラ）は、きつと君の指揮能力を引き出してくれるよ。それから狙撃モードに切り替えられるライフル。あれも君の戦闘データを元に作ってみた」

ロイドの言葉に思い出す。通常モードと狙撃モードに切り替えられるライフルをシュミレーターでテストしたことがあった。狙撃モードでは連射はできず、エネルギー消費も半端ないが、使い勝手は良さそうだった。

「戦術と言った方がいいかしら。カイナさんは複数の敵と戦う場合、敵を分散、もしくははなるべく減らしてから接近戦に持ち込むから。スザク君だとそのまま戦うわよね」

「君はよくスラッシュユハーケンを使うからかなり強化して、背中にも一個つけておいたよ」

よく見ている。

少しこの2人を見くびっていたとカイナは反省する。やっぱりロイドはただの変態じゃなかった。セシルが柔らかい表情を浮かべた。

「まあナイトメアの話はそれぐらいにして。今日はお祝いですもの」

「そうそう。今日は君の誕生日だからね」

「え？」

笑顔のセシルとスザクを交互に見てから、1つの可能性に思い至り、急いでカイナはIDカードを見た。誕生日は、今日の日付になっている。

『今日がお前の誕生日だ』

「っ!」

頭の中でまた誰かの声がした。さっきとは別人の声だったが、こちらの声にかイナは心臓を握られたような衝撃を受けた。

「ハッピーバースデー、カイナさん」

「誕生日おめでとう、カイナ」

「まあたまにはこういうのもいいかもね。おめでとうカイナ君。んふっんふふふふ」

「……あ、ああ。ありがとう」

カイナが気を取られたのは一瞬で、誰も異変に気づかなかったようだ。内心安堵しつつ、笑った。今日はこんなにくさんのものをもらえた。もしかしたらこういうのが幸せというのかもしれない。だから、さっきの”声”について考えるのは明日にしよう。せめて今日だけは”特派に拾われたカイナ”でありたかった。

セシルが効果音を自分で口にしながら何か運んでくる。食べ物のような。

「さあここにケーキもあるわよ。私が焼いてきたの。おにぎりも」「じゃあ遠慮なく……んん？ ロイドとスザクは食べないのか？ ケーキだけじゃなくておにぎりもあるぞ」

カイナは戸惑いなくケーキを食す。一人で食べていると、ロイドとスザクが様子をつかがっているのが見えた。口の中のモノを飲みこみ尋ねた途端、2人は顔色が悪くなった、気がする。スザクは慌てた様子で腕を振り回し、ロイドの眼鏡が反射して光った。

「いや、僕は、僕のご事は気にしないで。うん。ほらどんどん食べなよ」

「あ、ちよつと君、この前のデータどうなったの？」

彼らはあからさまに不自然だった。

「なんだ？ なあセシル、あいつら一体どうしたんだ？」

「さあ、どしたのかしら」

セシルとカイナは、揃って首をかしげた。

第三十四話「手に入れたモノ」（後書き）

能力はライと似ていますが、結構違います。行動予測はカイナの場合は勘であり、ライは理論です。どちらの予測能力が上かは状況によりけりでしょう。

今回クラブのカラーリングを変えました。ご容赦ください。青でもよかったのですが、イメージ的にこちらの方が合っていたので。

2011・03・31修正

第三十五話「赤い日記帳」

「まあ。今日はお兄様だけでなく、ライさんも一緒に居てくださいの
のですか？」

「たまには咲世子さんも休ませてあげないとな。ライも今日は時間
あるってさ、良かったな。ナナリー」

「ホントですかっ？」

「うん。最近は忙しかったからね。ゆつくりしようと思って」

顔を輝かせたナナリーに声をかけながら、ライはルルーシュと目
線を交わした。2人は同時に頷く。

思考を読むギアス能力者、マオ。ライも数回出会ったことがある
彼がC・C（シーツ）を取り返すためにルルーシュへシャーリー
をけしかけた。ゼロへの憎しみとルルーシュへの愛情で板挟みにな
った彼女を苦しみから解放するため、ルルーシュがギアスを使って
彼女の記憶を消した。これが、この前に起きた一連の騒動の真相だ。
ライはすべてを聞いた。シャーリーに関してのことだけじゃない。
どうしてルルーシュがゼロになったのかも。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。それがルルーシュの本名。正真
正銘、ブリタニアの皇族だ。もちろんナナリーも。

彼らは母親が何者かに殺された後、人質として日本に送られた。
スザクと知り合ったのはその頃で、最初こそ反発していたものの、
一緒に過ごすうちに仲良くなったらしい。しかしその後、ブリタニ
アは日本に宣戦布告、攻め入り、占領した。ルルーシュとナナリー
がいるにも関わらず、だ。攻め入れれば2人にどれだけの危険がある
か分からないはずがないというのに。

なんとか生き残った彼らはもう利用されることのないようにと、

公式にはその戦争で死んだとし、母親の後見役をしてくれていたアツシユフォード家に匿われて過ごしている。学園のクラブハウスに住んでいるのはそのためだった。

ルルーシユがゼロの仮面を被ったのは母親の死の真相をつきとめて仇を討ち、そしてナナリーが安心して過ごせる世界を作るためだ。ライは協力を惜しまないと彼に誓った。ギアスをかけることなく真実を伝えてくれたルルーシユの思いに応えるために。

何よりも、ナナリーが安心して過ごせる世界を作るという目的は、ライの心の隙間へ綺麗に入りこんだ。まるで最初から心の中に存在したかのように、収まった。

話は戻る。

マオはC・Cをルルーシユが奪ったと感じているらしい。だからルルーシユを追い詰めようとシャーリーを利用したのだが、失敗した。その際ルルーシユと対峙し、ルルーシユの思考を読んだのであれば、次にマオがナナリーを狙うのは明白だった。なので怪我のことはあれどライは護衛役を買って出た。最初ルルーシユは良い顔をしなかったが「怪我をしても君よりは強いよ」というライの一言に折れた。……その後、なんだかとても落ち込んでいる気もしたが。

パソコンの画面を見ていたルルーシユが少し顔を歪めた。防犯カメラの映像に誰か映ったのだろうか。紫の瞳がライを見た。焦っている様子はないのでマオではないのだろうか。ライは少し力の入った肩を落とした。ルルーシユが立ちあがる。

「少し席をはずす。ライ、頼んだ」

「ああ」

「はいお兄様」

足早に出ていった背中を見送り、ライはナナリーに向き直る。

「さあ、今日は何しようか」

「そうですねえ。……あ。昔話を読んでいただけませんか？ 咲世子さんが新しい日本の絵本をもってきてくれたんです」

「へえ面白そうですね。いいよ。どこに置いてあるのかな」「えっと」

その日は何事もなく、ライはナナリーと楽しい1日を過ごした。危険が迫っているなど感じさせない穏やかな時間だった。

日が沈み、ナナリーを寝かした後、ルルーシュは「ついて来てくれ」とライに言った。首をかしげながら彼について行く。細いルルーシュの背中が闇に溶けて消えてしまいそうで、目が離せなかったのだ。

人気のない場所まで来たところでルルーシュはある物を取りだす。なんとも表現し難い虚脱感がライの体を覆った。ルルーシュがライターに火をつけ、ある物へ近づけていく。自分が代わりに、という言葉は飲みこみ、ライは別のことを口に出した。

「燃やすのか？」

「それが一番だからな」

ルルーシュの手にある赤い日記帳を見てライが思い出すのは、少女の笑顔だった。まだここでの生活にライが慣れていない頃、彼はシャーリーに誘われて一緒に文具店へ行ったことがある。その時に彼女が買ったのは。

ライターの花が日記帳に燃え移り、思い出を灰に変えていく。俯いているルルーシユの顔は見えない。ライは火を見ながら口を開いた。口に出すつもりなどなかったというのに、気がつけば声を発していた。

「……僕は値段ばっか気にしてたんだけど、赤いのはおしゃれでかわいいんだそうだ」
「ライ？」

怪訝な視線に、しかしライは答えなかった。ルルーシユもまた視線を落とし、後はただ、思い出が煙になるのを2人で見届けた。

『この赤い日記帳にする。ほら赤いのはおしゃれでかわいいし。書くスペースもたくさんあるから思い出もいっぱい書けるもの』

ルルーシユ、君が背負うモノを僕も背負うよ。君が苦しむなら、僕も苦しもう。それが”いま”の僕の歩む道だ。

第三十五話「赤い日記帳」（後書き）

いろいろ省略しながらお届けしました。赤い日記帳燃やすところはどうしても入れたかった。あの時のルルの表情が切ない。ライにはあの頃から彼を支えてあげて欲しかった。

さて、気づけば次の話で第三章終りです。……早いものですね。そして、次の話が最長話で、一番の難産作品です。最後にじっくり推敲したので明日、もしくは明後日にアップ予定。

2011・03・31修正

第三十六話「探し求めた答え」

「ユーフェミア殿下に会いたい?」

「あー、うん。学校の友達のホテルジャックの時に庇ってもらったらしくて。お礼を言いたいんだって」

どこか照れくさそうに言うスザクに、カイナは聞き返した。視線は目の前のディスプレイから外さない。自分の今までの戦闘データを分析し、クセがないか確認している最中だった。これもまた彼女の仕事だ。

「なんで俺に言うんだ。お前の方こそ個人的な友好あるんじゃないのか? 前だって」

「あの時は特別だよ。殿下の方から仲介を頼まれただけだし」

「じゃあ俺ごときに言っても無駄無駄。ほら、さっさとメディカルチェックに行つてこい」

「メディカルチェックは明日だよ。カイナは騎士候だから謁見できるはずなんだけど」

スザクの言葉に「そういえばそうか」と短く返したが、振り返ることなくまた画面を睨む。……ハーケンの使い方パターンが開始めている、か。直さないといけない。というよりハーケンに頼りすぎているのか。ハーケンは多様性があり便利なのでついつい使ってしまう。スザクの戦い方も参考に新しい組み合わせを考えよう。スザク以外でも参考になりそうなのは、と。カイナは頭の中で指を折り、数名の乗り手をリストアップした。

頭に浮かんだのはノネットを筆頭にコーネリアやコーネリア親衛隊のギルにダールトンと言った面子で、彼らのデータを手に入れる

のは難しそうだった。カイナは顔を歪めてどうしたものかとしばし悩む。そんな彼女の視界に白衣が映り、そういえばと思いついた。

「めんどつくさい、やる気がない、だるい、腹減った、眠い、から断る。俺よりその伯爵様にでも頼んだらどうだ。下っ端騎士よりよっぽど確実だろ」

「カイナ、腹減った眠いつて……へ？ 伯爵、つて」

「んん、僕？」

「え！ えええつ……ロイドさんって伯爵だったんですかっ？」

すごく驚いているスザクの声がした。今まで知らずにいたらしい。なぜか照れてだらしなない笑みを浮かべているロイドの姿に威厳はまったくない。たしかに言われなければ気づけない。

「いやああつはつはつは。お恥ずかしい」

「放蕩貴族よ。遊びと仕事の区別がついていないの」

「はあ」

カイナは3人が話している間にデータの確認を終え、パソコンの電源を落とし立ち上がる。これ以上自分に話が向かないうちにと手を振った。

「じゃ、お先に」

「あ、カイナ君、メディカルチェックだけど、君は良いから」

「ああ」

後ろから聞こえたロイドの声に短く応え、さつさと特派を出て帰宅する。帰っている途中、ロイドにデータ入手を頼み忘れたことに気づいたが、ため息をこぼすにとどめた。明日にでも頼もう。

「腹減った」

家に帰りついてすぐ、洗った野菜にかじりつく。給料日前なので
今晩はキャベツ2個だ。物足りないがしょうがない。

その後シャワーで汗を流した。髪を拭きながら時計を見るとまだ
寝るには早い。周りから聞いた話では、こういう時間をテレビでつ
ぶすらしいのだが、この家にはそもそもテレビがない。家具と呼べ
る家具はテーブルと椅子、ベッドぐらいなものだ。

どうしようもないので寝るかカイナがベッドに腰かけた時、枕
もとの携帯が震えた。手にとって顔をしかめる。見知らぬ番号だっ
た。

「はい」

悩んだ末に通話を押した。少し身体が緊張したが、聞こえてきた
声にとりどころじゃなくなる。

『あ、カイナさんですか？ 私です、ユーフェミアです』

「は……はいいつ？」

これが俗に言う素っ頓狂な声なのか。カイナは他人事のように感
じながら、ユーフェミアの話を聞いたのだった。

翌日、カイナが待ち合わせ場所のショッピングモールに来ると、
大勢の人が行き交う中、手を振る人影があった。大きな白い帽子と
サングラスを身につけた少女だ。殿下と呼びかけた。

「でん」

「あ。今日はユフィと呼んでくださいね」

だがユーフェミアに言葉を遮られる。それもそつだ。こんなところで身分がばれては大変なことになる。何より今、ユーフェミアを守れるのはカイナしかない。ため息をつく。

「護衛、まいてきたんですか？」

「大丈夫ですよ。姿は見えませんがついてきて」

「いないから言ってるんじゃないですか」

言い切ると、ユーフェミアは舌を出して笑った。こうしていると普通の少女にしか見えないというのに。

「わかります？」

「ええ」

気配を探ってみてもユーフェミアの周囲にそれらしき者たちがない。確かに周囲は人で溢れているが、訓練された者とそうじゃない者を見分けることなどカイナには容易いことだった。どうしてそんなことができるのかはやっぱり分からず、ますます自分の過去が気になってしまったぐらいだ。

それにしても、どこにでもいそうな少女にまかれる護衛って一体よつぼど間抜けなのかこの少女が手慣れすぎているのか。……カイナはまだこの少女のことをよく知らないが、後者である気がした。姉のコーネリア総督が頭を悩ませている姿が脳裏をよぎっていく。

「でもあなたがいれば大丈夫ですよ。さ、行きましょう」

「はあ、ったく」

前回のようにはスザクはいない。彼には学校があるし、その後はメ
ディカルチェックに向かうはずだ。他に護衛もないので、カイナ
には少女の後をついていくしか選択肢はなかった。ため息が零れる
のは仕方ないだろう。

「いつもこんなことされてるのですか？」

「実際に見てみないと皆さんの生活が分からないですから」

「それは、そうですね」

物珍しそうに周りを見たりせず、完全に周囲と同化しているユー
フェミアに、カイナは苦笑する。自分よりこの場になじんでいるよ
うに思えた。実際、少女よりもカイナへ向けられる視線は多かった。

「今日はどちらに行かれるのです？」

「ゆっくりあなたとお話がしたいので、お店に入りませんか？ あ

っ！ あそこがいいです」

「えっわわ、ちょっと」

「はやくはやくー」

か細い手に引っ張られる。拘束から逃れることは容易だが、ユー
フェミア相手に手荒なこともできず、カイナは諦めて引っ張られて
いく。2人が入った店は落ち着いた雰囲気のカフェだった。平日の
昼間とあって客は少ないが、ちらほらと座っているのは女性ばかり。
数名と目があつたカイナは戸惑った後で微笑んでみた。相手はすぐ
にこちらから視線を外した。慌てたような仕草に、自分に変なこと
をしてしまったのだろうか、と首をかしげた。

店員に案内されたカイナたちは窓際の席に座った。椅子とテーブ
ルは濃い茶色の木目調で、シンプルなデザインだった。決して皇女
様が座るような椅子ではないが、妙に似あっている姿にカイナは何

も言うまいと思った。

ユーフェミアは呆れた目線に気づかず、ケーキを手慣れたように頼んでいた。店員に問われたカイナも適当にコーヒーを注文する。

早速用件を話すのかと思いきや、ユーフェミアは他愛のない会話をしてきた。カイナは仕方なく話を合わせて相槌を返す。とはいっても2人に共通する話題は少なかったため、自然とスザクに関することが多くなった。

「ああ。スザクが学校に通えているのはあなたのおかげでしたか」

「やはり17歳なのですから通うべきだと思って……スザクは学校を楽しんでいますか？」

「最初はいろいろあったみたいですけど、今は友達もいるみたいで学校に行ける日は楽しそうにしていますよ」

「よかったです……あ、ありがとうございます」

店員が品物を持ってきたことで一端会話が止まった。店員に平然と頭を下げているユーフェミアの姿をカイナは見つめる。皇族であるわりに、目の前の少女は庶民に頭を下げることを自然と行っていた。皇族としてはダメだと言われるのかもしれない。でも、そちらの方がカイナには好ましく映る。誰かに感謝し、それを表すのは当たり前のようにとても難しいことだから。

「どうかされましたか？」

ケーキを嬉しそうに食べ始めたユーフェミアがカイナの視線に気づき、怪訝な表情をした。よほどじっと見つめていたらしい。カイナはコーヒーを飲んで誤魔化した。

「まあでも、今日のことは私にとっても好都合だったので良かったですよ」

「あらおいしい……私わたくしにご用事が？」

「はい。なぜ私にあんなことを問われたのか、お聞きしたかったのです」

「戦う理由、ですか？」

ユーフェミアの表情が変わる。ただの少女から皇族へ。その変化を面白いものを見るように眺め、カイナは頷く。

カイナとユーフェミアの間に接点はあまりない。ゲットーとナリタで偶然出会っただけである。身分の差も大きい。変な出会い方だった自覚があるので、記憶には残るだろうが。スザクに頼んでまで自分と会話したかった理由としては弱い。

「スザクとはたまにお話しをしますのです。その時に彼からあなたのことは聞いていて、1度お会いしたいと思っていたのです」

「あなたは、一体何度抜け出してるんですか」

「もっもっっ！ 今そのことはいいのです」

つい呆れて口を挟むと怒られた。はいはいとカイナが流せば、ユーフェミアが咳払いをする。

「あなたが目を離すと消えてしまいそうで心配なのだと、スザクは言っていました。ゲットーで初めて出会った時、私も同じように感じました。あなたはとてもきれいな空気を持っていらしたけれど、無色透明でしたから」

「消える？ 透明って、はあ？ あの一体何の話でしょうか」

ユーフェミアの話は抽象的すぎてついていけない。カイナは戸惑って意味を問うが、ユーフェミアは意に介さず話を続ける。

「カイナさん。出会った当初、あなたの中には何もなく、空っぽで

した。自分の意思なくただ生きていた。違いますか？」

逆に問い返されて、カイナはコーネリアが言った”脆弱者”という言葉を頭に思い浮かべた。生きていようで死んでいる。否定はできない。確かに自分はそうだったのだ。己の手を見下ろした。でも。

手を握り締めて顔を上げると、それを待っていたかのようにまた彼女は口を開いた。

「2度目に出会った時、あなたの中に何かが芽生えているのを感じました。あなたは必死に自分の足で前に進もうとしていた。でも歩き方が分かっていないようで、このままでは躓いてまた歩けなくなりそうな気がしました。

だから私はお聞きしたのです。なんのために戦っているのか、と。あなたなりの理由を考えることが1歩目なのだと思いますので」

ユーフェミアは毅然と顔を上げてカイナを見ていた。心の底まで見透かされているように感じて仕方がない。

目の前に居るのは本当にただの少女なのだろうか。睨まれたわけでも、怒鳴られたわけでもないというのにカイナは気圧される。お飾りの副総督？ 馬鹿を言え。どこにそんな少女がいるんだ。ただのお飾りがこんな目をするはずないだろうが。カイナはユーフェミアをそう称した輩やかいに文句を言いたくしてしよがなかつた。

「少しお節介だったかもしれませぬ」

「い、いえ。そんなことは」

柔らかに微笑んだユーフェミアに、そう返すのが一杯一杯だった。コーヒーでも飲んで落ち着こうと思つのに、手が震えて飲めそうになかった。声を上げて笑われる。カイナの頬が羞恥で少し染まった。

「スザクはよくあなたの話をするんですよ。カイナさんに思い切り髪の毛をかき混ぜられる時があるって。最初は何をするんだろって思ったそうです。でもそれはいつもスザクが落ち込んでいる時で、あなたの手が離れた後は元気になっていると気づいたって。それがあなたなりの励まし方だって分かったと。あなたらしい分かりづらい励まし方だって笑ってました。」

カイナさん。もうあなたの中にはスザクが、いえ、彼以外にも住んでいらっしやる方たちがいいますね？ あなたが持つ素晴らしい力を、どうかその方たちを守るために使って下さい。今日、私はあなたにこれを言いたかったのです」

言い終わったユーフェミアはフォークを動かしてケーキを一口頬張った。カイナは美味しそうに頬を緩めているユーフェミアを茫然と見ていた。人によってはそれだけで呼んだのかと怒るかもしれない。だがカイナにとって忘れ難い日となるのは、間違いなかった。激情が腹の底から湧き上がり、人目も気にせず泣き喚きたい気になった。ごちゃごちゃといろんなことが身体の中を渦巻いた。

自分がしたことで元気になったと聞いて嬉しかった。励ましに気づかれていたことが気恥ずかしかった。自分の中にいる彼らのことを考えると温かくなると同時に苦しさも感じた。彼らがいらない未来を考えられないことが息苦しくて仕方なかった。

「あなたに言われてからいろんなことを考えました」

唇に力を込めながら、カイナはゆっくりとしゃべった。気を抜くと本当に泣いてしまいそうだった。

「お恥ずかしい限りですが、確かに私の中は空っぽで、いつだって飢えていて、渴いていて、どこかが痛かった。でもあなたに問われ

るまで、私はそのことにすら気づいていなかった。愕然としました。でも気づいたからといって何をどうしたらいいか分からなくて、困り果てていたらスザクが私の部屋の前に居たんです。心配で来たと言った彼の顔を見て、自分の中にもあったのだと気づきました。スザクが、ロイドが、セシルが、特派の皆がいたのだと」

そこまでカイナが一気に語ってユーフェミアを見ると、彼女はとも優しい目をしていた。母親が子供を見るようなその目に、カイナはすぐく恥ずかしくなつて視線を下げ、コーヒーの水面に映る自分を見つめた。子供みたいな顔をしていると思った。

「皆が笑っていると飢えも渴きも痛みも感じなくて。このままでいられたらいいなつて思いました。けど……」
「けど？」

一端言葉を切るとユーフェミアが先を促してくる。気合を入れるように息を吸い込んだ。ナリタで出会った少女の気高い背中を、冷たい石の感触をカイナは思い出す。

「特派は前線で戦うわけじゃない。だけど軍に居て、戦いのための兵器を生み出している以上、私たちは戦いで生まれる悲しみや憎しみを背負わなきゃいけない。私はあいつらに、そんな暗くて冷たくて、とても重たいものを背負つて欲しくないんです。それらはきつとあいつらを苦しめて傷つける。」

特にスザクなんかは、ほら、馬鹿じゃないですか。あいつは他にもいろいろ背負いたがるから、少しでもこつちが軽くしてやらないとこのままじゃいつか潰れてしまう。まだセシルたちは自覚があるけど、スザクは自覚ないから性質たちが悪い」

スザク達のことを考えながら話していると、自然に身体から無駄

な力が抜けた。余程緊張していたらしいと、カイナは笑った。泣きたい衝動はどこかへ行っていた。代わりに腹の底が温かくなる。腹を温めた熱が、何かを浮かび上がらせた。ああ、そうか。欲しかったものをようやく見つけられた。

「あいつ、スザクほど戦場が不釣り合いな男も中々いないですよ。でもあいつは戦いに身を投じずにはいられないみたいだから、自分を傷つけずにはいられないみたいだから。面倒くさいけど俺は、私はこれから探そうと思うんです」

「探すつて、何をですか？」

最後の一口にフォークを刺していたユーフェミアが、顔を傾けて鮮やかな髪を揺らす。どこからどう見てもただの可愛らしい少女だった。さつき見た気迫はどこにもない。きっとどちらもこの少女の本質なのだろう。本当に面白い皇女様だとカイナは思った。

「戦いをなくす方法ですよ」

「えっ？」

「戦いがなくなってしまうえば、いくらスザクが馬鹿だろうと戦えないですからね。名付けて『戦いをなくしてスザクをいじめよう作戦』です。人に説教しときながら無茶ばかりする罰だ。今からでも泣きながら俺にわびる姿が目に見えよう楽しんでね」

そう言っただけカイナは悪戯を思いついた子供のような笑い方をした。とんでもないことを言っている自覚はある。ユーフェミアだって驚きに目を見張っている。驚き具合は空中で止まったフォークを見れば一目瞭然だった。カイナの目がキラリと輝く。

「隙あり」

「あ」

「むぐぐ。ご馳走様」

口の中がクリームの甘みで一杯になった。

唇をペロリと舐めたカイナがユーフェミアを伺えば、少し頬を染めて唾然としている彼女の姿が見えた。いくら庶民派皇女様でもこんなことはされたことがなかったのだろう。肩を震わせてカイナが笑うと、ユーフェミアは「もうっカイナさん！」と怒って、それから声を上げて上品に笑った。

「ふふふ。じゃあ私もその作戦に参加させてもらってもよろしいですか？」

「へ？」

すっかり冷めてしまったコーヒーを飲もうとした時、ユーフェミアが言った。彼女は可愛らしく片目をつむって見せた。

「『戦いをなくしてスザクをいじめよう作戦』です。私もあの人はわたくし無茶をしすぎだと思いますから」

「……ふっ、あはははは」

先ほどからなんでこんなに楽しいのだろう。目の前の少女は苦手だったはずなのに。カイナは笑いながら片手を差し出した。ユーフェミアも意図を悟って手を差し出してきた。お互いの手が触れ合う。

「では今から私たちは同士、ですね」

「はい。共に歩いていきましょう」

銀の王は、ある兄妹の幸せを願い、彼らが安心して過ごせる世界を作ると誓った。

黒の騎士は、ある人たちを守りたい、彼らが戦わずに済むようにと歩き始めた。

彼らはゴールを目指して1歩を踏み出した。その先に待つモノは、銀の王が描く世界か。黒の騎士が求めた世界か。それとも……。

第三十六話「探し求めた答え」（後書き）

最長記録となりました。もう、両サイドの文章量を合わせようなんて考えは捨てております（おい）。無理に縮めるよりも書きたいものを詰め込みました。

とはいえ、まだまだ納得できる域には達しておりません。大事なところなのでもっと掘り下げたいし、ちゃんと描写もしたいのですが、いかんせん、実力不足で、今の私にはこれが限界でした。少しでも思いが伝わると良いなと思っております。

さて、これにて第三章は終わりです。現在第六章のはじめを描いています。全く筆が進んでいないのです。すぐに更新追いついてしまいうので戦々恐々としております。

あと少々忙しくなるので連日更新はきつそうですが、なるべく細かく更新していけたらと思うのでお付き合いのほどよろしくお願ひします。

2011・03・31修正

第三十七話「人間らしく」

ライがルルーシユの秘密を知り、彼と同じものを目指すと決めた日から1週間が経過していた。

マオの脅威はすでに去り、肩の怪我ももう痛まない。自由に時間がとれるライが時折ゼロの影武者になったりしつつ、黒の騎士団は順調に勢力を拡大していた。そんなある日、

「藤堂中佐、ですか」

キョウトから補充物資だけでなく、1件の依頼が騎士団に届いた。藤堂中佐の救出だ。ライにそのことを伝えていた扇が神妙に頷いた。

藤堂中佐と言えは^{いっしょくま}巖島の合戦でブリタニアに対して唯一勝利をおさめた名将として有名な人物だ。彼の名前は日本人の支えともなっている面がある。実際の人柄もよいらしく、彼の人望は厚い。

ナイトメアなしでナイトメアの部隊を打ち破った、ただ1人の將軍。ゼロも藤堂に一目置いていた。そんな人ゆえに、救出という言葉がライの中で引つ掛かる。

「しかし、捕虜になっていたんですね」

「そうらしい。なんでも四聖剣を逃がすために自ら囷となったそう
だ」

扇の言葉を聞いて納得したライは、視線を正面に向けた。似た形のナイトメアが数機並んでいる。1機は青い塗装の月下先行試作機であるライの機体であり、他はその後に作られた月下だ。灰銀色でカラーリングされた月下が四機と、1機は黒色で頭部に赤い髪の毛のようなものが二房ついている。黒が指揮官機なのだろう。これら

5機の月下に輻射波動はない。予算の問題か機能の問題か。さすがに専門家ではないライにそこまで察することはできないが、自分の乗る機体の後に作られたのだから性能は上がっているのだろうと月下を眺め、その周りで調整に追われているパイロットへ視線を移した。

見知らぬ顔が4つ。そう。月下のパイロットは黒の騎士団の隊員ではない。

「彼らが四聖剣、か」

藤堂中佐と彼らがいるところに負けはないと言われているらしい。ライの隣で同じく月下を見ていた扇が笑った。

「しかし月下がこれだけ並ぶと壮観だな。頼もしいよ」

「そうでしょ。つくんの結構苦労したんだから」

扇に答えたのはライではなく、見知らぬ金髪の女性で、煙管を口にくわえていた。褐色の肌をしていて顔立ちには東洋系だが日本人には見えない。まあ、ライ自身も日本人の顔立ちではないので人のこととは言えないが……首をかしげていると扇が彼女を紹介してくれる。

「こちらはラクシャータさんだ。紅蓮式式や月下の開発者だよ」

「紅蓮と月下の……あの、ライです」

少し驚いてから名乗ると、ラクシャータはライを興味深そうに眺めた。どうにも居心地の悪い視線だった。

しかし開発者が黒の騎士団に来たということは、騎士団にとって大きな前進である。やはり専門家が1人いるのといえないのではまったく違う。他にも数名、白衣を着た見知らぬ者たちがいるので、彼らも技術者なのだろう。

「ふうん。あんたが……興味あつたんだよね。あんな戦果をあげるぐらいだからどんな化け物かと思っただら、可愛いボウヤでびっくりしたよ」

彼女は楽しそうだった。そして「今回も期待しているから」と言い残して他の機体を見に行った。少々変わった人のようだが、紅蓮や月下を作るぐらいだ。優秀な人であることは間違いない。ライと一緒に彼女の背を見送っていた扇も最後に一言告げてから、他の幹部の元へ向かった。

「すぐに出撃だからな。機体の最終チェックと調整、怠るなよ」
「はい、分かりました」

今回の作戦は非常に分かりやすいものだった。

月下に乗った四聖剣による正面ゲートの突破による敵の誘引。その間にカレンとゼロが中佐を救出。黒の騎士団は四聖剣の援護、藤堂中佐の機体搬入と撤退支援を行う。今回はコーネリア不在ということと比較的楽に推し進められると思われた。また、藤堂中佐が捕えられているチョウフ基地はナイトメアの配備数が少ない。とはいえ油断は禁物だ。

ライが担当するのは基地周辺から敵部隊を引き離す陽動の役割。質問はあるかと聞いたゼロにライは手を上げた。

「僕にバックアップをつけるということなんだが」

「扇の隊の無頼を2機つける。不足ならもう2機回すが」

「逆だ。市街地で月下の軌道力を活かすために無頼では困るんだ」

無頼は不要だとライは続けた。決して単騎で無茶をしようというつもりではなく、冷静に考えた上での判断だった。

月下と無頼では基本速度がまったく違う。気にせず月下を前進させれば隊を分裂させてしまい、かといって無頼の速度に合わせてしまえば月下の利点を活かせず、逆にライを危険にさらす。ライの月下がやられれば他の無頼も危険となる。それは作戦の崩壊をも意味し、下手をすれば黒の騎士団そのものも危ない。

単独は危険だが、ライの月下に関しては単独の方が安全だった。組むとしたら四聖剣の月下か、カレンの紅蓮式式ぐらいだろう。語ったライにラクシャータが頷いた。

「まあ確かにボウヤの動きについていける無頼なんて存在しないからね」

「なるほど。単騎でこそ働けるということか」

「ああ。それに陽動へ戦力を割き過ぎてしまうと突破が疎かになる可能性もある。それは避けたい」

ゼロが腕を組んで頷いた。

「ならば玉城の地上部隊を支援につけることにしよう。敵を上手く誘き出し、集中砲火で殲滅しろ」

それならばとライも頷き、他に異論もなかったので作戦会議は終了となった。作戦開始は30分後。ゼロの声に幹部たちは次々と持ち場へ向かって行く。その中でただ1人、カレンだけがライへと近づいてきた。ライが首をかしげていると聞きたいことがあるのだと言う。カレンはライを真っ直ぐ見つめた。

「さつき単独行動を主張してたでしょ。最初はうぬぼれるなっと思っただけど、あれって他のパイロットを危険にさらさないためじゃないの？ 月下についていけない無頼じゃ、確実に撃破されちゃうもの」

カレンの指摘していることは間違いではない。だが、ライは肩をすくめて見せる。高評価を受けるのはむずがゆかった。

「さあどうだろ。僕は功績を自慢したいだけかもしれないよ？」

「ふ、ふふ……じゃあ、あとでその自慢を聞かせてもらうことにするわ」

しばし唾然としたカレンは、小さく笑った。戦闘前にもかかわらず、彼らの間には穏やかな空気が流れる。作戦の話はそこで終り、カレンは別のことを口にした。

「あなた、大分人間らしくなったわね。最初は人形みたいだったもの……うん、随分変わったわ」

「そう、かな」

「そうよ。でもいい？ ちゃんとした人間になるまで死なないでよね。私はあなたの本性が見てみたいの」

どうやら気を使われていたらしいと、ライはようやく気付く。カレンの気遣いがあるがたい。そしてふと思えば、ありがたいという感情を、最近まできちんと理解していなかった気がした。なるほど、これが人間らしくなった、ということなのか。

だとしたらそれはきつと……カレンやルルーシュ、ナナリーや皆と過ごしたおかげなのだろう。ライは笑った。自然と笑えた、気がする。

「君こそ死ぬなよ。僕が困るから」

「困る？ どうして？」

「君が言うところの”ちゃんとした人間”とやらに戻れたら、きっとこれまでの生徒会業務の埋め合わせを、君に求めたくなるだろうからね。それまでに死なれてしまったら埋め合わせを要求できなくなる」

「うっわ、ヤブヘビ。……そうね。じゃあブリタニア軍人のスザクにでも」

「彼には彼で貸しがある。軍務とはいえ休み過ぎだ」

言いわけを先んじて封じる。逃げ場はないぞ、とライがカレンを見れば、彼女は穏やかな顔をしていた。とてもこれから戦場に向かうとは思えない。

「ま、元々死ぬ気なんてないからね。あ。でも要求するときはお手柔らかに頼むわ」

カレンは、ライが知っている中で一番綺麗な笑顔を浮かべた。

第三十七話「人間らしく」（後書き）

マオの話飛ばしました。何回書いても「あれ。ライ、いらなくな
？」な、展開になったので。テンポも悪くなりましたし。

第四章開幕です。第四章は章のタイトルに悩みました。更新遅れ
たのはそれが原因だったりします。

では、二人の物語をこれからも応援してやってください。

2011・03・31修正

第三十八話「チヨウフ基地」

「スザクにチヨウフ基地へ出頭要請？」

「うん。僕もだけどね」

ロイドの後半の言葉を聞き流し、カイナは腕を組んだ。

「俺には？」

「出でないね」

首をかしげる。カイナに要請が出てスザクにないはあったが、逆は初めてだった。唸っているとセシルが笑った。

「カイナさんは最近出勤が多かったし、今回は休暇だと思ってゆっくりすればいいのよ」

「……うん……なんかひっかかるなあ」

セシルはそういうものの、しっくりこなかった。大体カイナが家に帰っても寝ることしかできないのだが、これでは気になって身体を休めるどころじゃなさそうだ。

「なあ俺もついていっていいか？ あ。できればクラブも」

「別についてきちゃダメって言われてないしねえ。いいんじゃないの？」

「ちよつとロイドさん！ カイナは家でゆっくり休んでよ。近頃、君は忙しかったんだから」

ロイドは適当に了承したものの、スザクが猛反発した。しばし力

イナとスザクが睨み合うように対峙する。スザクの過保護ぶりは多少マシになったものの、健在だ。カイナは眉を寄せて、ため息をつく。

「分かった」

彼女が引き下がるとスザクは安心したように笑った。だが、甘い！ カイナの目が怪しい光を帯びる。わざとゆっくり大声を出す。

「休暇だから俺は好きなこととしていいよな。免許も取ったしバイクに乗ってどっか行こうかなーっと」

続いた言葉にスザクの笑顔は固まったが、カイナは気にせずに靴の中からバイクのカギとヘルメットを取り出した。ロイドが面白そうな顔でスザクに言う。

「あはは〜。あれは絶対追ってくるつもりだよ？ どうする、スザク君？」

しばらく考え込んでいた少年の許可は、すぐに降りた。勝手について来られるよりも一緒にいた方がマシだった。カイナもスザクにやられっぱなしではない。思わずガッツポーズする彼女の隣でスザクが肩を落とした。

「君、性格変わってないかい？」

「成長したと言ってくれ」

こうしてカイナのチョウフ基地行きが決まった。

コーネリア総督も中々えげつないことを考える。

カイナが視線を斜め下に向けると、スザクとロイドが並んでソファに座っていた。彼らの前には低いテーブルがあり、白い紙が何枚も広げられていた。ロイドが文句を言いながら正面に座る男の指示に従い、広げられたそれらの紙にサインをしていく。

ソファの横に立っているカイナからでは俯いているスザクの顔は見えないものの、膝の上で握りしめられた拳が震えているのを見れば、十分に思えた。

日本人であるスザクに日本の英雄、藤堂中佐を殺させる。

捕虜である藤堂という男は日本の反ブリタニア組織の中でも象徴的な存在だ。聞いた話だとナイトメアなしの部隊でナイトメアの部隊を打ち破った名将だとか。そんな男をスザクの手で処刑させるつもりなのだ、コーネリア総督は。しかもスザクと藤堂は知り合いらしい。ほんとにえげつないが、戦略的には間違っていない。

以前のカイナならそう冷静に分析し、行った相手を褒めただろう。無関心がための中立。しかし今カイナは中立ではない。スザク、引いては特派の立場にある。

くそっあのババア！ 厚化粧で年増のシスコンのくせに！

カイナは心中を酷く荒げながら、処刑の注意事項について説明する男と、黙り込んでいるスザクを見下ろしていた。本能に身をゆだねて紙切れをめちやくちやに切り裂いて、じゃあ俺が殺してやると叫べればどれだけ楽か。

処刑の執行人と戦場で誰かを殺すことは、同じであるようできてまったく違う。処刑は無抵抗の相手を殺すのだ。代われるものなら代わりたいたい。しかし、その方法がいくら考えてもカイナには分からなかった。拳を握りしめ、不謹慎にも黒の騎士団でも現れてくれ、とまで願ってしまう。

「なんだっ？」

まるでカイナがそう願うのを待っていたかのようなタイミングで、大きな爆発音と警報が耳を打った。

サインに疲れたと喚いていたロイドが眼鏡を輝かせる。急いで窓を見ると音のした方角から黒い煙が上がっていた。襲撃だ。黒の騎士団かはまだ分からないものの、どうやらカイナの願いが叶ってしまっただようである。

「やっぱりカイナ君の勘って当たるねエ。科学者としてはあまり認めたくないんだけど……あ。今度調べさせてもらってもいい」

「ロイドさん、こんな時に不謹慎ですよ！」

「え、なんで……ああ、いえ、なんでもないです」

セシルの咎める声に、カイナも内心謝ってしまったのは、仕方のないことではあった。

第三十八話「チヨウフ基地」(後書き)

カイナさん。吹っ切れたようです。今回はちょっと短めで。次はお待ちかねの戦闘です！

2011・03・31修正

第三十九話「白の騎士」

「作戦開始まで120秒」

ライは自身を落ち着かせるために深く呼吸をした。今から彼が行うのは敵の陽動だ。敵部隊を基地周辺から引きはがし、各個撃破しつつ玉城たちの地上部隊がいる場所までおびき出したところを、集中砲火で殲滅する。月下、およびライの担う役割は大きい。失敗すれば自分だけでなく玉城たちも危険にさらす。

通信が入った。

「こちらゼロ。陽動作戦を開始せよ」

「了解」

待機していたトレーラーから飛び出す。まずは騒ぎを起こさなければならぬ。ライが周りを見ると検問待ちの軍用トラックがゲートに並んでいる。ラクシャータからふくしゃ・はどう放射波動をなるべく使うように、とは言われているが、ここはハンドガンを使うことにした。放射波動はエナジーの消耗が激しいのだ。

トラックは次々と爆炎を上げて辺りを明るく照らした。そのままライが真っ直ぐゲートへ向かうと2機のサザランドが動き出す。すぐさま撃たれたライフルを避け、すれ違いざま1機に放射波動を撃ち込む。サザランドは上半身を膨れ上がらせ、一瞬遅れて爆発する。前回使った時よりもエネルギー効率、威力共に上がっているようだ。これならばもう1回、2回使っても問題ないだろう。

派手な動きをした後、こちらからの攻撃はなるべく避け、回避に専念していると次々と敵機が集まってくる。あまり攻撃をしかけなさすぎると怪しまれるのもう1機に放射波動を撃ち込む。サザ

ランドが膨れ上がり、コクピットが射出されたすぐ後に爆発、炎上した。

「輻射波動の威力はどう？ なかなかすごいでしょ？」

「確かにすごいが……今は忙しい！」

「えー、いいじゃないの」

突如ラクシャータから入った通信にライは思わず大声を返した。

ぶつくさ文句を言っているラクシャータを無視してリーダーを確認する。予定通りゲートを手薄にできたようだ。ライは突出したサザードランド4機を引き連れて街路を走る。付かず離れずの距離を保ち、誘いだと気づかせないというのは中々難しく、集中力がある。後ろからの攻撃を避けながらライは指定ポイントに辿り着いた。大きな声を発する。

「今だ、撃て！」

「言われなくても分かっちゃあ」

玉城が叫ぶように応え、待ち伏せていた玉城の部隊がサザードへ一斉に攻撃する。画面にLOSTの文字が躍った。

「ゼロ、こっちは片付いた」

「確認した。突入！」

四聖剣の操る月下が手薄になった正面ゲートを突破すると基地のあちこちで戦闘が始まった。ゼロとカレンが隙間を縫うように動き、藤堂中佐がいる収監ブロックへ向かっていく。

油断は禁物だが、順調であった。

「うまくいきそうだな」

ライが呟いたのとほぼ同時に藤堂中佐を救出した一報が届いた。藤堂中佐が乗る予定である機体の搬送も上手くいっている。後は撤収するだけだ。

「聞こえるか、ライ。扇だ」

「扇さん？ どうしたんですか」

機体を反転させようとしたところで通信が入った。画面に映っている扇あいつは険しい顔をしていた。

「エナジーは？」

「……まだ十分動けます」

「ならゼロ達の援護に向かってくれ。白カブトが出た」

「分かりました」

それだけ聞くとライはフットペダルを踏み込んだ。白カブト。黒の騎士団の敵。なぜここにまでいるのかは知らないが、今日こそ倒す！

正面ゲートを越えると、すぐにあの白いナイトメアが見えてくる。しかし既に周りを四聖剣が囲っており、ゼロの的確な指示で白カブトを追い詰めていた。どうやらライの出番はなさそうだ。まあ、なにに越したことはない。

藤堂中佐の乗る月下の攻撃が白カブトのコクピットに当たり、ハッチ上部を切り飛ばした。中にいたパイロットはなんとか避けられしく無事で、顔を上げる。白いパイロットスーツに身を包んだ彼は……ライの思考、ゼロの指示が止まった。顔を上げたパイロットは、

「すげ、く？」

学園の同級生であり生徒会メンバーの、くさ枢木スザクだった。

第三十九話「白の騎士」(後書き)

更新遅れましたすみません。

チヨウフ基地きましたね！ これからどうなるんでしょう。お楽しみに！

えーっと、風邪をひいてしまったので、次の更新は遅くなりそうです。今も頭痛い。いや、ストックはあるんですけども、載せる前の最終チェックがしんどくて(^^)；

なるべく早く治すのでお待ちいただけると幸いです。

2011・03・31修正

第四十話「もう一人の亡霊」

スザクの乗るランスロットが出撃してしばらく、カイナはようやく出撃できた。クラブの駆動系に問題が発生していたらしいのだ。なんとか出撃したものの、あまり無茶するなとロイドにキツク言われた。

保障はできかねたので、カイナは返事をしなかった。うん。嘘はいけない。

索敵能力の高いクラブは敵ナイトメアの情報をすぐさま伝えてきた。カイナは顔をしかめる。見たことのない形が数機と、右手がアンバランスに大きい例の赤い機体、それからゼロのものらしき無頼が的確にスザクを追い詰めていた。通信から聞こえてくるスザクの驚いた声から察するに、戦闘のパターンを分析され、攻撃を読まれているらしい。おそらくゼロの指示で彼らは動いているのだろう。状況を把握したものの、スザクの乗る白い機体”ランスロット”までは距離がある。全速でクラブを向けているが間に合わないだろう。カイナは唇を噛む。不幸中の幸いは、向こうがカイナの存在に気づいていないことか。通常モードになっているライフルを狙撃モードに切り替えた。

「避けるよスザク！」

黒い機体の刃がランスロットに迫っている。カイナはクラブの速度を落とさぬままにライフルを構え、照準もろくにつけず撃った。強硬策だ。

「え、わわっ」

通信からはスザクの慌てた声。黒い機体と白いランスロットが直撃寸前で飛び退いた。……あぶな、スザクに当たるところだった。いや、当たらなかつたのだから良しとしよう。通信から聞こえてくる抗議の声にカイナは耳を塞いだ。

ようやく周りの機体がカイナに気づいてハンドガンを撃ってくる。すべての攻撃を操縦桿とスラッシュハーケンを巧みに動かして避けながら、カイナはほぼ真っ直ぐスザクの元へクラブを進めた。ライフルを標準に切り替え周りを牽制し、敵機の間を縫うように駆け抜けていった。

そしてランスロットと敵機間にクラブを割り込むことに成功する。すぐさまスザクの状態を確認。コクピットハッチの上部を切り落とされていたが、本人に怪我はなく元気そうだ。

一息つく間もなく、先ほどの黒い機体が左から切りかかってくる。似たような機体の中でこの1機だけが黒いカラーリングで、赤い髪の毛のようなものがついている。カラーリングが違うということは、リーダー格なのかもしれない。

すぐさま周りを囲んでいた同型の機体が俊敏に動きまわり、黒の機体と同調するように攻撃をしかけてきた。連携の取れた見事な動きである。今までの黒の騎士団とはどこか違う。だが、

「俺を舐める、なっ」

ソードで黒い機体の攻撃を受け止め、右の機体にライフル、正面の敵2体、および後ろの敵にスラッシュハーケンを放つ。黒い機体以外が後ろに下がったところでライフルからもう1本のソードに持ち替え、味方機に隠れて近づいていた赤い機体へ薙ぐ。

右手を繰り出そうとしていた赤い機体は大きく飛び退って避けた。良い反応だ。退いていなければ今頃真っ二つになっただろう。赤い機体に乗っているパイロットは確実にエース級だと思われた。

「チツ。外したか」

相手を褒めながらも、やはり悔しかったのだろう。カイナは舌打ちした。

左で拮抗していた黒い機体も不利を悟ったのか、すぐさま退く。だが動きを止めず、体勢を立て直している赤い機体を追った。あの右手は厄介だ。攻撃を受け止めようと伸ばされた右腕を、下から払うように切りつける。浅い！

「もう一発！ くそっ新手か」

カイナは追撃を中止する。右前方から青い機体が向かってきている。赤い機体を目で追いながら、ライフルを青い機体へ向けてフルオートで撃つ。今までの相手ならそれで突撃速度は落ちる、はずだった。

「なっ、この動きは」

しかい相手は速度を落とさず真っ直ぐこちらへ向かってきた。真っ直ぐ？ 違う、小刻みに進路変更して避けているのだ。こ、れは！

『君と相対している敵パイロットはまるで”亡霊”と戦っているみたいに思っただろうね。一見避けていないのに攻撃が当たらないんだから』

以前、ロイドに言われた言葉がカイナの頭をかすめた。そう。確かにこれは”亡霊”のようだ。……別の意味でも。

一瞬カイナが気を取られた間に相手の持つソードが間近へと迫り、慌ててソードで受け止めた。カイナの動きがここで初めて完全に止まった。ライフルから接近戦へ切り替え、二振りのソードを振るう

と青い機体が1度間合いを取る。しかしこちらの体勢が整う前にすぐさま攻められる。

「ぐうっ！　なんで！　くそっ」

一合二合と激しい近接戦闘を繰り返す。しかし、カイナの攻撃はまるで予想されていたかのように当たらない。焦りながら他の敵機的位置をレーダーで確認する。どうやらスザクが相手してくれているらしい。こちらを援護する機体はなさそうなのが幸いだっただ。

なんとか動揺を押し隠そうとする。カイナにとって自分の攻撃をここまで予測されるのは、記憶を失ってから初めてだった。まるで自分と戦っているかのような錯覚を覚える。でも、それでいてどこか懐かしい。この感じを自分は知って、いる？　一体どこで？　相手は誰だ？　この青い機体に乗っているのは……青？

「カイナ。お前はどんどん強くなっていくな。もう私では力不足のようだ」

声が聞こえた。次いで苦笑する声もした。自分はそんなことないのだと否定して、銀色をなびかせている彼を見上げれば、青い瞳が自分を見ていた。

「いつつう」

頭に鋭い痛みが走り、カイナは我に帰る。他の敵機が遠ざかり撤退している。レーダーに味方の増援が映っていた。ああそれで撤退しているのか。とりあえずスザクの安全を確保して、それから。正面で様子をつかがっている青い機体を見た。頭が痛い。青い機体が反転する。追いかけては。頭が割れそうに痛い。

待って下さい。私も一緒に連れて行って下さい。お願いです、

第四十話「もう一人の亡霊」(後書き)

お待たせいたしました。第四十話、更新です。

こうなるといいですか。時間を置いてから改めて自分の作品を読むと、恥ずかしいですねえ。書き終わった後の「俺はすごいものを書けた」という興奮がすっかり冷めている心境で読むとね。なんであんなに自信满满だったのかと穴を掘りたい気分です。

完結させたら、地道に修正していきたいです。本当に。

あ。風邪の方は全快！とまではいきませんが、そこそこ回復しました。ただし、執筆は相変わらず同じ話で止まっております。ストックがなくなるのが今一番怖いです^^;

誤字(誤語?)訂正。

2011・03・31修正

第四十一話「心を隠して」

月下の前でライは座り込んでいた。白カブトのパイロットがスザクだったという事実が、彼に大きな衝撃を与えていた。

『ナナリーの騎士にスザクを？』

『ああ。スザクがナナリーの傍にいれば安心だ』

ルルーシュの会話が思い出され、どうしようもない焦燥感が身体を支配した。

ライは苛立っていた。ルルーシュが言うとおり、ナナリーを任せられるのはスザクだけなのに、なんでお前が”そっち”にいるんだ！と。

たしかにスザクがブリタニアの軍人だと言うことは聞いていた。だが技術部だと……ああ、そうか。技術部で開発されたのがあの白カブトか。苦笑し、左手で前髪を掴むように顔を覆った。

「くわくわく枢木、スザク」

ライやカレン、そしてルルーシュと同じく生徒会に所属し、軍務で抜けることは確かに多かったけれど幾度も一緒に仕事をした。仕事だけでない。他愛のない会話もたくさんした。猫のアーサーに噛まれる彼をからかった。1人で抱え込むなど、いつだってライを気にかけてくれた。ルルーシュ、ナナリーと仲がいい彼は、ナナリーがマオにさらわれた時も協力してくれた。そんな彼が、敵。

落ちて着くんだ。

冷静さを取り戻すためにライは己へ言い聞かせる。スザクはライヤカレン、ルルーシュの正体を知らない。明日学校に行けばいつも

と変わらない笑顔で話しかけてくるはずだ。

気づかれるわけには、いかなかった。平常心で、いつもと同じように接しなければならぬ。改めて考えると、それはとても大変なことに思え、ライは深いため息をつく。

コツコツ。彼以外の足音が聞こえたのはそんな時だった。

「どうしたライ。功労者がそれでは負け戦だと思われるぞ」

「ああああ。すまないゼロ。少し気になることがあって」
「気になること？」

ゼロに声を掛けられてライはようやく顔を上げた。仮面をつけている彼から動揺は感じられず、自分を恥じた。誰よりも衝撃を受けたのは、目の前のルルーシュに他ならない。だというのにそれを必死に抑え、自分を励ましくしてくれている。ライは気合を入れ直し、意識を切り替えた。

「途中から現れた黒い新型について、な」

咄嗟に出た誤魔化しの言葉だったが、実際気になっていたことでもあった。ゼロは「ふむ」と頷き、その話題に乗った。お互いスザクのこととはまだ整理がついていない。何よりこんなところで話せる話題でもなかった。

「白カブトに似た、あの黒い機体か」

「ああ……妙じゃなかったか？」

「どうということだ？」

ライはそこで言葉を探した。どう説明すればいいのか。脳裏にある黒い機体を思い浮かべる。

「相手はおそらく僕よりも技量が上だ。普通に戦っていればすぐやられていたと思う。藤堂中佐もあれに乗っているのは歴戦の猛者だと言っていた」

撤退した後、改めて四聖剣、藤堂と挨拶をした際にあの機体の話が出たのだ。機体越しに伝わる気迫が並のモノではない。彼らは神妙そうに語り合っていた。あの相手をよく勤められたな、と藤堂たちはライを口々に褒めた。黒の騎士団の誰よりも戦いを知っている藤堂たちが言うのだから、間違いはない。だからこそおかしなのだ。ゼロも気づいたのだろう。首を少し傾けた。

「だが、僕は相手の動きを読めたし受け止められた。なぜなら」
「なんだ？」

続きを促すゼロに、ライは少し躊躇してから答えた。あまりこの先は考えたくないことだった。

「……僕の動きと似ていたからだ」

最初に介入した際のスラッシュハーケンの使い方は違った。しかしライが近接戦を挑んだ時に相手が見せた動きは、まるで鏡を相手にしているかのように感じた。自分ならこう動く、ライがそう思った動きをしてきたのだ。つまり、あのパイロットは……。

「もしかしたら僕の」

その先をライは言わなかった。ゼロもそれ以上問うことはしなかった。作戦は成功したというのに、2人の心はまったく晴れなかった。

次の日の生徒会室では、スザクの話題で一杯だった。スザクがユ―フェミア副総督の専任騎士に選ばれたのだ。忙しいらしくここに本人はいない。スザクがいないことに少し安堵したライだったが、心の中は複雑だった。友達として喜びたいのに喜べない。息苦しくて仕方なかった。

これで本当にナナリーの騎士がいなくなった、か。思い、ナナリーに視線を送った。少女は優しい色の髪を揺らして笑っていた。

「スザクさんのためにパーティを開きませんか？」

ナナリーが明るい声で言った。次いでミレイが嬉しそうに笑って賛成を唱える。リヴァルもシャーリーも乗り気で、満面の笑みを浮かべている。

きつと黒の騎士団に入っていないければ、ライも同じように心から祝福できたのだろう。スザクが頑張っているのはみんな知っていたから。

「いいアイデアね！　じゃ、全校挙げてのド派手なパーティにしましょ！」

「ねね、ナナちゃん。どんなパーティにしようか」

「よーし、ナナリー！　ここはぜひこのリヴァル様にお任せあれ」

「なーにお任せあれ、よ！　このお調子者が！」

「どわったた。会長ってばひでえなあ。俺だってやる時はやるんですよ」

「ふふ。そうですね。皆さんがとっても楽しめるようなパーティにしたいです。ね、ライさん？」

「あ、ああうん。そうだな」

スザクの騎士叙勲パーティはナナリーの企画・立案のもと、盛大に行われることになった。

もうすでに大騒ぎしながら「ああでもないこうでもない」と話し始めた彼らの横で、ライは視線を彷徨させた。視線はやがて、黙したままのカレンに向かった。彼女もまたライを見ていた。

カレンは病弱なご令嬢の仮面を被ったまま、随分苦しそうな表情をしていた。もしかしたらカレンもライを見て同じことを思ったかもしれない。お互いの握られた拳の震えが、言葉にせずとも心境を語っていた。

表面上には喜びの笑顔を浮かべ、心の中ではなんとも言えないモノを抱えたまま、ライもカレンもパーティの話し合いに参加した。

第四十一話「心を隠して」（後書き）

ふいー。お待たせしました。

修正は完結させてからだなんて言ったものの、気になってしょうがなく、地味に修正作業を進めてました。修正作業に没頭するあまり更新を忘れていたとかそんなことはありませんからね！

最近は丁寧に文章を書くこととしていますが、描写を書きすぎてくどい文章になっている気がしなくもない。適度な描写って難しいですね。精進します。

2011・03・31修正

第四十二話

親の顔をカイナは知らない。顔どころか存在すら知らない。彼女はずっと一人で生きてきた。

腹が減ったら食べ物を探してゴミをあさり、喉が渴いたら汚水を飲み、疲れたら眠りにつく。目的などそこにはなく、本能に従っていただけの当時の記憶はひどく曖昧だ。はっきりと思いつける最も古いカイナの記憶は、視界一杯に広がる拳大の石から始まる。

石は伸びつばなしの前髪をくぐり抜けて右目の少し上に当たり、肌を切り裂いた。どろりとした生温かい液体が目には沁み、反射的に目を閉じる。半分になった視界の中、いくつもの石が自分に向かっているのを認め、カイナは慣れた様子で頭を抱えてしゃがみこんだ。逃げる、抵抗する、といった考えはなかった。状況が悪化するだけだと知っていた。受け入れることが彼女に残された唯一にして最良の選択肢なのだ。待っていればいずれ石の雨は止むのだから、じっとしていればいい。

だがその日は、あまりにも止むのが早かった。

「！」

聞き覚えのない甲高い声が辺りに響いた。

首をひねりながらカイナが顔を上げると銀色の輝きがそこにはあった。黒い目が細められる。

「いつ？ あ！」

「だ！」

石を構えている複数の影と、銀色の光をまとった少年は何事か言

い争い始めた。両者の間に剣呑な空気が流れていく中、カチャカチャという音にカイナは身体を大きく震わせる。彼女だけではない。影達も同じように震え、言い争いが止んだ。少年が怪訝そうな顔をした。

「ラ まっ！ ごぶ か ？」

現れたのは重そうな甲冑に身を包んだ兵士数人。少年を囲んでいた影達は悲鳴を上げて霧散していった。

「 いさ っ？ あな ぶ 」

兵士の中には、少年より若い少女がいた。ふわふわとした黒髪を揺らした彼女は青い瞳を大きく開いた。何やら慌てた様子で兵士に命令していたが、兵士は顔をしかめてカイナを見た。少女はとても怒っていた。カイナはそのやり取りをただ見ていた。逃げようかと思っただが、足に力が入らず断念したのだ。……視界の隅で銀色が動いた。別の兵士に何事か告げていた彼は少女に駆け寄り、2人は小声で話し合う。頷いた少女がドレスを揺らしながらカイナの傍にしゃがみ、少年が少女に代わって兵士と話し合いを始めた。

少女は真っ白な布を取り出し、そっとカイナの額に押し付けた。白はあつという間に赤黒く染まっていく。その布だけではない。少女が身に着けているドレスも、しゃがんだことで泥だらけになっている。カイナは声をかけてくる少女よりもドレスの汚れのほうが気になって、ずっとドレスを見つめていた。

「 ？」

ふとカイナは顔を上げる。目の前には少年が立っていて、彼は右手を彼女に差し出していた。白くて綺麗な手だった。その手の意味

を、カイナは知らなかった。殴られるわけではないことは理解できても、どうすればいいのかは知らない。だから不思議そうに手を眺めていた。

「
」

ぼうつとしていたカイナの手を、横から伸びた小さな手がつかんで引く張った。驚く間もなく、気づけばカイナと彼らの手はつながっていた。

彼らの手は、とても温かかった。

* * *

少年と少女は領主の子供だった。どうも城を勝手に抜け出してきたらしい。

2人はカイナの怪我を治療した後も、カイナを放り出すことはなかった。彼らの母親と共に様々な事を、物をカイナに教え、与えてくれた。カイナという名前も彼らにもらったものだ。カイナの宝ものである。

『まあ、ちょうどいいところに来たわね。カイナを呼びに行こうとしてたのよ』

柔らかく微笑んで手招きする女性からは甘い匂いがし、中庭に設置されたテーブルの上には空のカップが四つ用意されていた。

『あっカイナ！ 今クッキーを焼いてたの。私がつつたのだから絶対おいしいわよ、食べてって』

部屋の奥から現れた少女がカイナを問答無用で椅子に座らせ、テーブルの上にクッキーを置いていく。どれもこれも不恰好で、なんの形なのか判別しがたい。焦げているものもあった。料理が得意でない彼女が、どうしてわざわざ自分で作ったのか。カイナはその理由を知っていた。細長い魚のようなこげ茶色のものを手に取る。口に入れた時、ジャリツと鳴ったが気にせず飲み込んだ。

強気なことを言っておきながら心配そうな顔をしている少女に、カイナは頷いてみせる。まだ笑顔は、苦手だった。

『はい。とても美味しいです、姫様』

『ほんとっ？ ど、どどん食べていいからね。なんだったらお兄様の分も』

『それはひどいな』

苦笑とともに現れたのは少年だった。驚くカイナと少女に対し、女性だけが落ち着いて『ライ、早かったのね』と入れたての紅茶を彼の前に置いた。彼が椅子を引く音で我に帰ったカイナは、慌ててクッキーを飲み込んだ。苦しい。

『もっもっしわけっライ様の分まで食べようなどと思ったわけでは？！』

『あらカイナ。私だけ悪者にする気がしら？』

『えっえええええっいっえっあわ、私はべ！ がほっかはっ』

『カっカイナ！ ちょっと、大丈夫？ 今のは冗談よ。カイナあっ？』

『あらあらあ、大変』

『母上、そんなのん気な……はあ。カイナが真に受けるから冗談は言わないようにと言っただらう？』
『だってえ』

クッキーの欠片を喉に詰まらせたこの失態は後々何度もからかわれた。その度に赤面して慌ててさらなる失態を重ねていた。

「懐かしい、な」

そつと呟き、カイナは空を見上げた。

記憶を失ってから何度だって見上げた空。残念ながら、求めた色はそこにはなかった。いや、あるはずだった。なのに、どうしてだろうか。色が見えない。

どこからか、声がする。

『て るしに 』！

地面が震えるような鬨とぎの音が、聞こえる。

『待ってくれ、今は』

制止の声を振り切り、たくさんの人間が武器を手に駆けて行く。泣きそうな顔をした”彼”を置いて行く。……カイナ自身もその一人だった。

頭がひどく重かった。反対に体は異常に軽く、どこに向かうかも分からぬままに走って、走って、走って、ふいにカイナが立ち止まった。黒い瞳が大きく開いた。視線の先には、

『妃様？』

手に短剣を握った黒髪の女性がいて。彼女は短剣を振り下ろそうとしていて。その体勢のまま、彼女は動かなくなっている。胸から槍のようなものが生えていて。

わけが、分からなくて。

『あああああああああ』

両手を占める剣が邪魔だったので放り投げて走った。ゆっくりと倒れて行く彼女の体を抱きとめる。槍が引き抜かれた胸からは血肉が飛び出していた。理解が追いつかない中、カイナの手は彼女の短剣を握っていた。

『がはあっ』

槍を持った男が倒れるのに目もくれず、女性を抱きしめていた。温かかった。いつも優しく抱きしめてくれる両腕は、ピクリとも動かない。優しく名前を呼んでくれる唇からは、開けっ放しであるのに呼吸音すら聞こえない。青い瞳はどんよりと虚空を映すばかりで、こちらを見てはくれない。

『なんで……何が起こって』

少し視線を動かした。もしかしたら、よく似た別人かもしれぬ。差異を求めた先には淡いピンク色の花が散らばっていた。こひゅつと奇妙な音が自分の喉からした。

花の名前など知らない。だが見覚えは、あつた。カイナがとある少女にあげたものと似ていた。

違う違う違う！

否定するために顔を上げた。花に伸ばされた白い手。泥にまみれた黒い髪。腕の中にいる女性とよく似た顔と青い瞳。

『……っ』

第四十二話 「(後書き)」

お待たせしました。ようやく更新です。

時間軸がごちゃごちゃしているのはわざとですすみません。

なるべく原作を壊さないように気をつけてみたのですが、どうでしょうか。間違っているところがあればこっそり教えていただけるとうれしいです。

あと、タイトルもいろいろ悩んだ末にこうなりました。さ、サボったわけじゃない、ですよ？

2011・02・23(水)修正

03・31(木)修正

第四十三話「自然と零れた記憶の欠片」

ライはナナリーと屋上に来ていた。屋上の風を感じたい。少女のささやかな願いを叶えるために。

ナナリーは礼を述べてから息を思い切り吸い込んだ。ライには分からないものの、彼女が言うには屋上の風と地上の風は違うらしい。同じように息を吸い込んでみた。……やっぱりよく分からなかった。一方のナナリーは、ウエーブした柔らかい髪が風に揺らされるだけでも楽しそうで、いつも以上に穏やかな顔をしていた。

「空は青いですか。木々は緑ですか？」

「ああ。いつも通りだ」

「そうですね……良かった。まだ思い浮かべられます」

彼女は目が見えない。だが生まれつきのことではなく、目の前で母親が殺されたショックで見えなくなった、心因性のもらしい。いつか見えるようになることを、ライはその話を聞いた時から願っている。同時に、願っているのは自分だけでないと確信してもいた。心やさしい少女の幸せを誰もが、少なくとも彼女の周りにいる人間は願っているはずだった。

昔見た光景を思い浮かべているのか、ナナリーは笑顔を見せた。

「そつえばライさんの瞳は青いそうですね」

「え、ああ」

突然の話題にライは少し戸惑った声を上げる。少女は気にせず空の方へ顔を向けた。今日はとてもいい天気で、ところどころ白い雲は見えるものの、心地よい青空が広がっていた。空を飛び交う鳥が

気持ちよさそうに風を浴びている。ナナリーの目は相変わらず閉じられているが、もしかしたら彼女には青い空が見えているのかもしれない。

ふと、そんなことを考えた。

「どんなお色なのかとお兄様にお尋ねしたら、空のように澄んだ青色だと教えていただきました」

一体どんな想像をしているのか。ナナリーはうつとりした顔をしないで、思わずライは苦笑した。彼女の中で自分がとてもきれいな存在だと確定される前に訂正をする必要があった。

まったく。ルルーシュもナナリーに適切なことを言うものだ。後で彼にきつく注意しておかなければ。

「よくあいつにも言われたけどね。僕の目は空みたいに綺麗ではないよ」

だからあまり期待しないで。目を開けてがっかりされるのも辛いからね。「冗談交じりにライが言った。しかしナナリーは首をかしげてライを見上げる。」

「あいつ、とはどなたのことですか？」

「え？」

一瞬何を問われたのか。ライは理解できなかった。

「お兄様のこと、ではないですよね」

「あ、ああ。そうだ、ね。……ねえ、ナナリー。僕はさっきなんて言ったかな？」

「確か……」よくあいつにも言われた」と、おっしやっただように思

います」

思案しながら言われたナナリーの言葉に、ふむと頷いた。記憶を辿れば、確かにそんなことを言った気がする。けれど、”あいつ”に該当する人物がライには思い浮かばない。ナナリーが言う通りルルーシュではない。スザクやリヴァル、生徒会のメンバーでもない。黒の騎士団でもない。他に交流関係などないはずだ。 ”今”の自分には。

「ダメだ。僕にもなんでそんなこと言ったのか分からない」

「もしかしたら、記憶が戻りかけているのかもしれないね」

「っ！ そう、だね」

ライは嬉しそうなナナリーに笑顔を返せなかった。

あんなにも追い求めていた記憶だというのに、戻ってしまったら、それでナナリーを、ルルーシュを、みんなを傷つけてしまうのではないか。そんな不安を抱き始めていた。奇妙なものだとつくづく彼自身も思う。以前は記憶がなくて不安だったというのに。

「ライさん、どうかされましたか？」

目が見えないはずだが、ナナリーは敏感に何かを感じ取ったらしい。不安そうな表情でこちらを見上げていた。

「え、ああごめん。いや、あの雲がさ」

「雲？」

「その……以前ナナリーが作ってくれたおにぎりにそっくりだなあって」

とっさに口走ってしまった言い訳だった。本当のことは言えなか

った。

「まあ、ふふふ。そういえばそろそろお昼の時間ですね。お腹が空いてきました」

なんとかごまかせたらしい。戻りましょうかと笑う彼女をじっと見つめた。

ああ、どうか。

彼女に合わせるように笑いながら、ライはどうか、と願う。どうか、少しでも長く今のままでいられますように、と。みんなに拾われた”ただのライ”で在れますように、と。

「そうだね。早く帰らないとルルーシュに怒られそうだ」

「……お兄様は心配しすぎなのです」

軽口を叩いて、平静を装う。

あいつ、か。

ナナリーの車椅子を押しながら、ライが声には出さず口の中で転がすように呟くと、彼の心はほんの少し温かくなり、同時に心臓が掴まれたような苦しみを感じた。その苦しみはどこか、罪悪感に似ていた。

『ライ様』

後ろから聞こえた自分を呼ぶ声に、彼は耳を塞いだ。

第四十三話「自然と零れた記憶の欠片」（後書き）

なんか、盛り上がってきました。このまま一気にゴール……といけたらいいですね！

最近はモチベーションが下がってきたので、どうにかあげる為にモザイクカケラ（ロスカラED曲）を聞きまくってます。何度聞いてもいい曲だ。

後はニコニコ動画でロスカラのMADを見てますね。ニコニコ以外でお勧めあれば教えていただけるとうれしいな！

2011・03・31（木）修正

第四十四話「チガウ」

時はチヨウフ基地が襲撃された日に戻る。

黒の騎士団が撤退した後、カイナがクラブから降りてこなかった。不審に思ったスザクやセシルは何度も通信を開いたが応答はなく、外から声をかけても同じく。心配になり外からハッチを開けると、彼女は両腕で頭を抱え、うめき声を上げていた。スザクが慌ててカイナをコクピットから引き上げる。成すがままに身を任せていた彼女の身体は、とても熱かった。

「うああ」

「カイナさんっ？ ひどい熱。メディカルセンターに連絡を！ はやくっ」

「はっはい！」

セシルが周りに指示を出し、若い兵士が駆けていく。その間もカイナはずっと頭を押さえ続けていた。必死にスザクやセシルが声をかけるも、まったく聞こえていないようで返事はない。ただただ苦痛に喘いでいた。

「ぐうっ ああああああっ」

「カイナ！」

安静にさせようと身体を抑えれば暴れ、人の手が届かないところに行こうとする。うめき声と相まって、まるで手負いの獣のようだった。

触れられるのを怖がるくせに、黒い瞳はどこか寂しそうで……しかし近づけば暴れて彼女自身を傷つける。どうすることもできずス

ザクがち唇を噛んでいると、ようやく救急隊員がやってきた。安堵の息をついたのもつかの間、本当に大変なのはここからだつた。

白衣を来た隊員を見た途端、カイナが今まで以上に暴れ始めた。慌ててスザクが抑え込もうとしたが、あり得ないほどの力で引きはがされる。応援に来たブリタニア軍人たちとスザクで取り押さえようとしても、彼女の動きは病人とは思えないほど俊敏で、捕らえられない。

……事態が収拾したのは2時間後。カイナの体力が限界にきて片膝をついたところを、数人がかりでようやく抑え込んだ。

注射を打たれて意識を失ったカイナの熱を測ると40度を超えていたため、そのまま緊急入院となった。高熱の原因は今なお不明だ。また暴れ出す危険性があったので、カイナは病室のベッドに縛り付けられて寝かされた。彼女の顔色は真つ青を通り越して色がなく呼吸も浅かったため、まるで死んでいるようにスザクには見えた。

ピツピツと一定のリズムで音を立てる機械だけが、彼女の生存を教えてくれていた。

* * *

特派にその連絡が入ったのは、チヨウフ基地の一件から3日後の昼過ぎだった。休憩から帰ってきたスザクは、数秒の間、何を言われたのか分からなかった。

「え？」

思わず聞き返した彼に、セシルは怒ることなくもう1度告げた。

「カイナさんが病室を抜け出したらしいの」

ゆっくりと言葉が体に染み込んでくるように感じた。沸き起った感情は色々なものが混ざり合っていて、彼自身にもはっきりと認識できなかつた。

「あんだけぐるぐる巻きにしたのにねえ。演技する元気戻ったみたいだし、復帰するのも早そうで良かったよ。彼女は貴重なデヴァイサーだからね」

のん気な口調でロイドが言う。詳しい話を聞くと、どうやらカイナは今朝目覚めたらしい。最初こそ混乱していたカイナは自分の状況を理解すると大人しくなり、拘束を解いたところで逃げ出したようだ。

「今朝つて、そんな話僕は聞いてませんよ！」

思わず大声になったスザクを、ロイドは見た。メガネの向こうにある目はいつもと同じように笑っていたが、いつもとどこかが違った。違いはごく僅かで、気づいたのは付き合いの長いセシルぐらいだったろう。セシルはそっと目を伏せた。

「スザク君。君は」

* * *

「探してきます！」

それ以上、スザクは耐え切れなかつた。

「あつスザク君っ？ 待って」

「おい枢木クノキ！」

セシルや他の職員たちの制止を振り切り、スザクは傘を片手に特派を飛び出した。

『スザク君。君は少し』
『違う！』

ロイドに言われた言葉が頭から離れない。思い出したくなくて、カイナのことを考えた。

『君は少し勘違いをしていないかい？』

しかし考えれば考えるほど、思い出す。スザクは足を止めて傘を放り出し、両手で耳を押さえた。

『カイナ君はちょっと変わったただけの、ただの人間だよ。決して君の”ヒーロー”なんかじゃない』

『そんなの、言われなくても分かっています』

声を荒げるスザクと反対に、ロイドはいつもと同じ態度のままだった。

『そ？ ならいいけどね』

メガネのずれを細長い指で直した彼は、容赦なく続ける。

『どうも君が、カイナ君に寄りかかっているように見えたものだから』

『ら

「違うんだ。違う」

あの時出てこなかった言葉は、雨と一緒に地面へと吸い込まれていった。

第四十四話「チガウ」(後書き)

時は〴〵に戻る、という表現は、自分的にあまりしたくない表現でした。

しかし自分にはもっとこの場面に合った表現法が思いつかず、こうなりました。

とはいっても、この表現を駄目だと言っててるんじゃない、この場ではもっと違う方法があった気がして……。語彙増やす方法って本を読むだけしかないのかな。

そんな感じの四十四話でした！ 過去編長そうな予感。

2011・03・31(木)修正

第四十五話「完璧な布陣」

「僕を幹部に？」

「ああ。私だけでなく、扇たちも望んでいる」

ライを部屋に呼んだゼロことルルーシュは、そう話を持ちかけた。ライの幹部昇格は以前から考えていたことだったが、さすがにゼロ1人が推して幹部にするのは難しかった。可能は可能でも組織内の不和を招くことは避けたかったからだ。条件は揃い、今ようやく叶えられる。

彼は黒の騎士団内でも頭角を現し、組織にとって必要不可欠な存在になっていた。

「不満か？ お前の活躍は黒の騎士団を支えている」

青い瞳が迷っているのを見て、仮面の下でルルーシュの眉間に力が入った。前々から思っていたが、どうもライは自分を過小評価する一面がある。彼には記憶がないため自分に自信が持てないのだろう、と理解はできる。だが、少しでも傍にいて欲しかった。ライが幹部になれば、騎士団内で彼と話をしていても不自然ではなくなる。共に背負ってくれると誓ってくれた彼にスザク（親友）の姿を重ねているのは、ルルーシュも自覚はしていた。きつとライも気づいている。それでも、自分は……。

笑い声がした。

「君は相変わらず、僕を高く評価しすぎているな」

「そんなことはない。先ほども言ったが、これは扇たち他の幹部の意向でもある」

苦笑いしているライに言い募る。なんとか説得しようとして口を開き、ライの様子に気がついた。とても苦しげな表情かおをしていた。

「組織として功労者を報いるのが大事だ、っていうことは分かっている」

冷静に話し始めたライの声に耳を傾ける。そう。どれだけ活躍しようとして評価されないというのは、黒の騎士団の士気にもかかわる重要なことだ。下手をすれば組織の瓦解にもつながってしまう。彼ならそのことを理解して幹部昇格を受け入れる、とルルーシュは踏んでいた。だから今、ライが何を悩んでいるのか掴みかねた。言いつらそうに青い瞳がルルーシュから逸らされる。

「しかし僕が幹部になると、どうしても騎士団にいる時間が長くなってしまうだろう？ そうしたらっミレイさんたち、生徒会の皆が心配するから。これ以上、彼らに心配はかけたくないんだ」

途中でライが言い換えたのをルルーシュは察した。
シャーリー。

今、たしかに彼はそう言おうとしていた。その名を出さなかったのは、彼なりに気を使ったからなのだろう。

ルルーシュの事実を知り、悩み、傷ついたシャーリーの記憶は、ギアスで消した。だが、どこかで覚えているのか。彼女は記憶の穴を埋めるように、以前よりライと接するようになっていた。おそらくライはまた同じことを繰り返さないように注意をしているのだ。もう彼女を傷つけないように。ルルーシュを悲しませないために。ミレイ達に心配をかけたくないのも本心ではあるうが。

「そうか」

頷く以外の行動をルルーシュは思いつかなかった。

「まあ、扇さんだったら僕が幹部になっても学業を優先しろ、て言ってくれるだろうけどね」

ことさら明るく言ったライに、心の中で感謝を呟きながら、ルルーシュは微笑んだ。

「……………ああ、そうだな……………」

笑ってから、思った。できればライが記憶を取り戻さず、ずっとこのまま……………ルルーシュの脳裏にカイナの顔が浮かんだ。

『あのパイロットは……………もしかしたら僕の』

スザクが白カブトのパイロットであったのなら、その同僚であるカイナがああ黒い機体に乗っている可能性は高い。そしてカイナはライの知り合いで、同じ動きをしたということは同じ武術を学んだ相手、なのだろう。このままでは確実に2人は潰し合うことになる。黙り込むとライが首をかしげた。

「どうかしたのか」

「い、いや。なんでもない」

* * *

記憶喪失。最初はその言葉を疑い、何が目的なのかを探ろうとし

ていた。

疑心以外の感情をルルーシュが初めて抱いたのは、チエスをした時だった。戯れに誘ったチエスで、ライはルルーシュと互角の勝負をした。胸が躍る対決だった。今でもはつきりと思い出せる。そんな感情が沸いたのは久しぶりで、それから少しずつライに対する考えを変えていった。

クラブハウスにルルーシュが帰れば、ナナリーとライが折り紙をしながら「おかえり」と笑顔でルルーシュを出迎える。気がついた時には、それが普通の生活になっていた。こんな生活もいいと思うようになっていた。これで、

「これでスザクが……いや、俺は何を」

ルルーシュは考えを振り切るように首を振った。それはもう、いや待て。彼は前髪を描き上げようとした姿勢のまま、動きを止めた。たしかにスザクはユーフェミアの専任騎士となった。だが、だからこそあいつをこちらに引き込めればブリタニアに与える影響は大きい。そして今度こそスザクにナナリーを任せられれば。更にはスザクを引き込められれば、カイナをこちらに連れてくることも可能かもしれない。そうすればライとカイナが戦うことはない。考えれば考えるほど、良案に思えてならなかった。

考え込んでいるルルーシュの視界に写真立てが目に入った。ライが来てからしばらく経った頃に、ミレイが記念と言って強制的に撮った写真だ。硬い表情をしているライの首にリヴァルが腕を回して無理やり中央へと引っ張っていて、他のメンバーが2人をそれぞれの表情で見ている。

こうして改めて眺めてみるとライの変化が良く分かった。当時は人形のように表情も変わらなかった。雰囲気も今とは大分違う。時折ではあるが柔らかく笑うようになったし、驚いた顔も、怒った顔も、拗ねた顔もするようになった。

写真立てを手に取る。ライの隣でスザクが照れたように笑っていた。幼馴染であり親友でもある彼がいれば、それはルルーシュにとつて完璧な布陣と言えた。ルルーシュにライ。ナナリーにスザク。

でもそうになるとカイナはどういう位置になるだろうか。想像した。ナナリーもスザクもカイナを好いているし、ライとも上手くできるはずだ。どこか抜けているカイナは、ナナリー達を自然と笑顔にしてくれる気がした。彼らが幸せならルルーシュも文句はない。

ああそうだ。まだ諦めるには早い。決意を固めるように拳を握りしめる。

「スザク。お前が俺達の側に来てくれさえすれば、すべて上手く行くんだ」

第四十五話「完璧な布陣」（後書き）

気がつけば好きになっていた。

ではありませんが（笑）、いつの間にか今まで当たり前ではなかったことが当たり前になることとてありますよね。

まあ、そんな話です。

2011・03・31（木）修正

第四十六話「ナミダノオト」

「いない？ 退院されたということでしょうか？」

「えっあ、いえ」

齒切れの悪い答えに、ピンク色の花束を抱えたユーフェミアは首をかしげた。彼女に応じている禿頭の男は白衣を着ていた。首に聴診器をつけていることから医者なのだろう。

「あの状態で退院などさせられません」

医者はそわそわと落ち着かない様子で目と首をしきりに動かしていた。ユーフェミアがブリタニア皇族だから緊張している、わけではなさそうだ。男は患者を純粹に心配する医者顔をしていた。

いつものユーフェミアならば、そんな男の態度に喜びの感情を抱いたかもしれない。しかし、彼女は大きく目を開き、口元を押さええた。花束が白い床に落ちた。

「彼女は脱走したのです」

* * *

ユーフェミアがカイナと初めて出会ったのは、実のところゲットーではない。……出会いと呼ぶには少々一方的なものではあったが、サングラスをかけ、白い大きな帽子を被ったユーフェミアは河川敷に来ていた。川の横に広がる敷地内で、子供たちがボール遊びを

しているのが見える。きらきらした彼らの姿に、思わず頬が緩んだ。他にもジョギングをしている人や犬の散歩をしている人もいた。

租界内の賑やかさも決して嫌いではないが、ここの穏やかな空気の方がユーフェミアは好きだった。時間がゆっくりと流れていく気がするのだ。

笑顔でその場を見回したユーフェミアの目に、奇妙な光景が飛び込んできた。

黒い髪の青年が、芝生の上にしゃがみこんでいた。体調が悪いわけではなさそうだが……じつと何かを見つめている？ 視線を追いかけると……3メートルほど離れた場所に茶色い毛玉が見えた。猫だ。他に目に付くものはない。

猫は警戒した目で青年を睨んで唸り声を上げ、一方の青年は無言のまま猫を見ている。2人(?)はどうやらにらめっこをしているようだ。

「んみぁおおうっ」

「あ」

先に戦線を離脱したのは猫だった。

今までユーフェミアが聞いたことのない、なんとも危機迫った声で鳴いた猫は、青年と真逆の方へ逃げ出した。逃げ出した方向には散歩をしている中年の男性と紐に繋がれた犬がいた。猫に気づいた犬が吠えようとしたが、視線の先に青年を認めると犬は暴れ出し、紐を持った中年の男性を引っ張った。引っ張る方向は川の方角……青年とは逆方向だ。

「おっおいどうした、突然」

「ぎゃううううんっ」

猫の姿はもう見えない。

何が起きたのだろうと目をパチパチ開閉させていると、視界を黒が横切った。あの青年だ。

「やっぱり俺は……」

眩きがかすかに聞こえたが意味は分からない。それよりも、自身の手の平を見つめていた青年の表情がユーフェミアは気になって、目に、記憶に焼きつけた。

青年は笑っていた。すべてを諦めたような、老齢した笑い方だった。

* * *

カイナが病室を抜け出したと聞いた時、ユーフェミアの頭に浮かんだのは、どうしてかかあの日の出来事で、あの笑い方をするカイナで。

理由を考える前に、

「ユーフェミア皇女殿下っ」

雨の中へと駆け出していた。

一緒に戦いを無くそうと誓い合った日から、カイナとユーフェミアは可能な限り会い、解決策を言い合った。解決策は未だ闇の中だが、何度も会ううちに相手のことを少しずつ理解していった。

大食いであるカイナは食べ物の好き嫌いはないものの、1人で食べるのを極端に嫌っているとか。服は動きやすさしか考慮しないため、センスが悪いとか（普段は特派の誰かに選んでもらっているようだ）。戦隊モノや子供向けのアニメや番組が好きで、それ見

たさにテレビを買ったとか。いつも持ち歩いている大きなリュックには”おやつ”のキャベツが2個入っているとか。意外と子供好きで面倒見もいいだとか。電話が苦手なくせに、ユーフェミアが落ち込んでいると必ず電話をくれるだとか。すっごくすっごく寂しがりやだとか。他にもたくさん。

知り合ってまだ短くても、たくさんを知った。だが、ユーフェミアはまだ知らない。

「カイナ！」

雨の中、カイナは傘もささず、川の淵に立っていた。

「で、んか？」

振り向いた綺麗な黒の瞳は、ユーフェミアを見ているようで、いつだってその向こうを見ていた。何を見ているのか。ずっと知ってしまうのが怖かった。ずっとゴチャゴチャ考えていた。でも、

「私はあなたの過去を知りません」
わたくし

過去という言葉にカイナは怯え、肩を震わせた。もしかしたら、思い出したのかもしれない。でも、

「私は今のあなたが大好きです！」

昔カイナに何があったとしても。自分に別の誰かを重ねているとしても。記憶を取り戻して遠くに行ってしまうとしても。たとえばイナに傷つけられたとしても。

結局ユーフェミアがたどり着いた答えは、単純なことだった。

「どんなことがあっても私はあなたを嫌いになりません。ずっとずっと好きでいます。」

だから、今はどうかあなたの体を大事にしてください。元気になったら大事な人の下に帰っても構いませんから。私のことを嫌ってくれても構いません。私を見たくないというなら、2度とあなたの前に現れませんから。

だから今はっ」

ドンと体が押され、傘が手から離れて宙を舞うのが見えた。

倒れこむように尻餅をつく。濡れた地面はとても冷たかった。上質な服は泥だらけになったことだろう。それでもユーフェミアは気にせず、腰の位置にある黒い頭を撫でた。
後ろで傘が地面に落ちる音がした。

「殿下、殿下、殿下」

「はい」

雨が強くなった。その時、カイナは何か言ったが、あいにくと雨音で聞こえなかった。まるで雨がカイナを守っているかのように思った。

「大丈夫です。私はここにいますから」

ユーフェミアは聞き返すことなく、涙の音を聞いていた。

第四十六話「ナミダノオト」（後書き）

殿下大胆。

そういえば、ユーフェミアから見たカイナは書いてないなと思ってできた話。過去編はとりあえず後一話で終わりそうですね。

タイトルに悩んだお話……センスが欲しい。毎回悩むんだからいいそのこと題名なしにすればいいのに、といつも思う。けど、いいのが思いついた時はやっぱり嬉しいからつけてしまう。

2011・03・31（木）修正

第四十七話「後ろのあいつ2」

「あれ、ルルーシュはまたいないの？」

生徒会の仕事をライがしているとシャーリーが声をかけてきた。ルルーシュ。その呼び方にいつもライは胸が痛くなる。すべてを吐きだしたくなる。君は彼のことを”ルル”と呼んでいたんだよ。ライは軽く目を伏せた。

「そう、みたいだね」

「最近カレンもスザク君も休みがちだし、君も……仕事が溜まる一方ね」

「はは。すまない」

「ううん。君は事情が事情だしね。カレンは身体が弱いし、スザク君は軍でしょ。でもルルーシュは違うじゃない」

シャーリーの顔が歪む。嫌悪感を抱いている表情だ。以前のシャーリーがルルーシュに浮かべることのなかった表情。ライはそれ以上そんな顔を見ていたくなくて、話を変えた。

「そういえばシャーリーは水泳部とかけもちだったな。今日部活の方はいいのか？」

「へ？ あ。う、うん。今日は、その、生徒会に来ようと思ったの」

少し甲高い声を上げたシャーリーは、頬が赤くなったような気がした。目線もライから逸れ、宙を彷徨っている。怪訝に思ったものの深く追求せず、ライは彼女に書類の束を渡した。追求している余

裕はないのだ。挙動不審だったシャーリーの頬が、一瞬で引きつった。

「じゃあ遠慮なく、お願いしよう」

「えっと……もしかしてこ、これ全部？」

「ああ。頼む」

隣で「やっぱり来なければ良かった」と肩を落としているシャーリーを横目に、ライは黙々と仕事をこなした。ルルーシュもカレンも今は黒の騎士団の活動に忙しい。ここでライまで抜けてしまえば生徒会がどうなることか。幹部になっても時間とれる、だろうか？
ため息をついた。

* * *

久しぶりに黒の騎士団へやってきたライは、格納庫に置かれた月下の調整をしていた。今は専門の技術者が黒の騎士団にいるとはいえ、自分の相棒なのだ。できることはしてやりたいと彼は思っている。

「こんなところにいたのか。新組織発表だというのにいないから探してみれば、愛馬の調整とはな。熱心なことだ」

「C・C（シーツ）か」

格納庫に響いた声にライがコクピットから顔を出すと、緑の髪を揺らした少女が呆れた顔をしていた。新組織発表。それは新たに加わった藤堂中佐と四聖剣をふまえての、大変重要なことであった。ライはあらかじめどういものになるかをルルーシュから聞いてい

たため、わざわざ出席する必要もないと格納庫で1人、月下の調整をしていたのだ。

今回、扇を始めとした幹部にはきちんとした役職名が与えられ、ライは作戦補佐となった。要はゼロの補佐役で、すること自体は今までとあまり変わらない。責任はついてくるが。

藤堂中佐と四聖剣を得て、黒の騎士団は生まれ変わった。表面だけ見れば、5人のパイロットと5機の月下が加わっただけかもしれない。だが、彼らの存在は簡単に数値に置き換えることはできない。騎士団にとって一騎当千の熟練パイロットは、喉から手が出るほど欲していた存在なのはたしかだ。しかしそれ以上に、前線で部隊を指揮できる将校クラスの人材を欲していた。

もちろん幹部はそれぞれ人望も能力もあつたが、元は一般人、軍事経験などない。今までの作戦指揮や状況判断はゼロに頼りきりだったのだ。これまでの組織であればそれであんなかくなつたが……^{いっ}巖島の奇跡^{くしま}で知られる藤堂中佐たちが騎士団に合流したのを受けて、日本解放戦線の残党を始めとした大勢が騎士団に入団してきていた。もう黒の騎士団はただのテロ組織ではない。軍と、そう呼んで差しさわりが無いほどになっている。改めて組織を構成し直すのは黒の騎士団が存続するためにも必要だつた。ライも重々承知してはいるものの、最近忙しくてろくに月下に触れていなかったのだから優先したのであつた。

自分の行動を見直して、苦笑いした。C・Cが呆れるのも、確かに無理はなかつた。

「まあいい。それよりも以前出ていた枢木スザク暗殺の件だが、却下された。良かったな」

C・Cはライに告げると格納庫を出て行つた。どこか不満そうな顔をしていた。彼女はあまりスザクを好いてはいないのだ。

敵であると同時に友であるスザクの存在は、日本人たちのゼロへ

に対する求心力を低下させるほど大きなものとなっていた。人はいくら努力しても誰にも評価されないことを嫌うものだ。そうした鬱憤^{ぶん}の吐き場所の1つがテロ行為であり、反ブリタニア組織であった。だが、ブリタニア支配下でも功績を認められるとあれば、わざわざ危険に身を晒す必要がない。スザクに続けと恭順派の人間が増える可能性は高く、下手をすれば恭順派の旗印になりかねない。

「良かった」

それでもライは安堵の息を吐いた。

敵同士なのは理解している。だから殺し合うのは当然で、いつかはどちらかが死ぬのは必然だ。それでも可能であれば殺さずに白カブトを無力化したい。ライの本心だった。そんな都合のいい話があるわけもなかったが。

「白カブトと」

ライは呟きを途中で止めた。銀色の髪を手でかき混ぜ、頭の中を空にした。様。

「ああ。そういえばゼロに呼ばれていたな」

月下から降りて、ライは格納庫を出て行った。つい振り返りそうになる自分を律した。振り返っても誰もいないのだから。

第四十七話「後ろのあいっ2」(後書き)

2011・03・31(木)修正

現状をすべて受け入れたわけではない。

どうして自分がここにいるのか。あの後、一体何があったのか。彼はどうなったのか。どうして彼が青いナイトメアに乗っていたのか。分からないことは多すぎた。

だがカイナにとって、より大事なことがあった。

彼を、彼らを破滅に追いやったのが自分であると言うことだ。：

いや、自分が原因などというのはおこがましい。しかし、一因であるのは間違いなかった。

彼には不思議な力があつた。力を使って命令をすれば相手の意思に関係なく従わせることができた。その力に抗える者はほとんどいなかった。ほとんど、というのは、カイナに効かなかったからだ。力が効かない理由は分からなかったものの、有益な力であることに変わりはない。共に歩いていく上で力が効かないのは都合がよかったので、どうでもよかった。

ただ守りたかつた。彼らが安心して過ごせる世界を作りたかつた。カイナはそれだけで良かった。

邪魔なものは全部排除した。

しかし排除しても排除しても、目的を妨げる者たちがどこから現れた。戦いの日々が始まった。

自分たちの手で切り抜けることもあつたが、力を使って窮地を脱することは多かつた。いつしかカイナはこの力があれば大丈夫だと思つうようになっていた。力に頼らずともよい場面でも、彼に頼つた守りたい対象に頼りきりだつたのだから、今考えれば呆れるしかない。

有益だと思つていた力に破滅を与えられたのは、結局自分の甘えがあつたからだつた。力に頼らずとも、自分たちの手で成し遂げら

れたはずだ。力を使うよりも時間はかかったかもしれない。それでもあの時、自分が。

「ははっ何を今更言ってるんだ私は」

白い部屋の中でカイナの声はよく響いた。

後で悔いるほど、無意味なことはない。だが、カイナは悔いる。

「Jinx」

昔、カイナはそう呼ばれていた。本当にその通りだった。自分などに関わるとろくなことがない。だというのに。

「殿下、あなたは馬鹿だ。大馬鹿だ」

鮮やかな色を纏った少女を思いながら、不敬罪に問われかねないことを口にした。ベッド脇にはピンク色の可愛い花が置かれている。手を伸ばし軽く花弁に触れた。冷たいはずの花弁は、温かい気がした。

病院に戻った次の日。

「私は不幸しか、災いしか呼びません。私なんか好きになってもろくなことありませんよ」

だからもう関わるな。

改めて見舞いに来た少女に別れを告げた。体調はすでに全快と言っても良いほど回復していたから、その日の夜にでもカイナは出て行くつもりだった。のだが、

少女は、あらと無邪気に笑った。

「なら、不幸にしてください」

「……は？」

間抜けな声を上げてしまったのは、決して自分のせいじゃないと思いたい。少女はあっけらかんと言ったのけた。

「だって私を不幸わたくしにしてしまったら、優しいあなたは私から離れられなくなるでしょう？」

声を失うとは、まさしくこのことだった。

自分が優しいかはさておき。少女に何かあれば、必死に何かから守ろうとするだろう。傍にいればもつと不幸にするかもしれないと思っけていても、矛盾を抱えたまま、離れることができなくなる。

ああ、そうだ。あなたはそういう人だった。

カイナは自身の甘さに呆れの表情を浮かべた。目の前の少女に「不幸になるぞ」などという脅しが効く訳なかった。たとえ傷つける結果になろうと冷たく「お前の顔など見たくない」ぐらい言うべきだった。いや、何も言わずに去るべきだった……もしかして自分は止めて欲しかったのだろうか。行かないでくれ、とでも泣き叫んで欲しかった、とか？ だとしたら、随分と情けない。

「私がどこに行こうと構わないんじゃないんですか？」

笑うと、少女は心外だと少し眉を吊り上げた。

「ええ、構いません。第一私は行ってはいけないなどと一言も言っておりませんわ。」

ですがっ。あなたが自分の意思でここに残るのであれば、何も問題は無いでしょう？ 私としても大事な同士を失わずにすんで助か

りますから、嬉しい限りですね」

もうすでにカイナがどこにも行かないと、確信している口調だった。苦笑する以外、今のカイナにできることはない。

「なんでこういう時だけ口が回るんですかね。専任騎士を決める時なんかあんなにもごもごしてたのに」

「近くにいる人を随分と参考にさせていただきましたから……ごもごもごしていたのなら、その人の癖が移ったのかも知れませんか」

「ほおほお、誰でしょうか。私にはてんで分かりませんなあ」

「まあ、気づかないなんて。熱の後遺症でしょうか。大変です」

会話を思い出し、カイナは頬が引きつった。伸ばしていた手を額に当て、ため息一つ。ふっきれたのか、性格が変わり過ぎだ。

「厄介な人に好かれたものだな」

呟いたカイナの顔は、しかし、楽しそうに笑っていた。

第四十八話「She told me to please unhappi

お待たせいたしました。更新再開です。

連載当初の予定とだいぶ違うのはユフィのキャラと登場回数です。

こんなに出すつもりはなかったのになあ。いつのまにやら出てました。おそろべしユーフェミア！

第四十九話「毒が回っていく」

最近、スザクの様子が変だった。

「スザク」

「っあ、ご、ごめん。会長に呼ばれてて。じゃあね」

ライが声をかけると、なんだかんだ言い訳してどこかへと行ってしまう。最初は騎士団のことがバレたのかとひやひやしたライだが、どうも違うらしいと首をひねる。スザクの態度がオカシイのはライに対してだけで、生徒会メンバーからは何かしたのかと聞かれるも、騎士団を除くと他には……あつた。

記憶。

失った記憶について何か分かったのかもしれない。ドクン。ライの心臓が驚いたように大きな音を立てた。

「……いや、だとしたら話してこないのは、変、か」

スザクの性格を考える限り、記憶について何か分かったのならすぐ報告してくれるだろう。ライは知らぬうちに息をついてしまい、苦笑した。

しかし記憶でないとすると他には、騎士団しか思い当たることがないのだが。

「ねえ、本当に大丈夫なの？ もう学園には行かない方がいいんじゃない？」

「大丈夫だよ。それに疑われているのなら余計通った方がいい。下手に姿を消すと疑いを強くするからね」

心配するカレンにそう言ったのは嘘ではない。

「ライ、話があるんだけどちょっといいかい？」

真剣な顔で改まって言われると、さすがに警戒した。

「構わないよ」

* * *

ライブハウスの屋上で空を眺め始めてしばらく経った。時計がないので詳しくは分からないが、10分は経過しただろう。その間、ライもスザクも無言で別の方向を向いていた。なんとなく眺めた空で、雲がゆっくりと流れていくのが見えた。

「ねえライ」

ようやく声を発したスザクの表情は、ライの位置から見えない。スザクもまた空を見ていた。

「友だちだと思っていた人が、さ。もしも自分から離れようとしていたら、どうする？」

一瞬ルルーシユのことを言っているのかと思ったが、それならば”思っていた人”という曖昧な表現は使わない、と考え直す。スザクの意図が分からぬまま、ライは答えた。

「どうして離れて行くのかにもよると思うが、その人が考え抜いた結論なら止めないと思う」

「っ……そう、だね」

「なあスザク。一体どうしたんだ？」

いつにない様子に、ライは久しぶりに彼を”ただの友人”として見ることができた。ブリタニアの軍人だとか、騎士団の最大の敵だとか。忘れたわけではなかったが、友として、純粹に心配できたことが嬉しかった。

「最初は目を離すと何するか分からないから、心配で傍にいたんだ」
ポツリポツリと話し始めたスザクの声にライは耳を傾けた。

「すべてに興味がなさそう。その瞳に何も映っていないのが悲しくて。いろんなものを映して欲しいと思って。接するようになったんだ。そしたら段々僕を見てくれるようになって。頼ってくれるようになって。彼女には僕が必要なんだ、なんて思い上がるようになった。」

「だけどいざ彼女が僕の手を使わずに自分で歩き出した時、どうしようもなく怖かった。あの手がなくなるのだと思った」

スザクの言葉をライは良く理解できた。理解できたがために、彼もまた恐怖した。

白カブトに乗っていたスザクと共に戦場に現れた黒い機体のパイロット。スザクの同僚であり、ライとなんらかの関係がある、人物ドクン。

心臓が痛い。制服の胸元を掴み、ライはスザクから視線を外した。それ以上考えたくなかった。どうしてスザクがルルーシュではなく、自分に話を切り出したのか、なんて。

「僕は置いていかれないよう必死にしがみついていたんだけど、あ
る人がね、言ったんだ。彼女を解放してあげようって……。本当は
僕も気づいてた。彼女がいつだって求めていたのは、あの色だった
から」

ひたすらに空を見ているスザクは、ライの変化に気づかない。い
や、気づいていて、あえて見ないフリをしているようだった。手す
りを握っているスザクの手が、白い。

「その人は君と同じ記憶喪失だったんだけど、この前ついに記憶を
取り戻したんだ。その人はね」

スザクが語る内容は、ライにとって毒であった。毒は耳から脳へ
と回り、奥へ沈めた何かを無理やり吐き出させようとしていた。
ヤメテクレ。

「君を良く知っている人、だよ」

第四十九話「毒が回っていく」(後書き)

スザク君が嫌な子になってますが、私は彼のこと好きです。ただ、不器用だなあと思う。

第五十話「醜さを知った日」

「話があるんだけど、いいかな？」

いつも以上にクソ真面目な顔をぶら下げて病室へやってきたスザクの、第一声だ。

「えあつ？ ああ、別に」

カイナは戸惑っていたが、頷く。幸いこの病室は個室であったので、周りを気にせず話が出る。とりあえず座れ。ドアの前に直立していたスザクに促した。スザクは躊躇する仕草を見せたが「うん。ありがとう」と、ようやく少し笑った。

しゃり。

見舞い品のリンゴにかじりつきながらカイナは言葉を待った。1口、2口、3口……芯だけになったリンゴを口に放り込み、種だけを吐き出した。そのまま2個目のリンゴに手を伸ばす。

「スザク？」

リンゴを掴み損ね、戸惑った声を上げた。しっかりと、目の前の彼に握られてしまったからだ。スザクは俯いているので、ベッド上のカイナからは顔が見えない。困った。彼女は眉を情けなく下げた。何があったのかは分からないものの、相当落ち込んでいるらしい。困った。カイナは励ましの言葉など知らない。だから無言で頭をかき乱す、というありがた迷惑なことをしていたのだが今はそれもできない。

手を外すのは簡単でも、抵抗したら余計傷つける気がして身動き

が取れなかった。

「ライ」

スザク、と発する前に聞こえた名前に、言いつくろつことも出来ないほどカイナは動揺した。

「銀髪に空みたいな青い瞳で頭がいい。後ろから来た相手に右足を半歩下げて身構える格闘術を、身につけている」

「はっお、まえ」

スザクは彼のことを次々と語っていく。その意味を察し、カイナは言葉を忘れた。喉は呼吸に合わせて無意味な音の羅列を発するだけ。何か言わなくてはという思いだけで唇を動かしたが、結局、言葉は何も出てこなかった。

少し時間が経ってからスザクは顔を上げた。どこか寂しそうな微笑を浮かべていた。

「ナナリーに嘘を見破る方法教わったんだけど、必要なかったね」

手首の拘束が外された。力の抜けきったカイナの手は、重力にしたがってだらりと下がった。

「アッシュフォード学園でライは保護されたんだ。もう、1ヶ月前になるかな。君と同じく記憶を失ってた。今もまだ戻ってない」

いろんなものが頭を駆け巡る。その中で何度も同じ言葉がカイナの中で循環するようにグルグル回っていた。会いたい。

めしなま
主様。

ようやく口が正しく動いた時、カイナは息を吐き出すと同時に彼

を呼んだ。目の前にいるスザクにも聞き取れないほどの、弱弱しい呼びかけだった。

「げ、んきにしていらっしやるのか？」

「え？ うん。記憶以外は問題ないみたいだよ」

まずそれを聞いて安心した。カイナの呼吸が整い始める。

「笑っていらっしやるか？」

「うん。生徒会の皆とは仲が良くて、最初は笑えなかったみたいだけど、近頃はよく笑ってるのを見かけるよ」

「……そうか」

視線をスザクから窓へと移した。今日は生憎の天気で、求めている色は見えなかった。カイナは目を瞑った。

「ごめん！ 本当はもっと前から2人が知り合いじゃないか、ってルルーシュたちと言ってたんだけど」

慌てた口調で事情を話し出したスザクの声を、カイナは窓側を向いたまま目を閉じて聞いていた。カイナの名前を聞いたライが高熱を出して倒れたこと。また倒れるかもしれないと判断し、様子を見ていたこと。

「あのっカイナ。僕は」

反応という反応がなかったからか。スザクは泣きそうな、湿った声を出した。カイナがゆっくり彼を振り返った。

「気にするな」

手を伸ばし、わしゃわしゃと柔らかい髪をかき混ぜた。スザクは俯いていた顔を上げようとしたが、無理やり押さえつけた。今の顔は見せられなかった。

「カイ」

「お前らの判断は正しい。きっと、思い出さない方が良いんだ」

息を飲む音がした。手の下の抵抗が止む。

「あの方には会わない。会いに行かない。だからお前も、あの方に変なこと言うなよ」

* * *

青い瞳を見つめながら、数日前のことをスザクは思い出した。彼女はあの時どんな顔をしていたのだろう。微笑んでいたのか。無表情だったのか。それとも、目の前の彼のように顔面蒼白だったのか。意外な反応にスザクは戸惑いを感じていた。記憶を必死に探していた彼ならすぐに会うことを決める、と思っていた。少なくとも、喜ぶだろうと。だというのにこの反応はまるで逆だ。崖に追い詰められたかのような、恐怖に彩られた表情だった。

「ごめん、ライ」

「す、ざく？」

ゆっくりと自分を見た彼にスザクは微笑んだ。

「本当は言っなくなって言われてたんだ。彼女は君に会わないって言った。ホント、ごめん」

罪悪感で胸が一杯になった。目の前のライは今まで見たことがないほどに弱りきっていた。迷子になった子供を彷彿とさせる、頼りない表情かおをしていた。

こんなはずじゃなかったんだけどな。

友人を苦しめるつもりはなかった。ただライに記憶を取り戻してもらって、それで、それで。深緑の目が見開く。

それで？　なんだ？　僕は今何を考えた。

息を吸い込む音で我に返った。銀髪の彼を見た。

「すまないスザク。僕は、怖いんだ」

「怖い？」

ようやく少し落ち着いたらしいライだったが、まだ顔色は優れない。何度か深呼吸を繰り返し、彼は続けた。

「記憶を取り戻したらここにはいられない気がするんだ。僕はそれが何よりも怖い」

「っ！」

愕然とした。

どうして彼へ話そうと考えたのか。スザクは気づいてしまった。

僕は、なんてことを。ぎゅうつと強く強く拳を握りしめる。ツキンと痛みが走るのも気にならなかった。

カイナを引き込める術をスザクは持たない。だったらいつそのこと、ライと2人でどこか遠くに行つて欲しかったのだ。そうすれば、仕方がないと諦められるから。ライにカイナのことを告げたのは、自分の心を守るためだけのエゴに過ぎなかった。

「あ、ああ。ごめん、ごめんよ、ライ。ごめん。ごめん」

「スザク……スザクは間違ってる。せつかく記憶の手がかりを覚えてくれたのに、受け入れられない弱い僕が悪いんだ」

肩を叩いて慰めてくれる友人に、スザクはただ謝り続けた。違うんだ。違うんだ、ライ。僕は、僕は。

第五十話「醜さを知った日」（後書き）

コードギアスの魅力は何か。

そう聞かれたら私は「登場人物の人間臭さ」と答えます。綺麗なだけの人間がいない。完璧な人物がいない。それが最大の魅力に感じます。

だから今回はあえてスザクにこんな役目をさせました。いいじゃない。自分の都合で動いたって。人間なんだからさ。

当初はこんな予定じゃなかったんですけどね。開き直りました。スザクファンには申し訳ないことしたかもしれませんが、私スザク好きですから！ 彼にはがんばって欲しいと思います。

ちなみにこれ、恋愛のつもりはありません。あくまで友情だと言います（笑）。

第五十一話「届くことのない謝罪」

話が終わっても、誰もしばらく口を開こうとはしなかった。

「ほ、本当に、それでいいんでしょうか」

「彼女はそう望んでいる。心から、ね」

聞いたことのない冷たいスザクの声に、本当のことなんだとナナリーは悟った。今スザクからカイナとライの話を聞いたところだった。

詳細まではスザクも知らないようだったが、少なくともカイナはライをととても大切に思っている。でもライの記憶が戻らないようにライの”未来”^{あした}の幸せを考えて、会わないと決めたのだという。本当は自分を思い出して欲しいだろうに。会いたいだろうに。

「だって。だってお2人は生きていて、いつでもお会いできますのに」

「うん。そうだね、ナナリー。でも」

「あいつが自分で決めたことだ」

「でもお兄様、スザクさん、だってっ！」

ひどく落ち着いた声を出すスザクと兄のルルーシュに、ナナリーは「でも」「だって」を繰り返す。彼女も本当は分かっていた。2人だって辛いと思っている。それに1番辛いのは……。

「あれ、珍しいな。この時間にスザクまでいるなんて」

「ひゃっ！」

聞こえた声に思わず悲鳴がこぼれた。

「えっあ！ もうこんな時間なのか。ごめん。僕行かなくちゃ」

「そうか。気を、つけてな」

「うん。じゃあね、ルルーシュ、ナナリー、ライ」

スザクが慌てた足音を立てて去っていく。思っていた以上に話しこんでしまったようだ。騎士の叙勲式があった日から、スザクはとも忙しい。

「ナナリーごめん。ミレイさんに仕事頼まれて遅くな……ナナリーっ？ どうした、どこか痛いのか？」

「え？」

「大丈夫だ、ナナリー」

ライが椅子を引く音。すぐさま慌てた声がして、しゃがみこんだ兄の声と同時に頬に柔らかな布があてられる。これはハンカチ？ 私は、泣いている？ ナナリーは慌てて涙を止めようとしたものの、涙はとめどなく流れ出た。

そして泣きながら彼女は気づいた。

「あれ？ ちが、ちがうんです。私っは」

「ナナリー」

「一体何があつたんだ、ルルーシュ。ナナリーが」

手を握ってくれていた兄の手に、力が入ったのをナナリーは感じた。涙を拭ってくれていた手も一瞬止まり、しかしすぐに動き始めた。思考が始まり、終わったのだと妹である彼女には分かった。

「知り合いの訃報があつたんだ」

「え、ああ。そう、なのか」

それは嘘であったが事実でもあった。生きているはずの人を、存在しないように扱うのだから。

兄の言葉にライは納得したらしく黙りこみ、優しくナナリーの名を呼んだ。止めて欲しいと彼女は思った。そんな声で呼ぶのは。耐えきれなくなつて兄の手からハンカチを受け取り、それで顔を隠す。兄もナナリーの名を口にした。止めて欲しい。違つた。ライが思っている、ルルーシュが思っている涙とこれは違つた。これは、今流している涙は。

「違つたのです。ライさん、お兄様。私は」

「分かつてるよ、ナナリー。大丈夫だから」

分かつていないのですよ、お兄様。優しい兄にナナリーは心の中で告げた。

だって私はスザクさんのお話を聞いた時、カイナさんがライさんの知り合いだと聞いた時、喜ぶ前にとても怖いと感じたのです。この家にライさんがいるのは当たり前になっているのに、彼女がライさんを連れて行ってしまふのではないかと思うと怖くて、カイナさんを恨んだのです。ライさんがいなくなるのが怖かった。だから、カイナさんの覚悟をした時に、私は安堵したのです。確かに悲しみも感じたけれど、それ以上に安心したのです。

今ナナリーが流しているのは、カイナにライを取られずに済んだ歓喜の涙だった。彼女はそのことを理解するがために、涙を止められなかった。

「私は、私は最低です」

「そんなことないよ、ナナリー。ほら、落ち着いて」

「ライの言うとおりで。お前が苦しむ必要はないんだ」

2人の励ます声を聞きながら、ナナリーはずっと心の中でカイナに謝っていた。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。もう私には考えられません、ライさんのいない日常なんて。私がいて、兄がいて、ライさんとスザクさんがいて、咲世子さんがお茶を入れてくれて、皆で笑って過ごす。それがもう当たり前なんです。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

泣き疲れて眠りにつくまで、ナナリーは謝り続けていた。

第五十一話「届くことのない謝罪」（後書き）

前話と似ていますが、元々はこちらが先に構造としてありました。パクリはむしろスザクです（笑）。

ナナリー視点の難しさに脱帽。目が見えないので描写が限られる。ナナリーは優しい子なのでこんなこと本当は思わないかもしれないかもしれません。だけど彼女も人間だから、思ってしまうんじゃないでしょうか。そして思ってしまったことを理解するがために苦しむ。私はナナリーが好きです。だからこそこういう人間らしさを描きたかった。原作では綺麗過ぎると思ったので。

しかしナナリーファンの皆様大変失礼いたしました。でも私本当にナナリー好きです。サクラエンドなんてもう好きすぎてどうにかなりそうです。

第四章は次話で終了です。

第五十二話「千里の道も一歩から」

黒の騎士団に何よりも大事な主君がいることをカイナは誰にも告げないまま、ブリタニア軍に留まっていた。

それは耐えがたいほどの苦痛だった。

このまま戦い続けるということは彼とも戦うことになる。かといって戦うのを止めることは、ユーフェミアを裏切ることになる。……いや、黙っている時点で裏切っていることは承知の上だったが、彼がスザクの友人だと判明している以上、誰にも相談すらできなかった。

主と戦わねばならない状況を考えて心は何度も揺れたが、それでもカイナは戦うことを決めていた。

今、日本で起きている戦いをなくせば、日本を解放する目的で動いている黒の騎士団は戦いを止める、止めざるを得ない。そうすれば騎士団にいる彼も戦わなくていい。だから結局、自分のやるべきことに変わりはない。そう気づいたからだ。

もう彼を戦いで傷つけない。戦いから解放したい。強い意志で苦痛をはねのけながら、カイナは今日も方法を模索している。

「あいつらの気持ちも分からなくもない。本音を言うとな」

日本人、名誉ブリタニア人のその男は、焼きそばを作りながら言葉にしづらい表情で笑った。苦しそうな自嘲気味の顔をする理由は、黒の騎士団を始めとするテロ組織について話しているからだ。本来ならこんなこと堂々と話せることではないが、気兼ねなく話してもらえらぐらいの信頼関係を、カイナはこの男と築いていた。

「できるなら富士山を元の姿に戻したい、春になればサクラを見な

「から騒ぎたい。誰でもあの頃が懐かしいさ」
「花見つてやつか？ できない、のか？」

最近勉強した日本の文化を頭に思い浮かべながら、カイナは喋りかける。サクラの花を見ながら宴会をすることを花見というはずだった。別に少し羽目を外すぐらいできそうなものだが。

考えている間も彼女は大きな皿に積まれた焼きそばを食べる。あまりに食べる量が多いのでマイ皿持参だ。

「できたらしたいがな。そんな暇もお金も俺らにはないし、何より……有名な花見スポットはもう、ないからな」

「そうか。悪い」
「いや」

顔を上げた男の視線をカイナが追いかけると、公園に植えられた木が目に入った。植物について詳しくないが、あれはサクラではないはずだ。しかしきつと、男の目には満開のサクラとやらが見えているのだろう。日本人はサクラが好きで、散りゆくさまに人生まで見るといふ。カイナも写真で見た時綺麗だとは思ったが、そこまでの感慨はない。直接見たら己も何かを感じるのだろうか。

戦いをなくすと決めた日から、カイナはこうして日本のことを知り、日本人から話を聞くようになった。それが何かのヒントになると思っただけだ。千里の道も一歩から。日本にそんな言葉があるよ。うだが、名言だとカイナは思う。まあ、地道な作業過ぎて、スザクのやろうとしていることをとやかく言えなかつたりは、するのだが。最初こそカイナを警戒していた彼らも徐々に内心を語ってくれるようになったので、前に進んでいると思いたい。とはいえ、名誉ブリタリア人の話を聞いてどうする、とも思う。肝心なのは黒の騎士団を始めとする”反ブリタリア抵抗組織”に所属する日本人との話し合い、だ。

これが非常に難しい。

ブリタニア軍に所属しているカイナが動けば、黒の騎士団は警戒する。かといって信頼してもらおうと接触を重ねれば、今度は軍から爪弾かれる。ブリタニア人に”日本について好意的な意見”を言うだけで彼らは「嫌なものを見る目」でこちらを見るのだ。騎士団と接触してしまえば嫌疑をかけられ、最悪死刑もありえた。まだ自分だけが疑われるならいいが、特派やユーフェミアまで嫌疑の目が向けられるのは、たまったものじゃない。

では軍を抜けて接触すればとなるが、あくまでもブリタニア側の人間として話をしなければ意味がない。騎士団の考えを軍へ届けるためにも軍属であることは必要であった。

なので騎士団の方から話し合いに来てもらうしかないのだが、彼らが簡単に出てきてくれるわけもなく。

「しかしあなたは本当に変わっているな」

「んー、んん？」

箸をくわえたまま考え込んでいたカイナに、焼きそば屋の男は笑った。先ほどとは違う、明るい笑みだ。

「ブリタニアの、それも軍人さんだっというから最初は何事かと思っただが……あなたは俺たちを”人間”として扱ってくれる。俺たちはそれだけで随分助かってるんだ。代表で礼を言わせてもらおうよ。ありがとう」

「はあ？ いや、別に俺は何もしてな、げほっ」

いきなりの感謝の言葉に戸惑い、食べ物が喉に詰まった。男が呆れて水を差し出してくれたので受け取り、一気に飲みほして礼を言ったカイナは、男の目を見た。そこには出会った当初の、己を卑下する輝きはない。純粹に感謝の念を抱いているのだと分かるだけに、

カイナは余計首をかしげる。

「そうだな。あんたは何もしてないさ、特別なことはな」

「……おっちゃんの話はよく分らん」

「だっはっは！ だろうな。ま、あんたは気にせずいつものように俺の財布を潤してくれたらいいんだよ」

「それが本音か」

男はそう笑いつつも、おまけだと言って一玉分の焼きそばを、カイナの皿に乗せた。

第五十二話「千里の道も一歩から」（後書き）

サクラの木はエリア11となつてからも植えられているんでしょうか？ ここでは皆無ではないけれど、そう多くはない設定にしています。サクラは手入れが面倒な上に咲いている期間が短かったりするし、世話も大変なんですよね。

国柄的にブリタニアってすぐに散ってしまうサクラをあまり好きそうじゃないなあとも思ったので。

だいぶ進みましたねえ。次から第五章に入ります。お楽しみに！

第五十三話「声」

ブリタニア本国からの要人を出迎えるため、副総督であるユーフエミアが式根島に向かう。という情報が騎士団に入った。これは騎士団にとって大きなチャンスであった。

当然ユーフェミアの騎士であるスザクは同行するだろうが、戦略拠点ではない式根島にブリタニアの戦力はそう多くない。ゼロ、ことルル シュは白カブトごと枢木スザクくるぎを捕獲する計画を立案した。もしも彼をこちら側に引き入れることができれば民衆への影響も大きい。ブリタニアで地位を築いた日本人が黒の騎士団に下る。その意味を、誰もが考えるだろうから。

作戦はすぐさま実行に移され、黒の騎士団は潜水艦で式根島へと向かった。

「これまでのに加えて藤堂と四聖剣の運用データも反映したから、今まで以上に扱いやすくなってるはずよ。あと、分かっているとは思うけど、くれぐれもゲフィオンディスターバーの影響範囲内には入らないようにねん」

月下を前にラクシャータとライは話し合っていた。ゲフィオンディスターバー、とはラクシャータの開発したジャミング装置のことだ。磁場でナイトメアの動力源を無力化できるらしい。副産物としてステルス機能も発揮されるため定置式トラップとしてはかなり有効だ。今回の作戦の要でもある。

ゼロは自らを囿に枢木スザクをトラップへと誘い、白カブト（ランスロット）というのが正式名のようなこと捕獲、説得する。

言葉にすると簡単だが、ゼロ自ら囿になるといふのはかなりの危険でもある。ライは自分がゼロの影武者となることを密かに提案し

ていたが却下されていた。確かにスザクを説得するのであれば、ルーシユ本人でなければ無理だろう。ライ自身思っていたことでもあるので素直に引き下がり、ゲフィオンディスターバー設置の護衛についた。

式根島への上陸は思っていた以上にあっさりと成功した。さすがのブリタニアも黒の騎士団が潜水艦まで所有しているとは思っていなかったらしく、無警戒だった。

作戦は決行され、藤堂中佐の指揮により空港を襲撃、ブリタニアの守備部隊は混乱しているようだ。そしてユーフェミアの護衛に当たっていたランスロットが思惑通りに駆け付けた。すぐさまゼロが単独でランスロットに接触、追跡「させて」いる。カレン、藤堂、四聖剣もそれぞれのルートでゲフィオンディスターバー設置場所へ向かっているはずだ。

ライは浜辺付近の茂みに月下を潜ませていた。そしてゼロの乗った無頼とランスロットが現れた。ゼロが動きにくい砂地へとスザクを誘い込む。スザクは少し躊躇を見せた後で砂地へ入った。ゲフィオンディスターバーが発動する。目視では発動がどうなっているのか分かりづらいが、スザクのランスロットがゼロに剣を突き付けた姿勢のまま動かなくなった。作戦は無事に成功したようだ。

藤堂、四聖剣、カレン、そしてライが各々の機体を前進させ、ゼロとスザクを囲む。これでランスロットは袋の鼠。気をつけるべきもう一つの機体はユーフェミアの護衛で動けない。パイロットより皇女を守るのは至極当然の選択だった。

あの機体が出てこないことにライは一人、大きな息を吐きだした。「出てきてくれないか、枢木スザク。話し合いに乗らない場合、君は四方からの銃撃を受けることになるが」

無理やり彼を引き込むのではなく説得を選んだのは、冷静に考えれば愚策、なのだろう。こちらにはギアスという力がある。従わせ

るのは可能だ。だが、ライにはルルーシユの気持ちが良く分かる。ギアスなどではなく、彼自身の意志でついで来て欲しいのだ。私のように利用するのではなく。

「あ、れ？」

なんだか違う光景が見えた気がして、ライは数度まばたきをした。目の前の画面には対峙するゼロとスザクがいる。何もおかしなところはない。気のせいか？

二人の様子へ意識を戻してすぐ、一機のナイトメアがこちらへ進んできているのをリーダーがとらえた。ライだけでなく周りにいる藤堂たちも気づき、一斉に銃をそちらへ撃った。来るはずがないと思っていた、あの黒い機体だ。ライの心臓が大きな音を立てた。

「なんで当たらないんだっ？」

隊員の悲鳴が聞こえた。そう。一斉射撃にもかかわらず、あの機体は確実にこちらへ向かってきていた。妙なのは、まったく攻撃を仕掛けてこないところだ。チョウフでの戦闘を考えるとかなり長距離の攻撃もできるはずだが……手の形がおかしい。何かを抱えているような、あれは、人っ？ しかも少女だ。

「こちらに戦闘の意思はない。攻撃を中止してくれ」

オープンチャンネルに入った通信。聞こえてくる声は想像よりも随分と若く中性的な声だ。もちろん聞いたことのない声、のはずだった。

『主様、^{めしなま}どうかあなたの背中を私に守らせて下さい』

とても懐かしい、とライは思った。

第五十三話「声」（後書き）

2011・05・22（空行挿入）
読みにくければ気軽に教えて
ください。

第五十四話「イエス、ユア・ハイネス」

式根島、という島がある。今回カイナたち特派はその島に来ていた。もちろん遊びではなく任務だ。皇族のある人物（名前は機密情報でカイナは聞いていない）がブリタニア本国からこの島に来るという知らせを受け、ユーフェミアがその方を出迎えるために現地に行きたいと言ったのが始まりだ。

コーネリアの部隊はほとんどがイシカワに遠征中であり、ユーフェミアの専任騎士であるスザク、それとユーフェミアの親衛隊所属が内定済み、と噂されているカイナがいる特派に護衛任務が降りたのだった。ちなみにスザクは少佐、カイナは少尉となっていた。

「ふう。ここは空も海もきれいだね、カイナ」

「……え、あ、ああ」

リラックスしたスザクの声にカイナは視線を彼へ移した。しかしどこを向いても目に入る青色につい心を奪われそうになり、慌てて別のことを口にした。

「海って本当にしょっぱいのか？」

「え？ カイナは海に来たことがないのかい？」

「遠征で近くを通ったことはあるが、浜辺に降りて直に触ったことはないな」

「そうなんだ。じゃあ今回は満喫したらいいよ。病み上がりなんだから、任務は僕たちにまかせて」

高熱で倒れた日から既に数日が経っているものの、大事を取ってということなのか。コーネリアからの出動要請はなかった。コーネ

リアがカイナの見舞いに直接来ることはなかったものの、専任騎士のギルバートやダールトンが見舞いに来た際、伝言を伝えられた。曰く、

『この脆弱者が！ お前は騎士としての自覚が足りん』

とのことだ。あまりにも総督らしすぎてカイナは爆笑してしまい、『姫さまからのお言葉を笑うとは何事か！』とギルバートに説教されたのも、今ではいい思い出だ。ちなみにダールトンも一緒に爆笑し、ギルバートに小言を言われていた。

「そうよ、カイナさん。しばらくは大人しくしてなさい。無茶はダメよ」

セシルに額を軽く人差し指で押されて、カイナは苦笑した。最近小姑が増えて仕方がない。スザク、セシルにとどまらず、特派のほとんどが事あるごとに心配し、あるものは倒れたことをからかってくる。辟易したカイナが政庁に避難すればギルバートに捕まり、騎士の心構えを説かれる。コーネリアに見つかれば何か一言怒鳴られ、ダールトンには『息子と見合いをしないか』とからまれる。落ち着けるのはユーフェミアとの定期的な会議の時間と自宅だけだ。あ、いや。ユーフェミアも結構無茶なことを言うてくる上に、最近自宅にも押し寄せる。

あれ、なぜだろう。涙が出てくる。

「まあどつちみちしばらくナイトメア騎乗は無理だから、ゆっくりするしかないでしょ。お・め・で・と・う！ ふう」
「そう睨むな、ロイド。俺のせいじゃない」

もう大丈夫だとカイナは主張し、医者も問題はないと言ったが、

ユーフェミアからナイトメア騎乗を禁じられていた。一応この任務にもクラブは持ってきてあるものの、それは象徴的な意味が強い。チヨウフ基地での一件はテレビで中継されており、そこで大立ち回りを演じたスザクのランスロットとクラブは一躍有名となったのだ。カイナの少尉昇格はそのせいもあった。

もともと、カイナの正体は表ざたにはなっていないが、話が少しそれた。

デヴァイサーが一人（一つ？）減ったのが、一時的とはいえロイドはお気に召さないらしい。が、スザクとセルはそのことを聞いた時に喜んだ。

「とにかくゆっくりしましょ！ あなたは元々働きすぎだったもの。良い機会だわ」

「ここは海に囲まれているからね。もし敵襲があっても早い段階で察知できる。少ないけど常駐している守備部隊もいるから、大丈夫だよ。何かあっても僕にまかせて」

この二人はロイドとは逆でなんとしてもカイナを休ませたいのだ。気持ちはありがたく受け取りつつ、カイナは地形を確認した。小さな島は海の青と空の青に包まれて平穏そのものに見える。深い海の青に、彼女を思い出し、首を横に振った。

「……海の中から来たら？」

「潜水艦はさすがの黒の騎士団でも持っていないと思うよ」

「そうか。じゃあいいか」

ロイドの言葉を聞いてカイナは空を見た。昔、空ばかり見て歩いて主に怒られたことがあった。何故空を見ていたのかという主の問いに、カイナはこう答えたのだ。

『だって空は主様の色ですから』

彼は照れたように頬を染め、ありがとうと小さな声で返してくれた。 うん、大丈夫。 いつだって彼の色がそこにあるのだから。 カイナが拳を軽く握り締めた瞬間、大きな音が聞こえた。 爆発のような音。 見れば黒煙が立ち上っている。 ロイドが関心の声を上げた。

「いやあ、いつもながらカイナ君がああいう事言つとやってくるね」「俺のせいだよ」

違つとロイドを否定したいモノの、確かに『敵が来るのでは』と発言したり思つたりすると毎回こんなことが起きる。 カイナは本気で泣きたくなつた。

「何事ですか！」

「皇女殿下、危険です。 船の中にお戻りください」

騒動に気づいたユーフェミアが顔を出し、スザクに押し止められる。

「守備隊の司令部がテロリストの襲撃を受けているようです」

その時入ってきた情報にスザク達が驚きの声を上げた。 確かに今まで気づかないことはおかしい。 情報を持ってきた兵士によると特殊なジャミングが使われていたらしく、寸前までキャッチできなかったのだとか。

「租界に戻りましょう！ 護衛の船は出せますか？」

「帰って危険かもしれません」

「だな。下手に船を出してしまえば逃げ場がない。ここで迎え撃つ方が得策だ」

セシルの言葉に兵士とカイナがそう返した。海の上では普通のナイトメアは役に立たない。テロリストがユーフェミアを狙っているのだとしたら海上用のナイトメアを準備しているだろうし……ん？ 考えていたカイナはふと何かが引掛かった。なんだ。今、自分は何を考えた。

「ご安心ください。皇女殿下は自分が守ります」

「いえ、あなたは司令部の救援に向かってください。せつかくの戦力を私一人のために遊ばせておくことはできません」

「しかし」

「枢木スザク。私を守りたいというのなら一刻も早く敵を追い払い、私のもとに帰ってきてください。大丈夫です。ここにはカイナもいますから」

「へっ？」

思考に没頭していて、突如呼ばれた自分の名前にカイナは間拔けな声を上げてしまった。カイナが顔を上げると真剣な表情のユーフェミアとスザクがいる。大体事情を察した。

「俺をゆっくりさせてくれるんだろ？ だったらさっさと行ってさっさと帰ってこい」

「カイナ……うん、わかった」

スザクはユーフェミアに向き直り「イエス、ユア・ハイネス」と敬礼した。そしてすぐさまランスロットに乗り込み、司令部へと向かって行った。カイナは彼の背を見送ることなくクラブに乗り込み、何があっても動けるようにスタンバイした。ナイトメア騎乗禁止命

令は、先ほど解かれた。

「しかしなんだ、この違和感は」

そう違和感。この島をテロリストが襲う理由で考えられるとすれば副総督のユーフェミア、もしくは来訪するという高貴な身分の誰かだ。重要な軍事施設などはこの島にはない。そして高貴な誰かはまだ来ていないことを考えてユーフェミアを狙った可能性が高い。しかしだとすると、何故司令部を襲ったのか。単純に考えれば陽動だが。

「ロイド、司令部の状況は？」

「守備隊は全滅。スザク君が支えているところ。敵は黒の騎士団みたいだね」

「黒の騎士団、ゼロか」

情報を確認してからまたカイナは考える。今回の襲撃でのゼロの目的はなんだ。陽動にしては守備隊を全滅させるのは過激すぎる。確かに守備隊の数は少なかったが、この短時間に全滅となるとかなりの戦力を割いているはずだ。陽動ではない、のか。じゃあ、なんだ。

「あれ？ 敵の動きが」

「よかった。敵が逃げて行きますね」

セシルの声に続いてユーフェミアが安堵の息を吐いた。カイナはリーダーを見る。確かに逃げている。何故だ。今までの経験からランスロットを強敵とみなしているだろうが、戦力差からみても今逃げる必要はない。

「特派ヘッドトレーラーへ。ゼロを発見！ これより追撃します」

通信が入った。ランスロットで救援に行っていたスザクからだ。そうか。ゼロの、黒の騎士団の目的は。

「あつ！ まてスザク、それは罠だ！ ああくそつ通信切れてるし。セシル！ 急いでスザクへつないでくれ」

「え、カイナさん？」

「敵の狙いはランスロットだ！」

「……この動き、おそらくカイナ君の推測通りだね。スザク君はゼロを前にすると冷静さを失いがちだから、このままじゃ危ないな」
「そんなんっ！」

「あのゼロが相手だ。単純な戦力だけでなく何か考えているはずだ。すぐ撤退命令を！」

「枢木少佐。追撃をただちに中止し、帰投してください」

慌ててセシルがスザクに告げる。しかしスザクはロイドの言うとおり、完全に冷静さを失っていた。

「帰投命令っ？ でも目の前にゼロが！ 捕獲するチャンスです」

ダメだ、これは。カイナはすぐさまハッチを閉めた。起動準備していたクラブはすぐさま起き上がる。

「ユーフェミア副総督、ご命令を」

今すぐにも発進したいのを我慢して、ユーフェミアに命令を求めた。命令なしで救助に向かうのは後々のことを考えると得策ではなかった。

「分かりました。カイナ少尉に枢木少佐の救援を命じます。ただし、条件が」

「条件、ですか？」

こんなときに一体何を言い出すのか。カイナだけでなく、傍に居たセシルやロイドが興味深げにユーフェミアを見た。彼女は毅然と顔を上げて、カイナを画面越しに見た。

「私も連れて行きなさい」

「は？ ちょ、こんな時に何をおっしゃるんです殿下！ 危険です」「あなたがいるのだから大丈夫でしょう？ それにあなたなら分かるはずです。これは私たちにとってのチャンスなのだ」と

カイナは言葉に詰まった。ユーフェミアが何を言っているか分かったのだ。今ここにゼロがいる。直接会って話をする絶好の機会だった。絶望的だと思っていた話し合いは、確かにこのような状況でなければ現状では成しえない。

第一自分がいれば大丈夫、などといわれてしまえば、カイナに反論できようはなかった。

日々自分の使い方が上手くなっていくユーフェミアに心の中で苦笑しつつ、カイナはただ一人にだけ使うその言葉を口に乗せた。

「イエス、ユア・ハインス　ただし乗り心地は保証できかねます」

第五十四話「イエス、ユア・ハインス」（後書き）

カイナの最後の台詞が書きたかったただけだったり。

2011・05・22（空行挿入）読みづらければ気軽に拍手等
でお知らせください

第五十五話「たった一言が心に響く」

現れた黒い機体からの言葉に、誰もが戸惑っているのか攻撃がやんだ。くぼ地で睨みあっていたスザクとルルーシュは何事かと顔を上げたが、二人の位置からでは様子は見えないだろう。

黒い機体、ランスロット・クラブはこちらの動きを見て大事に抱えていたその人を地面に下ろした。そして、今度こそ誰もが言葉を失った。

「ユーフェミア、だと？」

クラブが運んでいた人物は、スザクの主であるユーフェミア・リブリタニア、その人だった。

「繰り返す。こちらに戦闘の意思はない。主が諸君らと、ゼロと話がしたいだけだ。我が主を攻撃しない限り、私は諸君らに何もしない」

クラブは戦闘放棄をアピールするようにライフルを投げ捨て、両手を上にあげた。あまりの出来事に、ライも状況把握ができない。いや、彼は別の衝撃も受けていた。今この声の主はユーフェミアを“我が主”と言った。何故だか、それがとても悲しかったのだ。

「了解した。全員武器を下げろ」

「藤堂さんっ？」

「奴に戦う意志はない」

藤堂の声にライは何も考えず従った。あのパイロットに銃を向け

ずに済んでほつとしていたぐらいだ。騎士団の何人かが反論していたようだが、全て雑音にしか聞こえなかった。ユーフェミアが動きを止めたナイトメアの間を縫ってくぼ地を降りて行く。その時、愚かにも一人の団員が動いた。

「あいつさえ死ねばっ」

「よせ！」

制止する藤堂の声を無視し、その団員のナイトメアは銃を無防備なユーフェミアに向け……次の瞬間に爆発していた。コクピットハッチが射出された機体に突き刺さっているのはクラブのハーケンだ。いつのまにか先ほどまでいた場所から動き、的確に機体の急所を突いていた。

「我が主に武器を向けたが故に攻撃させていただきました。次はない」

また通信が入る。本当にユーフェミアに危害を加えなければ戦う意志はないのだろう。ライフルは捨てたままだった。藤堂が相手へ言葉を返す。

「部下の非礼を詫びよう」

相手からの返事はなかったが、再び動きを止めた。彼女の声を聞きたいとライは思った。だが同時に我が主と呼んでくれるなとも思った。お前がその言葉を向けるのはユーフェミアではなく……。

「ユーフェミア皇女殿下っ？ 何故ここに」

「よかったスザク。無事のようにですね」

「一体どうなっている。何故ユーフェミアが！」

「ゼロ、あなたにお話があるので。どうか聞いてください」

三人の話を聞きながら、ライはクラブから目が離せなかった。当たり前前のことでもある。相手は敵だ。戦う意志はないと言っているが、先ほどのような動きができるのなら油断させて自分たちを殲滅、まではいかずとも痛手を負わせることが可能に違いない。そう言い訳しながら、ライはクラブを見ていた。ランスロットと見た目が似ているが、白と黒のカラーリングが施されている。その色合いは彼女のイメージにピッタリだった。彼女には黒が似合う。

ふと、その黒い機体が動いた。ほぼ同時にオペレータの井上の声が聞こえた。悲鳴のような声だった。

「ミサイル飛来！ 多数接近中」
「ゼロ！」

カレンがゼロを助けに行くがゲフィオンデイスターバーは稼働中で、もちろん紅蓮式も動けなくなった。彼女はすぐにハッチを開いて外に出ていった。ライが見れば、隙をついたスザクがゼロを取り押さえている。ブリタニア軍はどうやらスザクにゼロを捕まえさせて彼ごと殺すつもりのようなのだ。ユーフェミアがいるというのに…カレンは「生徒会のカレン・シュタットフェルトだ」と叫びながら彼らの元へ向かっていく。完全に冷静さを失っている。状況が状況だけに仕方ないが。

クラブがライフルへと近づいた。藤堂が銃口を向けてクラブを牽制した。ライは自然と動きそうになった己の腕を押さえた。そうでもしなければ味方であるはずの藤堂を撃ちそうだと思ったのだ。

「勘違いするな。援護するだけだ」

再び聞こえたその声にライは思考が止まりそうになる。ダメだ、落ち着いて考えろ。自分が今何をすべきなのか。ゼロを、ルルーシ

ユを助けなければ。どうやって。大量のミサイルが今も迫っている。ブリタニアは味方ごとゼロを殺すつもりだ。

「えっ？」

味方、ごと？　じゃああの黒い機体のパイロットはっ？

ライが愕然としている間にもクラブは自分が捨てたライフルを掴み取ると、ミサイルに向けて構えた。ライフルの形が変わっていく。クラブは、彼女は、ミサイルに向けてライフルを撃ち始めた。

「そんなっ　まだ射程距離には」

一見無意味に見えたクラブの攻撃だったが、彼女の攻撃は次々とミサイルを確実に落としていく。その鮮やかな手腕に誰かが感心の声を漏らした。

「あのナイトメアはこの距離からでも当てられるのか」

「しかもあれだけ離れているというのにあそこまで正確に撃ち抜くとは。やりおる」

ああそうだろう。彼女の弓はいつだって百発百中だったから。聞こえてくる味方の声に、ライは心の中で呟いた。そしてまた思考が止まる。何故か先ほどから自然とパイロットを女として考えていた。あの中性的な声しか情報はないというのに、いや、スザクが言っていたから可笑しくはない、か。

だが、弓？　百発百中？　黒が似合う？　何故知っている。やはり彼女は自分の。

『お前はどんどん強くなっていくな。私が教えてもらっ側になるのもそう遠くはなさそうだ』

『そつそんなことありません！ 私などより主様めしさまの方が』

また映像が浮かぶ。映像の中で、今よりもずっと幼く高い声の彼女は、綺麗な黒髪をきつちり一つに結んでいた。振り返るといつもあいつはそこにおいて、黒髪をなびかせながら嬉しそうに目を細め、

「へえ。半分ぐらいに減っているよ。案外やるな、あいつ」

朝比奈の口笛が聞こえて頭を横に振った。レーダーに映っているミサイルは、彼の言葉通り随分と数を減らしていた。

「まもなくミサイルが射程圏内に入ります」

「あいつが数を減らしてくれたから、なんとかなるかもしれないな」
「悪いがこちらは燃料切れだ。後は頼んだ」

四聖剣の声に混じってクラブからまた通信が入った。藤堂が了解と答える代りにナイトメアの左腕を上げ、そして声を張った。ライも思考におぼれている場合じゃないと、操縦桿を握り直した。

「弾幕を張れ！ 全弾撃ち尽くしてもかまわん！」

一斉に射撃が開始される。クラブにより半分に減っていたミサイルは次々と空中で爆破し、霧散していく。この調子なら全て落とせる。少し安堵したライたちの頭上を影が覆う。ミサイルの後ろに巨大な人工物が浮いていた。すぐさま藤堂たち黒の騎士団が空中艦らしきものに向けてライフルを撃つが、シールドのようなものにはじかれる。

そしてハッチらしき箇所が開き、中からなにかが光って……。

「まずい！ ゼロ、カレン！」

ライはコクピットハッチを開けて、何も考えずにくぼ地へ飛び込んだ。二人を庇うように立ちはだかる。

「なっ！」

そんな彼の視界を、黒い機体が塞いだ。 主様！ あの声にライは呼ばれた気がした。

第五十五話「たった一言が心に響く」(後書き)

小出しにしている感がバリバリします。これからさらにこんな感じになるかも。

次はいよいよ神の島です！

以前他の連載で地と会話文の間に空行をいれて、といわれまして、こっちはどうしようかと思ったのですが、試験的にやってみました。どちらの方が見やすいでしょうか。前の方がいいという場合は拍手などで気軽にお声かけください。

第五十六話「ゼロの正体」

久方ぶりに見た彼の姿に、身体は勝手に動いていた。叫んだのは、スザクでもユーフェミアでもなく、彼の呼び名だった。 ぬしさま 主様！

「ぐっ」

痛みでカイナは目覚めた。地面に横たわっているようだ。現状を把握するために起き上がる。右肩から腕に違和感があった。上半身を起こして見てみると、パイロットスーツに包まれていたはずの腕はむき出しになっている。手を握ってみるが力はいれにくく、鈍い痛みが走る。拳を作っても維持するのは難しい。だが徐々に回復しているのを感じたのであまり気にせず立ち上がった。他の場所に異常はない。

「あーあ。スーツが酷いことに……セシルが怒りそうだ」

破れているのは右の首付け根から右のわき腹にかけてだ。スーツの下にまいていたサラシも一部が裂けてもう意味をなしていない。邪魔なだけとなった布をカイナは取り払った。押さえつけられていた胸が膨らんでスーツの下から存在を主張している。本当に胸つて邪魔だよな。カイナは思ってたため息をつく。普段はあまり男女を気にしないのだが、こうした時にふと思う。

ぎりぎり胸は隠れているが、こういう格好をすると何故か周りが怒るのだ。動くのに邪魔なだけでなくそんな障害もある。何故男の裸は良くて女だとダメなのか。その線引きがカイナにはよく分からない。

「でもこれは不可抗力だ。うん。そう説明しよう」

カイナはそれ以上気にしないことにして周りを見渡す。

島であることは変わりない。森があつて、海がすぐそこに在る。しかし、空気が違う。何よりクラブが近くにない。壊れたとしても破片ぐらい見つかるはずだが見える範囲に全くない。余程遠くに飛ばされたのか。連絡をとりたくてもインカムをなくしてしまった。というより自身の状態を考えるに壊れたのだろう。

とりあえずカイナは島を歩いてみたが、違う島だとすぐ判明した。何故違う島に自分がいるのか。記憶を探ってみても、あの禍々しい光と主のことが浮かんだところで途切れていた。部分的な記憶喪失なのか。記憶そのものが元からないのか。カイナには分からないものの、自分がここに居る以上、あの場にいた者たちがここに居る可能性は高かった。生きていることを望むが、どうだろう。

噛み締めた歯がギリッと鳴った。

「主さつあ、いや。殿下とスザクの無事を確認しないと」

銀色の光がちらつく。いけない。自分はもう彼の騎士ではないのだ。

意識を切り替え、すべきことを考える。気候から考えるに式根島から遠い島ではないはずだ。どれだけ滞在するか分からない。助けが来るかも不明なのだから水と食料を確保すべきか。幸いそういうのは得意だった。

「ところで、いつまでもその物騒なものつきつけるのは止めてくれないか。おちおち考え事もしてられん」

「その割には随分と落ち着いているようだが」

ゆっくりとカイナは振り返った。何度もテレビを騒がせていた黒

い仮面の男、ゼロがそこにいた。彼の手には銃が握られ、カイナに向けられている。

「ん？ まあ、それぐらいじゃ死なない自信はあるし、お前のことはよく聞いている。頭は良いが運動はあまりだと　スザクから」

言った瞬間、ゼロは動揺したのか銃を持つ手が震えた。明らかなか隙であったが、カイナは何もしないところか、ゼロを見て笑いかけた。

「ゼロはお前だったんだな、ルルーシュ」

「わ、私は、ゼロだ」

「うん？ うん。知ってる。で、ルルーシュなんだろう？」

カイナが断言すると仮面をかぶったままのルルーシュは「何故そう思う」と聞いてきた。困ることでもないので素直に告げる。

「だってルルーシュの匂いするし」

「に、におい、だと？」

「ああ。あ、でも今はちょっと磯臭いな」

「いそくっ!」

慌てて自分の体を見下ろした彼に、どうしたのだろうとカイナは頭を傾けた。ルルーシュは余程慌てているらしく、仮面の上から服の匂いを嗅ごうとしていた。彼の様子をぼんやり眺めてから、カイナはまたやってしまったと気づいた。匂いで人を判断するな、とスザクやセシルから何度も注意されていたのだ。

「悪いな。俺はどうも人の顔が見分けられなくて」

ルルーシユはしばし無言になった後、深いため息をついた。彼の細い手が仮面に伸びる。仮面の下から現れるのは黒い髪と紫色の瞳の少年、ルルーシユ・ランペルジ。彼は呆れた顔をしてカイナを見た。

「スザクから聞いてはいたが、本当に匂いで当てられるとはな」

「まあまあとりあえず銃おろそうぜ。ここで争っても無意味だろ。お互いに」

「そう、だな」

銃がおろされたのを見て、カイナは歩き出した。後ろのルルーシユに「まずは水場の確保。それから食料。落ち着いてから話そう」とだけ声をかけた。戸惑い気味ながら足音が自分に続いてくるのを確認して、彼がついてこれる速度で歩く。水は予想より簡単に確保できた。岩の隙間から流れる綺麗な湧水があつたのだ。少しなめて身体に害はなさそうだと判断する。周囲を確認。そこそこ広く、万が一襲われても対処できそうだ。

「ここにするか。おつよさそうな木の棒発見」

「棒？」

「あ、お前は適当に枯れ枝集めといてくれ。火起こすから」

カイナは地面に座り、右ふくらはぎに括りつけてあるナイフを抜いた。警戒の目になったルルーシユを無視して、手に持った丈夫そうな木の棒をナイフで削っていく。器用に削られた棒はあつという間に先の鋭い凶器になった。素直に枝を拾っていたルルーシユが、カイナを見て頬を盛大にひきつらせた。

「まさかとは思つが。カイナ、お前。そんなもので狩りをする気が？」

「え？　なんか変だったか？　あ、やっぱり石槍の方がいいかな。でもめんどろだし、これで充分だろ？」

堂々と言い放ったカイナに、ルルーシュは言い返す言葉を思いつかなかったようだ。また黙り込んだルルーシュを放ってカイナは立ち上がる。右腕はまだしびれているので左で槍を何度か振りまわす。問題なさそうだ。カイナは一つ頷いてルルーシュに声をかけようとした。

が、その前に視界を布が覆って彼女の言葉を封じた。手にとつてみればゼロのマントだと気付く。どうしたのか。目線を送ったが彼は明後日の方向を向いていた。心なし顔が赤い気がする。

「……それを着ている」

「えー。なんでだ？　動きづらい」

「なっ！　お、お前は自分の恰好を理解しているのかっ？」

啞然としたらしいルルーシュは一度カイナを振りかえり、気のせいではすませないぐらい顔を真っ赤にして後ろを向いた。言われてカイナは自分の恰好を見下ろす。動いたからか、右胸があらわになつていた。これだから女は面倒だ。思いつつ、マントをはおった。視界の隅でルルーシュが安堵の息をついた。

「別に俺は気にしないんだがなあ」

「気にしろ！」

第五十六話「ゼロの正体」(後書き)

見やすくするため、前回に引き続き会話と地の文の間に空白の行を入れていきます。なしの方がいいというご意見ありましたら気軽に拍手等で教えてください。反対意見が次回までなければ、全部このように統一させていただきます。

初ポロリいただきました(え?)。カイナさんは野生児です。がんばれルル!

第五十七話「狂王と皇女」

ぬしさま
主様。

あいつが自分を呼び始めたのはいつだったろう。確か、そうだ。母上の話を聞いてからだだった。自分の主君を祖国でそう呼ぶことがあると母上は言った。あいつは以後自分をそう呼び始めた。あいつだけに許した自分の呼び方で。

「……ん？」

誰かが髪を撫でる感触にライは目覚め、瞬時に飛び起きた。相手は少し驚いたようだがすぐに微笑んだ。長い桃色の髪が少し重たそうに揺れた。

「ユーフェミア！ 何故お前が、っう」

「あつあまり急に動いてはいけません。ひどく身体を打っているのですよ」

身体に走った激痛で、ユーフェミアの伸ばした手を振り払うことができなかった。確かに彼女の言うとおり身体を強打しているようだ。幸い内臓は無事そうだが、おそらく鳩尾周辺は赤紫色に変色しているだろう。パイロットスーツを着ているので見えないが。ああ、打ち身で済んだのはスーツのおかげかもしれない。

「申し訳ありません。うなされていたようなので」

「わかって、いるのかっ？ 僕は黒の騎士団だ。お前の、敵なんだ！」

「はい。分かっています。ですからどうか今は安静に」

分かっている。いいながら自分の身を案じているユーフェミアに、ライは呆れて何も言い返せなかった。いや、言い返したいのだが痛みで頭が働かない。

「私はあなた達とお話が出来たかったです。カイナが言っていたと思いますか？」

「カ、イナ？」

「ええ。私を運んでくれた黒いナイトメア、クラブのパイロットです」

ユーフェミアはどこか誇らしげにあのパイロットについて語った。ライはそのことが悔しいと思った。あいつは！ あいつは私の！ 笑顔のユーフェミアにとっても腹が立って仕方がなかった。あいつが誰なのかすら思い出せないというのに、だ。

「私たちは戦いをなくしたいのです。ですから黒の騎士団の皆様にも、投降しろともいうのか？ 負けを認めてお前たちに従えとも言うのか！」

「違います。ただっ」

「悪いが僕にはお前と話すことはない」

彼女の話振り切るようにライは立ち上がった。痛みを顔には全く出さず、ライは冷めた目でユーフェミアを見下ろした。彼女はただ悲しそうに眉を下げ、目を伏せた。その姿を見てさらに苛立つ。何故そこまで怒りを覚えるのか。自分の感情をコントロールできず、そんな自分にまたライは腹が立つ悪循環を繰り返してしまう。

舌打ちをしたライはユーフェミアの背後に回り、腕を拘束した。彼女は抵抗をしようともしなかった。武人の姉とは違い、本当にただの少女らしかった。

「今は状況が不明瞭故にお前を生かしてはおくが、妙なまねをしたら容赦はしない。今の僕でもお前を殺すぐらいはできるからな」
「はい……あ」

その時響いた場違いな腹の音に、沈黙が降りた。ユーフェミアが顔を赤くする。彼女の様子を見て、ライは急速に頭が冷えて行くのを感じた。そうだ。冷静になれ。

「あの、ごめんなさい」

「いや、僕も、すまない。少し苛立っていたようだ」

目が覚めてからようやく心が落ち着いたライは、ユーフェミアの拘束を外し、代わりに彼女へ手を差しのべた。気まずそうに目線を逸らしながらライは言う。

「食糧確保に付き合ってくれるなら拘束は止めておくが？」

「はい！」

途端に顔を輝かせたユーフェミアの瞳を見て、懐かしいと感じた。そう。手を差し伸べるといつだってあいつはこんな瞳をして、嬉しそうに自分の手を取るのだ。はい、主様！

散策した結果、今いる場所が式根島ではないことが判明した。気候や状況を考えてそう遠くはないとは思うものの、こちらから連絡するすべはなく、船もない。自然が豊かで食料には困らなかったことが不幸中の幸いだった。

「さすがに動物を狩るのはこの身体じゃ無理だから、これで我慢し

「てくれ」

「いいえ十分です……あなたの知識はすごいですね」

果物や食べられるキノコなどを前にユーフェミアが感嘆の声を上げた。ライは褒められてもむずがゆいだけなのでさつさと果物を口にした。彼自身そんな知識が何故あるのかも分からない。だが身体は覚えているようで火を起したり、食べられる植物を見極めたり、寝床とするに最適な場所を見つけたりすることができた。残念なのは水場の確保ができなかったことか。怪我のせいであり動けなかったのだ。

「これは水分が豊富だ。これで水分を取ると良い」

「ありがとうございます」

「……別に」

無警戒な笑顔を向けてくるユーフェミアに、ライはペースを乱される。この少女は本当に分かっているのだろうか。自分は敵であり、少女は拘束こそしていないが捕虜なのだ。もちろん意味のない暴力を振るうつもりはないが、だからと言って何故ここまで自然体であるのか。

「君は、本当に皇女なのか？」

「はい？」

「今君は捕虜の身だ。捕まえている者に対してもう少し警戒すべきじゃないのか？」

上品に果物を食べている姿は確かに皇女なのだろうと思わせる。

だが心を許しすぎた姿に、ライはあきれ果てた。ユーフェミアは口の中のをゆっくりと飲みこんでから、少し顔を傾けた。不思議そうな表情だ。

「そういえば、そうですね」

「……何？」

「なんだか大丈夫な気がしてました」

予想外すぎる言葉にライは一瞬声を失った。お気楽過ぎる。ユーフェミアはしばらく考えるように目を上に向けた。少し経ってから「あ」と声を出して、ライを見た。彼女の顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「分かりました！ きつとあなたがカイナに似ているからですわ」

カイナ。また出てきた名前にライの胸の奥が疼いた。

「彼女は『戦いをなくす道』と一緒に目指して下さっている方で、私を同士と呼んでくれるのです」

「ど、うし？」

同士。一緒に。頭の中でその単語が回る。

「はい！」

一応他の方がいる前だと主と私のことを呼ぶのですが、普段は気軽に冗談も言ってくれたりするのですよ。それでも敬語は取り払ってくれなくて、以前敬語を止めて下さいってお願いしたら、泣きそうになった上に何も喋らなくなってしまって大変だったことが……あ、すみません。今その話は関係ありませんでした」

本当に心から楽しそうにカイナの話をしているユーフェミアを、どこか遠いところからライは眺めている心地がした。それでいて頭の中ではユーフェミアが語っている情景がつぶさに浮かんでいた。

敬語はこれからナシだとライが言った途端、滅多に涙を見せない彼女が今にも泣きそうになって、その場に突っ立っている。必死に口を開閉させているものの、言葉らしきものは一切そこから出てこず。あまりにも哀れな様子にこちらが言葉を撤回しようとしたら、

「酸欠で倒れた、か？」

「っそう！ そうなのです！ あの時は本当にびっくりして、カイナの目が覚めた時慌てて言葉を撤回しました。それ以来もうその話題はしないようにしています」

「真面目、なんだな」

「いつも面倒くさそうな顔をするのですけどね。でもちゃんとやるべきことをきっちりする人です。時折頑張りすぎることもあるので、いつもスザクと見張っているのです。スザクはスザクで無茶するのですけども」

ユーフェミアの話聞きながら、ライは少し記憶を取り戻していた。カイナ。自分のただ一人の騎士。どういう経緯でカイナが自分の騎士になったのかも、別れたのかも分からない。ただ不思議と、裏切られた、とは思わなかった。あいつが簡単に裏切ることなどありえない。あるとすれば、自分があいつに何かしてしまったのだろう。

もちろん寂しさは感じる。悲しさも感じる。それでもカイナ自身を選んだことならいいのだ。何よりユーフェミアは本当にカイナを大事に思っているようだったから。

目の前の皇女ならカイナを任せてもいい。ライはそう思うことにした。ただの逃げと自覚していたが、今はまだ考えなくなかった。たとえそう遠くない未来に戦い合うことになったとしても。

第五十七話「狂王と皇女」（後書き）

ロスカラ
原作だと、ライ君は仲間はずれなんですけど、絡めて欲しかったなあ。

ところで、ユフィの喋り方が変な気がするんですけど、あってますかね。不安でしょうがない。

第五十八話「差しのべられた手の先にあるもの」

美味しそうな匂いを漂わせている肉をルルーシュは見つめていた。焼き加減もちょうどいい。腹も減っている。思わず彼はつばを飲み込んだが、先ほどまで動いていたイノシシの死骸が目に入ると気分が悪くなった。断末魔の叫び、とでもいうのか。あの時の鳴き声や落ちくぼんだ瞳にどうもやるせない気持ちになる。

「ん？ 食わないのか？」

目の前で平気そうに喰らいついているカイナは首をかしげた。驚くことに、カイナはあんな木の棒でイノシシを狩り、慣れた手つきで肉をさばき、火を起こして焼いた。サバイバル慣れしすぎているが、もうカイナのことで何も驚くまい。今はそれよりも目の前の肉だ。

意を決してルルーシュはかぶりついた。

「……うまい」

「そうか！」

味付けは彼女がどこからか持ってきた岩塩をかけただけのはずだが、本当においしかった。一度食べてしまえば腹の減り具合を自覚し、ルルーシュは肉を食べた。そんな彼を見ているカイナは始終楽しそうだった。その顔を見ているとルルーシュはどうにも調子が狂う。

目の前の彼女と自分は敵同士のはずだ。仲間にできたらとは思っているものの、今はまだ敵側の人間である。戦闘能力では圧倒的に自分より強い。だというのに彼女は自分を拘束するわけでもなく、

簡単に背中を見せ、大事な食糧まで分けた。何が狙いなのだろう。ルルーシュは考えているいろんな予測を立ててみたが、どれも的外れな気がした。

というよりも、目の前にいるカイナのように『直感で動く』タイプの思考は読みにくい。

「お前の目的はなんだ？」

「ん？」

キノコを口に放り込んでいたカイナはルルーシュを見た。黒い瞳は炎に照らし出され、暗闇の中で不思議な輝きを放っていた。戦場で藤堂たちを震え上がらせた人物と同じとは思えないほど、純真な瞳だった。

こんなに綺麗な黒があるのかと、ルルーシュは初めて知った。

「お前と話がしたかったんだ。だから、そのためにはまず腹ごしらえだろ？ 腹が減っては話は出来ぬ、とか日本の言葉であるんだぜ！」

意味不明な後半はさておき。胸を張って答えたカイナを見て、ルルーシュは思わず眉間にシワを寄せた。

「話？ 俺と？」

「ああ。ユーフェミア殿下も言ってた。あの時は話す時間なかったみたいけどな」

ユーフェミア・リ・ブリタニア。

何故かあの時やってきた幼馴染の少女は、確かに話したいと言っていた。相変わらず甘いことを言っている。

「俺たちは戦いをなくしたいんだ。大事な人たちを戦いから解放したい。だからお前たちと話をし」

「ふっ。そんな理想論をお前は、お前たちは本気で掲げるつもりかっ？ 今さら戦いが終わるわけがないだろう。どちらかが倒れるまで戦いは続く！ 話し合いなど無意味だ」

思わずルルーシュは銃を取りだして、カイナに向けた。だということに彼女は全く動じなかった。まあまあ落ち着けと言って果物を一口食べる余裕さえある。まるでお前は撃たないと言っているかのようで、ルルーシュは苛立った。数度しか交流のない自分をどうして信頼するんだ。

「理想なのは分かってる。でも、理想だからこそ目指すんだ。それにほら、今俺たちは話合っているだろ？ だからさ、ルルーシュ」

真っ直ぐに腕が差し伸べられて、カイナの口が動く。なんとなくその先を聞きたくないとルルーシュは思った。自分の根本が揺らいでしまう気がした。耳を塞ぎたいと思ったのに、手は銃でふさがっていた。やめろやめろやめろ。

カイナが笑顔でルルーシュに右腕を差し出した。

「一緒に目指さないか？ 戦いのない世界を」

引き金を引いた。

第五十八話「差しのべられた手の先にあるもの」(後書き)

細かく両サイドを書きたいために一話一話が短くて(=進行遅くて)、申し訳ない。

とりあえず島編は後二話ぐらいで終わる、予定。

第五十九話「その場所にいるべきなのは」

ライとユーフェミアは、昨夜の和やかな雰囲気など忘れたかのようには静かに歩いていた。ライが昨晩人工的な明かりを見た。敵か味方かは不明だったものの、現在その方角へ向かっているところだ。背中にユーフェミアの視線を感じつつ、ライは黙々と歩いた。もう話す必要を感じない。どころか、これ以上喋ると余計なことまで口走ってしまいそうだった。

「待て」

人の気配がしたところで立ち止まり、ライは影に身をひそめる。不自然に木々が切り開かれた場所があった。その場所の反対側から二つの影がその場にやってくる。人影は見知った姿をしていた。カレンとスザクだ。二人とも特にケガはなさそうだ。動揺した心を一瞬で落ち着けたライは、カレンが拘束されているのを見て、ユーフェミアの腕を掴んだ。

「悪いが、捕虜の役目を果たしてもらおう時が来たようだ」

「分かりました……ですが、最後にあなたのお名前を聞かせてもらってもよろしいでしょうか？」

ユーフェミアはやはり抵抗らしい抵抗はしなかった。代わりとばかりにどうでもよさそうなることを聞いてくる。ライは青い目を数秒宙にさまよわせてから口を開き、小さく笑った。嬉しそうで、それでいて悲しそうな笑顔だった。

「あいつはさびしがり屋で甘えたがりのくせに、甘えるのが究極的

に下手なんだ」

「え？ きゃっ」

疑問の声に答えずライはユーフェミアを引きずるようにスザク達の
前へ連れて行った。カレンとスザクが驚きに目を見張る。しかし
カレンはすぐ嬉しそうな顔になった。

「ユーフェミア様っ？ それにライがどうして」

「ライ！ よかった、無事だったのね」

「動くなスザク！」

ライは小型のナイフをユーフェミアの首元につきつけた。駆け寄
ろうとしたスザクの動きが止まる。自分の主が人質にとられたから
だけでなく、衝撃が大きいようだ。見知った顔だから、というだけ
でもないだろう。彼は、カイナのことを知っているのだから。

「ま、さか君まで黒の騎士団に」

「そうだ」

「何故だっ？ 何故！」

「何故か、だと。愚問だな、枢木スザク」

その場に響いた第三者の声に誰もが一瞬気を取られた時、ライは
背筋が凍りつくような殺気を感じて、ユーフェミアをスザクへと突
き飛ばした。

「あいつを頼む」

「えっ？ まさかあなたは」

驚いた声を出したユーフェミアがライを振り返った。そのまま倒
れこむ寸前にスザクが彼女を抱きとめ、スザクの近くで拘束されて

いたカレンはその隙にゼロに近寄った。ライもまたゼロの横に跳び、二人と合流する。先ほどまでライがいた場所に転がっているのは、ただの石ころだった。それでも当たって無事ですまないことを、ライはよく知っていた。

石が飛んできた方角へゆっくり目を向ける。

久しぶりに見たカイナは髪こそ短かったものの、ライの記憶にある彼女で間違いない。ただ、俯いていたので顔は見えなかった。綺麗なあの黒い瞳が見れないのことを残念に思った。

おそらく、カイナに気づいたのはライだけだったろう。完全に気配を消したカイナは静かにユーフェミアの後ろに付き従った。ライは歯を食いしばった。覚悟していたとはいえ、その光景を直接見ってしまう、どうしようもない胸の痛みを感じてしまった。ユーフェミアが立っている場所には、本来自分がいるはずだったのだ。一体どこで、どうして自分たちの道は別れたのだろうか。

しかしカイナがその場に足を踏み込んだとほぼ同時に足元が大きく揺れ始め、ライに考え事をする余裕はなくなった。人工物らしき床に鳥のような文様が浮かぶ。これはどこかで見、

「いつが、あああああっ！」

「ライっ？」

誰かに名前を呼ばれたが、返事はできなかった。頭の中に次から次へと津波のように情報が押し寄せる。

『ライ、おはよう』

優しく笑う女性がいた。

『お兄様、見て。綺麗でしょ』

自分に花を差し出してくる少女がいた。

『主様、ぬしさまご安心ください。私があなた方をお守りします』

必死に勉強しているカイナがいた。

『野蛮の血』 『薄汚い子供が』

嗤う周りの大人たちが、彼女たちを傷つけていく。弱い自分を恨み、力を欲した。その願いに応える声があった。手に入れた力で戦い。血が流れ。戦って戦って戦って。そして、

『 敵を殺せ！ 』

「あああああああああああつ」

第五十九話「その場所にいるべきなのは」(後書き)

島編はあっさり目に終了します。一応後一話、かな。
いよいよライの過去編です。

第六十話「もういらぬ」

いくら覚悟していても、やはり辛いものがあつた。

突如苦しみ始めた彼に思わず近寄ろうとして、カイナは呼吸を忘れて立ち止まつた。

「ライっ？ どうしたの、しっかりして！」

赤い髪の少女が彼に付き添っていた。ゼロもどことなく心配そうに彼を見ていた。もう自分は要らない現実を、問答無用で突きつけられる。周りで様々な雑音がする中、カイナは苦しむ彼から目が離せなかつた。黒いナイトメアの影に見えなくなつても、彼の存在を感じられなくなるまで見送つて、ようやく息を吸い込んだ。

「げほっかはっ」

「カイナ！」

一気に入りこんだ空気でせき込んだ。そこで周りの人間はカイナの存在に気づいたようだった。乱れた呼吸を正常に戻してから、カイナは普段通りに笑つた。いつの間にかいた洞窟らしきその場所は、よく声が響いた。軽く見まわしただけだが、遺跡らしい。見たこともない装飾や巨大な扉らしきものに、カイナは何故か懐かしさを感じた。

現状把握をざつとした後でスザクとユーフェミアに向き直る。

「さつきからいたのに酷いですね、殿下。スザクまで」

「ええっ？ ご、ごめん。気づかなかつた」

「すみませんカイナ」

謝ってくる二人に苦笑を返し、カイナは先ほどから感じる不躰な視線を追った。その先に居たのは一人の男で、ついと目が細まった。小太りではげ頭その男を、カイナはよく知っていた。記憶を失っていた自分を捕まえ、研究していた男、バトラーだ。カイナはこの男の下から逃げ、ロイドに拾われた時に再び記憶を失った。実験の副作用だったのだろう。軍に警戒心を抱いていたのは、この男のせいだった。

さてここはどういう対応をすべきか。下手なことを言ってしまうと、また研究所らしきところに逆戻りになってしまいそうだ。逃げ出す自信はあるものの、わざわざ捕まりたくはない。

「失礼」

「え」

無視が一番かと思いはじめていると、香水のような匂いととも温かいモノがカイナの身体を覆った。白い高級そうな外套が肩にかけられていた。顔を上げると金髪の男がカイナに微笑みかけている。彼やバトラーにはばかり意識がいつて他の存在に全く気づいていなかった。カイナもスザクやユーフェミアのことを言えない。その場には何故かロイドもいた。呑気にこちらへ手を振っている。

背の高い金髪の男は、優雅な所作でカイナの手を取った。

「あなたがカイナさんですね。ロイドからお話は聞かせてもらっています。大変優秀な方だと」

展開について行けずカイナはまばたきした。手にそっと口づけられ、その男が微笑むのを他人事のように眺めた。誰だこの気障な男は。というか何がどうなっただろうなっているんだ。久しぶりにカイナは混乱していた。

「シュナイゼルお兄様」

「やあユフィ。無事でよかった」

だがユーフェミアが男を兄と呼んだことで我に帰る。ユーフェミアの兄、ということとは皇族だ。皇族ならば自分の恰好を見て外套をかけたなり、ああいう気障なことをしたりもするだろう。なるほど。カイナは納得した。

「失礼いたしました、シュナイゼル閣下。あのこれは」

慌てて一礼し、外套を返そうとするがシュナイゼルは微笑んでカインを制した。

「構いません。この島は温暖ですがその恰好ではお寒いでしょう」

「は、その、ありがとうございます」

別に寒くもなければ恥ずかしくもないので返してもいいのだが、皇族の前でこの格好がマズイことはさすがのカイナも理解している。どころか下手に突っぱねれば不敬罪にも問われかねない。カイナは大人しく頭を下げた。

* * *

気が付いた時、目の前には笑っている『彼』がいて、カインは自分が夢を見ていると悟った。彼はまだ幼く、彼の妹と彼らの母親も一緒にいた。彼ら三人は緑あふれる綺麗な庭で幸せそうに笑っていた。見覚えのありすぎる光景に、夢の中とはいえ涙腺が緩む。

『あつカイナ―こつちこつち』

彼よりも深い青の瞳を持つ少女がカイナを振りかえって大きく手を振った。嬉しくて、カイナは急いで彼らの元へ駆け寄り動けなくなった。足元を見る。いつのまにか足元に広がっていた赤黒い泥が、カイナのふくらはぎまでを呑みこんでいた。一体何が起きているのか。よく分からない。

くすくす。笑い声にカイナは顔を上げた。

『ねえカイナ。どうして守ってくれなかったの？ あなたを信じていたのに』

血まみれの少女がカイナに言った。何か言おうと口を開いても言葉は全く出てこなかった。

『どうしてかしら。とても痛いよ。助けてカイナ』

胸に槍が突き刺さった女性がカイナに手を伸ばした。触れた手は信じられないほどに冷たく、硬かった。

『私と一緒に戦うと誓ったではないか 裏切り者め！』

銀色の光をまとった少年が青い瞳を赤紫に染めて、カイナを見た。違うのだと言いたくて口を開き、必死に手を伸ばした。だが少年は、カイナに背を向けてどこかへ歩きだす。追いかけようと沼の中でもがいたが、意思とは反対に身体はどんどん沈んでいった。

主様！

声ならぬ声に反応するように彼が一度カイナが振り返った。大好きだったはずの青い瞳を見て、身体が凍りついた。

『もつお前などいらぬ』

どうでもよいモノを見る目だった。彼にだけは向けて欲しくなかった目だった。カイナという『存在』は、彼に与えてもらったものだから。

抵抗する気力はすでになく、カイナは沼に飲みこまれた。

第六十話「もういらない」(後書き)

島終了。

けっこんめっせり終わった感じで。

2011・06・06(誤字修正 ごめん、バッテリー)

第六十一話「それを運命の別れ道とでも言うのか」

ブリタニア辺境の小さな国。そこでライは領主の息子として生まれた。

ライの母親は日本という島国から嫁いできた女性で、いつもとても柔らかい笑みを浮かべている人だった。

やがて妹も生まれた。妹は母と同じ黒髪で、ライよりも深い青の瞳を持っていた。自分の後をついてくる小さな妹は可愛らしかった。自分たちを優しく見守ってくれる母が好きだった。二人がいればライはそれだけで幸せだった。

しかし、遠い地から嫁いできた母の地位は低く、周りから軽んじられていた。彼女が生んだライたちも同じく。

自分だけならともかく、二人が冷たいあの視線にさらされるのは、ライにとって耐えがたかった。力を欲して剣を学ぶようになった。勉強をするようになった。それでも領主の座とは無縁な子供の相手をする者はいなかった。ライの上には、彼らが言うところの『正當な血』を引く兄がたくさんいたのだ。

悔しくて悔しくて。どうにもならない苛立ちを感じながらも漫然と過ごしていたある日、妹がぼつりつぶやいた。街に行ってみたい、と。

当時、女性の身分はまだ低く、特に母と妹は異国の地を引く者として厭われ、与えられた離宮から自由に出ることすらできなかった。男であるが故に多少自由に動ける自分を、妹が時折羨ましそうに見ていたのをライは知っていた。普段我がままを言わない妹のささやかな願いだ。

絶対に叶えてやりたいとライは思った。

街に出ることなど訴えても許してもらえないはずがなかったので、

こっそり抜け出すことを考えた。離宮の庭を歩き回り、堀を越えられそうな場所を探し、兵の巡回のパターンを理解して準備を整えた。決行の日、ライは妹と共に比較的動きやすい服を身につけ、堀の傍に生えている木に登った。手間取ったものの、無事に堀を乗り越えた。

街には見たことがないほどたくさんの人がいた。

「お兄様、あれはなんでしょう？」

「こら。走ると危ないよ」

「大丈夫ですわ。ほら早く早く」

妹は初めての外に興奮していた。呆れつつライは追いかけた。こんなに楽しそうな妹が見られるのならまた抜け出すのもいいかもしれない。かつてないほど、彼は穏やかな気持ちを抱いた。

二人は街を楽しそうに歩き回り、そのうち暗い場所に迷い込んだ。先ほどまでの明るい街並みが嘘のようだ。鮮やかな色の全くない灰色の世界だった。そこかしこにゴミがあり臭いもひどい。何よりそこにいる人間の目が二人を恐怖させた。

「貴族のくそガキか」

「ひひっ中々見目がいいな。売ればかなり値がはりそうだ」

「おいおい、さすがに目をつけられるだろう。服ぐらいにしとけ」

「何言つてやがる。手を出した時点で同じだろうが」

「はははは。ちげえねえ」

見たことのないほどボロボロな布をまとった男たちが、ブツブツ相談しながら二人を囲む。不気味な笑い声にライは一步後ろに下がって、踏みとどまった。彼の後ろには妹がいた。自分以上に怯え震えている妹へ、ライは精一杯の笑みを浮かべて見せた。

大丈夫。

頭をそつとなで、前に向き直る。なんとか妹だけでも守らなければ。ライが護身用の剣に震える手を添えた時、

「奴がいたぞー」

響いた声に男たちの動きが止まった。舌打ちが聞こえる。剣を振りぬいた。

「ああ。もうそんな時間だったか」

「どつする？」

「とりあえずひん剥いてから行……ぎゃあああっ」

「このガキっ」

意識の逸れた男たちの一人をライは切りつけ、包囲が乱れた場所を妹の手を引いて走り抜けた。初めて人を切った恐怖を感じる暇などなかった。ただひたすらに走った。心臓がありえないほどうるさかった。

「おつに、さ」

「しっ」

二人は何度目かの曲がり角を曲がり、物陰に隠れる。もっと遠くまで逃げたくとも、体力は限界にきていた。なんとか息を整えようとするが、今さらながらに恐怖を感じて呼吸は乱れる一方だった。ライは自分の情けなさに泣きたくなった。

「どっか行け！ この化け物」

聞こえた大きな声に二人は、大げさなほど身体をすくめた。身体の震えは止まらない。

しかし、甲高い声はまだ幼く、先ほどの男たちではないことはすぐに分かった。それでも恐怖を感じた。明るく楽しそうな声にこめられた無邪気な悪意を、ライも彼の妹も感じ取ったのだ。

いろんな声がやむことなく響いた。子供らしき声が多いが、中には大人の声も混じっていた。どうもかなり大勢いるようで、聞こえる声は一方的なものだった。悪意をぶつけられているものの声は、奇妙なことにまったくしなかった。

そのことに気がついた時、ライの震えは止まっていた。代わりに彼を支配したのは、

「ここにいますように」

「おにっ」

「しっ」

妹の制止を振り切って駆け出したライは、うずくまる黒と出会った。

伸び放題の黒髪はべっとりしていてあちこちにゴミがついていて、肌は赤黒く、身体にはぼろ布を巻きつけただけという格好。近寄れば鼻を押さえたいくなるような臭いがすることだろう。だがライは、

「止める！」

うずくまる黒の前に立ちふさがった。

虐げられているその姿が自分たちと被って、無抵抗な姿にひどく苛立ったのだ。

その後、一時は危なかったが、妹が助けを呼びに言ってくれたおかげでライは無事だった。そして、あの黒を連れ帰ることにした。妹が心配したからだ。

次に出会った時、あの『黒』は風呂に入れられたらしく赤黒かった肌は綺麗な白色をしていた。べっとりしていた黒髪も艶を取り戻し、動くたびに軽やかに揺れた。中々に顔立ちも整っていた。しかし、何より黒い瞳にライは惹かれた。宝石のようだと幼心に彼は本気で思った。最初に感じた憤りなど、すっかり忘れていた。

『黒』は己の名前を知らなかった。

どころか言葉もろくにしゃべれなかった。あ、あ、と赤ん坊のように喋る『黒』に、自分の名前を呼んで欲しいとライは強く思った。妹とどちらの名前を先に言わせるか競争した。勝者は母だった。こともあるうに「ママ」と呼ばせたのだ。どうもそれが一番発音しやすかったらしい。後々に言葉の意味を知った『黒』が気絶して大騒ぎになるのだが、まあ今は関係ない。

『黒』に名前を付けたのは多少の言葉を覚え始めた頃だ。なるべく発音しやすそうな、意味よりも音を重視してライは一生懸命に考えた。最初に思いついた名前は、あまりに恥ずかしくて止めた。でもその響きは残したくて少し変えてカイナにした。結構いいじゃないか、と彼は満足げに笑った。

名前を自信ありげに告げると、母親に「音があなたの名前に似ているわね」と微笑まれ、ライは顔を赤くさせた。しばらく妹からもからかわれた。『黒』、改めカイナだけが不思議そうだった。

そんな風にライたちはのんびりと過ごしていた。

相変わらず周りの大人の目は冷たかったけれど、妹は遊び相手ができたことで嬉しそうだったし、母親も子供がもう一人できたみたいだと言って笑っていた。二人の笑顔を見て現状のままでもいいかもしれないとライは思った。

だがある日、カイナが牢に入れられた。

上の王子が妹に無体を働こうとしたのを防ぐためにカイナは王子ともみ合い、怪我を負わせてしまったのだ。悪いのは誰が考えても王子の方だが、カイナは庶民の生まれで相手は王子である。どちら

の主張が通されるかなど、考えずとも明白なことだった。極刑は免れない。

妹は自分のせいだと泣いた。母親は父親に取り次いでもらおうとしていたが話すら聞いてもらえず、ただ目を伏せた。ライは……力を欲した。妹が泣いて、母親が悲しんで、後ろを振り返っても嬉しそうに細められる黒い瞳はどこにもなくて。

「力が欲しい」

ライは拳を握りしめ、腹の底から絞り出したような声で言った。

「ならば君に力を与えよう。条件はあるけど、ね」

「え？」

予想外にも答える声があった。ライ以外には誰もいなかったはずの庭に、一人の男がいた。どこから侵入したのか、いつからいたのかも分からない。顔すら深くかぶったフードでよく見えなかったが、声から察するにまだ若い男のようだ。

男は契約を持ちかけてきた。

見知らぬ男の怪しげな言葉など、ふだんならライは気にもかけなかったはずだろう。だがカイナの処刑日は確実に迫っていた。藁にもすがる思いで彼は手を伸ばした。

「力をくれるというのなら結ぼう、その契約を」

男の口元がニイと笑みをかたどった。

半信半疑ではあったものの、男の言葉は嘘ではなかった。ライは契約により絶対的な力を手に入れ、カイナを助け出した。妹は泣きはらした目をしたままカイナに抱きつき、母親は喜びと安堵の涙を流した。

ライはそれまで領主になろうと思ったことはなかった。しかしこの出来事で考えを改める。このようなことはこれからも起こりえた。現状に甘んじるのを止めて、戦うことを決めた。

決意を固めて城へ向かう彼を呼びとめる声が、あった。

「主様ぬしさま、このようなお時間にどちらへ？」

不思議そうな黒い瞳を見て決意が揺らいだ。これからライが歩こうとしているのは孤独な道だ。自分は耐えられるだろうか。そんな不安を抱いた。

ここでライは最初の過ちを犯した。

「これから私は戦いに行く。だからどうか 私と一緒に戦ってください。カイナ」

「っ……はい、喜んで。主様ぬしさまが戦いに赴くおもむのならば、私はあなたの剣となり盾となりましょう」

彼女は微笑んで跪ひざまづいた。

ライは知っていた。こんな言い方をすれば彼女が必ず頷くことを。彼女が自分に寄せる敬意や恩義、彼女自身の優しさを、自分は利用したのだ、と。

第六十一話「それを運命の別れ道とでも言うのか」(後書き)

過去編です。カイナさんというイレギュラーがいるため、あちこち改造してます。でも基本は原作の流れと同じです。

第六十一話「たとえどれだけ憎まれようと」

目を開けたカイナの視界では翡翠色が広がっていた。しばし彼女はぼんやりとその色を見つめ、それがスザクの瞳だと気付いた。少年は今にも泣きだしそうな情けない顔をしていた。カイナはふっと笑った。スザクを見つめて彼女は心の中で呟いた。大丈夫。自分は大丈夫だ。言い聞かせているようだった。

「ひどい間抜け面だな」

「カイナ」

カイナは右手を彼の頭へ伸ばして、いつものように彼の頭を力一杯撫でつけた。彼女の右腕は白いシャツで包まれていた。どうやら寝ている間に着せかえられたようで、軍服の上着がベッド脇に置いてあった。存分にスザクの柔らかい髪を堪能してから、カイナは橙色の上着を手に取り羽織った。

「ここはどこだ？」

「アヴァロン……シュナイゼル殿下の空中艦だよ。ここはその医務室」

「なるほど、あれか」

カイナはミサイルを防いだ後に現れた空飛ぶ戦艦を思い浮かべた。なるほど。彼女は納得した。スザクへ下された命令はシュナイゼルの作戦だったのか。

「で、なんで俺は捕まってないんだ？」

グチグチ考えるのを止め、カイナは素朴な疑問を口にした。カイナにはユーフェミアを基地へ連れ帰るように命令が下されていた。それを無視して皇女を危険な場所へ連れて行ったのだ。罰せられてもおかしくない。というより罰せられない方がおかしい。スザクはスザクで帰投命令を無視している。本来なら二人揃って牢屋にいないければいけない身の上なのだ。

スザクはシュナイゼルが取り計らったとカイナに伝えた。整ったカイナの眉が形をゆがませる。どうも厄介な相手に借りを作ってしまった。スザクは純粹に感謝しているが、カイナにはそう思えてならない。

「緊急時のことだし、君はユーフェミア殿下に命令されたから仕方ないって」

「そう、か」

シュナイゼル・エル・ブリタニア、帝国宰相。

カイナの意識が手の甲にいった。遺跡で左手に口づけられたのを思い出す。妙な夢を見たのはそのせいな気がした。

「ん、あれ？」

そういえば、どうして自分はここで寝ているのか。

おそらく貧血とカイナには察しがついたが、真っ先に聞くべきことだろう。ずいぶん寝ぼけている。苦笑したカイナは左手から視線をスザクに戻し、「うげっ」と盛大に顔をひきつらせた。スザクが不機嫌だった。間違いなく怒っている。カイナには理由がいくつも思い浮かんでしまった。現場にかけたことだとか、ユーフェミアを連れて行ったことだとか、今ベッドで寝ていたように気絶してしまったことだとか。

「いや、あの、ス」

「もしかしてシュナイゼル殿下のことを考えてるのかい？」

スザクは話を遮った。これは彼が本当に怒っている証拠である。益々カイナはどうしようかと悩んだ。質問の意図もよく分からない。とりあえず嘘をつかず正直に話すことにした。

「えー、まあ、そうだった、かな」

しかし話しながらカイナが考えてみれば、たしかに先ほどまで考えていたものの、今はスザクの機嫌を直す方法について考えている。答えづらく、あいまいな返事になってしまった。するとスザクの機嫌がさらに悪くなり、目つきが鋭くなった。そんな彼から距離を取ろうと思わずカイナはのけぞり、墓穴を掘ったのを認識した。突如スザクが微笑んだのだ。

「なんで僕から離れようとするの？　もしかして、何かやましいことでもあるのかい？」

なんでというかやましいというか、単純にあなたが怖いからです。とはさすがのカイナにも言えず、「あ、あははは。どうしてだろうな」と渴いた笑い声を上げるにとどめた。もうこれはお手上げである。思ったカイナは逃げるためにベッドから立ち上がった。ドアへ向けて一歩踏み出し、

「どこにいくのかイナ。話はまだ終わってないよ」

右手をスザクに捕まえられたことで逃亡は失敗に終わる。まさか無理やりほどくわけにもいかない。仕方なしにカイナは恐る恐る振り返った。彼女の手の甲に、柔らかい何かが一瞬触れた。

「ん？ どうしたんだ、スザク？」

スザクは座っていた椅子から降り、カイナの前に跪いていた。茶色い頭がカイナの右手近くで固定されている。どうやら先ほど触れたのはスザクの唇で、手の甲にキスをされたのだと理解はした。カイナの顔が傾き、黒髪が頬を滑っていく。勢いよくスザクは顔を上げた。心なし彼の顔は赤い。

「あついや、違っただこれは！」

両手を顔の前で大きく横に振っているスザクを、カイナは不思議なものを見る目で見つめた。

「何が？」

「えっ………あー、うん。カイナは気にしないでいいよ。むしろ気にしないでくれたらありがたい、かな」

一瞬茫然としたスザクは脱力したように息を吐いて、安堵したようなガツカリしたようなよく分からない表情を浮かべた。顔を傾けたままカイナはスザクを見ていたが、翡翠の瞳が逸らされたので答えは返ってこないと判断し、とりあえず頷いた。

「スザク、カイナは目覚めま……あら？」

「あ、殿下。おはようございます」

微妙な空気が流れ始めたところで部屋のドアが開き、カイナは左手を上げた。カイナのあいさつを軽く無視したユーフェミアは驚いたように目を見張って、歓喜の声を上げた。

「まあ、ようやくその気になったのですね、スザク！」

「へっ？ 殿下一体何のことでおわあっ！」

「どうおわあ？」

ユーフェミアが満面の笑みでスザクの手を指さし、指の先を追ったスザクは奇声を出した。未だスザクとカイナの手はつながったままだった。スザクは慌ててカイナの手を離す。気のせいではなく、間違いなくスザクの顔はトマトの如く赤い。

「私は二人がいつ一步を踏み出すのかと」

「ユーフェミア様！ お、おとおおち、落ち着いてください。今のは違うんです！ 僕とカイナはそういうのでは」

楽しそうなユーフェミアと焦っているスザク（お前が落ち着け）を眺めながら、「よく分からないが、もう怒っていないみたいだし、まあいいか」とカイナは傍観者に徹することにした。スザクがユーフェミアにからかわれるのはいつものことだ。気にしていたらキリがない。

眺めているカイナの脳裏で、声が聞こえた。

『もうお前などいらぬ』

あの夢のことをカイナは誰にも言わなかった。どれだけ彼に恨まれようと、今の自分がすべきことを成し遂げるのだ、と決めていたから。それに、もう自分にはスザクやユーフェミアたちがいる。彼にもルルーシュやあの赤毛の少女たちがいる。だから大丈夫。何度も言い聞かせる。何度だって言い聞かせる。

今だ言い合いを続けている二人を見ながら、カイナは一人で戦っていた彼の背中を思い出した。

第六十一話「たとえどれだけ憎まれようと」（後書き）

カイナとスザクの間に恋愛感情はありませんのであしからず。

この二人は、ぶっ飛んでいる姉と、姉に振り回される弟なイメージで書いてます。友情というより家族愛ですね。お姉ちゃんをとるな！的な。

そこにユフィという妹？ がまざって仲良くやってたら良いと思うよ、この三人は。

第六十二話「重ね続けた罪の末」

ライが力を手に入れてからは戦いの連続だった。兄を殺し、父を殺し、ライが王となっても戦いが終わることはなかった。

執務室のドアが開いた。入ってきたのは黒髪の青年　女性、カイナだった。彼女は厳しい顔をしてライに告げた。

「主様、東で謀反の動きが」

カイナはライの騎士となっていた。女性では騎士になれないと知ったカイナは「ならば女であることを止めます」と迷いなく宣言し、男として彼に仕えている。

一つにくぐられた長い黒髪を見ながらライはため息をついた。

「またか」

ライもカイナも、あの日からたくさんの血を浴びた。これからも浴びるのだろう。いつ終わるのかも分からない戦いの中、罪悪感を感じつつも彼女がいてくれてよかったと心の底からライは思う。一人で歩くにはあまりにもこの血塗られた道は歩きづらかった。自分が殺し、奪ってきたものに足を取られても、カイナが支えてくれた。血の海で沈みそうになったらカイナがそこから引つ張り上げてくれた。

「準備は？」

「すでに整っております」

短く訊ねればライが期待した通りの言葉が返ってきた。

皮肉と言えいいのか。

カイナは戦に関して、天才と表現するに相応しい才能を持っていた。もしもライが戦いへと誘わなければ、おそらく誰にも知られることなく埋もれていったらう才能だ。

ああ、やはり皮肉としか言えない。

とても純真でとても澄んだ綺麗な空気をまとっている彼女ほど、戦いが似合わない人間はいないだろうに、誰よりも戦いの神様とやらに愛されているのだから。

「出るぞ」

「はい、主様」

自慢の騎士をつれて今日もまた、ライは戦いに赴く。カイナが前線に立ち、ライが後方で全軍を指揮する。

人は『黒風銀雨』と二人のことを表した。暴風雨、嵐、とは随分と御大層な名前をつけられたものだ。ライは苦笑し、呟いた。

「災害を受けたくないのなら大人しくしていればよいものを」

そんな戦いだらけの日々は、ある日唐突に終わりを告げた。

執務室の扉が勢いよく開かれ、入ってきたのは泥だらけの伝令兵だった。

「陛下！ 北の蛮族が攻め入ってまいりました」

届いた知らせは絶望であった。敵軍の総数は自分たちよりはるかに勝っている。土気の低下、国民の不安を取り除くためにライは急遽演説を行った。演説をしながら感情の高ぶった彼は、言っただけではない言葉を口にした。

これが二つ目の罪。

「敵を、奴らを皆殺しにしろ！ 敵を殺せ！」

その時ギアスがライの意思に関係なく発動し、彼の言葉は逆らえない命令となった。

彼の声を聞いた国中のものたちは武器を手に取った。中には子供もいた。女性もいた。老人もいた。彼が愛した家族もいた。武器が手に入らないものはクワやホウキを持ちだし、鬨とぎの声を上げた。国が、大地が揺れた。誰もが敵を殺せと叫びながら戦場に向かっていった。

「ま、まて！ 今のは違う」

慌てて命令を撤回したが、もはや誰もライの言葉など聞いていなかった。……いや、一人いた。うめき声に彼は後ろを振り返った。

「ぬしさ、ま」

「カイナ！」

カイナは正気だった。ライは安堵の息を吐き出した。

彼が思い返せば、カイナは何かと必死に戦っている苦悶の表情をしていた。きつとギアスに抗っていたのだ。だがそんなことにも気付かずに、ライは最後にして最大の罪を犯した。焦っていたのだ、など、言い訳にもならない。黒いカイナの衣服を掴んで、ライは叫んだ。叫んでしまった。

「助けてくれ、カイナっ」

ライは目を開けた。視界はひどく歪んでいて、自分がどこにいるのかわからなかった。彼が呆然としていると鼻をつく薬品の匂いがして、医務室だろうかと推測した。

「あ」

聞こえた声に自然とそちらを見たライだったが視界は歪んだままで、ただ赤色が見えた。誰だろうか。いや、そもそも自分は一体どうなっているんだ。医務室って、どこの？ 城にこんなところはなかった。城？

思考がひどく混乱していた。

「ライ、よかった、めざまめ、て」

声から察するに赤い誰かは女のようにだった。近寄ってきて自分を見下ろしている誰かをじつと見返す。相変わらずライの視界は不鮮明だが、ベッドのようなものに寝かされているのだとようやく彼は理解した。女に事情を聞こうと口を開くも喉が張り付いていて、出たのはうめき声だけだった。

「あ。水を……起きれる？」

ライはだるい体を女に手伝ってもらいながら起こし、口元に運ばれた水差しのようなもので喉を潤した。一息つく。そして顔に手を当てた。違和感があったのだ。触れた指先は頬が濡れていることをライに教えた。濡れている？ なぜ。

「よほど苦しかったのね。ちょっと待って。今拭くから」

苦しい？ 何が？

柔らかい布で顔が拭われる。その布がどんどん湿気るのをライは感じた。少し晴れた視界の中で赤い髪の女が、悲しげに顔を歪めたのを察した。

「やっぱりまだ熱があるわね。ライ、あなたすごくうなされてたのよ」

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれているこの女は誰だろうか。ライは名を問おうとして、スツと女の名が浮かんできた。

「カ、レン？」

そう。彼女の名前は紅月カレン。黒の騎士団のエースパイロットで生徒会メンバーの一人。そしてここは黒の騎士団の医務室。視界がずっと歪んでいるのは、泣いているからだ。なぜ泣いているのか。答えはあまりにも簡単すぎて、ライは腕を伸ばした。

カレンはどこか様子がおかしいライを心配そうに見た。涙は拭いても拭いても止まらない。

「ねえやっぱりまだどこか苦しいの？ 私、ラクシャータさんと呼んひえっ」

跳ね上がったようなカレンの声を耳元で聞きながら、ライは涙を流していた。動揺しているカレンに「ごめん」と短く謝った。暴れていたカレンは動きを止めた。しばらくしてからトントンと優しく背中を叩かれ、ライはしばらく静かに泣いた。

泣く資格もないのだと思いつつも、彼の涙は止まりそうになかった。

『ついておいで。いいものを見せてあげる』

最後まで尽くしてくれた騎士まで失い、呆然と立ち尽くしているライの前にあの男が現れた。ついてこいといって歩き出した男の後ろを、ライは頼りない足取りでついて行った。考えることを放棄していた。

途中で彼は何度も柔らかい何かや粘っこい液体に足を取られた。支えてくれる手はない。起き上がるのを手伝ってくれる手もない。だがライ空ばかりを見ながら歩いていた。どこをどう歩いたのか覚えていない。

男に連れていかれた遺跡で、ライは青い瞳を大きく開いた。

『カインナツ？』

驚く前にライの身体は動いていた。慌てて駆け寄ると、カインナはひどい有り様だった。綺麗な黒髪は不揃いに切り落とされ、血と泥がこびりついていた。身につけている服はあちこちが破け、そこから血が流れている。返り血だけでないことは病的に白い顔を見れば分かった。触れるのが怖くてライは凍り付いていた。

『大丈夫、生きているよ』

男の声に急かされるようにライは手を伸ばした。覚悟していた冷たさも硬さも感じなかった。よく見ると唇がかすかに動き、呼吸もしていた。か細い息だが、生きている。たしかに彼女は生きていた。

『半端者だったから回復には時間がかかるけどね。このままでいれ
ばいずれ目を覚ますよ。良かったね。普通の人間なら確実に死んで
いた』

『よかった。カイナ』

男の言った言葉の半分もライは理解していなかった。ただ生きて
いるカイナが目の前にいることだけを理解した。しかし男の言葉は
そこで終わりではなかった。

『だから君も、彼女と一緒に眠るといい』

ライが顔を上げると、男は『契約だよ』と笑いながら言った。契
約。確かに男とライは契約を交わし、その対価としてライは力を与
えてもらったのだ。

『君が必要となるその時まで、おやすみ。君が目覚める時には、彼
女も目を覚ませるぐらいに回復しているはずだから』

再びライがカイナへと目をやれば、呼吸しているのは分かるもの
のやはり顔色は悪い。生と死、いつどちらに転んでもおかしくなさ
そうに思えた。ライは彼女を見ながら考える。死にたい気持ちガラ
イの中には根強くあった。だが……。

長く残っていた黒髪の一房をライは手に取った。真っ直ぐな黒髪
には癖一つない。

昔、母も妹も黒髪なのに自分だけが銀色でお前が羨ましい、など
と彼女にこぼしたことがあった。カイナは大慌てで自分の髪を切る
うとした。あの時は止めさせるのが大変だった。後で母と妹からも
こっぴどく叱られたのも大変だった。ライは小さく笑ってカイナの
髪に口づけ、優しい声でささやいた。

『すてねますよじ』

第六十二話「重ね続けた罪の末」（後書き）

黒風銀雨について。

作中に出てくる”黒風銀雨”という四字熟語はありません。正しくは黒風白雨^{こくふうはくう}。意味は黒風が暴風で白雨がにわか雨。二つ合わせて暴風雨。二人は人扱いされてませんね。嵐とか。

後今回ねつ造が多くてすみません。契約があるから死ねないってロスカラ内ではなってますが違和感があつたんです。ルルが自分^こに銃を向けたらC・Cが困るシーン、原作にあるんですよねえ。だから契約した側は死ねるはず。死ななかった理由にしては弱いなと思ったので今回このようになりました。ってか、この主従ラブ過ぎて書いている方がはずい。けど、恋愛のラブじゃない、つもり。

どう無理なく話しをつなげるか、めっちゃくちや悩みました。更新も止まりそうでこわいっす。

第六十三話「日本人」

「そうですね。ゼロは応じてくれませんでしたか」

「はい。おそらくもう私の言葉ぐらいじゃ届きませんね」

カイナとユーフェミアは二人だけの会議をしていた。例の『戦いをなくしてスザクをいじめまくって泣かしちまえ大作戦』の会議だ。いろいろ付随しまくっているのはご愛嬌。ふざけた作戦名でも話の内容は至って真面目なものだ。

悩み始めたユーフェミアを見ながら、カイナはゼロとスザクのことを思った。スザクは自分が憎く思い追いかけている男が親友のルーシュだと知らない。自分は仕方なくとも、あの二人をこれ以上戦わせたたくない。カイナはそう思う。

なんとかしろ、と心臓が警告音を立てるのがうるさかった。そんなの言われなくとも分かっている。でも、どうすればいい？ 正体を教える？ 駄目だ。最近のスザクはどうも不安定で、彼がどんな行動を取るのか不明瞭すぎた。何があつたんだ？ あああつ違う。今はそのことじゃなく。いや、そのことなのか？ 違う違う。二人を戦わせないためにも、どうやったら戦いが終わるか考えなければ。

思考は空回るばかりで、良案はこれっぽっちも出てこない。昔からカイナは作戦の立案・構築が苦手だった。いつも作戦を考えてくれていた彼の偉大さを実感する。

「……日本人になれる場所があつたらいいんですけどね」
「え？」

ぽつりとカイナは呟いた。手の中の紅茶を眺めていたユーフェミアが顔を上げる。カイナは少し慌てたように笑った。

「いやっあ、っと、その。案が浮かんだわけじゃないんですが……名誉ブリタニア人だとか、イレヴンだとか、反ブリタニアだとかじやなくて、彼らがただ一人の日本人となって話せる場所があればなと。」

ほら同じ日本を思う者同士で戦うなんて虚しいだけですし。お互いの心からの意見をぶつけ合ったら、少なくとも日本人同士で戦うことは回避できるんじゃないかと」

そんな場所があれば最初から苦勞はしない。分かっているてもカイナは思ってしまう。そういう場所であればスザクもブリタニアと反ブリタニアに挟まれた立場でなく、素直に話せるはずだ。ゼ口達だつてそうだろう。

「やっぱリスザクの言う組織改革しかないのですかね」

「組織改革、日本人が日本人」

繰り返すように呟いているユーフェミアを見て、カイナもまた腕を組んで考える。

スザクの「中から変えるべき」というのは理想論だ。特にスザクは日本人、改革出来るほどの地位につくまでが果てしなく長い。いや、現在のブリタニアでは不可能と言いつてもいい。

では自分ならどうだろうか。

カイナはブリタニア出身ということになっている。しかもコーネリア総督はカイナを戦場によく呼ぶので、出世のチャンスはスザクより多い。

スザクはラウンズになって日本を取り返すと言っていた。確かにそれはそれでいいのだろう。だが、救われるのは日本だけだ。他の場所で戦いは止まらない。それではきつと何も変わりはない。

第一軍人が出世するということはそれだけ血を浴びるといふこと

でもある。スザクがナイト・オブ・ワンになるためにどれだけの人を殺すのか。同じ日本人を殺しつくしてその地位についたとして、同族を殺しまくったスザクを日本人が許すだろうか。その前にスザクの精神が持つだろうか。カイナは首を振った。きつと持たない。では海外で活躍する？ 日本人以外なら殺してもいい？ そんなわけではない。他国の人を殺しまくって成しえた平和など、今のブリタニアと同じだ。

「戦い以外、か」

もしかすると軍人という時点でダメなのかもしれない。

直接戦いに関与しない部署でのし上がるのも一つの手だ。だが、出世するのは戦に出るより難しい。賄賂が手っ取り早くとも、賄賂で得た地位など簡単にひっくり返ってしまふ。地位がひっくり返ればそれまでのこともすべて疑われて元に戻る可能性が高い。

庶民出身のカイナが出世する一番の方法が軍属なのは、たしかだった。役人になるという手もあるが、自分がそうだった方面に適していないことは経験から重々承知している。執政補佐の経験を活かすたとしても良くてそこそこの地位で終わるだろう。そこそこ、ではダメなのだ。

大体組織を変えろというより、ブリタニア全体の考え方を換えなければならぬ。ナンバース制度の廃止や植民地国の自治権を認めさせる、ナンバースへの差別化をなくす、なんてことができる人間は、ブリタニア皇帝しかない。

カイナは首を横に振った。その考えはルルーシユと同じ「ブリタニアをぶっ壊せ」となる。じゃあ、どうすれば。

ユーフェミアを皇帝に、という考えは一瞬浮かんですぐ消えた。また同じ罪を犯すつもりなど、カイナにはない。

じゃあどうするのか。

いつもカイナの思考はそこで止まる。元々考えることが苦手なカイナにしてみれば、ここまで考えることができれば上々ではある。こういう仕事は彼の分野だった。

ため息をついてからテーブルの紅茶に手を伸ばし、気が付いた。

「ユーフェミア皇女殿下、お話があります」

口を横に引き結んだスザクだった。ふと、島から帰ってすぐの会話を思い出す。

『スザク。あの方のことなんだが』

気まずげに口を開くとスザクは手でカイナを制した。翡翠の瞳が「言わなくても分かっている」と、優しく、寂しい光をたたえていた。

ここ最近カイナはコーネリアに引きずりまわされていたため、スザクと会うのはそんな話をして以来だった。声をかけようと息を吸い、静かに吐き出した。スザクはカイナの存在に気づいていなかった。ひたすら思いつめた顔をして、ユーフェミアを見つめている。退出した方がよさそうだと、膝に力を入れた。

「こちらをお返しします」

しかしスザクがユーフェミアに差し出したものを見て、カイナは動きを止めた。羽のついたカギのようなそれは、選任騎士の証であった。それを返す、ということとはつまり。

「重荷でしたでしょうか？」

「いえ、そんなことはありません。ただ自分が自分を許せないんで

す。父を殺した自分が」

カイナはスザクではない。だから彼が何を考え、思い騎士を降りたのか。説明されてもカイナにはよく分からない。しかし、

「殿下」

目の前で小さく震えているか細い肩が悲しんでいること、ぐらいは分かる。

スザクはよほど緊張していたのか。カイナに気づくことなく退出していった。それからずっと、ユーフェミアは無言のままドアを見つめていた。もう十分は経過しただろう。きっと彼女はスザクが再びそのドアを開けて部屋に入ってくるのを待っている。やっぱりさっきのはなし、だとか。冗談だった、だとか。照れくさそうに笑いながら言ってくるのを待っている。

「冗談や嘘ではない。分かっているけど、認めたくはないのだろう。かといって、いつまでもこの状態にいるわけにはいかない。カイナはもう一度彼女を呼んだ。」

「カイナ」

鮮やかな髪が、どこか億劫そうに揺らいだ。振り返ったユーフェミアの瞳に光るものがあつた。

「返されちゃいました」

騎士の証を見せびらかすように掲げて、彼女は笑った。

第六十三話「日本人」(後書き)

今回は面白みのない話ですみません。

じゃあいつも面白いのかと聞かれたら首を傾げますが(苦笑)。

第六十四話「呼ぶ」

一体どこをどう歩いたのか。ライは覚えていなかった。何度こけかけたのかも、覚えていない。そんなこと、今の彼にとってはどうでも良かったのだ。

求めていたのは唯一つ。

「こんなところにいたのか」

声をかけてきた人物へ、ライは億劫そうに目を向けた。緑色が風に揺れていた。

「C・C（シーツ）」

「ゼロやカレンたちが心配して騎士団は大騒ぎになっているぞ」「そうか」

ライの様子を見て、C・Cが眉間にしわを寄せた。

「何があった……いや、愚問だったか」

問いかけを途中でやめたC・Cは一人納得していた。ライはまた空へと目をやった。思い出すのは、一つの笑顔。主様。

どうも空は自分の色らしい。そんな大したものじゃないと何度言っても、彼女はそう嬉しそうに語った。だから空がたくさん見える場所が好きだと、なんの恥ずかしげもなく言われた時は自分の方が恥ずかしかった。

彼女と交わしたそんな細かい会話を、ライは今でもはっきりと覚えていた。

それは彼に残ったかすかな希望だ。

「記憶が戻ったんだな」

言葉をかけられても、ライの意識は別のものに向けられていた。しきりに首と目を動かして探している。川沿いの広々とした公園には男女が数人いた。彼らは思い思いに過ごしている。ライの探しものはその中にいなかった。ライはC・Cの存在を気にも留めずに歩き出す。足元をまったく気にせず歩いていく彼の姿は、ひどく頼りない。何度もこけかけた。そのたびに彼は期待を目に浮かべ、息を吐き出した。おかしいな、と呟いた彼の表情は今にも泣き出しそうだった。

ついにライは完全にこけてしまった。衝撃の少し後に痛みが走り、

『主様、大丈夫ですか？』

声がした。ライは勢いよく顔を上げる。

「カ」

「ライ、大丈夫？」

一瞬浮かんだ映像にライは顔を喜色に染め、すぐに落胆へと変えた。目の前に広がっていたのは望んでいた色ではなかった。声を腹の底から絞り出すようにライは彼女の名前を呼んだ。

「カレン、どうして」

邪魔をするんだ。

さすがにその言葉を口には出さなかったが、ライはめんどくさそうにカレンを見た。カレンは一瞬ひるんだものの、なんとか口を開

いた。彼女の声はいつになく震えていた。手も小さく震えていた。ライは彼女の異変に気づかない。

「どうしてって。ここからここにいるって聞いたから……さ、帰りましょ。まだあなたは熱が下がってないのよ。ゼロも扇さんも藤堂さんも、みんな心配しているわ」

「しんぱ、い」

言葉を繰り返し、顔を上げた。雲と青空が半々に広がっている。

「主様！ 何をなさっているんですか。安静にしているようにと、医者が言っていたではありませんか」

「大丈夫だ。あれは大きさに言っているだけで、私は」

「駄目です！ もっとひどくなったらどうするのですか。お願いですから治るまでは安静にしてください」

「ああ、分かった。分かったから、泣くな」

「あいつは、泣いたか？」

「え？」

ふっと笑ったライに、カレンは戸惑いの声を上げた。しかしライはまったく気にしていなかった。何も無い場所を見つめたまま「そうだな。帰って寝ないと、あいつが泣くな」と嬉しそうな顔をした。さきほどまでの途方にくれた顔はどこにもなく、穏やかな表情だった。今までカレンに見せたことのない表情だった。

カレンは大きな瞳に涙を溜めた。

「ライ？ 誰のことを言っているの？ さっきからあなた変よ」

「何言ってるんだ。あいつは」

首をかしげたライは青い瞳を大きく開いた。カレンの姿はもう見えていなかった。求めていたものがあつた。

遠ざかっていく色へ必死に手を伸ばし、足を一步前に踏み出す。弱った彼の身体は上手くバランスを取れずに傾いた。慌ててカレンがライを支え転倒は免れたものの、彼は不恰好なまま手を伸ばした。支えの手を邪魔だとまで思った。

自分が欲しているのは、この手じゃない。

「待ってくれ。待て！ お前まで私を」

「お願いライ正気に戻って。今あなたは高熱が出てるのよ。安静にしてて」

「なぜだ。なぜお前はそっちに行くんだ。違う！ お前がいるべきなのはそこじゃない」

「っ……あ、扇さんっ？ お願い早く来て。ライが変なの。ひどく錯乱してて」

呼吸荒くうわごとを繰り返すライにカレンは涙を流して懇願する。声は届かない。ライには、その色しか見えていなかった。どんどんと遠ざかっていくその色しか、彼には見えない。見ようとしなかった。

気を失う寸前までライはその色を見つめ続け、手を伸ばし続けていた。

『頼む。お前まで私を置いていかないでくれ カイナ！』

第六十四話「呼ぶ」(後書き)

次話更新後、少しお時間いただくかもしれませんが、どうしてもじっくりこなすことが出来ず、必死に書いてはいるのですが、どうもしっくりこなくて。

第六十五話「聞こえる」

「つたく、めんどくさい」

「そう言わないでくれるかな、カイナ君。僕だってめんどくさいんだから」

カイナとロイドは政庁内をけだるそうに歩いていった。重苦しく引き締まった空気が漂う政庁において、二人の緩みきつた雰囲気は随分と目立っていた。もちろん、そんなことを気にする二人ではない。気づいてすらいないだろう。

「スザク君が選任騎士を降りてしまった以上、君が繰り上げでユーフェミア皇女殿下の親衛隊隊長になるのは仕方ないでしょ。他に適任者もないみたいだし」

「そこだよそこ。俺以外に適任者がいないってのがまず問題だろ。どんだけ人材不足なんだよ、ブリタニアは。探せばゴロゴロいるだろうに」

「いやいやいや。ゴロゴロいたらとっくの昔に僕はたくさんデヴァイザー見つけてたよ。中々いなくて困ったんだから」

ロイドは呆れたようにカイナに言った。カイナは「そうかなあ」と不思議な顔をしていた。ロイドの言葉は嘘ではないが、着眼点がずれていた。突っ込みを入れられる人間は、残念ながらこの場にはいない。

「でもよ。隊長になるだけでどうして面接だとか書類手続きなんかが必要なんだ？ めんどくせーだけじゃねーか。隊長になれ！はい！ でいいと思うんだが」

「うーん。実は僕もそれで良いと思うんだけど決まりなんだって。それなら君だけ行けばいいのに。一応僕は君の上司で保護者だから僕のサインも必要らしいんだよ。まったく困るよね。今日はガニメデ見せてもらえるはずだったのにい」

「俺に文句言うな。……つたく、お前が保護者なんてこつちから願い下げだつての」

「あは。いつも思うけど、カイナ君って僕に対して冷たいよね」「気のせいだろ」

どうでもよい会話をしつつ、二人は足を動かしていた。もう少しで目的地まで着くところで、足音が止まった。

ロイドは後ろを振り返った。丸いメガネが窓から入った光を反射した。

「どうしたんだい、カイナ君」

カイナがロイドよりも3メートルほど後ろで立ち止まっていた。黒い瞳は窓を見ていた。気になったロイドも窓を覗いた。政庁の中庭でブリタリア人がのんびりと昼休みを満喫している。おいしそうな弁当を食べている数人の軍人を見て、ロイドは「お腹すいたのかい？」とのんきにたずねた。答えはない。

さすがに様子がおかしいとロイドが思った時だった。

「主様？」

「カイナ君？ えっ！ あ、ちょ、ちょっとここ五階いいいっ？」

窓を開け放ってカイナは外へと飛び出した。普段ニヤけた顔からほとんど表情を変えないロイドが、目を開いて驚きをあらわにした。彼にしては俊敏に窓へと駆け寄る。見下ろすと、つぶれたトマトはどこにもなかった。代わりに驚きで言葉をなくしている人々と、風

より早く駆け抜けていく黒い影が見えた。

第六十五話「聞こえる」（後書き）

ぐだぐだしております。ライ復活まではまだかかりそうな予感。
次回の更新はもしかするとできないかもしれませぬ。

あ、そういえばキャラ設定なるものが見たい方はおられますでしょうか？ 私は基本のつけない主義なんですけども、無事完結したら載せてもいいかな、と考えてます。

要望なければ載せませんけど（だってめんどりゃ）。拍手などで教えていただけると幸いです。

第六十六話・前編「すべて元に戻るだけ」

こつん。ゼロは足音を立てながら彼が寝ているベッドに近づいていく。ぼんやりとした青い瞳が自分へ向けられ、彼が口を開いた。

「お前は、誰だ？」

ゼロが動きを止めた。足音も思考も止まる中、マントだけが静止できず寂しげに揺れる。ライの秀麗な眉が中央に寄せられた。ゼロの前にいるのは、どこからどう見てもライだった。しかし……そこにいるのは、自分の騎士ではなかった。

「誰の許可を得てここに入った。カイナ、スマンハク卿はどうした」

矢継ぎ早に言葉を発するライに対し、ゼロは黙ったままそこに立っていた。ただ呆然としていた。青い瞳に睨まれているのが信じられなかった。ライが身体を起こして自分を警戒している。「私を殺しに来たのか」その言葉が自分に向けられたものだと思えるのに、かなりの時間を費やした。

ゼロとライの間には大きな、大きすぎる溝が横たわっていた。

「ここまでたどり着けたのは褒めてやる、だが」

冷たい声を発するライに、ゼロは指一本も動かさなかった。ライは、まだ本調子ではないだろう身体を動かし、構えを取った。嘘だと、思いたかった。

「カイナをどうした。返答しだいでは」

「ライ」

ようやくゼロは声を出した。震えた情けない声だと、自身で呆れてしまうほどにかすれていた。

青い瞳が驚いたようにまたたく。少し考えるそぶりをしたライだったが、眉を吊り上げて目つきが鋭くなるだけだった。

奇妙な沈黙が空間を包む。ゼロが指を仮面にかけた。手は中々言うことを聞かず、仮面を外すのに手間取ってしまう。

「私は……お前にとっての俺は、こんな簡単に消えてしまう程度の存在だった、ということか」

ルルーシュ黒髪が空気に触れる。ライは黒髪だけを見て柔らかい微笑みを浮かべたが、それだけだった。紫の瞳がぐにやりと歪む。

ライはゼロの、ルルーシュの顔を見ても不思議そうにするばかりで、ルルーシュが誰であるか分かっていない顔をしていた。それが演技ではないと理解できるほどには、ライを理解していた。

「さきほどから何を言っている。お前は私を殺しに来たのではないのか。なぜお前はそんな」

何かをライが言い終わる前に、ルルーシュはゼロの仮面を被った。それ以上は耐えられなかった。

潮時なのだろう。ライはルルーシュとゼロの荷を背負ってくれた。できるなら彼の荷を自分も背負いたい。ルルーシュは思う。しかし、自分には背負わせてもらえない。彼の荷を背負えるのは、この世にただ一人だけで、それは自分ではない。そのことを痛感する。

「覚えていないらしいが、お前は道端で倒れていた」

「え？」

「高熱が出ていたためこちらで保護した。それだけだ。まだ下がってきていない。安静にしている」

ルルーシュ、ゼロの声に震えはなかった。ライはその時ようやく自分がある場所に見覚えがない、と気づいたらしい。自分の身体や周囲を確認するように首をめぐらし、苦笑を浮かべた。ゼロの言葉に納得したようで「それはすまないことをした」と謝罪した。ルルーシュは以前、ライが高熱を出して倒れた時のことを思い出した。

「すまない。どうも頭が働いていないらしい」

「いや」

「世話になった。礼は城に帰ったら必ず」

「城？」

「これ以上寝ているわけには行かない。私にはすべきことがある。

ああ、迷惑ついदैといつてはなんだが、馬を貸してくれないか」

「馬だと？ 待て。その身体では無茶だ、寝ている」

起き上がろうとするライをゼロは必死に押しとどめる。しかしどれだけ言葉を重ねてもライは帰るの一点張りだった。どうしたらライを止められるか。ゼロは頭を無理やり回転させる。

「カイ……スマンハク卿には連絡してある」

「カイナに？」

告げた名前は効果覿面で、ライは動きを止めた。そのことにゼロはホッとした。同時に虚しさが彼を襲ったが、ゼロはそれに気づいていない振りをする。

気づいてしまえば、もう一人では立てない気がした。

「ああ。だからコレを飲んで横になっている」

「すまない」

水の入ったコップを渡し、ゼ口は背を向けた。気が抜くと足から力が抜けてしまいそうで、必死に立っていた。

「さようなら」

誰にも聞こえないほどの声で別れを告げた。

第六十六話・前編「すべて元に戻るだけ」（後書き）

短いんですが、次の話とはちょっとつながりが悪くて切らせていただきます。

今回は三本立てで、カイナさん視点はしばしお休み。

ライとゼロの関係がどうなるのかは、お楽しみに。

第六十六話・後編「すべて元に戻るだけ」

白いベンチに腰掛け、ルルーシュは眠ろうとしている太陽を眺めていた。道行く人々が彼の前を通り過ぎていく。みんな急ぐように足早で、だんだんと足音は減っていった。

街灯が気だる気な声とともに活動を始めたころ、彼の待ち人がやって来た。闇の中にあつて尚、その人物は黒い輝きを放っていた。まるで暗闇を従わせているかのようだ。黒い服を着ているわけではないというのに、その人物は黒を彷彿ほうふつとさせる。街灯に照らされた髪は自分と同じ色のはずだったが、もっと違う色にルルーシュには見えた。驚いた様子で自分を見つめる黒い瞳に嫉妬し、歯が悲鳴を上げた。

「悪いな。これでも早めに出てきたんだが」

ルルーシュの待ち人、カイナは腕時計を見た。時刻は7時15分。待ち合わせは7時30分だった。

「気にするな。俺が少し早く来てしまったただけだ」

「そつみたいだな。何時ぐらいに来たんだ？」

カイナはベンチに座った。ルルーシュはぼーっとその様子を眺め、そついえば自分はいつからここにいたんだろうかと記憶を振り返る。朝カイナに電話をして、それから……よく、覚えていなかった。身体が痛い。腹も減っている気がした。詳細は分からないもの、かなり長い間いるのは間違いない。

「さあな、それより」

首を振ってから目に力を入れた。目の前にある瞳を見つめれば、澄んだ黒色の存在を初めて知る。ルルーシュが見たことない色だ。もしも自分の瞳がこんな色をしていたら、ライに忘れられずにこれからはずっと傍にいられたのだろうか。

ありえない未来を想像し、自分を笑った。そんな仮定に意味はない。だからこそ、ルルーシュはカイナへ残酷な言葉をつむぐ。

「ライが記憶を取り戻した」

黒の瞳が激しく揺れ動いたのをルルーシュは観察していた。だがカイナは「そうか」としか言わなかった。予想外な彼女の態度に苛立ちを覚えた。分からないのか、と。俺にすべて言わせる気か、と。

「あいつは」

「で、なんだ？ 俺を殺すのか？」

言葉を遮られて今度はこちらが動揺した。ルルーシュは慌てて彼女から目を逸らし、アスファルトを見下ろす。心の底にある願いを当てられた驚きと、ライと同じことを言った彼女への妬みと、彼女にその言葉を言われた悲しみと。すべてが混ざり混ざった感情が出口を求め、胸の中で渦巻く。出口は一向に見つからない。

ルルーシュは何度か口を開閉させた。彼女を追い詰めるはずが、逆に問い詰められていた。

「どうした。なんかあったのか？」

優しい声に、止めてくれとルルーシュは思った。自分には、そんな声をかけてもらえる資格がない。ここに呼び出したのも最後に、すべて奪われ前に、彼女をぼろぼろに傷つけたかっただけだ。彼女は何も悪くない。自分がライと関係を築けなかっただけ。これはた

だの逆恨みだった。

ルルーシュが目をカイナに戻すと、彼女は思惑など軽く吹き飛ばすような、温かな瞳をしていた。話の先を促される。……感情の出口を見つけた。

「あいつが、俺のことを覚えていない」

溜め込んでいたすべてを、ルルーシュは勢いよくカイナへぶつけていく。彼女は微かに顔を傾け髪を揺らし、無言で耳を傾けてくれた。

初めてライと会った時は胡散臭く思ったこと。チェスで自分と互角の戦いをしたこと。どこか放っておけずに世話を焼いたこと。騎士団でC・C（シーツ）から紹介されて驚いたこと。すべてを知られた時に荷を半分背負ってくれと言ってくれたこと。それがとても嬉しかったこと。口喧嘩をしたこと。折り紙をナナリーと一緒に折ったこと。島で倒れてから高熱が出たこと。熱が落ち着くと自分のことを忘れていたこと。

他愛もない日常から、心の底の思いまで。身体の中が空っぽになるまで吐き出していく。言い終わったときには肩で呼吸をしていた。乱れた息を整えていると、終わったのを察したカイナは「そうか」また呟いた。

2人ともしばらくの間は何も喋らず、星空を見上げていた。

「……俺は、会わないぞ」

灰色の雲が星をいくつか隠したと同時に、カイナは目を瞑った。あまりにも意外な返事だった。ルルーシュは目を見はる。彼女がどれだけライを大事に思っているか。ルルーシュは聞いて知っていた。彼女は1度だけ肩を震わせた。笑ったらしい。

「なぜだ？ あいつはお前を、お前に助けを求めて。それにカイナ、お前だって」

カイナは目を開けてゆっくり首を振る。黒い瞳から彼女が何を考えているか察するのは、ルルーシュにはできない。ライならきつとできたのだろう。カイナの拳が密かに握りしめられ、痛そうな音がそこから聞こえた。

「違う。会えないんだ」

「あえない？ 会いたくないのか？」

「……………」

「カイナ」

「会いたいさ。今すぐ飛んで行って、傍に」

始終落ち着いた態度を貫いているカイナにルルーシュが「じゃあなぜ」と詰め寄る。カイナは唇を奇妙な形にゆがめた。怒った、というには寂しげで。寂しいというには決意が込められた。しかし笑ったというには、あまりにも悲しみの溢れた表情だった。

「今の俺では、あの方に会ってしまえば、また同じ過ちを繰り返してしまうのが目に見えているからだ」

過ちとはどういうことか。聞きたいとルルーシュは思ったが、堪えた。聞けばカイナは教えてくれたかもしれない。しかし、彼女から聞いてしまえば本当に終わりだと分かった。黙り込むと、黒い瞳が今度はちゃんと笑って自分を見た。

合格だ。

そう語っているように見えた。

「叶えたい夢があるんだ。その夢を成し遂げるまで、会うわけには

「いかない。だからそれまで、ルルーシュ。あの方のことを頼む」

「夢って……まさかっ本気であんなことを」

「まさかも何も、本気だったの」

『戦いをなくしたいんだ。大事な人たちを戦いから解放したい』

子供みたいに唇を尖らせるカイナを眺めていると、ルルーシュは島での会話を思い出す。

『世界中の戦いがなくなったら、お前やあの方みたいに頭のいい人間でもさ。さすがにもう戦えないだろ？ だからその足がかりとして、まずは日本から戦いを奪おうと思ってるんだ』

途方もない夢だ。無謀である。叶う可能性など皆無と言い切ってもいい。その夢が叶うまで会わないということは、つまり。お前はそれでいいのか？

声には出せなかった。カイナはただ笑いながらルルーシュを見ている。カイナの拳は人知れず解かれていたが、今度はルルーシュが拳を握っていた。

「あの方は意外と寂しがりやだな。そのくせ甘えるのが究極的に下手なんだ。傍にいてやってくれ」

「っしかし、ライは俺のことを忘れて」

「覚えてるさ」

「なぜっそういい切れる？ お前はあいつの目を見ていないからそんな無責任なことを言えるんだっ」

「なんでっつてそりゃ」

声を荒げたルルーシュに、カイナは唇の端をにっつと吊り上げてみせた。

「勘だ」

「……は？　かん？」

「ああ」

「根拠は」

「ないな。これっぽっちも」

大げさなほどに首を横に振るカイナに、ルルーシュが言葉をなくした。俯いて肩を震わせる。明らかに様子がおかしいルルーシュを見てカイナが心配し始めると、「くくく」笑い声が聞こえた。夜も更けた公園には2人以外の人影はない。そう、ルルーシュは笑っていた。

「くくつふ、くう、そ、そこは普通」あの方のことなら自分には分かる！』じゃないのか？」

「何言ってるんだ。そんな恐れ多いこと言えるわけないだろ」

唇を引き結んでムスツとしていたカイナだったが、ずっと笑い続けるルルーシュに連れられて明るい声を上げる。それから何か思いついた顔をして、上半身を倒した。素早い動きだった。

「ルルーシュ」

「ああ、分かって……ふ」

笑い声が唐突に止んだ。紫の瞳が大きく開いて彼女を見つめた。まつ毛の作る影がはつきりと見える位置に、彼女の顔があった。何が起こったのか分からず、ルルーシュは呆然としていた。唇が寒さを感じた時に、ようやく何をされたか理解する。赤くなった彼の頬にカイナの吐息がかかった。

「な」
「ふむ」

意味のない音を口から発しているルルーシュとは正反対に、カイナは落ち着いた様子であごに手を当て、何かを考えていた。上半身はすでに戻している。

うなり始めたカイナに、「おま、何を」ルルーシュがようやく出せた言葉はそれだけだった。カイナが「ん？」と首をかしげた。癖一つない黒髪が揺れた。

「いや、これすると元気になるのかなって。でもよく分からんなあ」

よく分からんのはお前の思考だ。何がどうなったらその行動に結びつくんだ。

ルルーシュは心の中で叫ぶ。

「ナリタでお前がこれしたら元気になったから試してみた。あ。ルルーシュはもう元気だったか」

ただでさえ赤かったルルーシュの顔がさらに濃いものへと変わった。あれはナリタでシャーリーの記憶を消した時だ。苦しくて悲しくてどうしようもなく。誰かに助けて欲しくて、近くにいたカイナにすがりついた。意図したわけではなかったが、触れてしまったのだ。何が、とは言わない。

「あ、あれは事故だ！」

「おおつやっぱ元気になってるな」

「違う！ はっ。まさかお前、誰にでもこんなことしているんじゃないだろうな」

「ん？ ……しちやダメなのか？ 今度スザクにしようと考えてた

んだが」

「駄目だ。絶対にするな」

カイナは、自身がした行為の意味を、まったく理解していないらしかった。色々言いたかったルルーシュだが、「今は気軽にしているものじゃない。好意を持った異性にするので、大体若い女がすることでは」彼女に説教するのが先だと判断した。

真面目に説教を受けていたカイナは、途中で何度も驚きの声を上げた。

「女にはダメなのか！ そうか。殿下にしなくて良かった」

本当に安堵した様子を見て、「する気だったのか」「未然に防いだよかった」という気持ちを抱いた。従姉妹を守った気分だった。

何から守ったのかは、ルルーシュ自身にもよく分からない。

第六十六話・後編「すべて元に戻るだけ」（後書き）

ルルたん復活の巻。ようやくナリタでのフラグを回収できた。もう覚えていらっしやらないかも知れませんが。

あと3本立てとってましたが、変更しました。すみません。

ところで、なんでこんなに天然キャラになってしまったんだろ。カイナさん。作者も不思議です。

第六十七話「一步前進」

ルルーシユをバイクに乗せて送り届けたカイナは、とあるマンション前に立っていた。新しく引越したマンションは無駄に高さを誇っており、カイナは好きじゃない。じゃあなぜ住んでいるのか。というとまあ、いろいろ事情があるのだ。

電子レンジのような音がした。エレベーターのドアが開く。11階。自宅がある階だ。

エレベーターを降りると、重力が増した気がした。ひどく疲れていた。珍しく食欲もない。今すぐ眠りたいのを堪え、カイナは必死に足を動かした。

部屋の前でポケットからカギを引っ張り出……さず、ドアノブをひねった。

「あ、カイナ！ おかえりなさい」

部屋の奥から間延びした声と共に、派手な色彩がカイナの目に飛び込んでくる。カイナが引越しをしなければならなくなった元凶、ユーフェミアだ。供を連れずに遊びに来るユーフェミアの安全を考慮し、治安のいいこの場所を借りた。前の部屋では狭くて彼女を泊められない（そう。驚くことに泊まっていくのだ。この皇女様は）という理由もある。

のん気な笑顔で自分を見上げている少女に、色々思い出してしまうたカイナの口からは、ため息しか出ない。

「来る時は声をかけてくださいと、何度も言ってるはずですが」
「急に来たくなったのです。仕方ありません」

仕方なくない。

カイナは反論するため口を開き、閉じる。これ以上疲れるのはゴメンだった。髪をかきむしるだけで何も言わず部屋の中へと入った。カイナの部屋は殺風景、なはずだったが、随分と可愛い小物あふれる部屋になっていた。すべてユーフェミアの私物だ。持ち主の荷物は基本の家具家電と数着の衣服ぐらいである。家具にしてもほとんどユーフェミアの趣味で決められたため、まるで他人の部屋だ。センスはいいのだろう。たぶん。カイナにはセンスとやらないため、判断はつかない。寝るだけの部屋だしいか。カイナは自分をそう納得させていた。

クリーム色のソファに、カイナは倒れこむ。肌触りが心地よい。ユーフェミアが後ろで驚く気配を察しつつ、カイナに返事をする気力はなかった。

「大丈夫ですか？」

片手をひらひらと振る。他の者たちが見れば不敬罪で問われそうだが、この場には2人しかいないので気にしない。

ユーフェミアはカイナと2人だけだと皇族よりも、少女としての面が強くなる。口調も僅かに柔らかくなる。丁寧語は癖らしい。カイナは口調こそ変えないものの、ユーフェミアには弱っているとこるをさらけ出す。疲れきったカイナに、ユーフェミアはそれ以上何も言わなかった。だからカイナは安心して眠ろうとした。他者がいると深い眠りにつけないカイナも、ユーフェミアは特別だ。ぼんぼんと軽く頭を撫でられ、

「おやすみなさい」

優しい声に、なんとか保っていた意識を、手放した。

* * *

甲高い悲鳴でカイナは目覚めた。何事かつ、とは驚かない。思うのは、

「またか」

呟きながら身体を起こす。毛布がズレ落ちた。昨晚は何も着ずに寝たはずだ。灰色の毛布を掴んでカイナは微笑む。

響いた陶器の音で、表情は瞬時に苦笑へ移り変わった。毛布をどけて立ち上がる。寝起きだというのにカイナの髪は梳いたように滑らかで、寝癖はどこにもない。歩くたびに髪が揺れる。

カイナが音の発信地であるキッチンを覗くと、「わわわ。どうしたら」両腕を無意味に振り回して動揺している皇族がいた。彼女の前には白い陶器の残骸が転がっている。カイナは額を手のひらで押さえ、ため息を吐き出す。

「食器棚には近寄らないようにと、これまた何度も言っているはずですが」

「ああっ違うのですカイナ。今のはお皿が勝手に落ちたのです。私わたくしは隣のカップを取るうとただけで」

「殿下。他に言うことは？」

「……すみません」

「よろしい。後は私がしますので、殿下は座っていてください。紅茶でいいですね？」

「はい」

頭を下げて謝ったユーフェミアにイスを指し示すと、彼女は素直

に座った。慣れた様子でカイナが割れた陶器を始末していく。その後、彼女は紅茶を入れ始めた。カイナは意外と紅茶を入れるのが上手い。

カイナが、紅茶と盛り付けたお菓子をユーフェミアの前に置く。ユーフェミアは礼を言ってから微笑んだ。ユーフェミアはカイナの紅茶が好きだった。

「カイナ」

「なんですか？」

「おはよう」

「はい、おはようございます。殿下」

いつもの朝だった。ユーフェミアは何も聞いてはこない。だからこそ、カイナは彼女に弱みを見せられるのだ。これがスザクだと、しつこく聞いてくることはなくとも、心配な表情を崩さないだろう。

『これすると元気になるのかなって』

紅茶に口つける前に、カイナは親指でそつと唇をなぞった。元気が欲しいのは、自分だった。結局自分は元気になれなかったが、ルーシユが元気になったので良しとする。赤い水に映っている己の顔を見つめ、一気に飲んだ。熱い液体が喉を刺激し腹が温まると、急に腹が減っていることを自覚した。適当に用意する。普段は野菜を丸かじりするカイナも、ユーフェミアがいる時は料理をする。面倒くさいだけで、まったくできないわけではない。

朝食を終えるとユーフェミアが白い紙をカイナに差し出した。カイナは眉を僅かに動かしてから受け取る。どうやら今回は、ただ遊びに来たわけではないらしい。

紙は数枚つづりになっており、表紙は真っ白だ。目で促されたの

で紙をめくり、すぐカイナの目が鋭くなった。黒い瞳が文字を追いかけていく。ユーフェミアは拳を握り、審判を待っていた。カイナが吐き出した息に、細い肩が大げさなほどに震える。

この人は。

内心カイナはとても驚いていたが、同時に納得もしていた。

この人なら。

「行政特区日本、ですか」

「どっとうでしようか？」

「甘いですね」

バツサリとした言葉にユーフェミアの肩が下がる。気にせずカイナは書類をバラして机に広げた。そしてペンと白紙の紙を何枚も持つてくる。ユーフェミアが不思議そうに首をかしげた。

「さて、じゃあ詳細を煮詰めましょうか」

「え？」

「ほら何をポケットとしてるんですか。こんな状態だと提出もできないでしょ」

「だってカイナが今」

「たしかに甘いです。」

特区を創る位置を富士山周辺にしたのは良いですが、まずこの面積では足りないですね。ブリタニアも日本人の正確な人口を把握できていませんが、これだけでは補えないのは確実です。居住区だけでなく商業区や工業区、農業区も必要ですからね。あと、もしも成功すれば租界の労働力不足が懸念されます。わざわざ特区外で働くと思う人は少ないでしょうから。1番厳しいのは農作物ですか。このままでは地方の土地が荒れるのは確定ですし、農業者を増やす条例整備も必要ですね。

さらには他国の植民地エリアに不満が募り、抵抗も激しくなるのも懸念されます。自分たちのところにもそうしろ、と」

「えっえっ？ ああ」

「条件として軍事力の解体を入れるとして。一番の問題はブリタニア内での反対です。なので彼らを納得させる草案を用意せねばなりません。問題点はまだまだありますし……殿下？ どうしましたか？」

口を中途半端に開けているユーフェミアに、「ああ」とカイナは頷いた。そして

「この案で進めましょう。一步前進です」

柔らかく笑う。滅多に浮かべないカイナのそんな笑顔に、ようやく理解をしたユーフェミアは、驚き、歓声を上げた。

「さあこれから忙しくなりますよ。一緒に頑張りましょう」

「はい！一緒に」

2人は草案作りに没頭し始めた。問題は山積みだったが、彼女たちの顔は明るい。

第六十七話「一歩前進」(後書き)

いろいろね、問題あると思うんですよ。ユファイには政の経験ないだろうし、となると発想はよくても中身が甘いはず。

カイナには発想ができないが、フォローはある程度ならできる。結構ね、相性いいとおもうんですよ、この2人。

第六十八話「夢を遮るもの」

ライは夢を見ていた。彼の前には2つの影がある。

緩やかな曲線を描いている黒髪、よく似た顔立ちの2人は、ライのとても大事な存在だった。ライは微笑み、目の前の光景が夢と気づかぬまま彼女たちに駆け寄っていく。

「……様」

「え？」

途中、後ろから聞こえた声にライは振り返った。黒髪の若い男が立っていた。その人物が男ではないことを、ライは知っていた。記憶にあるより髪が短かろうと。記憶にあるより表情が柔らかかろうと。その声、その髪、その目、その色を、忘れるわけではないのだ。自分が与えたその名を、呼ぶ。

「さようなら」

呼ぶ、前に。彼女がこちらから背を向けて歩き出した。

ライが何も考えぬまま追いかけようと一歩踏み出すと、背後から自分の名を呼ばれる。首だけ振り振り返り見れば、母と妹がライに向かって手を振っていた。2人がその場から動く気配はない。ライの足が止まる。戸惑って前へ顔を戻すと、彼女が遠のいていた。

今追いかけていなければ、彼女と一生会えない気がした。

今追いかければ、2人とも二度と会えない気がした。

ライは悩んだ。どちらを選ぶべきか、分からない。いや、選ぶことなどできない。どちらも欠けたらダメなのだ。片方を失うのなら、ライにとってそれはすべてを失うのと同じだった。

呆然と立ち尽くすライの耳が、ライを呼ぶ別の声を聞いた。

* * *

一瞬の息苦しさで衝撃、そして冷たさと不快感に襲われ、ライは飛び起きた。

「目は覚めたか？」

「……ああ。おかげさまで」

ゼロの格好をしたルルーシュが、片手にバケツを持ったまま口元をゆがめた。黄色いバケツは彼にはまったく似合わない。

バケツからは水が滴り落ちていた。どうやら水をかけられたらしい。全身がずぶぬれで髪も服も身体に張り付いており、気持ち悪い。

「随分と乱暴な起こし方だ」

「仕方がないだろう。3日も眠り続けるお前が悪い」

「3日？」

「ああ。3日前に意識を取り戻した後、また眠りについてからずっとだ。そう、だな。3日前に俺と話をしたのは覚えているか？」

3日前。ライは考えて、首を振った。そんなことよりも、今は。

「どうして起こしたんだ」

あのまま眠らせてくれていたら良かったのに。

もしもあのままでいたら、どちらも選べずに苦悩しただろう。ライは分かっていたが、現実いまよりはマシだと思っていた。

だから不機嫌そのままの声と顔でそう言い、濡れてへばりついた銀髪の間からルルーシュを睨みつける。その目は睨むというより、視線だけでルルーシュを殺そうとしているかのように険しかった。そんなライに対しルルーシュは笑うだけで、視線に怯える様子はまったくくない。

「お前が寂しがりやで甘えベタと聞いたからな。それなら存分に甘えさせてやろうと思ったたら、お前が寝ていたので起こした」
「……は？」

妙な発言をしたルルーシュにライの目つきが思わず和らいだ。そんな様子を見たルルーシュは耐え切れなくなり、ふき出した。彼には珍しい爆笑だ。上半身を曲げ、腹を抱えてルルーシュは笑う。仮面を外しているというのに、こんな大声出して大丈夫だろうか。ライが呆然としたまま心配に思うほど、ルルーシュは笑っている。ライの心配はよそに、部屋のドアが開くことはなかった。冷静に考えれば、部屋は防音だ。いくら大声で笑おうと、それぐらいでは外まで聞こえない。まあ一応ドアからすぐには見えないように衝立を置いてはいるようだが。

「い、一体何が」
「しかし寝起きが悪いというのも本当か。いや、これは意外だったな」

「る……ゼロ！ 先ほどから何がしたいんだ君は」

我慢できずにライが声をかけるも、少しだけ笑いの落ち着いたルルーシュは一人で勝手に納得していた。ライはつい大声を出す。いきなり水をかけられ、いきなり爆笑されれば、誰だって怒るだろう。ルルーシュは心外だといわんばかりに目を開いた。が、紫の瞳はいまだに笑っている。

「さつきも言っただろう。甘えさせてやるためだ。というわけで、甘える」

「き、気色悪いこと言わないでくれ。大体それと水をかけることになんの繋がりが」

「気色悪いか。お前も中々言つな」

やれやれ。肩をすくめたルルーシュは、ライと真っ直ぐに目を合わせる。紫の瞳から、先ほどまであったからかいの光がなくなった。ぼたり。

ライの髪から滴が床に落ちる。

「お前の荷物かこは俺が半分奪ってやる」

「な」

「思い出したんだろう？　すべてを」

濡れてへばりつく服の不快感を、ライは忘れた。過去。

その言葉を聞いた途端に速くなる心臓、短くなる呼吸、痛くなる頭。銀髪が揺れた。ライは俯き、何度も首を振る。

「ちが、僕は何も思い出してなんか」

「いや思い出している」

「違うっ！　僕は」

「お前は数百年前の人間。そうだな？」

ライの顔が勢いよく上げられた。ルルーシュは声の調子に反して、なんとも優しい顔で自分を見下ろしていた。

「覚えていないらしいが、お前は3日前、俺にこう言った。『礼は

城に帰つたら必ず』 『馬を貸してくれないか』とな。

現在実際に使われている城と、そこに住んでいる者たちについて調べたが、ここ数年で行方不明者はいなかった。

馬を交通手段に用いることは皆無、ではないが。それでも、城に住んでいるような貴族が交通手段に用いることはない。行楽ならまだしも、な。

あと以前、お前の血液を調べたのは覚えているだろうか？ お前には『日本人の血が流れている』としか伝えていないが、お前の中に流れていたのは日本人は日本人だが、日本の皇族。しかも数百年前に途絶えた一族。と、ブリタニア皇族の血だった。これは現在の国際情勢では考えられない。

が、過去をさかのぼって調べたら1人だけ、該当者がいた。

歴史において『銀の王』と呼ばれているライオース・ケイ・ブリタニア。

そして、『銀の王』に最後まで仕えた『黒の騎士』カイナ・スマンハク。

お前たちがどうして今ここにいるのかは分からない上にとても信じがたい話だが、どうだ。俺の推理はどこか間違っているか？ ライ

ライは何も言えなかった。口を開けば、どんな言葉を吐き出してしまうことか。ルルーシュは唇を引き結んだライを見て、唇の左側だけを吊り上げる。

「ライ。まさか俺の荷を背負っておきながら、自分の荷は明け渡さない、などが通じると思っていないだろうか？」

それがドドメだった。

本当はずっと誰かに吐き出したかった。1人で背負うには重かった。だから忘れようとした。でもできなかった。誰よりも、ライ自

身が忘れることを許さなかった。

どうしたらいいのかわからなかった。いつだって支えてくれた騎士は遠いところにいた。自分のそばには誰もいない。そう思い込んでいた。

なのに、今。目の前で不適に笑っている男は、ライにこう語りかけていた。俺がいる、と。

「僕は僕は、どうしてこんな、違うんだ。ただ僕はっう、あああああっ」

ライは叫ぶように泣いた。彼はこの時ようやく、泣く余裕を得たのだった。

第六十八話「夢を遮るもの」(後書き)

これにて第五章完結です。

次回の更新は、私生活が忙しくなるため遅れる可能性大(すみません><)。詳しくは活報にて。

この小説内ではルルーシユの活躍をあまり書いていないので、ルルは頭いいんだぞ? を書いてみました。彼の推理で無理がある箇所があれば教えてください。善処します。

過去から来たとか普通なら信じられないけれど、ルルはギアスつていうとんでもないモノもってるし、いけるかなって思ったんですが、どうでしょう。ちょっと自信ありません。すみません。

閑話1「敵（かな）わない」

「記憶が戻った」

ライがそう告げると、彼に背を向けて佇んでいる赤毛の少女は、一瞬だけ呼吸を止めた。

ふいに、「記憶を取り戻して欲しくないと思った」という、ルルーシユの言葉をライは思い出す。もしかしたら目の前にいる少女、カレンもまた、そう思ってくれていたのかもしれない。

そうであったなら嬉しい、とライは素直に喜べた。

「よかったじゃない。おめでとう、ライ」

「ありがとう、カレン」

カレンは、すぐにライの方へと向き直り、笑顔を浮かべてみせた。彼女が浮かべた笑みは、あまりにも不自然に綺麗で、彼女が必死に作り上げたものだとすぐに知れた。

だがライはそのことについてはあえて触れず、騎士団に留まることを告げる。

彼女はとても驚いた様子だった。

「え、なんで、どうして」

「僕が騎士団に留まるのは嫌か？」

「そんなことあるわけじゃないじゃない！ そうじゃなくて、だって」

大きく開かれたカレンの眼には、まなこ驚愕だけではなく歓喜の感情が、たしかに混じっていた。ライは笑った。口元に手を当て、肩を震わせて。

記憶を取り戻すことを怖がっていたのは自分だけじゃなかったのだと思えば、自然と笑いがこみ上げたのだ。

いきなり笑い出したライに、カレンは別の意味で驚いたもののライは滅多に笑わない　すぐに眉を釣り上げさせた。自分を笑われたと思ったのだろう。

「もうライっ私は真剣に」

「ごめんごめん……っ」

「謝るか笑うかどっちかにしてよ」

「ん、じゃあ遠慮なく、ははははははっ」

「ライ！」

笑うライと怒るカレン。この2人にしては珍しい光景がしばらく続いた後、カレンも笑い出した。

「ふふっ。もちろん、どうしてここに残る気になったのか、教えてもらえるのよね？」

ああ。だから君をここに呼んだんだ。

頷いてから、ライは川からやってくる心地よい風に目を細め、視界に入った青い空に優しい目を向けた。

「ブリタニアに、知り合いがいることが分かった」

「っ！」

「しかもどういうわけか、軍にいる」

ほんと、どういうわけなんだか。ライは言いながら苦笑した。

「最初は君が思っていた通り、騎士団を去ろうと思っていた。あいつと戦うなんて僕には考えられなかったから。あいつに剣を向けら

れるのも、あいつに剣を向けるのも、僕には……無理だ」

それが罰ならば受け入れるけれど。

罰という言葉に、カレンが眉を中央に寄せた。ライは気にせず
言葉を続ける。

「だからもう、ここにはいられないと思った。でも
「でも？」

ライとカレンの目がかち合った。

「僕はあいつを戦いから開放したいんだ」

「そのためにこれからも戦うと決めた」

青いライの眼差しは、きつと自分ではなく『あいつ』とやらを見
ているのだろう。こんなに優しそうなライの表情、はじめて見た。

以前の自分なら単純に喜べた彼の変化に、今の自分は喜ぶどころ
か落ち込んでいる。顔も名前も知らないその人が、うらやましい。

こんな浮ついた気持ちを抱く暇なんて、ないはずなのに。

「大事な人なのね」

「カレン？ どうし」

「……恋人、とか？」

感情が表に出てしまったのだろう。ライが心配そうに口を開いた

のを遮って、思わず聞いてしまった。聞いてしまった後で、何を当たり前なことを、と自分で自分を笑う。口ぶりから言って家族ではない。友だちというのもどこか違う。じゃあどういふ存在なのか。聞かずとも分かる。

ほら。ライも呆れて固まってる。

「恋人って、え、あいつが？」

「そうやっぱり……って、違うの？」

なんだか今日は驚いてばかりだ。

「違う。あいつはそんなんじゃない……？」

驚く私にライは苦笑して、首をかしげた。

「どうしたの」

「いや、その。あいつをどう言ったらいいのかわからなくて」

「でもその人のこと好きなんですよ？」

「たしかに好きか嫌いかで言えばそうなるんだろっけど……うん。なんか違うんだ。それじゃしっくりこない」

あいつを好きか嫌いかなんて、今まで考えたことなかったよ。

そう言ったライは、腕を組んで深く考え始めた。

真剣な彼の表情を見ながら、私はたしかに安堵していた。

苦しくないのかい？

スザクが唐突に言ったのは、カイナが彼を家に送るためバイクにまたがった時のこと。

話の流れがあまりにも急だったため、カイナは思わずスザクを凝視した。受け取ったヘルメットを見つめているスザクの表情は、どこか思いつめていた。

「まあた妙なことを考えているな。」

おそらくスザク本人が聞いていたら、それはこっちの台詞だ、とでも反論しただろうことをカイナは思い、頭の後ろを右手でかいた。さて、スザクの言う『苦しい』とはなんのことだろう。

カイナは尋ねる前にまず考え、その結果。少なくとも身につけているライダースーツが苦しそう、という話ではないだろうと分かっただけで、彼の問いたいことは分からなかった。

不思議そうなカイナに、スザクは言い辛そうに『苦しい』の意味を教えた。

「その……ライの、ことだよ」

「ああ。なるほど」

「なるほどって」

淡白なカイナの返事にスザクは戸惑った。彼は彼なりにこの話題について気を使ったらしい。そのことに気づいたカイナが苦笑を浮かべ、呟いた。

「苦しいよ」

普段と変わらない口調、普段と変わらない表情で、カイナは呟いた。

あまりにもさらっとこぼされた本音を、スザクは聞き逃したのか。「へ？」と間抜けな声を上げてカイナを見たが、その時には彼女が

ヘルメットを被っていたため表情が見えなくなっていた。
ぼけっとしているスザクに、カイナは自分の後ろを示した。

「ほら帰るぞ。さっさと乗れ」

「あ、うん。ごめん」

やっぱり聞くんじゃなかった。

気まずく思いながらヘルメットを慌てて被り、彼女の後ろにまたがった。

苦しいよ。

率直過ぎるその言葉は、あまりにも自然とこぼされた。

自然すぎて聞き逃してしまいそうなほどだったが、いつもと変わらない口調でこぼされたからこそ、それが彼女の本音だと悟った。

だからこそ、なぜ、と思う。

カイナがどれだけライを大事に思っているか、彼のことを語るカイナの目と声で知っている。だからこそ、なぜ。なぜ、敵として戦場に立てるのか。なぜ会いに行こうとしないのか。

「最近わかったんだけどさ」

走り出したバイクのエンジン音に混じって、やはりいつもと変わらない調子のカイナの声がした。

「俺が見たかったのは、違うんだ」

「違う？」

バイクがカーブにさしかかって、身体が斜めになった。なんともいえない感覚に思わず力が入ってしまったが、カイナは逆にリラックスしているようだった。

「俺が見たかったのは、戦場に立っている姿じゃない。すべてを独りで背負った後姿じゃない。俺は、俺はただ」

なぜだろう。その瞬間、カイナは目を細めて空を見上げた気がした。

「あの方が笑っているのを見たい」

「……………」

「あの方が大事に思っている存在とお茶したり、折り紙をしたり、本を読んだりしながら、笑っているのを見ていたかった、だけなんだ」

ヘルメット越しに聞こえてくるカイナの声は、やはり普段と変わらないように聞こえた。

ライとカイナがどういう関係なのか。自分は知らない。聞かなかった。

ただその口ぶりから、ライは貴族か何かで、カイナはライに仕えていたのだろうと推測していた。だがカイナがライを思う感情は……。

「君は、ライのことが本当に好きなんだね」

寂しく思いながら口に出す。まるでお気に入りのおもちゃを取り上げられたような 別にカイナをモノだと思っているわけではな

いけれど 表現しがたい虚脱感がした。
バイクが信号で止まる。

「好き？ 俺が、あの方を？」

信号待ちをしながら、カイナはぼやいた。独り言のようだったが、驚いて口を挟んでしまった。

「えっと、違うのかい？」

「ん〜ん〜。好きとか嫌いとか。そんな感情をあの方に抱いたこと
はないなあ」

信号が青くなり、またバイクが走り出す。カイナは「う〜なんて
言えばいいのか」ぶつぶつと考え込んでいた。……少し、前方に意
識を払っているのか心配してしまった。

「ああっそつだ！ あの方は」

「心臓、かな」

ライは口に出してから、うんうんと一人頷いた。口に出すとそれ
が一番しっくりと聞こえたのだ。

「心臓」

「うん。ずっと一緒にいるのに普段はそこに在るのを意識しない。
でも苦しくなったときは存在を主張して助けてくれる。うん。そう

だ。あいつは、僕の心臓なんだ」

今の僕が生きていられるのも、あいつのおかげだしね。

ライがその口に出したとき、カレンから表情が消えたことに彼は気づかなかった。

「あいつがいなくなったら、僕は今の僕じゃいられない」

「しんぞう？」

「ああ」

呆然と呟いたスザクに、カイナは前を向いたまま頷いた。

「俺が俺として生きられるのは、あの方がいるからだ。……考えたくもないが、あの方が死んだら、俺は死ぬだろうな」

淡々と、ただ事実を語る口調のカイナに対し、スザクは何も言わなかつた。

まったく別の場所、まったく違う時間に、まったく異なる立場の2人は、同じことを思った。

ああ。
敵^{かな}うわけがない。

閑話1「敵（かな）わない」（後書き）

本編ではなく申し訳ない。でもどうしても描きたくて、短編に入るには本編と関係が深いためこちらに。閑話1とありますが、2があるのかは不明^{おしい}。

2人の関係はこんな感じです。

そして、皆さんただいま！

第六十九話「重りになりたいわけじゃないんだ」

ライは騎士団に留まっていた。彼としては仲間を巻き込まないためにも去るつもりだった。そんなライの思考を予測していたのだろう。先回りしていたルルーシュに捕まったのが、今から3日前の出来事だ。

「持ち逃げは許さん、か」

その際にルルーシュが言った台詞をマネして、歌うようにライは口ずさむ。中々うまいマネができたことにライは満足げに笑い、顔を上に向けた。彼が座っていたのはお気に入りのお昼寝場所である学園の中庭で、背もたれにしている木の枝間から覗く太陽の光が、優しく彼に降り注いでいた。

記憶を取り戻してから眺める空は今までと変わらないのに、たしかに何かが違うっていた。

『だって空は主様めしなまの色ですから』

いつだって空を見上げていたのは、彼女の言葉をどこかで覚えていたからなのだろうな、とライは少し笑った。

彼女が言うには、空の青はライの瞳で、空の雲はライの髪だとか。常人とは少し異なったその感性が、なんとも彼女らしい。

そんな彼女が傍にいない。

たったそれだけのことがこんなにも苦しいなど、ライは想像していなかった。傍にいないことを想像したことがなかった。

ぎゅっと胸が締め付けられ、ルルーシュの言葉が思い浮かび、ライの整った眉が中央に寄せられる。

「カイナを騎士団に入れようとは思わないのか？」

ライはそんな単純明快な答えを考えつかなかったし、今も考えていなかった。

カイナはようやく自分という呪縛から解放されたのだ。また縛りつけない。幸せに過ごせているならそれでいい。

もちろんユーフェミアに嫉妬がまったくない、会いたくない、とは言わない。言えない。

それでも、自分のそば以外を彼女が選んだのなら、ライはその意志を優先したかった。今までカイナは、いつだってライたちのことばかり優先して、自身を省みることがしなかったから。カイナが何かを望んで、そのことに向かっているのならば、ライは応援したいと思っている。

たとえ自分が一声かければ、カイナがすべてを捨てて騎士団に来るだろうと知っていても。

ただ、選んだ居場所が軍である、というのだけはいただけなかった。

ライはもう、カイナに戦って欲しくないのだ。カイナに戦いは似合わない。カイナに赤は似合わない。だから騎士団に引き込む気もなかった。

そのことをライがルルーシュへ伝えると、彼は「そうか。分かった」とだけ言った。ライは続けた。

「ルルーシュ。僕はあいつを戦いから開放したいんだ。だから、頼む。協力してくれないか？」

ルルーシュは、少しだけ悔しそうに笑って、頷いた。

「どうかしたか？」

「いや……これからも頼むぞ。ライ作戦補佐」

首を振ったルルーシュに役職名を呼ばれた。そう呼ばれるのは初めてではないというのに、それはとても心地よい響きに感じた。

* * *

事態が動いたのは、ライが作戦補佐に復帰してから1週間後だった。

「どう思う?」

厳しい顔でテレビを見ていた騎士団幹部たちに、ゼロが問いかけた。全員に問いかけているようでいて、それが自分に向けられた質問だとライは気づいた。ライもまた、テレビを睨みながら考える。

テレビに流れているのは、大量のナイトメアがうごめく映像だった。そのナイトメアは群青色をしており、ブリタニアのものとは形状が異なっている。もちろん、黒の騎士団のものでもない。海を越えた隣の国、中華連邦の鋼體ちゅうか・れんぽうというナイトメアだ。

ガン・ルウは非人型で、コクピットが前方に向いている。性能は無頼ぶらいよりも劣り、2足歩行すら不可能らしく、1対の前屈脚と尻尾で直立姿勢をなんとか取れる有様だ。武器は無頼より射程距離が多少長いぐらいで、他に特筆すべき点はない。

これだけならばなんの脅威もない機体だが、低コスト・短時間（通常のナイトメアに比べて）で作れるため、生産性が非常に優れている。実際、テレビに映っているガン・ルウの数はかなりのものだ。いくら機体性能が落ちるといっても、これだけの数がいれば脅威となる。

しかし、一番の問題はこのナイトメアではなかった。

「我々は、ここに正当なる独立主権国家『日本』の再興を宣言する」

映像が切り替わる。そこには目つきの鋭い細身の男がいた。

ガン・ルウを背後に従えた男の顔立ちがアジア系で、彼の口から出た言葉は流暢な日本語だった。それも当たり前だろう。男、澤崎敦は、列記とした日本人である。

澤崎は、旧日本政府の第二次枢木政権で官房長官を務めていた男だ。ブリタニアが日本を占領した時に中華連邦へと亡命していたらしい。ゼロや各地での反ブリタニア（テロ）組織の抵抗によるブリタニアの混乱につけいり、中華連邦の援護と現地の反ブリタニア勢力と協力して、九州の半分以上を怒濤の勢いで占領した。などを、ニュースキャスターが説明していた。

『なお、黒の騎士団が関与しているかは不明ですが、先日の爆破事件が』

「関係ねえっての!」

テレビに向かって苛立たしげに悪態をついたのは玉城だった。難しい顔をした扇一（現在は騎士団の副指令になっている）が、ディートハルト　ブリタニア人でありながら、騎士団内で情報全般・広報・諜報・渉外の総責任者になった男。ゼロの信奉者　に目線を送った。

「キョウトはなんて言ってる?」

「はい。どうやらキョウトも知らなかったようです。サクラダイトの採掘権のみを一方的に通告してきた、と」

カレンが赤い髪を揺らして不安げにゼロを呼んだ。その場にいた幹部がゼロ、ひいては彼の隣に立っていたライを見た。ライは厳し

い顔をしていた。

「合流すべきではないな」

発言したのはゼロではなくライだったが、誰も文句は言わなかった。最終的に作戦や方針を決めるのはゼロだが、ライがその前に意見を述べるのはいつもどおりの流れだからだ。

「一見すると僕たちの望みである日本が 1部とはいえ 復活したように見えるけれど、これは中華連邦の傀儡政権だ。たとえ僕たち騎士団が澤崎に協力して日本からブリタニアを追い出したとしても、支配される対象がブリタニアから中華連邦に変わるだけ。しかも協力を要請してしまつた以上、文句は言えない。下手をしたら今よりも状況が悪化する可能性は高い」

「よしっじゃあ関係ねえってことでいいんだな」

ライの言葉に、玉城がどこか安心した様子で手を叩いた。が、ライの顔は厳しいまま。カレンが心配になつて声をかけた。まだ何か心配事があるのか、と。

「ああ。問題は、団員たちだ。これから死地に向かつてゴールの見えない道を進むよりも、すでに『国』というはつきりした形をもっている澤崎に賛同する者たちが出てくるはずだ。下手をすれば騎士団の分裂を招きかねない」

「そうだな。これは由々しき事態だ。さて作戦補佐、どうする？」

どこか芝居染みた問いかけに、ライは苦笑をなんとか堪える。実際、これは芝居だ。作戦補佐、という成果の見えにくいライの実力を、幹部にアピールするための。

ライが、少し苦労しながら唇を動かした。

「全団員を集めたミーティングを開こう。そこから先は、君に任せよ。君ならできるだろう?」

その時のゼロは何も言わずに仮面へと右手を添えるいつものポーズをとっていたが、仮面の下ではイタズラの成果を味わうように笑っていた、に違いない。

当たり前だろう?

聞こえぬはずの声がかたしかに届き、ライは苦笑を堪え切れなかった

第六十九話「重りになりたいわけじゃないんだ」(後書き)

ルルって、ポーズがいちいち大きいですよ。皇族だからでしょうか？

誤字修正) 2011・11・28(ご指摘感謝です。

第七十話「大丈夫」

今現在、カイナが抱えている問題は大きく2つに分けられる。

1つは行政特区の設立。これはひたすら頑張つて案を練つていくしかないのです、どうしようもない。

もう1つは、スザクとユーフェミアの仲たがい（？）だが、2人が解決すべき問題なので、これもどうしようもない。

が、そろそろ限界なのでさっさと後者をどうにかして欲しい。

心の中で愚痴をこぼしつつ、カイナはあるを匂い感じ取り、曲がり角に身を隠した。

「ああ、君。すまないがリーズ卿を見かけなかったか？」

聞こえた声に、カイナは嘆息した。リーズとは、ID作成の際、勝手につけられた家名だ。ほとんど役に立った覚えはない。その名で呼ぶのは、ごく一部の堅物だからだ。

ちらと覗き見れば、背の高いメガネの男が通りがかった兵士に声をかけていた。

そのごく一部の堅物、ギルバート・G・P・ギルフォード。

ギルバードなのかギルフォートなのか、どれを正式に呼べばいいのか、いつもカイナを悩ませてくれる長々しい名前である。毎度の如くカイナが名前を間違えるため、特別に『ギル』でいいと本人から許可を得た経緯がある。もちろん正式な場では使わない。そういう場ではなるべく名前を呼ばないようにしている。

「いえ。今日は見かけておりません」

「そうか。すまない」

完全に兵士とカイナの目は合っていたが、兵士は首を横に振る。ギルは少し肩を落としてからカイナと反対方向へと歩いていった。兵士はギルの後姿に一礼して、カイナの方へと歩いてきた。少し赤みを帯びた茶色の髪を持つ彼は、呆れた顔をしていた。カイナは彼に手を合わせる。

「悪い。助かった」

「別にそれはいいけどよ。お前、ギルフォード卿に何をしたんだ？」

「……別に何も」

「そういう嘘は、もう少し演技ができるようになってからするんだな」

「う」

あからさまに目線をそらして告げたカイナに、兵士の呆れは深まったようだった。

兵士の名前はボードウム・マラル。通称ボード。彼とカイナは何度か任務を共にするうちに意気投合した間柄だ。彼もまた貴族ではなく庶民からのし上がった騎士候であったのも、2人の仲が深まった要因だろう。

「ま、いいけどよ。今度何かおこれよ」

「分かった。だが前みたいなのは勘弁する」

「ちっ。わーたよ」

「今舌打ちしただろお前」

してねーよ、とボードが言い、いいや。言ったね、とカイナが反論し、2人は言い争いを始めた。これが2人のコミュニケーションだった。

「じゃあおこるのはいいから、女の子紹介してくれ。ほら、特派の」

「断る。お前に紹介したら俺が特派にい辛くなる」

「どういう意味だ…… ったく、相変わらず失礼なやつだな」

「それはどうも」

「褒めてねーよ」

しばらくの間、そんな軽口を交わしていた2人だったが、ボードが腕時計を見て慌て出した。

「今度の給料日、いつものとこでな」

あわただしくそんな言葉を残し、ボードは駆け出して行った。その背に向かって「ありがとう」と小さく呟いたカイナは、すっきりした面持ちで政庁を後にした。

ここに長いこといると、また誘われそうだしな。

ぼやくカイナの称号は、ただの騎士候で少尉。

そう。彼女は、ユーフェミアの親衛隊隊長に就任していなかった。早くスザクには騎士に戻って欲しいものだと思っ。

隊長就任のために政庁に行った、あの日。

彼に呼ばれた気がしたカイナは何も考えずに走り出し、彼の姿を目にして痛感した。……愕然とした、という方が正しいかもしれない。

すべてを忘れていた。

声が聞こえた瞬間、走っている間、彼のことしか考えていなかった。スザクやユーフェミアやロイドや、セシル、特派のみんな、他

にも知り合った仲のいい人間の誰一人として頭に思い浮かばず、自分が抱いた夢でさえ遠いかなたのところへ飛び去り、ただ彼のことを考えていた。

自分は彼以外の誰にも膝を折れないのだと、カイナは悟り、同時に恐怖した。

今もしも彼に『一緒に戦ってくれないか』と言われたら、自分は何も考えず、あの時犯した罪をまた犯すに違いない。そのことが、怖かった。自分は永遠にあの時を繰り返すのかと思つて。

だから今すぐ彼の前に出て行つて膝をつきたい衝動を無理やり押さえ込み、カイナはまた走りだす。彼とは反対方向へ。

逃げるように自宅へ戻つてから、カイナは嘔吐した。自分が、まるで自分が自分ではなくなるような気持ち悪さが全身を支配していた。

喉がひりひりして、なんともいえない臭いが鼻をつき、口の中が不快で、涙が出た。なぜ泣いているのか。嘔吐した気持ち悪さからか。それとも……本人ですらよく分からぬまま、吐きながら涙した。胃の中にあつたものすべてを吐き出してもまだカイナが気持ち悪さに苦しんでいると、背中になにかが触れた。

カイナは、その何かを掴んで彼女に向き直る。

細い手だった。カイナが本気を出せば握りつぶせるのではと思えるほどか細く、頼りない手だった。

嘔吐物で汚れたカイナの手を、彼女は突き放すどころかもう片方の手で優しく包んだ。カイナの方が大きく、まったく包めてはいなかったが、たしかに包まれたとカイナは感じた。か細く小さいその手が、とても暖かくカイナを包んでいた。

「申しつわけあ、ありません、殿下。私にはっ私には、なれません」

カイナが必死に言葉をつむいでも、ユーフェミアは柔らかく笑うだけだった。まるでその答えを知っていたかのような態度に見えた。

自分でも自覚していなかった本音を、とつくの昔に彼女に悟られていたのだとカイナは知る。

選任騎士を降りたスザクの代わりに親衛隊隊長に就くはずだったカイナは、今そのことをユーフェミアに直接断っていた。無理だ、と。自分はあなたの騎士にはなれない、と。

「でも私は本当に、あなたの騎士になら、って」
「大丈夫です。分かっていますから、ね」

だから、カイナ。どうかこちらを見てください。
ユーフェミアの優しい声に、カイナはようやく自分が目を逸らし続けていたことに気づいた。恐る恐る目を向けると、薄紫の瞳が嬉しそうに輝いていて、目が合っただけのことをユーフェミアは手を叩いて喜ぶ。

「それにね。私とあなたは『同士』（仲間）』でしょ？ 騎士（従者）になられた方が、私は困ります」

本当に心から思った言葉だったのだろう。ユーフェミアはそれは嬉しそうに笑って、言った。カイナは少しの間ぼかんと口を開け、涙でぐちゃぐちゃの顔を苦笑いに変えた。

ああ。敵わない。

おそらく一生、自分はこの人に敵わないのだろう。

そんなことをカイナはこの日、確信した。

政庁を出て歩いていたカイナは、右手を空にかざす。

もう大丈夫だと思えた。たとえまた心が揺れようとも、この右手を見れば大丈夫だと。

「さてっと。じゃあ、キュウシュウに行くか」

第七十話「大丈夫」(後書き)

ボードウム(英語)・マラル(アラビア語)とともに『退屈』という意味です。オリキヤラはあまり出たくなかったのですが、あちこち派遣されてるカイナさんに特派以外の知り合いがいても可笑しくないよな、と考えて作りました。短編の方でも再登場させたいもんですが、さて、どうでしょう。

ずっと考えてました。カイナは誰とだったら幸せになれるだろうかっと。

悩んで悩んで、やはり「ユフィ」しかないな、と結論。いやね。ノネットさんと迷ったんですよ。でもお互いに甘えあえる関係が一番いいかなあって。なのでカイユー(カイナ×ユーフェミア)が一番ですね。

え？ その前に何かが大きく間違っている？ はて？……あ！
そうですね。どちらかというところ、え、違う？(笑)

第七十一話「最強の人たち」(前書き)

今回は特派サイドになっています。

第七十一話「最強の人たち」

「くるくる枢木少佐、リーズ少尉。作戦概要を再度確認します。当艦は高々度から敵の前線を突破し、ひび発艦ポイントまで移動中。

うご嚮導兵器Z 01ランスロット。および、Z 01bランスロット・クラブは、フロートユニットを使用し、敵司令部『フクオカ基地』を強襲せよ。

なお、フロートユニットはエネルギー消費が激しいため、稼働時間に留意」

セシルの声に、スザクがいつもより硬い声で応える。カイナはいつもより軽い声で応える。なんとも両極端な2人だ。

フロートユニットとは、ナイトメアの背中に取りつけられた赤いパーツで、少し閉じられた翼のように見える。これでナイトメアは空を飛ぶことができる。とはいえセシルが言うにはまだまだ改良しなければならぬ箇所があり、長時間の飛行も不可能らしいが。

しかしそれでも、ナイトメアで空が飛べるといふのは進歩だろう。

「あーあ。折角空を飛べるのにな」

空を飛べることに期待を膨らませていたカイナは、いち早く発艦していったランスロットを軽く睨んだ。今は楽しんでいる場合じゃない。ランスロットを睨んだのは、ただの八つ当たりだ。

「ランスロット・クラブ。発艦！」

愚痴を言っていたカイナもまた、セシルの声と同時に空へと身を投じた。その瞬間、カイナの顔が自然と引き締まる。戦闘時におけ

る彼女の顔になる。

『前方に敵航空戦力を確認。戦闘を開始します』

元氣よく突っ込んでいくスザクに、カイナは少し眉をしかめてため息をついた。フロートユニットは便利ではあるもののエナジー消費が激しい、とつい先ほど注意されたばかり。なるべくなら空中での先頭は避けるべきなのだが、スザクは自ら戦いに向かっていた。

「あんまりはしゃぎすぎるなよ」

とりあえず一言だけ声をかけ、カイナは操縦桿を動かしてスザクを援護した。

さすがスザクというべきか。不慣れなはずの空中においてもランスロットは見事に立ち回り、圧倒的な強さで敵を倒していく。そんな様子を見ながら、カイナは残りのエナジーと基地まで距離を確認した。聞いていた通り、たった数機の戦闘機を落とすただけでも普段よりエナジーを消費している。空から基地までいけるのが理想だが、そういうわけにはいかないらしい。

「チツ。おい、スザク。そろそろ降り」

『こちらに向かってくる君は、枢木の息子か？』

『その声は、澤崎さんっ』

オープンチャンネルで伝わってきた声は、多少雑音が混じっていたものの、ニュースで聞いたものと同じだった。

キュウシュウブロックを占拠している彼らの大義名分は、澤崎的存在。つまり澤崎を失えば新日本政府は瓦解。中華連邦も撤退せざるをえないよね。

カイナはロイドの言葉を思い出しながら地に足を着けた。どうやらターゲットの方から接触してきたらしい。当たり前ながらカイナの存在は無視して、澤崎はスザクに話しかけている。

もう少しフロートをつけておくべきだったな。

かなり前方で着地したスザクの位置をレーダーで確認する。建物やガン・ルウの陰に隠れて直視ができないのだ。

しかも最悪なことに、スザクが着地した周囲には中華連邦のナイトメア、ガン・ルウが多数配置されていた。澤崎との会話で動揺させられたのだろう。何事にも真つ直ぐなのは彼の長所だが、同時に短所でもある。

「まあ、若いからな。仕方ないか」

やれやれと肩をすくめたカイナは、自身も若いと呼ばれる年齢なのを忘れている。

右後方から襲い掛かってきたガン・ルウを目も向けずに切り伏せ、カイナは通信を開いた。つながった瞬間に、「準備できたか？」と矢継ぎ早に問いかける。その間にもカイナは2体のガン・ルウに膝をつかせた。

画面に映ったのは、紺色の髪を揺らした女性、セシルだった。

「一応、できたわ。……ほんとうにやるの？ 今は戦闘中よ。なにも今しなくなつて」

「今じゃなきやダメなんだよ」

あのバカたちにはな。

聞きたいことだけを聞いたカイナは、まだ何か言いたそうなセシルとの通信を一方的に切り、また別のところに繋いだ。

ディスプレイに写ったのは……。

『カイナ？ 一体どうしたんだい』

不思議そうな顔をしたスザクだった。

突如入ったのはオープンチャンネルではなくプライベート通信で、「え？」とスザクが声を出した時にはカイナの顔がディスプレイにあった。

何か問題でも発生したのだろうか。

声をかけるも、カイナはただまっすぐスザクへと黒い瞳を向けるばかり。戸惑っている間も、敵は待つてはくれない。残り少ないエナジーで敵を倒しつつも前進していると、

『お前、殿下の騎士に戻れ』

場に相応しくない言葉が聞こえた。思わずカイナを見返したスザクだが、その黒い瞳から感情は読み取れず、困惑だけが深まっている。

いつかはその話題について聞かれると思っていた。しかしカイナは今までずっと触れてこなかったし、何より今すべき話題ではないだろう。

「カイナ。今は」

『なんだ？ 殿下の騎士になるのは嫌か？』

今は戦闘中だ。言おうとしたスザクを遮り、カイナは問いかけてくる。彼女の意図はまったく読めないが、スザクは首を横に振って否定するのは忘れなかった。

「嫌だなんてそんなことない。できるならずっと」

『じゃあ戻ればいい。簡単だろ』

「でも僕にはそんな資格はないんだ。だから」

冷静でいなければならない。

スザクは自分に言い聞かせていたが、あまりにも軽く言い切ってしまうカイナに思わず声に力がこもった。それ以上は何も言ってくれるな。祈るスザクの声は、カイナには届かなかっただらしい。彼女は続けてこういった。

『んなことはどうでもいいんだよ』

お前の事情なんか知るか。

本当に、心の底からどうでも良さそうな声と表情で、彼女は言ったのだ。あまりのことにスザクは呆然とし、戦闘中であることを忘れた。それからキツと、カイナを睨みつける。

いろいろなことがスザクの頭から消え去った。

自分が散々悩んでいる事柄を「どーでもいい」と一蹴されたのだ。怒るのも無理はない。

「たしかに君にとってはそうかもしれないけど、僕にとっては」

『俺が聞きたいのはっ』

反論は遮られる。彼女もまた怒っているようだった。カイナが怒るのは珍しい。それでもスザクは口を開く。スザクにも引けないことがある。

『殿下が好きか、嫌いなのか。どっちだ』

「好きだよっだから僕は！」

『……だ、そうですよ。殿下』

スザクは大声でその一言を叫び、思考を止めた。目の前のディスプレイにはカイナではなく、色鮮やかな桃色が見えた。いつ画面が切り替わったのかすら分からない。スザクは呆然とした面持ちで画面を見詰めた。

大きな瞳を潤ませ、小さな手で頬を押さえているその人は、

「ユーフェミア、皇女殿下」

名前を呟くことしかスザクにはできなかった。ユーフェミアの隠しきれていない頬が赤いのが見れば、今までの会話が聞かれていたのだと、簡単に知れた。スザクは顔が熱くなるのを自覚した。

『んじゃ後は若人でどうぞ。年よりは退散しますよっ』

ふざけた口調でカイナは通信をきった。

スザクは通信が切られたことにも気づかず、ユーフェミアへの言い訳を必死に考えていた。……まったく思いつかなかったが。

しかし沈黙が続くことはなかった。

『ふふ』

「でんか？」

『ふふふふふ。口、開きっぱなしですよ』

「あ」

口元に手を当てて上品に笑うユーフェミアの指摘にスザクは慌て

て口を閉じたが、ユーフェミアの笑いは収まらなかった。
久しぶりに見たユーフェミアの笑顔は、以前にも増して綺麗だった。

『カイナには敵いませんね』
「そう、ですね」

自然と、スザクも笑みを浮かべた。そして最後に付け足された一言に、

『あ、スザク。私はあなたのことが大好きですからね』

この人たちには敵わないな、と。顔をこれでもかと赤く染め上げた。

第七十一話「最強の人たち」(後書き)

内容はそこそこ気に入ってるんですが、表現が気に入らない。これでも頑張ったんです。

でも今回いえることは1つです。

「スザク、頑張れ」

第七十二話「何も怖くはない」

なるほどね。

白カブト　ランスロットとランスロット・クラブが暴れまわっている様子を眺めていたライは、そう呟いた。

『ライ、そろそろ作戦を始めるぞ……ん？　どうかしたのか？』

画面越しにライへ告げたゼロは、訝しげな声を出した。ライが、嬉しそうに笑っていたからだ。

「いや、なんでもないよゼロ。さあ、行こうか」

しばらく黙り込んでいたゼロであったが、今聞くべきことではないと判断したのだろう。無言で通信を切った。

「ああ。少しすねてしまったか」

くくくつと、今度はまた別の意味で笑みを浮かべたライは、「あとでC・C（シーツ）に文句を言われそうだな」と考えた。ゼロ、ルルーシュは　ナナリーへの態度を見ていれば分かることではあるが　大切な存在に対する独占欲が強い。

その『大切な存在』に自分が入られていることに照れくさい思いは感じるが、それ以上にライは嬉しく思う。もちろんライにとってもルルーシュは大切な存在だ。

おそらく、この作戦が終われば先ほどなぜ笑っていたのかをルルーシュは問いただすだろう。

「悪いけど、君にも教えないよ」

ライは操縦桿を握り締めた。

「さすがに恥ずかしいからね」

「カインっ君だけでも逃げるんだ！」

「ふざけんな、このうすら馬鹿ハゲ！　ヘタレ野郎は黙って突っ立つてればいいんだよ」

「へた……」

通信から聞こえてきた声に怒鳴り返したカインに、凹んだらしいスザクを気遣う余裕などなかった。

ランロットは、すでにエナジー切れで動けない。動けなくなつたスザクへ「このあほんだれっ」とカインが叫んだのはつい数分前だ。

怒鳴りながらもカインの手の動きは止まらない。

背後からの敵にスラーシューハーケンを射出、スザクに襲い掛かるうとしていたガン・ルウにライフルを打ち込む。倒れこんだガン・ルウに巻き込まれて1体が戦闘不能になったのは幸運だが、そんな小さい幸運だけではどうしようもないほどカインたちは追い込まれている。

「うじゃうじゃ沸いてきやがって。てめーらは　　か！」

「か、カインさん、落ち着いて」

オペレーターのセシルが顔を真っ赤にさせたが、落ち着いていられる状況ではない。カイナは、ここで死ぬわけにはいかない。右手に力が入る。まだ夢を叶えていない。叶えるまで死ぬるはずがない。だから、

「このっ……え？」

避けられない攻撃に耐えるため身構えた視界に、写るはずのないものが見えて、自分は死んだのだろうかとかカイナは思ったのだ。

目の前に、まるで自分を守るように立っている青い機体があった。

「ぬし、さま？」

呼吸がしづらい。1秒後には、心臓が止まってしまうのではないか。

あらぬ心配を覚えてしまうほどライの心臓は速く動いていた。もしも今。お互いがナイトメアに乗っておらず姿を直接確認できる状態だったならば、どんな行動に出たのか自分でも分からない。

ライは気持ちを落ち着かせるため、深呼吸をした。

『いきなり飛び出すな、ライ』

「すまない、つい」

突如空から降り注いだ赤黒い光が視界を良好にした。ゼロの乗るガウエインがハドロン砲を打ったのである。

ガウエインはゼロが神根島から持ち帰ったブリタニアの試作ナイ

トメアであり、未完成な部分が多かった。あの赤黒い光　ハドロン砲がその最もたるものだったが、ラクシャータによって完成した。黒と金で塗装された機体は通常のナイトメアより大きく、小回りは聞かないものの空中を飛べることで、何よりもハドロン砲の破壊力が凄まじい。

2人で操縦するらしいコクピットをライは以前に見せてもらったが操作は中々難しく、ゼロ以外に使いこなすことは不可能だろう。ゼロ専用機と言える心強い味方だ。

ちなみにもう1人はC・C（シーツ）が乗っている。

『まあいい。作戦に問題は無い』

ゼロは言って通信をオープンチャンネルに切り替えた。まあいいといった割には、声が怒っていた。後で怒られそうだなとライは苦笑する。

『枢木、それともう1体のナイトメアよ。まだ動けるか？』

ガウエインは、空中から襲い掛かろうとした機体をあっさり打ち落とすと、その巨体をランスロット前でかがませた。

『……俺の方はまだ動ける』

『そうか』

久しぶりに聞こえたその声に、ライは全身を緊張させて耐えた。そうでもしないと、今すぐ自分の元に来いと、言ってしまうそうだったから。

ゼロは、エナジーファイラーをガウエインの手に乗せ、ランスロットへと差し出した。

『私は今から敵の司令部を叩く。君らはどうする？』

どこまでも平坦に聞こえるルルーシユの声を聞きながら、ライはすごいなと思う。ライには、彼女の前で演技し続けられる自信はない。

『悪いけど、ゼロ。君の願いは叶わないよ』

再び聞こえたスザクの声は、少しだけ笑っているようだった。ランスロットの手が、エナジーファイラーを掴む。

『自分が先に叩かせてもらうからね』

『ほお。それは見ものだ』

ほんと。ルルーシユは役者になるべきだな。

苦笑しかけたライの元に、当の本人から通信が入った。

『ここは任せていいな？』

「ああ」

ガウエインのハドロン砲で一端は数を減らしたかのように見えたガン・ルウは、今また視界を多い尽くそうとしていた。

しかし、ライはまったく恐怖を感じない。なぜならば、

「何せこっちは、『黒い風』がついているからね」

「ここは乗った方がいいな。行つて来い」
『でも君のエナジーだつて』

渋っているスザクに対し、カイナはやれやれと息を吐き出した。スザクが心配するのも無理はない。動きを止めたランスロットを守りながら戦っていたクラブのエナジーは、空っぽにはなっていないだけで、決して楽観できるものではない。

「たしかにエナジーはないな……クラブには」
『え？』

不敵な笑みを浮かべたカイナは、今までとまったく異なる動きをした。いや、ようやく彼女本来の動きに戻った。

射出したハーケンを巧みに操り1体のガン・ルウをワイヤーで縛り付けたかと思えば、そのワイヤーを両腕で掴み、敵をなぎ倒しながら自らに引き寄せ、なんとエナジーファイラーを抜き取ったのだ。

そして抜き取ったエナジィファイラーを自分のものと交換する。

「これで問題ないだろ」

唾然としているスザクに、カイナは続けていった。どこか悲しげで、それ以上に誇らしげな声だった。

「何せ俺には、『銀の雨』がついてるからな」

第七十二話「何も怖くはない」（後書き）

ずっと疑問だったんです。エナジー。敵から奪えないのになって。黒の騎士団であるゼロが差し出したパックを利用できたなら、奪って使えるよなあ。それを交換して使うんだから、つけ外しにくい場所じゃないよなあ。かなり難しいだろうけれど、理論上は可能では？

まあ、普通は無理だし誰もそんなこと考えないだろうけどね。

カインさんも常時相手から奪えるわけでは在りませんのであしからず。

さて、いよいよ次は共同戦線ですね。めちやくちや気合入れているので楽しみに。

第七十三話「ただ守りたい。それだけなのに」(前書き)

タイトル変更しました(11/10/27)

第七十三話「ただ守りたい。それだけなのに」

本来、カイナは考えながらや指示を出しながら戦うタイプではない。むしろそういったことを苦手としている。

では得意なこととはなんであるのか。それは、

「はあああああああああつ」

クラブが、大勢の敵中で戦っていた。普段行う『敵を分散させる』戦い方ではなく、そのまま戦うスザクのものに似ているようで、まったく違う。その戦い方に『型』はなく、また『常識』というものも存在しない。

3つのハーケン、右手のライフル、左手のソードを自在に操り、障害物や敵ですら自らの武器と変え、クラブは暴れていた。そう。それは戦っているというよりも、かんしゃくを起こした子供のように『暴れて』いる、と表すべきだろう。

暴れて、暴れて、次々に周囲を破壊していくその動きは、洗練したものとはとても言いがたい。しかし何故か目を離せない魅力があった。

他の誰にもこのような動きはできないだろう。彼女はまさしく『黒い風』だった。近寄ることは敵わない。近寄ったそのとき、すべては終わるのだ。

暴れ続けるクラブに対し、ガン・ルウはほとんど数を減らしていくが、ずっと手をこまねいていたわけではない。

どれだけ強い風だろうと、止む瞬間があるのだ。

今もまた、エナジー補給のために風は息継ぎをしていた。

チャンスを逃すものかとガン・ルウは群れを成して『黒い風』に襲い掛かり、次の瞬間には鉄の塊へと姿を変える。

空から地上へ降り注ぐのは『銀の雨』、もとい、弾丸の雨。まる

で『黒い風』を守るように降り続ける雨は、的確にガン・ルウだけを貫通していった。ライの操る月下による援護射撃だ。

「お前達の相手は、私だ」

この戦場にたった2機で立っているというのに、誰もが彼の存在を忘れていたかのようだった。カイナにはかり注目がいき、彼の存在を隠していたのだ。

何も考えずに前線で暴れるのがカイナの本来の戦い方であるのに対し、ライは前線ではなく後方から戦場を見渡し、常に最善を考えながら戦うのを得意としている。2人の戦い方は、まるで正反対だった。

今も己の位置を巧妙に隠しながら、ライはカイナに襲い掛かろうとしているナイトメアを打ち抜いていく。冷静なライの目は、どんな小さな敵の動きも逃さない。計算づく去られ雨は、最小限のエンジニアで最大限のダメージを与えていった。

戦場を『銀の雨』が自在に操る。相手はただ雨を浴びるしかできない。

やがて雨が止み、ガン・ルウたちの標的が『銀の雨』へと変わった時には、復活した『黒い風』が再び暴れ始める。雨で大打撃を受けた彼らに、風を防ぐ手はない。

ガン・ルウたちへ襲い掛かっているのはただの『黒い風』ではなかった。ただの『銀の雨』ではなかった。

人はそれをこう呼んだ 『黒風銀雨』と。

* * *

変わっていないその暴れっぷりに、ライは場違いな明るい笑みを

浮かべていた。

カイナの戦いを見た時、ライだけが違和感を感じていた。なぜならその戦い方は、あまりにも『らしくない』のを、彼だけが知っていたからだ。

また同時に、仕方のないことだろうとも理解していた。

「お前の動きをサポートできる変わり者は、そうそういるわけがないからな」

だからライは嬉しかった。自分の居場所は、今もまだ彼女の中にあるのだと。

だからライは悲しかった。自分の居場所は、今はもう戦場の中にしかないのだと。

「ああ、それでも。お前がここ（戦場）を望むなら、私はお前の背を守ろう。今までもそうしてきたように……なあ、カイナ」

ライは、自分にできる1番の笑顔で、語りかける。

通信は開いていない。覚悟は決めていたものの、やはり演技はできないと確信していた。そして演技ができないのは自分だけでないとも、確信していた。

通信は記録に残る。カイナが軍にい続けると決めている以上、彼女の立場を悪くするわけにはいかない。もちろん今だってライはカイナに軍を辞めてほしいと思っているが。

「お前は昔から頑固だったからな。忘れていたよ。お前がこうと決めたら、私の命令も聞かないこと」

どれだけ笑みを浮かべたところで相手から見えるわけではない。どれだけ語ったところで聞こえるわけではない。通信を開いていないの

だから、当たり前のことだ。

それでもライは笑い続けたし、語り続けた。伝わるわけがないのだと自分を笑いながら、心のどこかで。伝わってくれと願っていた。

『世界中の戦いがなくなったら、お前やあの方みたいに頭のいい人間でもさ。さすがにもう戦えないだろ？ だからその足がかりとして、まずは日本から戦いを奪おうと思ってるんだ』

「ルルーシュから聞いた。お前のことだ。本気で思ってるんだろう」

戦いがなくなる。とても素敵なことだ。誰もが願っていて、誰もが諦めている、夢のような話。でも彼女にとってそれは幻でも夢でもなく、現実味を帯びたことなのだ。

夢が誰の目にもはつきりに見えるまで、きっとカイナは戦場に立ち続けるのだろう。ならば。ならば自分は、

「私はお前の夢を応援するよ。お前の背中を守る役目は、私以外にできないからな。」

ああ、だから。だからさ、カイナ」

もう少し、私を頼ってくれてもいいだろう？

「どうしてお前はいつも1人でしようとするんだ。お前にとって私はそんなに、弱く見えるのか？」

ライは自分が笑っているのか泣いているのか、分からなくなった。

* * *

無謀に思えたナイトメア2機による『フクオカ基地強襲作戦』は、大成功に終わった。澤崎の身柄を押さえられ、中華連邦はこれで手出しができない。

生きて帰ってくるだけでも難しい作戦を、2人とも特に怪我することなく成功へと導いたのだ。特派の職員達がパイロットを温かく出迎えるのは、当然だろう。

「おかえりなさい、スザク君、カイナさん」

「おつかえり〜。いやあ2人ともすごかったねえ」

スザクはどこか照れくさそうに歓迎を受け、カイナは、

「悪い。休ませてもらっていいか？ さすがに疲れた」

「え、大丈夫なのかい？」

「そうだねえ。あんな動きすればたしかに疲れるだろうね」

「ああ。あれはすごかったもんな」

純粹に心配したスザクの横でロイドがうんうんと首を縦に振れば、他の職員達も口々に「疲れるのも仕方ない」と言い出した。スザクは基地の司令部へと向かったために、カイナの戦いを知らないのだ。賞賛の言葉にカイナは苦笑だけ返し、仮眠室へと向かった。その顔色は、たしかに悪い。

身体がひどく重たかった。

カイナはなんとかスーツを脱いでシャワーの蛇口をひねったものの、身体はそこで限界だったらしい。カイナはその場にへたり込み、頭からシャワーを被ることになった。

しばらくは立ち上がるうと無駄な努力を続けていた彼女だが、諦めて体重を壁に預けた。

そして目を瞑ってカイナが思い出すのは、あの時の高揚感。

「ぬしさま、私は」

戦場のど真ん中にいて、周りが敵だらけだというのに、カイナはむしろ安堵していた。だから思うがままに暴れられたのだ。あの時背後にいるのが他の誰かであったのなら、あそこまで安堵は覚えなかつたろう。

背中を守られている心地よさに、すべてをゆだねていた。

「駄目だ。私はもっと強く、強くないと。もうあの方の手をわずらわせなくてすむように、安心していただけるように、もっと」

自分が弱ければ、彼はそんな自分を守るために戦い続けるだろう。それでは意味がない。だから、強くならなければ。

カイナは、何度も何度も、まるで呪文のように同じ言葉を繰り返した。

第七十三話「ただ守りたい。それだけなのに」(後書き)

皆さんはよりどちらに共感するのか。ちょっと気になります。

ちなみに私はカイナさんよりかな。自立したいけどできなくてあがいている感じ。でもライの気持ちも分からなくもないんだよねあ。うーん。難しい。

閑話2「鈍感是谁だっ？」（前書き）

今回の話は、本編に入れるには抵抗がある。しかし番外に入れるにしても本編とかわりがある、という話です。

前後編で、キャラ崩壊が多少あるかと思えます。苦手な方はお気を付けください。

閑話2「鈍感是谁だっ？」

キウウシユウ戦から帰ってきたライは、学園内を歩いていた。スザクと会つのを避けるため、ずっと学園には来ていなかったのだが、今日はどうしても会わなければならなかった。

騎士団に身を置いているとばれた今、スザクと会うことは危険だ。しかしライは確信している。スザクは誰にも告げていないだろう、と。

そう思いながら学園に来たライだったが、妙に騒がしい様子に首をかしげた。

「なんだ？」

窓に近寄って外を見下ろすと、たくさんのお店が並んでいる。学園関係者ではないと思われる姿も見える。

「ああ、そうか。今日が学園祭だったか」

そんなことすら忘れていた自身に、ライは苦笑した。

「ライ！ 良かった。今日は来てくれたのね」

「ミレイさん……すみません。準備の手伝い」

「ほんとよー。もう。ルルーシユのサボり癖がうつつたんじゃない？」

呼ばれて振り向くと、金髪を揺らしたミレイが軽く頬を膨らませながらライに言った。ルルーシユの名前が出たことに、ライは乾いた笑い声でごまかす。

決して遊んでいたわけではないが、そう思われても仕方はないだろう。

「というわけで今日ぐらいは手伝ってね。はい、腕章」

「巡回警備、ですか。構いませんけど、一体何をすればいいんですか？」

巡回中と書かれた腕章を受け取りながらライは神妙な顔をした。今日で学園に来るのは最後と決めている。さんざんお世話になったのだから最後まで何か役に立ちたかった。

ミレイは、そうね。とあごに手を当て

「うちの学園祭はオープンだから、怪しい奴がいたら捕まえて」

「不審者を取り押さえればいいんですね」

真剣な顔のライをじっと見ていたミレイは、やがて軽く噴出した。片手を振り「嘘よ。冗談」と明るく笑う。ライはなぜ笑われたのか理解できず、目を何度かまたたかせた。ミレイは柔らかい表情を浮かべる。彼女がこのような顔をする時は、いつだってライが敵わないと思う時だ。

さて。今回は何を言われるのだろうか。

「あなたが好きなように見て回って、困っている人がいたら親切にしてあげて。トイレの場所を教えたり、オススメのイベント場所に案内したり……ってそうそう。忘れてたわ。はい、これ。出店マップね」

「でもそれじゃ手伝っていることには」

「いいのよ」

言い募るライに、ミレイは「いいのよ」ともう一度言った。

「あなた最近、気持ちがここから離れてるんじゃない？ 授業に出ず、ただここに居るだけだから仕方ないかもしれないけど」

ミレイの指摘に、ライは内心動揺した。そんな彼に気づいていないのか。それとも気づいた上で知らないフリをしているのか。ミレイは普段どおりの声と顔で続けた。

「前にも言ったけど、あなたの帰ってくる場所はここなの。少なくとも、本当のおうちが見つかるまではね。」

今日はあなたのおうちでみんながお祭りをやってるのよ。仲間に入って、楽しんできなさい」

帰ってくる場所。その言葉がライの胸に染み渡り、彼は珍しく微笑みを浮かべた。

「はい」

「いい返事ね」

ミレイもまた笑った。そんなミレイに、ライは話しかける。

「学園祭が終わったら話したいことがあるんですけど、大丈夫ですか？」

笑っていたミレイが少し顔を引き締めた。ライの声が重みを持っていたからだ。

「話？ こくはくー、じゃ、なさそうね。ええ、分かったわ。また後でね」

手を振って去っていったミレイに、ライは頭を下げた。本当は、何も言わずに去るつもりだった。だけど、

「僕はずっと、守られていたんだな」

一言告げるのが、己にできる1番の感謝の証に思えた。

* * *

中庭には、たくさんのフードカウンターが並んでいた。人も大勢いて、とても賑わっている。みんな笑っていて、自然とライの頬も緩んだ。

「きゃー、見た見たっ？ 今微笑んだわよ」

そんな時に聞こえた甲高い声に、ライは視線を向けた。学園の女子生徒たちだ。

「すてき。ミステリアスだわ」

「絶対今私のことみた」

「違うわよ私だってば」

なぜか自分は見られているらしい。

ライは自分の服装を見下ろした。学園の制服だ。特に着崩しているわけでもなく、前後ろ反対に〜などという愚もおかしてはいない。はて。じゃあなぜ見られているのだろう。自意識過剰なのだろうか。首をかしげている彼に、声をかけるものがいた。

「よっライ。久しぶりじゃん」

「ああ、リヴァル。ちょうど良かった。僕の格好はどこか変なのかな？ さつきから女の子達に見られている気がするんだが、僕の気にすぎかな？」

不安げに、やや早口で問いかけたライを、リヴァルは啞然とした顔で見た。その表情に、ライはますます不安に駆られる。先ほどの女子達が「陰のある表情も素敵」などと言っているのは聞こえない様子だ。

しばらくしてから、リヴァルは大げさに肩をすくめ、呆れたように息を吐き出した。

「知らなかったのかよ。お前女子達の間で噂なってるんだぜ。『幻の美形』って」

「ま、まぼろしの、美形？ なんだそれ」

今度啞然としたのはライだった。

リヴァルが言うには、学園の中を歩いているカッコイイ男子がいるが、どこの教室に行ってもいない。学園の制服を着ているにもかかわらず、ついた名が『幻の美形』だそうだ。

説明を聞いたライは、それでも思う。なんだそれ、と。

「あの憂いのある表情……あゝ胸が締め付けられそう」

「できるなら私が悩みを解決して差し上げたいわ」

ため息をつけば、なにやら好意的な解釈をされている。リヴァルは「くあゝっ」と奇声を上げた。

「どうしてお前といいルルーシュといい。もてるやつはなんでこうも鈍いのかねえ」

鈍いのか、自分は。

リヴアルに言われてライは考えてみた。しかし自分が鈍いのだとしたら、

「あいつよりは、絶対マシだ」

「んあ？ ルルーシユのことか？ まあ、ルルーシユも対外だけだな。お前もどっこいだと思っぞ」

思わず呟いてしまった小声を都合よく勘違いしてくれたので、ライはその話に乗った。

しばらくルルーシユについて話し合っていたが、リヴアルがそろそろピザの準備があるからと言った。

「そういえばスザクもピザ担当だったか」

「ああ、そうだけ。スザクの出番はもう少し後だけだな……あ、でも今頃はお楽しみ中かもよ」

「お楽しみって」

今回の学園祭メインイベントといってもいい巨大ピザ作成は、ナイトメアを使って行う。その操縦はスザクが担当することになっていた。イベントが始まると話をする暇はないだろう。先に探して話をしなければ。

そう思ってライは話を振ったのだが、リヴアルは意味深な笑みを浮かべた。なんともイヤラシイ笑い方だ。

「あいつも隅に置けないよなー。ユーフェミア皇女殿下と言うものがありながら、あーんな美人の恋人がいるなんて。姉だー、なんてごまかしてたけど、あの雰囲気は姉弟きょうだいじゃないぜ。絶対」

「恋人？ スザクに？」

意外に思い、ライは目を丸くした。リヴァルはなぜか自慢げに話す。

「ああ。モデルみたいにかなり背が高く、黒髪の綺麗な……って、おい。ライ！」

リヴァルの説明を最後まで聞かず、ライは駆け出した。

* * *

ライがリヴァルと話すよりも1時間以上前のこと。スザクは、全身を硬直させていた。

「スザク？ どうした。やはり俺は何か間違えているのか？」

「え、あ、いや、その」

声をかけられて口をあけたものの、そこから出てくるのは意味を成さない言葉ばかり。

そんな彼の前に立っている女性は、不安げにスザクを見ている。身長はかなり高い部類に入る。ヒールを履いていることもあり、スザクと目線が変わらない。いや、やや上だろうか？

女性が首をかしげるたびに長い黒髪が揺れた。

「えっと、カイナ。どうしてそんな格好を」

長い髪を見てようやく口に出せたまともな言葉は、どーでもよいことだった。しかし女性　カイナは「ああ、これか」と少し疲れ

たため息をついた。

「変装したいと言ったら、カツラ被らされた。どーせなら別の色が良かったな」

いつものことながら、まったく答えになっていない。

見た目がまったく違うために緊張していたスザクだが、中身は当たり前だが まったく一緒だったので脱力する。とりあえず詳しい話を聞くことにした。

「どうして変装なんて」

「へっ？ い、いや、その、だな」

しかし、尋ねるとカイナは珍しくしどろもどろになった。若干頬も赤い。黒い瞳も潤んでいる。指を胸の前で組んで「言わなきゃダメか？」とまで言い始める。珍しい。というより、はじめてみる姿だ。

別段そこまで聞かなければならない事柄でもなかったものの、スザクは興味がわいたので「教えてくれると嬉しいな」と言ってみた。こういう言い方をするとカイナが断れないことを、短い付き合いながらも気づいていた。少しの罪悪感を覚えたが。

カイナはそれでもしばし悩みながらぼつぼつとしゃべり始める。

「1度、学校がどんなところか見てみたかった、だけだ」

「……それだけ？ ならいつでも来れるのに」

「何言ってる。部外者がいたら目立つだろ」

「たしかにそうだけど、わざわざ変装しなくなってる。今日は学園祭だし、外からも大勢来てるのに」

話しているうちに黒い瞳があちこちにさまよい始めた。カイナは

嘘が苦手だ。

黙りこんだカイナだが、注がれ続けるスザクの視線に観念したらしい。短く息を吐き出し、

「主様が、あの方が過ごしている場所を見たかったんだ」

どこか寂しそうに言ったカイナに、スザクは「そっか」としか返せなかった。変装をしたのは、ライに万一も見つからぬように、なのだろう。

「というわけで、だ。今暇か？」

「え？ あと1時間ぐらいなら大丈夫だけど、どうしてだい？」

しんみりとしてしまった空気を吹き飛ばすかのように、カイナは笑った。

「学園を案内してくれ」

* * *

ひらりひらりと、ロングスカートを翻しながらカイナは珍しそうに中庭を歩いていった。こうしてみると、どこから見ても女性にしか見えないのだから不思議だ。普段はどう見ても男にしか見えないのに。

「なあ、やっぱり俺はどこか変なのか？ なんか見られている気がする」

するんだが」

カイナは怪訝そうに眉を寄せる。揺れる黒髪は、カツラなのだろうに、とても綺麗なものに見えた。

「わあ。あの人綺麗」

「一緒にいるの枢木くるもぎじゃないか。くーっうらやましい」

周りからそんな声が聞こえているのだが、カイナはそれらが自分の事を指しているとは思っていないらしい。スザクは苦笑いした。もしも目の前にいるのがカイナではなかったら、おそらく自分も感嘆の声を上げていただろうと思うから余計に。

「気のせいじゃないかな」

「そっか？ んー」

伝えても意味は通じないだろうと判断したスザクは、ごまかした。それでもカイナは納得いかないのか「やっぱカツラがばれたのか？」などと見当違いな呟きをこぼす。

その後、視線に疲れたらしいカイナを休憩させるため、スザクは中庭へ案内した。中庭と言っても範囲が広く、この辺りは店が出ていないのだ。

カイナはふうと息を吐き出し、服が汚れるのも構わず芝生の上に座り込んだ。一瞬スカートが舞い上がり、白い足が覗く。スザクは慌てて目を逸らした。

当の本人は気にするどころか、気づいてすらいないが。

「……いいところだな」

「うん」

カイナは両手を後ろにつき、空を見上げながら目を細め、嬉しそうに言った。スザクはただ頷く。

そんな彼に呆れた顔をしたカイナは「お前も座れ」と手招きした。スザクが素直に近寄っていくと、突如カイナの表情が険しくなり、スザクは手を引つ張られた。

とつさに足を前に出して体制を整えようとしたものの、カイナに足を払われ、成すすべなく彼女の方へと倒れこむ。

「カイナ、なにす」

「しっ」

抗議したスザクの頭を抱え込むことで黙らせたカイナは、自らも身体を横に倒してぎゅっと目をつむった。スザクはそれでも抵抗しようとして、

「カイナっ！ どこだ」

動きを止めた。それは聞き覚えのある声で、自分を抱くカイナの手が震えたのがよく分かった。心臓が高鳴っているのも。

少し視線を動かせば、茂みの向こうに銀色の髪と青の瞳をもつライの姿が見える。始めてみる表情でカイナの名を呼んでいた。

名を呼ばれるたび、カイナが震える。

スザクは少し迷った後で、カイナの背に手を回して優しく叩いた。

……震えがマシになった。

ライの声が段々と遠ざかっていく。

「主様」
ぬしさま

小さく呟いたカイナの声がすぐ近くから聞こえ、スザクは我に返った。今の、自分の状況に。

「どうわぁっ」

「ん？ どうしたスザク」

「どどどどどっどどどどどじやなくて、は、はなし」

「はなし……ああ、悪い。苦しいよな」

カイナはようやく気づいたのか手を離してスザクを開放した。

苦しいと言うか気持ちよかったというか。って違う！ そっじやなくてっ。

1人動揺する少年の様子をまったく意に介さず、カイナは立ち上がった。スカートについている汚れを軽く払う。パンパンという音にスザクが冷静になってカイナをみたものの、視線が少し下がってしまいまた挙動不審に戻った。

カイナはそんなスザクを眺めながら、ぽつりと呟いた。

「なんだか今日のスザクは面白いな」

閑話2「鈍感是谁だっ？」（後書き）

ふつと気づきましたが、この連載ももう少しで終わりですね。もう学園祭ですもんねえ。

連載を始めて約11ヶ月。一年ぐらいで終わらせそうなことに自分ではびつくりです。もっとかかると思っていました。100話以内に収まりそうですし。

そして終わりに近づいたことで、ゲームを作りたいとか思ってしまった。ロスカラ、銀黒版……調子に乗ってますね（苦笑）。まあ、妄想するだけなら自由ですよ！

今週の日曜にこの閑話の後編をアップし、来週からは怒涛の更新ラッシュ！が、できたらいいな（願望）。

そしていつも応援ありがとうございます。完結に向けて突っ走る所存ですので、最後までどうかお付き合いくださいませ。

閑話2-2「怖い」

「あつ移動する！ 行くぞルルーシュ！」

どうしてこうなったんだ。

ルルーシュは手を引っ張られながらため息をついた。

『ちょうど良かったルルーシュ。僕はそろそろ行かなきゃいけないから、カイナを案内してあげてくれないかな？』

と、ばったり出会ったスザクにカイナを押し付け……任されたのが5分ほど前。案内をするどころか、ルルーシュは引きずられていた。

カイナは、長い髪^{かつい}をつけ、いつもとは違う女性らしい格好をしていた。本人曰く変装らしい。長いスカートとヒールを意に介さず学園内を走っている。周囲の視線が、非常に痛い。

「カイナ、と、とり、あえっず、おちっおち」

ルルーシュが溜まらず声をかけるとカイナは立ち止まった。そして振り返り、呆れた顔をする。

「お前、もう息切れしたのか？ 少し鍛えた方がいいな」

放っておけ。そっちが異常なんだ。

色々と言いたいことを飲み込み、ルルーシュはとりあえず息を整えた。カイナはというと、かなりの猛スピードで走っていたにもかかわらず、まったく疲れている様子はない。神根島でも思ったが、

カイナの身体能力はスザク並みだ。つまり、普通ではない。

「ん〜つとあれ？」

しょうがないなと腰に手を当てたカイナだったが、すぐに慌て出した。なんとか息を整えたルルーシュが問いかける。

「どうした」

「主様がいないっ」

カイナはあわあわと奇声を上げ、本当にあわあわと口に出す人間を、ルルーシュは初めて見た、走り出そうとした。

のを、ルルーシュが手を掴んで止める。今度はルルーシュが呆れる番だった。

「落ち着け」

「しかしっ」

「そもそもお前はここへ何をしに来たんだ」

問いかけに答えようとしたカイナは、ルルーシュの言いたいことが分かったのだろう。走り出すのを辞めた。その様子を見てルルーシュは手を離し、ため息をつく。

あんな速度で連れまわされたらこっちの身が持たない。

「……学園を見て回ることだ」

「で？ 今のお前は何をしてるんだ？」

ぶいと顔を明後日の方へ向けたカイナは、すねた口調で言った。まるで子供だ。そんな彼女に、ルルーシュはさらに問いかける。返

事は「むーっ」とした唸り声だった。

そして、再びカイナがルルーシュへ顔を戻した時、彼女は寂しい微笑みを浮かべていた。

「そうだったな。悪い」

ルルーシュは肩をすくめた。この2人を見てみると、どうして会わないのか、と問いただしたくなる。自分の方へ呼べばいいじゃないか。手を伸ばせばいつだって会えるのだから。

だが、なんとなく理由は察していた。お互いなんだかんだと理由をつけてはいるものの、結局2人は、

「で、おすすめの場所はどこだ？」

「そうだな。たしか……今なら体育館で人形劇をやってるはずだ」

「へえ人形劇か。見たことないな」

「行くか？」

「ああ」

笑顔で頷いたカイナを案内しながら、ルルーシュは思う。怖いのではないかと。

相手に『今の』自分を拒絶されるのが。

* * *

「どうなんだスザクっ」

あまりの剣幕に、スザクは若干後ろに下がった。が、目の前で凄
い顔をしてスザクに迫っている彼　ライの顔は険しくなるばかり。
スザクは「何がどうしてこうなったんだ」と考えてみた。案内し
ていたカイナをルルーシュに任せ、ピザの準備前にライと話をし
ておこうと声をかけ、屋上まで引つ張られた。ライも自分を探して
たと聞き、彼のほうから話を聞くことにしたら、こうして問い詰め
られている。

「ちよつと待つてライ！　誤解だから」

何度か同じ言葉をスザクが繰り返すと、ライは少し落ち着いた様
子で「誤解？」と眉を動かした。スザクはほうつと息を吐き出し、
頷く。

「僕とカイナは同僚だけど、ただそれだけで……というより、どう
して恋人だと勘違いしたのか分からないんだけど」

ライが動きを止めた。そう。なぜかライはスザクとカイナが付き
合っていると思込んでいるのだ。

「え。で、でもリヴァルが」

「リヴァル？　ああ」

珍しく動揺しているらしいライは級友の名を出し、スザクは納得
した。先ほどカイナと一緒にいるところで出会い、随分と冷やかさ
れたのだ。否定はしたものの、やはり誤解したままだったようだ。

スザクの顔が苦笑に変わる頃、ライもようやく冷静な思考を取り
戻したのだらう。すまないと謝って、掴んでいたスザクの胸元を離
した。

「そう、だな。君に二股なんて器用なことができるわけなかったな」

うん。スザクは頷こうとして、固まる。何やら不可思議な言葉を聞いた。

「ふ、二股？」

「ああそうだな。良かったよ。計画を実行せずにすんで
「け、計画って」

「いや私は別に両思いであいつが幸せなら、妨害をちよつとだけに留めるつもりではいたんだ。きちんと結婚するまで健全な付き合いをしてくれれば……あいつも年頃だしそういう話があっても可笑しくないからな」

ぽかん。ぽかん。と、スザクは口を開けた。目の前で「あいつは白色が似合うからな。どんなデザインでも着こなすだろう。ああ、でもそうだな」と、呟いている人物は、一体誰だ？ という心境だった。

しばらく眺めるしかできなかったスザクだが、微笑んだ。どこか寂しげな表情で。

「君たちは、少しお互いに遠慮しすぎていないかい？」

「っ、す、ざく？」

沈んだスザクの声に我へと帰ったライは、眉をゆがめた。こんなにも互いのことを思っているのに決して近づこうとしない彼らが、スザクの目には「遠慮している」ように映った。

「カイナと会ってほしい」

続けてスザクが言うと、ライの顔が青白くなる。しかしスザクは表情をまったく変えず、「今日、君に言いたかったのはそれなんだ」と言った。

ライは、何も言わない。

「さっき、カインは君に名前を呼ばただけで、とても嬉しそうだったよ」

「……………」
「でも、同時にすごく悲しそうで、苦しそうであんな顔は見たくない」

ライは、何も言えない。

「今カインは、ルルーシユと一緒にいるはずだよ。会っておいでよ。それで、2人がどんな道を選んだとしても、僕は」

「……………なんだ」

ライが、小さく何かを言った。スザクは聞き取るために口を閉じた。

「それじゃ、ダメなんだ」

「どうしてだい？」

「僕は、ずっとあいつを守っているつもりで、いつだってあいつに頼りっぱなしだった。最後まであいつにすがって、ひどいことをした。だから今度こそ僕があいつを守りたい」
「だったらどうして」

「あいつの前に出たら、またあいつにすがってしまうのが分かるから」

乾ききつた声で、淡々とライは言った。スザクには、まるで彼が泣いている様に聞こえた。

青い瞳は声と同じく乾いていたが、実際泣いていたのかもしれない。

「強く、なりたい」

ライは何度か同じ言葉を繰り返し、顔を上へと向けた。スザクもなんとなく顔を上に向ける。屋上から見える空は、どこまでも澄んでいた。

「あいつを守れるぐらい……あいつから頼ってもらえるぐらい、強くなりたい」

閑話2・2「怖い」（後書き）

カイナとユーフェミア、スザクが兄弟だとすると、ライが父親でルルーシュが母親（！）だろうなと考えてます。ナナリーは、末っ子かな。

すごく素敵な家族だと思うよ？

次は最後の章に突入です。

第七十四話「結局最後はこんな感じ」(前書き)

オリキャラ登場。

第七十四話「結局最後はこんな感じ」

カイナは、政庁内を歩いていった。両手には大量の書類を抱えている。紙といえどかなりの重量になるだろうに、まったく重さを感じさせない足取りだ。

そんな彼女の背後に迫る影があった。カイナは気づいていたものの、両腕にある書類のことを考えて覚悟する。直後、なんとも言いがたい衝撃が彼女の背中に襲いかかった。背中に綺麗な紅葉ができたかもしれない。

「いよう！ 混血派、期待の星！」

その衝撃をもたらした影、ボードウム・マラルは場違いなほど明るい声と表情でカイナに話しかけてきた。若干揺れてしまった書類へと意識を送っていたカイナは呆れた顔をし、

「ボード、その呼び方は辞めろって言っただろ」

「いいじゃねーか。混血派。笑い飛ばした方が、あいつら悔しがるぜ？」

混血派、とは植民地国に対して好意的な姿勢を貫いているものたちの総称で、『日本一（を始めとした植民地国）の血が混じっている卑しいものたち』という意味からきている。本当に混血であるわけではなく、植民地国に対して好意的なのは血が混じっているからに違いない、ということらしい。一体誰が呼び始めたのは不明だが、いつしか周囲がそうに呼ぶようになっていた。悪口、蔑みの言葉としても使われる。

さて、それはさておき。

カイナが新たな夢を追いかけ始めて意外に思ったのは、自分と同

じく日本人に対して好意的なものがあることだった。どうも、排斥を恐れて中々表明できなかった者が多いらしいのだ。

あとは中立の立場であるものたちにも、カイナの話に賛同する者がいた。ボードもその1人で、外ではタダの騎士候だが混血派の中では確固たる地位を築いている。

それでもやはり弱小なことに変わりはないが、最近、この混血派が注目を集めていた。

「お前もずるいな。行政特区を作ろうとしていたなんて、さ。俺にも言わずに、水臭い」

青い目を不満そうに細めたボードに、カイナはついと視線を逸らした。

先日、アツシユフォード学園の学園祭にやって来たユーフェミアが 相変わらず供も連れずに来たので、カイナは後でたつぷりと怒っておいた。たぶん反省はしていない 富士山周辺に行政特区の設立を宣言したのだ。

その宣言は、学園祭に来ていた報道関係者によりテレビに流され、あつという間に日本中を駆け巡った。もちろん、ブリタニア内でも行政特区が設立すれば、支配国に対するブリタニアの姿勢が方向転換することになる。つまり、植民地国に差別的な強硬派の立場が弱くなる。ならば、なるべく早く混血派について地位を築いた方がいいのではないかと、囁かれ始めていた。

実際、カイナの元には「混血派に入りたい」というものたちが大勢押しかけている。そんな派閥は作ったことがない上に、その名前について色々言いたいカイナだが、数の力というものをよく知っていた。なのであいそよく振る舞って明言することを避け、後で信頼できるものたちに相手のことを調べてもらっている。

カイナは情報収集には向かない。顔と名前を覚えるのが苦手であるし、名が売れてしまっていることもある。そういった仕事が得意

だったのがこのボードであり、カイナは彼に色々手助けをしてもらっていた。

が、それもユーフェミアが行政特区について発表した後のこと。行政特区のことをカイナは誰にも話さなかった。情報が外に漏れて妨害されるのを防ぐためだったのだが、ボードは自分にも告げなかったことが不満らしく、行政特区宣言の日からねちねちとしつこいのだ。しかしカイナも彼には話すつもりだったのだ。

「……お前がすねても可愛くない。むしろキモイ。不愉快だ」

「うっわ。親友に向かってなんといいひどい発言」

「誰が親友だ誰が」

唇を尖らせているボードだが、本当は怒っていないことをカイナは知っている。からかう理由ができたからからかっているだけなのだ、この男は。

しばらくはそうしてじゃれあっていた2人だが、ボードがカイナの書類をいくつか取り上げ、自分が持っていたものを開いたスペースに乗つけた。

「照れ屋のカイナ君へ親友のボード様からお土産ですよー」

「だからキモイってか自分に様付けかよ」

書類の内容について2人は何も言わず、何もなかったように足を進めている。向かう先は副総督執務室。

他人が聞いたなら「お前ら小学生か！」と言いたくなるくならないことを話しながら2人が中に入ると、机に向かって唸っていたユーフェミアがパツと顔を輝かせ、カイナたちが持っている書類を見て顔を青白くさせた。ユーフェミアの隣に立っていたスザクは、ひたすら苦笑いを浮かべている。

「愛しの殿下へお土産です」

「はい、これは俺からの分ですよ。麗しの殿下」

ユーフェミアの様子に気づいているだろうに、カイナもボードも遠慮なく書類を机に置いた。机には他にもたくさんの書類が積み上げられており、今追加された書類でユーフェミアの姿が比喻ではなく埋もれた。少なくともドアからでは姿が確認できないはずだ。

「ま、まだあるのですか？」

「そりやありますよ。殿下が焦って発表してしまいましたから、下の方がごたついてましてね」
「うっ」

当然な顔をしたカイナが最後に付け足した言葉に、ユーフェミアは黙り込む。その間にカイナはボードから渡された書類を片手に、応接用のソファへ座った。

本来ならば行政特区設立について、あのタイミングで発表するはずでは、なかったのだ。

たしかにシュナイゼルからゴーサインをもらっていたものの、大々的に発表するには下準備が足りなかった。工事の発注、制度作成、書類整理、住民登録のための受付所、現地を監督する軍人の選抜。あげ始めたらきりが無いが、特に問題なのは行政特区についての問い合わせ窓口がないことだ。役所に問い合わせても、職員たちも行政特区について知らされていないため、まともに対応できるわけがない。

対応員は自分の上司に、その上司もまた知らないためそのまた上司に、と登っていくと、行政特区について理解しているものがユーフェミアとカイナになる。もちろん現在では他にも何名かいるが、まだまだ人手が足りていない。今は急ピッチで対応マニュアルを作成している。

この忙しさを、己が引き起こしたと理解しているのだろう。ユーフェミアは文句の代わりにもため息をついてから仕事を再開した。スザクはその様子を見守り　ながら、行政特区について必死に勉強している　ボードは、

「頑張れ殿下、負けるな殿下。バカイナの言葉に凹む必要ないですからね」

などと応援しているのか邪魔しているのか分からないことを歌うように口ずさみ（この歌が無駄に上手い）、「あ、お茶入れますね」と誰の了解も得ず勝手にお茶を入れ始める。

ちなみに、混血派たちの中でユーフェミアは「殿下」だけで呼ばれている。どうもカイナの呼び方が移ったらしい。そしてなぜか、混血派の会合と称し、ボードを始め混血派に所属する者たちがカイナの部屋に勝手に入り浸るようになった。おかげでカイナの部屋は、もはや誰の部屋か分からない有様となっている。

部屋の様子を思い出したカイナは、ちょっとだけ泣きたくなった。

「すみません、ボードさん。ここはどういう意味ですか？」

「んん？　ああ、これは」

カイナの前に紅茶を置いたボードへ、真剣な顔をしたスザクが声をかける。スザクは今まで政治の中核に関わったことがない。しかしユーフェミアの騎士になった今、そんなことを言っていられるはずもなく、カイナやボードが1から教育している。

とはいえ、カイナは忙しい身の上になったのでほとんどボードが教えているのだが。

ボードとスザクは、キュウシユウ戦役後にカイナを通して出会った。これからのためスザクへの教育を彼に任せようとしたのだ。一見性格が合わなさそうに見える2人だが、意外と相性がよかったら

しい。スザクの教育は順調だ。

何やら話しこんでいる2人を尻目に、ソファに深く腰掛けたカイナは書類へと意識を移す。

書類には人物名らしきものと、経歴が事細かに記されていた。カイナたち混血派に擦り寄ってきたものたちについての報告書である。中には「一体どこから仕入れたんだ」という情報もあり、カイナは関心を通り越して呆れる。ボードは騎士ではなく、諜報関係の仕事につくべきだったのではと心のそこから思う。

感心しながら読み進めていたカイナだったが、とある場所で目が留まる。そこには赤線が引かれており、こう書かれていた。

元『純血派』、と。

名前はヴィレッタ・ヌウ、女性。カイナやボードと同じく庶民出の騎士候。純血派の代表格、ジェレミア卿の下についていたが「オレンジ事件」によりジェレミアが失脚し、政治の表から姿を消す。現在はどの派閥にも属していない。

ふむ、とカイナは考え込む。正直、その女性についてまったく言っていないほどカイナの記憶にはない。しかし純血派の文字と、最後に付け足された野心家という言葉は見過ごせない。

まあ、まったく野心を持っていないやつも珍しいが。

ちらとスザクを見たカイナは、紅茶へ手を伸ばし、なぜか塩辛いそれに顔をしかめた。視線をずらし、スザクの隣に立っていたボードが笑ったのを確認すると、カイナは一気にその塩辛い紅茶を飲み干す。悔しそうに青い目が歪んだ。

「美味しい紅茶をありがとう、ボード君？」

「いえいえどういたしまして、カイナさん」

笑顔のまま殺伐としている2人に対し、ユーフェミアもスザクも慣れているらしい。驚くどころか、監視の目がなくなったのでこれ幸いと伸びをする。

そしてボードが入れた紅茶を一口飲み、

「おいしいですね」

「そうですね」

と顔をほころばせた。

第七十四話「結局最後はこんな感じ」(後書き)

こんな感じ、というのは、真面目そうな話だけど、結局コメディ
ー路線だね、という意味です。

行政特区宣言の時期について。

大掛かりな事業です。周囲に全く隠したまま推し進めることは不
可能です。事前にルルーシュがその話を知っていたら、何かしらの
手を打つでしょう。

というわけで、原作と同じ流れでは在りますが、その裏の話でし
た。

混血派について。

当小説オリジナル設定です。純血派と真逆の方向路線だったので。
混血派の筆頭はユーフェミア、もしくはスザクとなるのが普通で
しょうが、ユーフェミアは皇族であり、スザクは混血というより日
本人なのでカイナが筆頭格に見られております。

またまたボードさんが出てきた上に、なんかいいポジションにい
ます。こんなはずでは！

この4人の関係はこんな感じです。

第七十五話「頼み」

やられた。

ライは思う。彼の目の前ではどうするべきかと悩む黒の騎士団幹部たちが勢ぞろいしている。議題は、『行政特区について』だ。

先日ユーフェミアによって日本中、世界中を駆け巡ったこのニュースは、黒の騎士団をも混乱させていた。

いや、組織崩壊の危機といってもいいだろう。

「もうすでに下からは『参加すべき』という声が上がってきている」「でもよっ。これって結局はブリタニアにへこへこするってことだろうっ?」

「ちよつと玉城、落ち着きなさいよ。ことはそう簡単じゃないの」

そう。簡単な話ではない。

行政特区に参加すれば、騎士団は解体させられる。第一それは、ブリタニアの支配を受け入れるということに他ならない。

かといって参加せずに戦争を続ければ、日本人たちからの支持を失う。基盤をなくしてしまえば、ブリタニアによって騎士団はあっけなく壊滅するだろう。

外国への亡命は、澤崎の末路を考えればありえない。まさしく八方塞だ。

重苦しい空気の中、どうしてか。ライの心は晴れやかだった。

ほんと。やられた。

1人ソファに座らず、腕を組んで壁にもたれていたライは目を閉じた。

行政特区というアイデアは、おそらくユーフェミアが自分で考え出したのだろう。しかし、今まで政治に関わっていなかった少女にまともな草案が作れるとは思えない。

「お飾りの副総督、ね」

一体どこがお飾りなのか。

ぼつりとライは呟いた。あのカイナが付き従っているのだから何かあるのだろうと思っただけだが、まさかこれほどとは、予想していなかった。

そしてライには、現状を打開できる案が思いつかない。もしかしたら考えないようになっているだけかもしれないが、先ほどから仮面を被ったルルーシュが黙りっぱなしなので、ルルーシュにも思いついていないのだろう。

ライは行政特区が設立した未来をぼんやりと考えてみた。騎士団が存在しないのであれば、堂々と会いに行けるのではないか。そんな未来を思い描くと、自然頬が緩みそうになってしまい、ライは口元を押さえて立ち上がった。カレンが「どうしたの？」と不安げに見上げてきたのに、「少し頭を冷やしてくる」と短く返す。

冷やさなければ不味い。

そうしてライが向かったのは愛機である月下がいる格納庫。何か思い悩むと月下の元に向かう癖がついていた。

しかし向かう途中でC・C（シーツ）の姿を見かけ、ライは足を止めた。彼女は普段着ている白い拘束着ではなく、ルルーシュに買わせたという普通の服を身に着けていた。

「どこかに行くのか？」

「私が出かけてはまずいのか？」

問いかけに問いかけで返される。ライは苦笑いを浮かべた。

「いや、そうじゃないが。気に障ったなら謝る」

「ほう？ 今日随分と素直だな。いいことでもあったか？」

「やれやれ。そんなすぐ分かるほど顔に出てるかな」

ライがあつさり肯定すれば、Ｃ・Ｃはますます珍しいものを見る目でライを見た。ライ自身、今の自分が普段と違うことを自覚していたので、苦笑いを浮かべたまま何も言わなかった。

Ｃ・Ｃはしばらくライを見ていたが、ふんつと笑った。そのままどこかへ歩き出す。

「これから、デートとやらに行ってくる。ゼロにそう伝えておけ」

「ああ、うんわか……え？」

頷きかけたライだったが、あまりにも意外な台詞に思考を止めた。彼が詳細を聞くことに思い至った時、すでにＣ・Ｃの姿は騎士団内になかった。

「デートって、誰と？」

これはゼロに伝えない方がいいのか？ むしろ伝えた方がいいのか？ ライはしばしその二択について頭を抱えた。

* * *

「まったく。私を呼び出すとは、お前も変わった奴だな」

ライを悩ませているＣ・Ｃは、ベンチに腰掛けている人物に声を

かけた。なんとも不遜な物言いに、その人物は苦笑した。
そんな表情がある男に似ていて、C・Cは笑いがこみ上げてきた。
似たもの主従だ、とルルーシュが言っていたのを唐突に思い出した
のだ。

「よお。久しぶり」

カイナは気軽に手を上げた。

たしかにカイナとC・Cが会うのは久しぶりであった。しかしす
でに敵対関係にあると分かっている以上、こうして話をしているこ
と事態がおかしいのだと、カイナは分かっているのだろうか。黒い
瞳に宿る光は、何1つ変わらぬままC・Cへ向けられている。

警戒したようにベンチから離れて立っているC・Cに、カイナは
ピザの箱を1つ差し出した。

「立ち話もなんだからさ。一緒に食おうぜ」

「……一応聞くが」

「んん？」

「残りは、ぜんぶ貴様が食べるのか？」

残り、と言いながらC・Cが指差したのはカイナの隣に置かれた
……否、積み上げられたピザの箱だ。10箱はあるだろう。

「いや、これは打ち上げ用だ。んん、やっぱり少ないか？」

「打ち上げ？」

C・Cは「十分すぎるだろう」と思いつつ、そこには触れず首を
かしげた。その際、きっちりピザの箱を受け取るのは忘れない。

「行政特区の打ち上げだ。準備が一通り落ち着いたんでな」

早速食べようとしていたC・Cの動きが止まる。カイナはその動きに気づいただろうに特に何も言わず、「まあ、それで頼みたいことがあってな」とC・Cの目を真っ直ぐ見た。

今日C・Cがここに来たのは呼び出されたからだが、どうやって呼び出されたかという点、

「その頼みごととやらは、貴様がピザの宅配に化けてまでする必要があることか？」

「ああ、十分にな」

結構似合ってたろ？

カイナはそう言って笑った。C・Cの口からため息が漏れた。

「分かった。とりあえず言ってみる。内容によっては、ピザの追加を要請する」

「冗談めかして告げたC・Cに、カイナはさらっと頼みを口にした。

「俺にギアスをくれ」

第七十五話「頼み」（後書き）

お気に入り数2000人を突破した模様。かくぶる

ありがたやありがたや。

拍手もいつも読ませていただいています。励みになってます。ありがとうございます。

今回の話については、「C・C様が出せたよ！」と叫んでおきます。C・Cとライの会話好きなんですよ。あ、ルルとの会話も好きですが。

というより、ギアスはいキャラが多すぎて、全員を活躍させるのは難しいです。シャーリーや会長、リヴァ、ニーナの生徒会メンバーも出したんだけどな。

実のところ、学園祭編でシャーリーとライのデート、人形劇を見るシーンとかも書きたかったんですが、話が進まないなので断念したという経緯があります。

完結したら、書きたい話の1つですね。

第七十六話「掴む」

C・Cは、しばしカイナの顔を窺うようにじっと見つめた。カイナは気にしていないそぶりをしつつ、内心とても緊張していた。

「ふっ何事かと思えば、そんなことか」

しかし、C・Cに鼻で笑われてしまい、「は？」と間抜けな声を上げた。

「お前には無理だな。これが見えないようではな」

C・Cの口調は笑いを含んでいたが、目は真剣そのもので、カイナはなるほどと思った。今、何かが見えていなければならないのだろう。カイナには、C・Cがピザの箱を大事そうに抱えている光景しか見えない。

カイナの身体から力が抜けた。「やっぱり無理か」と呟いているので、薄々分かっていたのだろう。そんなカイナにC・Cが言う。

「だが、これは返さんぞ」

これ、とピザの箱をカイナから遠ざける。カイナは苦笑して、「大丈夫だ。返せなんていわないさ」とピザを保障する。C・Cが大げさなほどに安堵の息を長々と吐き出した。そして今度こそピザを食べ始める。

カイナはそんなC・Cから目を離し、空を見上げた。

「んむっ。それで、なぜ突然そんなことを思いついたんだ？」

ピザ片手に聞いてくるC・Cに、カイナは素直に応じる。敵だとか味方だとか、そういうことはあまり頭にないらしい。

「騎士団がどう動くか分からないが、行政特区が設立すれば、少なくとも日本から戦いはなくなる。その時、ギアスは不要……いや、争いの原因になりかねないからな。ギアスを使って、あの2人のギアスを無効化できないか、と思ったんだよ」

「そのためにお前がギアスを持つというのは、矛盾してないか」
「まあそうだけと。ほら、時間がないだろ」

眉間にしわを寄せるC・Cだったが、ピザを口に入れると頬を緩めた。本当にピザが好きなんだなあとかイナは思いながらC・Cを見守る。

できるならば特区ができる前にギアスをなんとかしたいと思っていたカイナだが、簡単にいく問題とも思っていなかったので落ち込んではいない。少しは期待していたので、残念な気持ちはあったが、

仕方ない。他の方法を探すか。
カイナは立ち上がった。

「じゃあ俺は行くわ。さすがにもう会うこともないだろう。元気でな。」

ひらひらと手を振って、ピザにかぶりついているC・Cと別れた。もちろん大量のピザを持っていくことは忘れない。

そんなカイナの後ろでC・Cが舌打ちしていた。もっと食べるつもりだったらしい。

「太るぞ」

「ふんっ無用の心配だ」

思わず振り返ったカイナは、偉そうに胸を張っている。こがお腹をさすったのを見た。

* * *

「僕は何をしたいんだ？」

ライは、月下のコクピット内で、小さく呟いた。

ルルーシュの願いを叶えたい。その気持ちに嘘はないが、ならばなぜ。自分は今、彼の傍にいないのだろう。

「一つ聞かせて。あなたが入団しようと思った理由は、何？」

入団の際、カレンに問われた言葉が突如頭に浮かんだ。あの時はつきりと言葉にすることができなかった。というより、言葉にすらなっていない。あまりにも拙い自分の言葉を思い出してライは笑い、目を見開いた。

「そうか。そう、だった」

自分の頬に手を当てたライは、少し泣きそうな顔をした。なぜ自分が戦いを決意したのか。思い出したからだ。

ライは母の笑顔が見たかった。妹の笑顔が見たかった。カイナの笑顔が見たかった。そのために戦うことを決意した。

そして今も、それは変わらないのだ。

ルルーシュの笑顔が見たい。ナナリーの笑顔が見たい。ミレイの笑顔が見たい。シャーリーの笑顔が見たい。リヴアルの笑顔が見た

い。ニーナの笑顔が見たい。カレンの、団員たちの笑顔が見たい。道が分かれてしまったけれど、スザクの笑顔だっで見たい。あいつの……。

「なんだ。それだけで良かったんだ」

ブリタニアが、とか。日本が、とか。そんなことを除外して、ただのライとして考え、彼はようやく答えを見つけた。見つけてしまえばとても簡単なことだが、実現は不可能だと、心のどこかで否定していたのだ。

だが実際はどうだろう。今、不可能だと思っていた未来が実現しようとしている。生徒会の皆が笑いながら、騎士団の皆も笑える、そんな未来が。

それこそ、ギアスでも使わない限り無理だと思っていたのだけれど。

ライは笑って月下を軽く撫でた。そしてコクピットから出て、『彼の元へと向かう。』

「僕も掴むさ。今度こそ、自分の手で」

第七十六話「掴む」（後書き）

前回の台詞で誤解させてしまったようで申し訳ありません。

元からギアスをカイナに持たせる気はなかったのですが、ギアスについて話して欲しかったため、こうなりました。カイナはギアスについてあまりよく知らない＆今後もし平和になると考えたとき、またギアスの暴走で全てを失うことになってしまつと困るので。

最近思つのは、みなさんから頂いたメッセージを見る限り、もつとライを自由に動かしてよかつたんだな、ということ。ライを動かす時はけっこう原作にこだわっていましたので。

ふんむ〜。修正する時はそこらへん気にして、完全一から書き直すべきか。それともいっそのことカイナ主人公でライを攻略していくか（え。

悩みますね。

第七十七話「選択」

「なん、だと？」

ルルーシュは、ゼロの仮面を脱いだ姿勢で固まった。呼吸まで止まっていたそうにライは思い、心配になった。

「もっいち……ごほっかは」

「大丈夫かいつ？ 落ち着いて呼吸を」

心配は的中していたらしい。息を吸いすぎたルルーシュは激しく咳き込んだ。思わず駆け寄ったライに、ルルーシュは銃を突きつけた。紫色の瞳がライを真っ直ぐ睨みつけている。ライは少し驚いた顔をしたが、すぐに穏やかな表情になった。

まるで、わがままを言っている弟をなだめるような、優しい表情だった。

「ゼ……いや、ルルー」

「お前は俺の騎士だろうっ？」

震える銃口が額に向けられていると言うのに、ライに怖がる様子はなく「ああ、そっだよ」と頷く。

「だったら、だったらなぜそんなことを！ 俺に、『行政特区へ参加しろ』などと言うんだ。分かっているはずだ！ そんなことをしたら黒の騎士団は」

「なくなるだろうね」

「ライ」

「なくても、問題ないと思ったからだよ」

ルルーシユの目に、完全なる殺意が浮かんだ。銃口の震えが止まる。このままルルーシユが引き金を引けばライは確実に死ぬだろう。しかしそれでもライは穏やかな表情を崩さず、そして抵抗らしい抵抗もしない。そんな様子が、神根島での彼女の様子と重なり、ルルーシユはさらに苛立つ。

何に苛立つのかも分からぬまま、ルルーシユは言葉をつむいだ。

「やはりお前は」

「考えてみたんだ」

つむいだ言葉は、ライの声で遮られた。

「考えて、みたんだ」

「……俺を裏切ることについて、か？」

「違うよ。僕は君を裏切るつもりはない」

「しかし現に今」

「そうだね。君からしたら裏切りのように見えるかもしれない。けど僕は、君を守りたいんだ。それは嘘じゃない」

ライの青い瞳がまっすぐルルーシユへと向けられた。濁りのない瞳は、たしかに嘘をついているようには見えない。かすかに銃口が揺れた。ルルーシユは戸惑って、不安げな顔をする。

一瞬で怒りの顔へと戻ってしまったが。

そんな変化を見守っていたライは1度深く息を吸い込み、言葉を続けた。

「考えてみたのは、未来だ」

「み、らい？」

「そう。未来……もしも行政特区を、ギアスを使ってでも阻止した

らどんな未来が来るだろうかってね」

ギアス、その言葉を聞いた時、ルルーシュは肩をかすかにだが動かした。おそらく、ギアスを使うつもりだったのだろう。

ライは考えるように目をつむった。

「騎士団が存続する方法は、たぶんそれしかないと僕も思うよ。けどね」

「けど？」

「その先にある未来で、誰も笑っていないんだ。騎士団は存在し続けているのに、誰もが悲しそうで、苦しそうで、怒っている。」

ああ、もちろん戦争というものがそういうものだとは分かってはいるよ。けどさ、僕らがしたいのは戦争じゃない。『ナナリーが安心して過ごせる世界』を創るのが目的。違ったかい？」

「違、わない」

尋ねたライに対するルルーシュの返事は、ワンテンポ遅い。頭のいいルルーシュのことだ。もう気づいているのだろう。ライが何を言いたいのか。

「君も考えてみてくれ。行政特区が設立した未来を」

「みらい」

「もちろんいいことばかりじゃない。問題は山積みだ。辛いこともあると思う。未来がどう転ぶかは分からない。」

それでも1つだけたしかなことは、この未来では君が『ただのルルーシュ』として、皆と笑顔になれる可能性がある、ということだよ」

紫の瞳は、すでにライから逸れて床を見つめていた。銃を持つ手

には力が入っていない。

「僕は君の騎士だけど、同時に君の友でもある。だから君が幸せになれる未来をつかみたい。そう思う」

「ライ、俺は」

「もしも君が、それでも復讐の道を選びたいというのなら、全力で止めてみせる。その道は君にとって最良だと思わないから」

「でも」

「君は気づいていないだろうけど。生徒会の皆といる時、ルルーシユ、君はすごく楽しそうに笑っているんだよ。そして、そんな君をナナリーがもつと楽しそうに見ている。僕はそんな未来を迎えたい」
「ななリーが」

ナナリーは目が見えない。しかしその分感情に敏感で、ルルーシユが楽しそうだとナナリーはもつと楽しそうなのだ。

硬い音がした。ライの目の前から銃が消えている。ルルーシユはあいた右手で己の額を押さえた。

「そうか。ナナリーは」

小さく何かを呟いて、彼はソファへと深く腰掛ける。興奮を冷ますように深呼吸を1度、2度。そして、「くくくっ」と喉の奥から笑いをこぼし始めた。

「まったく、お前たちにはいつも驚かされる」

「それは心外だ。僕はあいつよりマシだと思うよ」

今までの穏やかな顔をどこへやったのか。ライがムツとした顔で言うと、ルルーシユはさらに大声で笑い出した。こんなに大きな声で笑っているルルーシユを見るのは初めてだ。

「五十歩百歩という言葉を知っているか？」
「……………」

からかうようなルルーシュの言葉に、ライは返事をしなかった。ルルーシュの笑い声はますます大きくなり、つられたライも呆れるように笑った。

「笑いすぎだよ、ルルーシュ。防音設備があるとはいえ、無用心だ」
「ああ、それなら問題ないさ」

笑いがようやく収まったルルーシュは、再び仮面を手に取り、ニヤツと唇をゆがめた。

その意味をライが知るのは、わずか5分後。集めた幹部たちの前で彼が仮面を脱いだ時だった。誰もが驚く中、特にカレンの衝撃は凄まじかったろう。ルルーシュは自分の過去を語り始め、行政特区に参加することを告げた。

「私は行政特区を富士山周辺だけでなく、日本中に設置するようブリタニアと交渉するつもりだ」

不満の声もあったが、ルルーシュは「交渉が上手く行かなかった場合は、この身を焼くなり煮るなり好きにしる」とまで言い放った。なんともふてぶてしく、彼らしい態度で。

中でもディートハルトが不満そうだった。彼はゼロの信奉者だ。しかし、ルルーシュが交渉を上手く取り付けた場合はまた彼をあがめるのでは、とライは思う。

だから問題はディートハルトよりも、カレンの方だろう。いまだに混乱しているようだった。

「皇族がゼロでルルーシュでゼロ？」

呟いている言葉は間違いではないのだが、混乱がよく分かる台詞だ。

無理もないだろう。尊敬していたゼロが自分の同級生であり、憎きブリタニアの皇族だったのだから。

他の幹部もたしかに戸惑ってはいる。それでもゼロが騎士団を始めとした日本人に希望を与えたのは事実であり、実際自分たちを助けてくれたと言う思いがあるため、素直な不満をこぼしたのはほんどいない。それに交渉についての意気込みを感じ取ったのだろう。とりあえず交渉の結果次第、ということで落ち着いていた。

「カレン」

ライが声をかけると、カレンは大げさに肩を震わせた。だが振り向いた時、カレンはいつもと同じ強気な表情で

「大丈夫。分かってるから」

と、ライに告げた。ならば、ライにそれ以上問えるはずもなく、「そうか」とただ頷きを返す。

ライは天井を見あげた。

選択は終わった。あとは審判を待つのみ。

第七十七話「選択」（後書き）

ゼロの覚悟、な仮面を脱ぐシーンは掘り下げたかったのですが、上手く行かず断念。書き直す際にはきちんと……。もう完全に原作から離れてます。自分の願望です。

11月中に終わられるかなあと、思っていました。12月に完結となりそうです。

あと2、3話だと思つのですが、よろしければお付き合いください。

第七十八話「そうだね」

カイナが、最も重要な仕事に取り掛かるかと重い腰を上げたとき、携帯電話が音を立てた。

ちょうど手に持っていたカイナは驚いて画面を見、さらなる驚きで目を見はる。「画面に浮かんだ名前は、今カイナが電話をしようと思っていた相手だったからだ。

眉を中央に寄せつつ、彼女は通話ボタンを押した。

『頼みたいことがある』

通話相手は、カイナが何か言い出す前にいきなりそう切り出してきた。

「いきなりだな」

『世間話をするほど暇ではないのでな』

皮肉めいた口調で返すと、相手は淡々と言つてのける。

何か、違和感を感じた。電話越しであるため、間違っているかもしれないが……迷いが消えているようにカイナは感じた。それは自分たちにとって吉となるか凶となるか。

「それはゼロとしての頼みか？」

警戒気味のカイナの問いかけに、相手、ゼロは「そうだ」と短く答える。だから

「分かった。とりあえず聞くだけ聞いてやる」

* * *

電話を置いたルルーシュは、ふうつと息を吐き出した。

「とりあえず交渉の場は得られた。あとはユーフェミアとの交渉結果で俺の未来が決まるわけだ」

「そうだね」

独り言のようなルルーシュに合い槌を打つのは、ライだ。この部屋には今、2人だけしかない。

ソファに深く腰掛けてリラックスしているルルーシュに対し、ライはどこか憮然とした表情でつつたまま。

ルルーシュが呆れた顔をする。

「すねるな」

「僕は別にすねてなんか」

ライはルルーシュの言葉をすぐ否定したが、

「分かった。交渉の場を設けよう。同行者は2人まで許可する。ただし、『青い機体のパイロット』は駄目だ、か」

続けられた台詞にムスツと黙り込んだライは、誰がどう見てもすねている。

ルルーシュが口にしたのは、カイナに交渉の場をつくるよう頼んだ際につけられた条件だ。

「仕方ないだろう。あいつは俺たちのギアスを知っている。警戒す

るのは当然だ。かといって、交渉の場には俺が行くしかない。少しでも脅威を少なくしたただけだろうか？」

「それは」

ライが言いよどむ。彼も分かっている。ギアスの危険性に関してはルルーシュよりも見に染みて理解している。だからカイナが自分を拒んだわけではないと分かっているのだが、心は納得がいかない。子供か、と言おうとしたルルーシュだったが、結局口には出さず、苦笑にとどめた。

「式典の日には会えるんだ。その日まで待つことだな」

「……どうだろ」

「ん？」

ライの声を聞き逃したルルーシュが首をかしげる。ライは「そうだねって言ったんだよ」と微笑んだ。

* * *

「ほんとうにいいんだね？」

念を押して聞かれ、カイナはまっすぐ男の目を見て「はい」と頷いた。決意の込められた堅苦しい声だ。

そんな様子を見ていた男　シュナイゼルはそれ以上何も言わず、机に置かれた書類に何かを書き込んでいく。

書き込みながら、まるで世間話をするかのようにシュナイゼルは口を開く。

「残念だよ。兄としては、君がユフィについていてくれたら安心だったのだけど」

「それなら問題はありません。殿下……ユーフミア殿下には最高の騎士たちをつけてきましたから」

「ああ。親衛隊の人員は君が決めたのだったね」

書類が書きあがる。

「さて。あとは交渉で騎士団を説得し、式典の日を無事に迎えることができればいいのだけど」

「私もそう願います。」

できれば、悔なく死にたいですから」

* * *

数日後、ユーフミアは行政特区の数を将来的に増やすことをテレビで宣言し、黒の騎士団が特区への参加を表明した。

第七十八話「そつだね」(後書き)

エピソード「銀の王と黒の騎士」

「もう少し右だ…… オツケー」

「おーい、資材足りねーぞ」

「そっちに置いてあるだろう」

活気に溢れた工事現場で使われているのは、日本語。働いている人たちも全員日本人で、誰もが生き生きと動いていた。ここは行政特区日本……フクオカ支都しと。まだ住民はおらず、関係者以外立ち入り禁止となっている。

最初にできた行政特区は富士の都、富都ふとと呼ばれるほどに活気付き、富都が資金面でフクオカ支都を支援するという条件で、第二の行政特区が作られた。

そんな場所をゆっくり歩いている青年がいた。彼の名前はライ。それ以上でも以下でもない。

ただのライは、1人で特区を歩いていく。

「こっちは順調だ。お前の方はどうだ？」

誰かの分まで光景を目に焼き付けるようにしっかりと見つめながら、ライは誰かに語りかける。すると一瞬だけ強い風が吹いて彼の銀色の髪を揺らした。

* * *

空港にある大きなディスプレイに、ユーフェミアとゼロが硬く握

手する場面が映っていた。その様子を見ていたその人は、口元を和らげて立ち上がる。

もう大丈夫。

そんな確信を得たのだろう。その人の足取りは軽い。

「カイナ」

しかし聞こえた名前に足を止め、その人は振り返る。黒い瞳が驚きに包まれていた。

「ど、して」

「お前の行動ほど分かり易いものはないさ」

ライは言いつつも微笑みながら彼女へと近寄っていく。最初こそ驚いていた彼女だったが、やがて「御見それしました」と冗談めかして言った。

そんな彼女の様子を見ながら、なんだ、とライは思った。

会いに行くまでずっと緊張していた。だけどいざ対面してみれば、なんのことはない。ライはただのライとして、その場に立っていた。そしておそらくは彼女も。

その証拠に、彼女は決して縮めることのなかったライとの距離を自ら縮めた。

1歩、2歩、3歩。

2人の足が止まったのは、お互い手を伸ばせば触れることのできる距離。

「なるほど。あなたでしたか。ルルーシュを変えたのは」

先に話を始めたのは彼女だった。ライは苦笑した。

「私は別に何もしていない」

「ふふ。ではそういうことにおきます」

「かい」

「あなたの知っているその人物は死にました」

彼女は「だからその名を呼ぶのはお止めください」と続けた。それに対し、ライは心苦しく思いながら

「ライオースも死んだ。だから敬語を使うのは止める」

黒い瞳を真っ直ぐ見ながら言った。2人はしばしにらみ合うように見つめあい、どちらともなく笑った。

離れていた時間など、なかったかのように。

「申し訳ございませんが、私は元からこのような口調です」

「しかしルルーシュたちには違う話し方をすると聞いたが？」

「ほう。つまりあなたは、ここで私を窒息死させるおつもりで？」

「……冗談に決まっているだろう」

「では、そういうことにおきましようか」

「……………」

随分と懐かしいやり取りに、ライは思わず微笑む。しかし、彼女は時計を見て申し訳ない顔をした。タイムリミットだ。

「わたし……僕も」

「あなたはルルーシュにとって必要な存在です」

「それを言うならユーフェミアにとっても」

「殿下にはスザクをはじめ、信頼できるものたちを置いてきましたし、何より」

「何より？」

「あなたがいてくれるのであれば、何も心配はありません」

つまりそれは、ライを信頼しているということだ。

ライは苦笑する。そんな風に言われてしまえば、彼に否と言えるはずがない。

「随分と口が上手くなったな」

皮肉を込めて言うと、彼女も苦笑した。いろいろあったのだろう。そのいろいろな場面に居合わせられなかったのは残念だが。

そのまま頭を下げて去ろうとした彼女に、ライは最後の言葉を贈った。

「疲れたら、いつでも帰って来い」

「っはい！」

* * *

銀の王は名を捨てて、大事な存在の幸せを願い、彼らが安心して過ごせる世界を作り始めた。

黒の騎士は名を捨てて、大事な存在の幸せを願い、彼らが戦わずに済むようにと夢を描き始めた。

2人の道は遠く、されど先に待つものは同じ。

2人は歩いていく。道が交わるその日を信じて。

エピソード「銀の王と黒の騎士」（後書き）

最後、完全失速しているな、と自覚済みの舞傘です。

これにて完結です。

今見返すと、今すぐ押入れの奥深くへとしまいたいくらいですが、無事に完結できてほっとしています。とりあえずは話がまとまった。残念な点、などたくさんありますが、一番はやはりご指摘いただいたとおり、ライの活躍に関してですね。もっと自分の中のライ像を明確にしていれば、と。書き直す際に気をつけたい一番のことですね。

できれば今すぐにも一から書き直していききたいところですが、体調やらリアルやらいろいろありまして……。

短編を書きたいカキタイと言っておきながら放置してますし、あちらを書こうか。いつそのことオリジナル過去編をアップしてしまおうか、と妄想だけが広がっている状態です。

設定はアップしそうな予感。

とにもかくにも、今まで拙作につきあっていただき、まことにありがとうございます。ここまで書くことが出来たのもみなさんのおかげです。

また、別のところで会えますことを楽しみにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1925p/>

銀の王と黒の騎士

2011年12月11日14時57分発行